

真剣で人生を謳歌しな
さい！

怪盗K

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めたら、体が縮んでいた！

※この作品の注意点

- ・主人公が下品です
- ・原作主人公が空気になるかもしれません
- ・不定期更新になると思われます
- ・ご指導ご鞭撻、よろしくお願いします。

2021.9.29 タイトルをつけました。

2021. 11. 17 タグを編集しました。

目次

幼少期編

第1話

第2話

第3話

第4話

第5話

第6話

第7話

第8話

第9話

第10話

第11話

1

30

49

79

101

123

143

158

174

193

210

第12話

第13話

第14話

第15話

第16話

第17話

第18話

第19話

第20話

第21話

第22話

第23話

第24話

226

247

264

280

297

315

333

349

367

415

431

459

490

中学生編

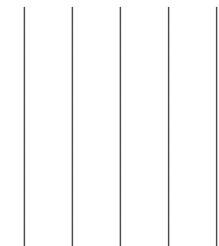
第25話

第26話

第27話

第28話

第29話



596 571 550 533 517

幼少期編

第1話

目が覚めたら体が縮んでいた。しかも、どっかも知らない河原にワープしていた。

いや、なんでやねん。え、俺、どこかの頭脳は大人、身体は子供な探偵的な目にあつたの？ あれだよ？ 俺高卒だから実際頭脳は子供のよ？ 体まで子供にしたらただの子供よ？ あれ、何か問題あるつけ？

「というか、マジでここのこよ」

だだっ広い河川敷で一人ぼつんと黄昏る俺、見渡す世界は低い、ガチで子供の体になつている。遠くの方にビルディングが見えるし、日本語の看板も見えるから日本だろう。

そこまで考えながら、俺は小さくなった手をにぎにぎする。

俺、この体なら女湯に入れるんじゃないやね？

まじか、あの楽園の園に行けるといふのか、こけた振りしてパイタツチも自由なのか。

ヒヤッホー！ コナ●最高！ ガキボデイ最高！

「こりや、早々に温泉か銭湯を探すしかねえな」

思い立ったが吉日が信条である俺は夕暮れの河川敷から走り出す。目指すは女湯、周りは見た感じ夕方だし人も多くなるタイミングだ。

「て、金持ってねえじゃん」

見知らぬ自分の服のポケットを探るが、小銭一つ出てきやしない。なんてことだ、俺の野望がこんなも早くとん挫するとは。

「オイ、お前、ここは俺たちの遊び場だぞ」

「あ?」

呼ばれたので振り向いたら、やたらガタイのよさそうながきんちよが居た。その後ろには何人が控えている。ひーふーみー、四人か。コ●ンボディになって少し筋肉落ちたか? まあいいか、俺最強なナイスガイだし。

「お前、ここは俺たちの遊び場だぞ、出て行けよ」

「ほー、言うじゃねえか、お前。何だ、同年代より図体デカいから少し粋がつてんのか? あ?」

子供の言葉にも同じレベルで返してあげる俺クオリティ。少し煽ってあげれば、ガタイのいいがきんちよは俺につかみかかってこようとす。遅い遅いイ!

まっすぐに来たガタイのいいガキの顔を蹴り飛ばす。手より足の方が長い、はつきりわかんだね。

すぐさま奥に居たひよろりとしたガキの方に走っていき、テレフォンパンチをかます。ガタイのいいガキも、ひよろりとしたガキも氣を失ったみたいだ。

「で？ お前は どうするよ？」

「や、闇の申し子の俺に手を出したらどうなるかわかっているのか？」

なんか変なことを言い出したがきんちよが居たのでとりあえずコークスクリューブローをかます。

意識飛んだか、やりすぎたかな。急に変なこと言い出したからつい、殺っちまった。

意識を失ったがきんちよどもの衣服を漁る。ち、小銭しか持ってねえ、まあいい、風呂入ってコーヒー牛乳を飲んでアイスを買うぐらいはあるだろ。

「な、何でそんなことするの……？」

「あ？ 雌だったのか、お前」

最後まで残ってたのは幼女でした。幼女かあ……幼女かあ……。流石にこの年のガキンチョとなると、射程圏内に入るかどうか……。

うーん、ありじゃね？ 俺もガキの体だし。どこかの源氏さんも青い果実はもぎ取れって言ってたし。

「いやね、こいつらは俺がここにいることに対して、文句を言ってきたじゃないか？ そのうえで、彼は俺に掴み掛ってきたんだ、俺は死ぬかと思ったよ。だって彼はとても体

が大きいじゃないか？ 君もそう思うだろう？」

「う、うん……ガクト、からだ大きいよ、ね」

「そこで、俺は正当防衛したわけだ。やらなきゃやられてたからね。そして、そこからは戦争だ。奪うか奪われるかの残酷な戦いが始まったんだよ」

「？ セーとー？ むずかしいことばは分からないわ」

「つまりは俺は青い果実を食うことにしたんだ」

「??」

このまま捲したてればいけそうだな。この子、抜けたところがあるっぽいしな。アホの子ってやつか？

「そんじゃあ今日から君、俺の性奴隷ね」

俺の超理論の飛躍はアポロよりも高く飛んでいく。

顔はよさそうだが、やつぱり子供だから体は貧相だな。まあ、そのあたりは将来に期待だな。

……何故か、そこまで育たないという電波を受け取ったが。

「どれー？」

「まあ、つまりは、一緒に遊びましょってことだ。あ、性奴隷のことはこいつらには秘密な」

「わかったわ！ 私があなたと一緒に遊べば、ガクトたちにもうひどいことしないのね！」

たぶんなんも分かってないだろうが。まあいいや、大人のお医者さんごっこしよう。やっぱり一度は漢なら夢見るよね、お医者さんごっこ、まさか実現できそうな日が来るとはな。

と、てか、ここどこなんだ？ 丁度目の前に地元民が居るので聞いてみようそうしよう。

「そうそう、それじゃ、まずはこの辺りを案内してくんね？ 具体的には地名とか」

「うーん、他の遊び場所、公園とかでいいかしら？」

なんとまあ無邪気な、これを今から汚すとなると背徳感ばないわー。てか青い果実を性奴隷にするとか俺の守備範囲は一郎級だったようだ。

「あ、でもガクトたち……」

「いいんだよ、寝かせとけば。たまにはこいつらもぐつつすり寝ないと」

「そうなのかなあ？」

子どもって騙されやすいなーお兄さん心配になっちゃうよ。見た目が大人だったら完全にアウトだが、俺も子供だからセーフセーフ。

「きや、もうー、くすぐりたいよー」

「……」

「触らないでーよ、あはは」

「……」

「どうかしたの？ シュウジ」

「……」

俺のエクスカリバーが起きたねえ、ふぎけんなよ子供ボディ。コ●ン君もこんな気分になったのか、すまねえ、女湯入り放題じゃんとかいつも思ってた。こんな悲しい気持ちになるんだな。

「シュウジ？」

「いんや、何でもねえよ。ほら、気持ちいいか？ 一子」

脇をもみもみ、さわさわしてやるが、岡本一子ちゃんも未発達のため中々反応が薄い。俺のゴールデンフィンガーも、流星にガチロリの体を開発するのは中々に難しい作業のようだ。

信じられない敗北と折れた聖剣のことで俺の精神はポドポドだ。

「んー、気持ちいいわよ？ 少しくすぐりたいけど、あつたかくて、ポカポカするわ」

「ほーへー、なるほど。もつとしてほしいか？」

「うん！ もつと触ってちょうだい！」

ナチュラルになんつーセリフを、いや、言わせた俺も俺だが。まあいいや、毎日開発してれば刷り込みできるだろ。エクスカリバーが抜けたら、まずは一子ちゃんにブチ込むとしよう。

それにしても、こいつのおばあちゃんも人が良すぎねえか？ 娘の友達と思つたらつて一緒に風呂に入るまで許すなんて。

あー、何か、流石にあのおばあちゃんを騙すのは、気が引けるな。

「……」

「シユウジ、さつきから元氣ないわよ？」

「あー、いや、そうだな。一子ちゃんは奴隷からペットに昇格してあげよう」

「むー、ペットって何よー。えい！ シユウジもくすぐってやる！」

一子ちゃんの無邪気さやべえ、俺の真似して乳首や股間触ってきやがった。こりやあ、俺もおつんおつきしちゃうぜこれ……。

うん、起たねえ。聖剣を抜くにはもつと資格とか必要みたいだ、ユーキャンで取れっかな。

「ほら、二人とも、遊んでないでそろそろおあがり、牛乳が冷やしてあるよ」

「はーい！ 行きましょ！ シュウジ」

「あいあい」

脱衣所の方からおばあちゃんが声をかけてくれる。このおばあちゃんと話すたびに俺の罪悪感がちくちくと刺激されてしまう。なんだかなあ、こういう人、天敵なんだよなあ。

「しかし、川神ねえ。てか、神奈川なのね、ここ」

風呂上がり一杯を終え、俺はおばあちゃんの亡くなったじいさんの浴衣に袖を通していた、めっちゃ袖が余るが着心地は悪くない。いらないうったが、あのおばあちゃんに押し切られちゃった。んで、今は一子ちゃんの部屋で彼女の勉強を見ている。流石に小学生レベルならいける……いける、よね。

なにはともあれ、一子ちゃんから聞いた場所は聞いたこともない場所であった、いや、俺が知らなかったと言えばそれまでだけど。神奈川は地元ちゃうからなー。

「ふえー、シュウジ、ここが分からないわあ」

「あ？ なんもん、ここをガシャーンしてウイーンしてトータムポールすんだよ」
フイリングで分かりやすく伝える。決して面倒だからとかではない。

「ちゃんと教えなさいよー」

ほかほかと殴ってくる一子ちゃんがうざいので乳首の位置をつねる。飼い主に噛み

ついてきた犬へのしつけの意味も込めて少し強めに。

「んあ……」

……。

「び、びつくりしたあ……シユウジ、今なにしたの？」

「あー、うん、算数教えてやるよ、どこが分かんねえんだ？」

流石の俺もビビったわ。すげえエロかったぞ、今の一子ちゃん。幼女でも女つてわけか……。

まあ俺のエクスカリバーは眠ったままですけどね！

「Zzzzz……」

「流石に幼女に睡姦はレベル高いよね」

俺は好きなおかずは最後までに取っておくタイプなのさ！ それに俺は情緒も大事にするタイプだから。

流石に幼女の夜は早いのか、一子ちゃんは22時になるまでには寝落ちしてしまっていた。

「……さて、と」

こつそりと川の字になってた布団から抜け出す。そのまま部屋を後にし、まだ起きてるだろうおばあちゃんのとこへと向かう。

「あら、まだ起きてたのかい？」

「ん、まあな」

起きてきた俺におばあちゃんは、うちの布団じゃ寝れなかったかねえ、と優しく笑う。そのまま俺様の頭を撫でてくる。

「織原修二くん、だったかい？ 一子とは同じクラスの子なのかい？」

「あー、いや、学校違うわ。まあ、河川敷で会って、そっからだ」

「そうかいそうかい」

「そういや、そのあたりとかどうなってるんだろ、面倒だから住所不定無職でいいか。」

「そりやまあ、一子ちゃんとは将来を決めあった仲ですしおすし」

性奴隷またはペットとしてだけど。

「そりやまた、気の早い子だねえ。ふふ、修二くんなら、一子を任せても大丈夫そうね」

おばあちゃんあなたの目は節穴ですか。それとももう痴呆が始まってしまったのですか。

一子ちゃんの性への目覚めを手助けしてしまった翌日、俺の姿はまたも河川敷にあった。春のうららかな風が心地よく俺を撫でて通り過ぎていく。

「あー、どうすつかなあ」

一子ちゃんは学校だし、金もねえし、何よりエクスカリバーは鞆に収まったまんまだし。真名開放はいつになったらできるのか。

ロリボデイだったからいけなかったのか、一子ちゃんのエロスが足りなかったのか。聖剣はオネシヨタでも望まれているのか？ いや、ありつちやありだけど。

「まあ、あと1、2年すれば起つじやろ」

一子ちゃんたちは小学3年生らしい、なら俺もそのくらいだ。今決めた、俺がルールだ。

「ほう、昨日から感じた気の持ち主がどんな奴かと思って来てみれば、こんな子供だったとはな。膨大な気を持つとはいえ、ただの赤子か」

なんかめつちや上から目線のじじいに後ろから声をかけられた件。こりやあ、キレた若者としての一面を見せるべきだろうか。俺は本来温厚だが、赤ちゃん呼ばわりされるのは我慢ならない。俺を赤ちゃん扱いしていいのは赤ちゃんプレイのときだけだ。

「いや、流石に赤ちゃんプレイは射程圏外なんだけどね」

「何を言っている。気でも触れているのか？」

失礼なジジイめ。てか改めて見るとなんか、すごく嫌な予感をビンビン感じ取るんだが、目を離れたら一発でぶち殺されそうなそんな感触。チリチリと後頭部が焼けつくような感覚がする。

「あつれー、冷や汗止まんないんだけど。じいさん、もしかしてめちやくちやな人種？」

「ラオウとかオーガとか、そういう部類」

「羅の王か。そいつがどんな人物かは知らんが、俺の強さを感じ取れる程度はできるようだな」

「ラオウ知らないとか信じられないですわー。てか、どうする、今のところ本能がアラーム鳴らしっぱなしなんだけど、セコム早く来てくんね？」

「赤子、名前は？」

「織原修二」

俺は一步後ろに下がる。ジジイも一步間合いを詰めてくる。まじい、逃げられそうにない。川に飛び込んでも普通に追いかけてきそうだ。

「てか、なんで俺が逃げなきゃなんねえんだ？」

「そもそも、このジジイが悪い人と決まったわけじゃ……………」

「……………」

「うわー、人殺して食べてそうな見た目してるわー、髭とかで人を刺し殺せそうだわー」

あ、何か威圧感増えた。これ動き出したらヤラレルね。俺はいつだって女の子をヤル側だつてのに。てか、今じゃヤルこともできないし……。俺から性の喜びを奪いやがって。

「とりあえず、何の用よ」

「ふん、小生意気にも俺を挑発してなお、そのふてぶてしきには感心するな」

「バトル漫画みたいな展開はいいから。とりあえず何の用だべ」

「赤子、九鬼に来るがいい。俺が手ずから鍛えてやろう」

会話になってねえ。人の話を聞かない奴って困りますわー。てか鍛えるってどういうことよ、あれか、悟空みたいに超重力の中で腕立て腹筋とかしなきゃいけないの？

ヤダよそんなスパルタン。亀仙流の修行法とかなら考えないこともないけども。

「てか、九鬼って何よ」

「九鬼を知らないとは、世間知らずな赤子だな」

「子供って世間知らずなくらいがちよーどいいのよ。俺は世間に埋没したくないお年頃なのよ」

それよりも聞き捨てならないあつたな。鍛える？ このバトル漫画から出てきたような鬨気を醸し出しているジジイが？ 明らかにバトル漫画の展開だろ、それ。

「あの一、拒否ってできます？」

「却下だ。貴様の気の総量を考えれば放置はありえん」

「気つてなんだよ、やっぱりドラゴンボールか？ 七つの玉を集めればギャルのパンティをもらえるあれな世界なのか？」

「……」

「逃げるか。たぶん無理と思うけど。」

「結論、やっぱり逃げきれませんでした。」

「ドナドナドナー」

「今なら売られていく子牛の気持ち分かる。首根っこ掴まれて背負われて連行されております。てか、逃げ出そうとした瞬間になんかよくわからんキックでHP全部持ってかれたわ。チートジジイめ。ジャンル違いのさばるんじゃない！」

「てか、これからどうなのよ、なあ、じいさん」

「貴様が気絶している間にいろいろと調べさせた。戸籍もない、足取りもつかめん。九鬼で調べて出てこないということは戸籍はないのだろう。大方、認知されずに捨てられたか、どこかからか放浪してきたか」

どうやって調べたし、怖すぎるわ。

でも実は、ただ単に目が覚めてたらコナ●君だっただけです。てか、一子ちゃんとの約束あんだけどどうすんべ、今日も少しずつ性感帯を開発するつもりだったんだけど。

「九鬼の方で貴様の戸籍は用意してやる」

「戸籍、ねえ。なんだってそんなことを？」

「戸籍がないと後々厄介だからな。それに、貴様はつきつきりで俺が扱いてやる。光栄に思えよ？」

このジジイ、どんだけ理不尽なんだ……。俺は俺以外の理不尽なんぞ絶対に認めん、絶対にだ。

「ふざけんなジジイ！俺にはこれから一子ちゃんとの調教開発や女風呂ランデブー計画とかすること山ほどあるんだ！なあにが悲しくてこれからの素敵ライフを枯れたジジイと過ごさにならんのだ」

「言うな、赤子……だが、まあ、学校ぐらいには行かせてやるか」

いや、学校とか行く気ないんだけども。あー、それにしても、どうしてこうもままならないのか。

「ドナドナドナー」

俺の唄が虚しく響いていったのでしたまる。

「それで、そのガキがさつき連絡してた子供か」

「はい、帝様。この齡にして、氣を失いかけながらも私に一撃を入れてくる才を持った子供です。それに、物珍しい能力も持っているようです」

「ほー、そりゃ、すげえガキだな」

なんか偉そうなバツテンの前に連れてこられてしまいました。てか、無意識のうちに一発かましてたのか。

「それで、お前さんがこのガキの面倒を見るのか？」

「はい、これだけの力、放置しておけば九鬼にも累が及ぶやもしれません。そして、この子供を矯正できるのは私以外にはいないでしょう」

「矯正つて、俺ほど真面目で善良な一般市民は居ないだろうに」

ぶらーんとジジイにつるされたまま、俺はジジイの言い草に反論する。

「黙っている、今は俺が帝様と話しているのだ」

「ふぁー、みかどっち、どうよこの傍若無人っぷり。俺たち同じ人類よ？ 少しは俺の人権尊重してもいいんじゃないですかー？」

「……」

「……」

あ、ジジイからの殺気が飛んできたわ。てか、ナチュラルに殺気とか感じるようになった俺超人。

「貴様……」

「アツハツハツハ！ かまわんかまわん、ヒューム。みかどっちなんて初めて呼ばれたぜ」

「おー、そりやお気に召して何より。だからみかどっちこの隣ですんごい殺気オーラ出してるじいさん止めて」

みかどっちは、笑いながらじいさんをたしなめてくれる。まじみかどっち帝。てか、帝ってゴージャスな名前だな。お金とか持つてそう。……あごは普通だな……うん。

「おう、ヒューム。俺が許可する。お前さん、名前は？」

「織原修二。みかどっち、名字の方は？」

「九鬼だよ、聞いたこと、無いんだったな。んで、こっちがヒュームだ。これからお前の

面倒を見るから、仲良くしとけよ？」

「えー、このじいさん怖いぜー、みかどつち」

「ああ、ヒューム怒るとこえーからな、怒らせんじゃねーぞー」

「あつはつはつは。……笑えねえ」

いきなり襲い掛かれて、逃げ出そうとしたら蹴り倒されて、あれ、このじいさんやバイ人？

……分かりきつたことだったね。

「まあ、とりあえず、戸籍の方は適当に用意しといてやるよ。学校は、まあ、英雄のとこと一緒にいいだろ。あ、英雄つて俺の息子な、仲良くしてやつてくれ」

「アツハイ」

なんかもうそれでいいです。

てか、みかどつちの息子かあ。そこそこ面白そうなやつな気がする。てか、何でかなあ、みかどつちに反抗しようつて気があんま起きねえ、なんでだろ。

「そんじや、俺は仕事あつから、あとは任せたぜ、ヒューム。じゃあな！ 修二！」

「かしこまりました」

「いつてらー」ノシ

高笑いしながらみかどつちはどつかへ行つてしまった。なんか台風みたいなやつ

ちやなー、みかどっち。なんか一緒に酒でも飲みながらどんちゃん騒ぎしたいな。

「……」

「……」

爺さんの俺を持つ手に力が籠った気がする。

「あ、気のせいじゃない。痛い痛い痛いッ！ 握力ゴリラか！」

「ふん、帝様に関しては許可された以上、もう俺からは何も言わん。だが」

目がキュピーンと光る。え、ガンダム？

「目上の者には敬意を払え！ ジェノサイドチェーンソー！」

「ちよ、おま」

俺を仕留めたのはその技だったか。次は、かわ……無理ポ。

「知らない天井だ」

目が覚めたらふつかふかのベッドだった。河原よりもましたが、それでも俺様の心は

黒いものに覆われていた。

あんのジジイめ、次に会ったら筋肉バスターかけてやる。

「……ハッ！ ジジイは！」

そのにつくきじいさんは今周囲にはいないようだ。まあいい、この少しスイートクラスを超越した感じの部屋から脱出しなければ。

まあ、恐らくはあのじいさんに連れられたでつかいビルだろう。

「うわ、高。何階まであるんだ、これ」

窓から見た景色は何階か考えるのもめんどくさくなるぐらいの高さだ。俺が鳥類の血を引くか完全生命体だったらこの窓から逃げ出していくのに。流星に生身じゃ無理だ。

「さて、スパイごっこすつか」

俺はいつだって楽しむことを諦めない男なのである。

こちらハンサム、順調に下の階へと向かっている。今まで気づかれていないと思われる。気づいたとしても全員夢の中に居るから問題ない。

「む？ 何だ、このダンゴ——」

「ホワツチャア！」

「ぐはあ！」

執事服を着たおっさんを北斗神拳で殴り倒す。実際はただの急所への攻撃だが、一撃で敵を倒す気概は一緒だから問題ない。とりあえず気絶させた相手の懐を漁る。

どいつもこいつも、何で武器とか持ってんねん。こいつは銃器だし、さっきのやつはナイフ大量に持ってたし。

「まあ、とりあえずあのジジイ対策に借りておくか」

適当に漁り、最後に顔にアンパン●の落書きをして、適当な部屋に詰め込んでおく。てか、今何階だ？ 結構降りてきたと思うが。

えーと、今何階だ？ めんどくせえ。エレベーターは流石に目立つからなあ。一応逃げてる側だし、心は伝説の傭兵だし。葉巻は吸ったことねえけどな。

「……ふと、ダクトを見つけてしまった私はどうすべきでしょうか」

そういえば、近くには海があったな。ビルの高さそれなりにあったっけか……行けるか？ うーむ、色々必要なものがあるべえな。でもこの人たちのドロップ率的にいけないこともなさそうだ。

「度肝抜いてやらあ、クソジジイ」

くはは、面白いこと考えちまったなあ。

「I can fly イイイイイイイ!!」

俺は外へ目がけて駆け出していく。方向、距離、加速、全てが十分！ てか、屋上へリポートつてこのビルばねえな！ みかどっちの財力は世界一いいいいいいい！

「ヒヤッホオオオオオ!!」

飛び降りるとともに、はるか下のじいさんの気配が揺らいだ気がした、動揺するようには。くはは、どうよ、じいさんが下で待ち受けてたのは何か途中で体得した気配察知で読んでいたのよお！ 俺ってばやっぱり超人になってるじゃないか！

「パラシュート展開!!」

執事から奪った武器の類や、メイドの下着の類を使って作ったパラシュート、それにいろいろ補強はしたから並大抵のことじゃ壊れんぞ! 流石のじいさんも空を飛べまい! しかも女物の下着だけで作ったから目の保養にもなる! カラフルだしね!

「くははは! このまま海に逃げ込んだらあ!」

子供の体重だからか、俺のパラシュートの出来が凄すぎるからか。想像通り、理想のポイントに落ちていく。そのまま海に落ちていく。

衝撃、流石に痛かったが十分我慢できる。ジジイの気配も遠い、このまま波に紛れて泳いで逃げていく。

くははは! ざまあ!

俺は荒波を乗り越えて自らの故郷へと戻っていく鮭の気分を味わった。あいつらは死を覚悟して自らの子孫を残しそうと、川を上っていく。その覚悟、在り方、人間は見習うべきだと俺は考えた。荒波にもまれ、それでも生きねばならない。

「というわけで、俺はここまでバタフライで戻ってきたわけだ」

「すごいわー！ シュウジー！」

河川敷へと海から川を上ってきたら丁度一子ちゃんたちが遊んでいた。てか、あのガタイのいいガキたちもいるんだが、端の方で怯えられてる。

僕ちなんなかわかんなーい。

「あー、お前さんらも昨日は悪かったな。あれだ、俺もいきなりコ●ン君になってて余裕がなかったんだよ？ 仲良くしようぜ。な、一子ちゃん？」

「？ よくわからないけど、皆仲良しってのはいいと思うー！」

「……ち、何でワン子はそんなにこいつに懐いてんだよ」

「いや、俺ってばモテモテハンサムな男だし？ 当然のことじゃないか？」

ガクトくんとかはまだ不満らしい。なんだ、もつと凹した方がいいか？ でも一子

ちゃん見てやがるしなあ。とり敢えず俺はピースフルな男だから和平からしていこうと思う。

「まあ、えーと、確か島津首置いてけど、直江兼次と、師岡スネ夫か。よろしくな」
「全然あつてないよ！ それに僕は卓也！」

昨日一子ちゃんにこいつらのこと教えてもらったし、俺がさわやかに挨拶をすると、昨日はテレフォンパンチで終わったスネ夫くんがツツコミをしてくれる。小学3年生にして切れのあるツツコミ、悪くない。

「なんだなんだ？ こいつがガクトたちの言つてた生意気なやつつてことか？」

なんかバンダナしてたこどもが楽しそうに近づいてくる。これがこいつらの頭張つてるキャップとやらか。なんか風魔だったつけ、風間だったつけ、忍者っぽいな。これは俺が忍者スレイヤーになって対決しなくちゃいけないのか？

「あー、うん、昨日はごめんね。俺も大人げなかったわ、すまねえ」

誠心誠意謝罪を伝える。俺つてば素直で素敵なチャーミング。

「ほら、これやつから、過去のことは水に流そうや」

パラシュートの残骸、パンツやブラジャーを差し出す。性に目覚め始めたがきんちよにはいい餌になるだろ。

「うおっ！ まじかよ、これどこで手に入れたんだ!？」

「ふ、俺もただでお前らと仲直りしてきたわけじゃねえのよ」

なんか一番ガクトくんが食いついていい反応見せてくれて、俺は気分がいい。スネ夫くんと愛戦士もむつつり反応を示している。

うんうん、男の子はそうじゃなくちゃ。やっぱり男の子はいつだってパンティに夢中なんだ。

「ほら、一子ちゃんにはお菓子をプレゼントしてあげよー」

「わあー！ ありがとう修二ー！」

「ほれ、お前らにも分けてやんよ」

「おー！ いいのかー！ ありがとうなー！」

俺はズボンのポケットに菓子を取り出すように手を突っ込む。てか、ヤバイな俺。マジヤツベエ、この秘密がバレたらまじヤツベエ。

一子ちゃんたちから見えないように手のひらに“何か”を凝縮させる。すると、手の中にはなんとうめえ棒が！

……。

便利だとは思うけど、これ、どういう原理なんだろ。物理法則ガン無視よ？ あのジジイの言ってた気とやらのせいかな？

んー、この力もコナ●君化の影響かねえ。思い描けば大体のもんは作れるっぽい。

「まあ、そこまで気にせんでもいいか。便利便利」

男どもはパンツで分かり合えたし、バンドナと一子ちゃんはお菓子で釣ることが出来た。

何てチョロくて平和な世界なのか。これはノーベル平和賞も夢じゃないな。まあ、その授賞式でどっかの国に宣戦布告とか面白そうだな。

「やはり、ギャルのパンティは世界を救うのか。いや、メイドさんだったけど」

「何をバカげたことをしているのか。はねっ返りの激しい赤子には、きつい仕置きをせねばならんな」

殺気！

「ジェノサイドチエーンソー！」

「させるかよッ！」

前に飛び込むように転がりながら回避する。今度は避けれた！

それと共にブラジャーを大量にぶちまけ、相手の視界を限りなく防ぐ。そしてそのまま奪っていた拳銃をブラジャー越しに撃ち込む。

「ファツキンベイバー!!」

実弾じゃなくてゴム弾つぽいが、暴徒鎮圧ぐらいはできそうな威力だ。

連射連射あ！ 弾幕薄いぞお！

「シッ！」

ジジイの足が霞んだと思ったら、全ての弾丸を蹴り落とし、さらにこつちに跳ね返してきやがった。今度はパンツをシールド代わりにして凌ぐ。弾丸蹴り返すとか化けもんかよ。

奪つてた武器の中でも大きめのバトルナイフを引き出す。拳銃は投げ捨て、両手でナイフを握りこむ。少し柄が足りんが、まあいい。

足を引き、腰を落とす。ジジイの一挙一投足に目を凝らす。眼球乾くなんぞ知ったことか、目の前のはSCP173だ、目を離せば殺されちまう。

——なら、殺される前に殺す——

「ほう」

「んだよ、感心したみたいな顔しやがって」

「事実、感心をしている。いい目をしているな」

「ジジイに言われても鳥肌立つわ」

「ふ、貴様には言われたくはないがな」

目を離してなんぞいなかった。そんな分かり切った愚を犯すなんぞ俺はしないはずだ。つまり、俺が見つめていてなお、俺の視界から逃げ出したのか……!?

「これからに、期待だな
あばー。」

第2話

じいさんにあばーされてからの一週間は、それはもうイカレタ日々だった。

一日目、目が覚める。じいさんの顔見て唾を吐きつける、蹴られる。

二日目、目が覚める。じいさんの顔を見て股間に一撃かまそうとする。蹴られる。

三日目、その日は準備が整ったやらなんとか、白い密閉空間に閉じ込められじいさんに蹴られる。

四日目、逃げ出そうとするもじいさんからは逃げられない。筋トレさせられまくる。

五日目、仕方なしに体調不良を装う。じいさんが目を離れたすきに脱走する。

六日目、親不孝通りとやらでチンピラたちのリーゼントをもぎ取りながら、どうじいさんから逃げるか模索する。蹴られる。

七日目、一日目に戻る。

「まじどうなってんだ、クソゲーにもほどがあるだろうおい」

修行と言うか拷問じゃねえか、端から見りや虐待だぞ。こりゃ出るところ出ないといけ

ませんねえ。

自分に与えられた九鬼ビル内の部屋の中で、ベッドに転がる。ズキズキと体が悲鳴を上げてやがる。SもMもいけるハイブリッドハンサム俺でも流石にまともに動けねえ。

「あーくそいって、筋肉痛ってこんな痛かったか？」

ちなみに昨日は筋トレ日だった。なんだよ腹筋1000回って、バトル漫画の住人かよ。ちなみにスクワットと背筋とかさせられた、しないと蹴られる。あのじいさん、ぜってえカルシウムが足りてねえだろ。

「見誤ったか。貴様が子どもと言うことを失念していた」

「うっせ、幼児虐待者め。ジャンプ買ってこいや」

「ふん、悪態をつく元気があるなら次も同じメニニューでいいな。いや？ むしろ追加するか」

「ごめんなちやい許しておじいちやま」

できる限り愛嬌を振りまいてみる。こうしたこと落ちなかったじいさんは居なかった。

「気持ちが悪いな。今度は死ぬ直前までしごくか」

「フアツキンジーザス」

なんてことだ、じいさんの美的感覚はイカレちまつてたみてえだ。

じいさんは俺をいじめる未来を想像したのか、笑みを浮かべたまま部屋を出て行く。

「ちくせう、結局ジャンプは手に入らねえのかよ」

少年の聖書が手に入らないとかふざけてやがる。ちなみに俺はジャンプのラブコメが好きだ。

てかガチで俺の心を折りに来てやがるな、あのじいさん。曜日も時間も分からない状態にして苛め抜いて、終わったら部屋に放り込んで軟禁だべ。

普通、こないじめにあつたら耐え切れんぞ、流石の俺も涙目ぞ。こんなストレス感じてちゃ飯運んでくれるメイドさんにパイタツチすんのも仕方ないね。

逃走は成功率1%ぐらいいきやいとこだし、あのじいさん以外はいいとして、俺の勤がじいさん並みの化け物がこの街に居るぞーってピンピン反応してる。どうせならエクスカリバーにピンピンしてほしかった。

「あ、一子ちゃんのこと忘れてたわ。くっそ、この街から逃げる前には真名解放しねえと」

二、三年だ。それだけ時間をかけてあのじいさんから逃げる。絶対だ。

「そうと決まりや、雌伏の時だなー。てかじいさんいつか殺す」

体から力を抜き、目を瞑る。いじめられた筋肉が再構築されていくようなイメージを感じながら、今までの疲労を溶かしていく。あ、すんごく気持ちよく寝れ……スヤア。

「おい起きろ、食事の時間だ」

お目覚めはメイドのキッスがよかったです。じいさんの髭はノーサンキューです。

「今何時だじいさん、そろそろ時差ほけどころか精神がイカレちまうぞ」

「そう言う割にはまったく応えてないようだな。あと一カ月ほど続けてやろうか」

こっちの心折る気じゃねえわ、殺す気だわ。あ、泣きそう。確かに反社会的なことばつかしてたけどさ、この体になってチャラになったと思っくいいいじゃない。反省なんて欠片もしてないけど。

てか刑務所より上等と感ずるのが飯と寝床しかない現状である。ファツキン。

「と、言いたいところだが。喜べ、明日はようやくここから出られるぞ」

「お？ ついに虐待バレて閑職にでもなんのか？ 無職になって年金暮らしになんのか？」

「そんなわけないだろう。貴様の学校への編入が決まったただけだ。今度の月曜から通ってもらうぞ」

そんなふざけたことを抜かしながら俺に真つ黒なランドセルを投げて寄こしやがった。なつつ、俺は天使の羽しか受け付けねーんだけど、きちんとそこそこ配慮してんのかねえ。GPSとか埋まってそ、流石に考えすぎか。

「あいあい。くっそふざけやがって」

ランドセルの中にはご丁寧に教科書まで入ってやがる。俺の学歴は高校中退だぞ。ちなみに放送室で女教師をガチャピン（意味深）してたら全校に放送されて、仲良く学校からおさらばだった。刺されかけたね、相手に。

「明日明後日、土日を使って勉強をしておけ。小学校とはいえ、九鬼の名を使って編入させたからには無様な学はさらすなよ」

「ふぁー、出たよこの人。九鬼大好きすぎかよまじ」

まあ俺もみかどつちは気に入ってるしな。なんかあつちもシンパシーみたいなの感じてるみたいだし。

「そーいやみかどつちは今どこにおるん？　時間間隔麻痺ってるから最初に会った時からいくら経ったか分かんねえが」

「帝様は明日までこのビルにおられる。明日の朝には中東の方へ向かわれるがな」

「渡り鳥かよマジワロス。まあいいか、じいさんは着いていكانの？」

マジお願いみかどつちこの不良爺連れてって。てかこの教育方法もチクつちやろ、クビになつちまえ。

「誠に残念だが、俺も帝様の護衛として着いていかねばならん。紛争地帯がごたつている上、現地のやつらが九鬼に何か仕掛けてくる動きも見られたからな。傍を離れるわけにはいかなかった」

「ひやつほー！　現地民さんまじさんきゅー！」

「喧しい。蹴るぞ」

「アツハイ」

じいさんの目が光り出したのでひとまず大人しくする。現地のやつらつてのが何だかよく知らんが、ひとまずお礼を言っておこう。てかみかどっち中東に何しに行くんだよ、石油でも掘るのか？

「そんじや、俺は自由の身でおけ？」

「一般の従者の監視は付くがな……。それでもまだ調教も済んでいない獣を野に放つようなものだが、鉄心にも言つてあるから大丈夫だろう」

「おつ、一般の執事やメイドに俺を止められるとでも？」

おつおつおつおつと反復横跳びしながらじいさんを煽る。高スペックになったこの体なら百面相しながら煽れる。

蹴られた、解せぬ。まあ俺がやられても蹴るけども。

「まじあのじいさん暴力的すぎんよー、みかどつちよー」

「アツハツハツハ！ お前さんそんな目にあつてたのかよ。虐待じゃねえか、はたからみたらよ、フハハ」

みかどつちが腹を抱えて笑う。おうこらその腹筋にパンチかますぞ。

じいさんが出て行つた後、筋肉痛もいくらか収まつたので俺はみかどつちの所に向かうことにした。手土産は大吟醸とききいかを最近手からお菓子出せるようになったのでそれで作つた？ まあ、食えるから問題ないだろ。

じいさんいるかなーと思つたが居なかつた。明日の荷造りでもしてんのかね？ 忘れ物すんなよ？ 友達いないんだから誰も忘れた物貸してくれないぞ？

「てか、この酒とかつまみはどうしたんだ？ 金も持つてなかつたし、買いに行くことすらできなかつたら、あむ」

「手から出しましたー。何かよくわからんが、食べ物限定で手から出せるっぽい。ほら、今度はビーフジャーキー」

俺も酒のせいで酔ってるな。口が滑つちまう、こりやいかん傾向だ。酒で身を亡ぼすタイプだったわ俺。お菓子とか食べ物しか出せないとか俺の異能どうなってんのよ。どうせならお金出せるようにしてほしかったわ、一字違いだしいじゃん別に。

「へー、便利だな。飢え知らずってか、中東行くか？ あっち飢えてるやつが山ほどいるからな」

「俺一人で何ができんのよ。せいぜい一人二人満腹にして終わりだよ。みかどつちが救ってこいや。そういうの得意じゃろ、大勢でゾロゾロと行くんだし」

たぶんじいさんが言ってた気とやらを消費して食べ物作ってんだろーな。少しけどるい感じがするし。てかみかどつち全然酔わねえ、うわばみかよこやつ。

「お前見た目通りの年齢じゃないだろ絶対。あー、ミスったな、学校に行かせるんじゃないかって引つ張っていくべきだったぜ」

「お断りです。俺はフリーダムなの、世界の半分ぐらい寄こせば考えたるよ。よく考えたら勇者って世界の半分の誘惑を振り切って魔王ぶつ殺すよな、まじ鋼の精神だよな」

「だつはっは、確かにな。ま、明日にや俺は飛行機だ。てかよー、お前まじで子供じゃねえだろ、俺と同じ年くらいって言われても納得するぞ？」

「見た目で人を判断してくださいー、平平凡凡な小学三年ですー」

まったく、見た目で判断してくれなきや女湯いけねえだろうが。分かつてんのかよみかどつちよー。

「どうせ女湯でも覗くんだろ？ うらやましいぜ、まったくよ」

「な、なにをおっしやるみかどさん」

勘がよすぎませんかねえ。いや、この場合はその勘に持つてる絶対的な信頼を驚くべきか？

「ま、いいさ、宿り木にしちや豪華だが、楽しんでくれや」

「ええのかいそれで、あのじいさん九鬼の従者にしてやるーとか意気込んでるんだぜ？

あの洗脳教育もその一環じゃろうて」

「無理無理。お前、俺と大体一緒だわ。ま、考えてることとか、スタンスとかは違うけど

な」

そうかい。ま、俺もみかどつちとは上下関係って言われても想像できんしの。なんだかまじでシンパシー。

いやあ、酒が旨いなあ。

そして、翌日。

「二日酔いと言うオチである」

あつたまいてえ、吐き気がヤベエ。何でおんなじくらい飲んどいてみかどつち平然と中東に行けるんですかねえ。つまみはじいさんに蹴られて全部リバーズしたよチクシヨウ！

「とりあえず、久々の自由を……う、日差しがきも”ぢわ”る”い”……」

今にも吐き出しそう……もう胃液しか残ってねえよ。

「あ！ シュウジ！」

「あん？」

何やら従順なワンコが俺を呼ぶ声がある。

「……一子ちゃんじゃねえか。どしたよ、学校は」

「？ 今日休みよ？ シュウジ具合悪そうよ？ 大丈夫？」

「あー、大丈夫だいじよ、うぶ……」

ガキの肝臓の処理能力を見誤ってた。もうみかどつちと同じペースでは飲まねえ。

「ほ、ほんとに大丈夫？ おばあちゃんの家で休む？」

「あーうー、へーきへーき。あのばあちゃんにあんま迷惑かけたかねえんだ」
「ほんと?」

「ああ、そんで。一子ちゃんはこんなくつそ暑い日差しの中どしたよ、遊びに行くんか?」

遊ぶとなるとあのパンツ愛好会たちか。いや、男は誰もがパンツ愛好家か。

「ええ! ヤマトたちと野球するの! シュウジも来る?」

「おうおう、そんじゃ俺がメジャーリーガーも真つ青なデッドボールかましたるよ」

物理的には真つ赤にするんだがな。

「遊びに誘ってくれた一子ちゃんにはご褒美をあげよー」

「わーい! コロコロ♪」

手から飴玉を異能で作り出し一子ちゃんの口に放り込む。アメとムチを使い分ける調教師としての側面も俺は持ち合わせているんだ。その内一子ちゃんには猛獣として

俺の上を飛び跳ねてもらわなきゃならんからな。

「そんじゃ、行こうや。この前の河川敷か？」

「うん！ こつちよー！」

一子ちゃんに手を引かれる。やるな、キウンキウンポイントが高いぜ。

「かつきーん!!」

子どものころの将来の夢はメジャーリーガーでした、修二です。放物線を描いたボールは遥か彼方へ！ 伸びる！ 追い風に乗ってどこまでも伸びるぞー！ これは入ったでしよー！

「どわー！ 飛ばし過ぎだぞー！」

「走れ筋肉ダルマよお！ その間に俺はホームベースを踏んでるがなあ!!」

子供の草野球にはランニングホームランぐらいしかないよね。人数少ねえと三角ベースだし。

じいさんの蹴りを撃ち返すぐらいの気概で行ったら伸びる伸びる。子どもなんぞ勉強が少しできてスポーツができれば大体言うこと聞くようになるだろうと思ってたが思いのほか楽しいな。

「ふ、流石は俺を一度は地に伏せさせた男だ。ただ者ではないと思ったがな」

「おー！ お前すんげえだな！ この前は何か気がついていたら居なくなってたしな」

うるせ、あのじいさんはしかたねえだろ、負けイベントだ負けイベント。今は居ねえけどな!! 最高だなあ！ おい！

「クハハハツ！ いいきぶ……う、おろろろろろ」

ホームベースまで戻ってきたが、キャッチャー役の中二君に酸スプリットアタックをかましてしまった。中二君の悲鳴を聞きながら、俺はしっかりとホームベースを踏み抜

いたのであつた。

S i d e : 九鬼帝

「本当によかつたのですか。あの小僧を置いてきて」

飛行機の中で、ヒュームが表情を厳しくして俺に聞いてきた。

小僧とは当然、ヒュームが連れて来たあの子供の皮を被つたやつのことだろう。人並み外れた総量の気、それだけでも監視に置くだけの危険性があるつてのに、あいつ多分かなりのバカだからなー。

多分犯罪とか後ろ暗いことも色々してたんだろ、俺には分かるわ。ヒュームも若干それを感じ取つて危険だと判断したんだらうけどな。

「ありや抑えつけたところで反発しかしねえよ、ヒューム。実際、閉じ込めてポコポコに

したところでさして手応え無かっただろ？」

「ええ、奴は危険だ」

簡潔に、それでいて確信的な答え。

「そうだなー、修二は危険だわな。でもま、それ以上に、俺の勘があいつとはダチになれって言ってたんだわ」

「……」

この勘に俺は全てを乗せて来た。勘なんて不確かなものを、俺はこの人生常に絶対的な信頼をもってやってきた。それが外れたことはなかったし、これからも俺はこの勘を信じていくだろう。

「ヒューム」

コインをトスし、ヒュームに投げ渡す。コインはくるくると放物線を描き、ヒュームの手にとまる。

「表なら、俺の言う通りにしろ。裏だったら、おまえが言う通り、あいつは危険と判断して何らかの対策を講じよう」

ヒュームは難しい顔のままですつと受け取ったそれを手の甲に乗せる。

答えを俺は間違えない、俺の勘が教えてくれる。

「表だろ？　俺の勝ちだ」

コインの面を言い当て、俺は飛行機の窓から頬杖をつきながら外を眺める。

「面白そうなこと、やらかしてくれよ？」

ヒュームからの答えを聞くまでもねえや、俺は俺の勘を信じてるからな。

第3話

爽やかな汗を流した俺たちは夕暮れごろには解散することにした。中二君こと戦艦大和がずぶ濡れなのは俺が親切心で川で洗ってやったからだ、このまま黒歴史も洗い流せるといいな。

子供の草野球と思って舐めてたら熱中しちまってたぜ、こりやスポ魂路線を考えてもよさそうだな。でも友情、努力、勝利の大半に唾吐いて来たから別にいいか。

「そして、ここが川神院よ！ 修二

「ほーでけえー看板だな、幾らで売ってんの？ 看板破りとか面倒だけど看板だけは欲しいわ」

「確かにおつきいわ！ 高そうねー」

一子ちゃんの案内で川神観光。

俺としちや裏の方にある山の方が気になるな、山登りとか好きなお年頃だし。美味そう動物とか茸とかもあるかなー、あと一子ちゃんに俺のキノコをぶち込みたい。

「あとはー、この辺りだと葛餅屋さんくらいかしら」

「お、いいねえ。つて、金がねえ。また今度だわな」

まあ、俺は帰りに無銭飲食するがな。

「うん！ 今度は皆で食べに行きましょ！」

「おうおう、そんじゃ、一子ちゃんは帰りな。俺もそろそろ還るから」

キラキラな一子ちゃんの髪をなでてやる。くすぐったそうに目を細めるのを見て、犬みてーだなー、そのうち裸で散歩プレイとかすっかなーと考える俺。

撫でてた手を軽く押してやり、そのまま左右に振る。一子ちゃんは名残惜しそうにしなからも笑顔で去って行った。

今度から学校かー、一子ちゃんみてえなのがいるならいいんだけどなー。光源氏先生に倣って青い果实はもぎ取っていくスタイルだからなー。

「ラランランランドセルーはー」

「て、天使の羽……！」

というわけでランドセルを背負って、俺は小学校に通っていた。昨日の今日で色々そろえる九鬼ばねえ。だがジジイ、スパルタンなお前だけはだめだ。何だうさぎ跳び1000回とか、だからバトル漫画の住人がのさばるんじゃない。

そんな初めての学校、転校生の俺は友達が100人できるか不安につぶれそうだったが今ではこんなに素晴らしいお友達ができました。皆さんにもご紹介させていただきましよう。

「小雪ちゃんですー」

「う、うえーい……」

教室の隅でガクブルしてたから強引に引つ張り出してしまった。とりあえずアルビノで珍しかったからとりあえず物珍しきから絡んだつてのものもある。

うーむ、少しこの子風呂呂に入つてねえな？ かすかにツンとした匂いがしてきやがる。それに、色々と訳ありそうだ。とりあえず、小動物っぽい感じがお兄さんのポイント高いのであります。

「だが、俺はかわいい女の子なら体臭は気にしなーい！ クンカクンカスーハー」

「きや……！」

「つて、何してんのよ、転校生！」

「おやおや、修二君は小雪さんのことが気に入られたようですね」

あー？ なんか少し天パ気味の小僧がツツコンできた。しかも何か中東の雰囲気漂わせる色黒のやつも。何だ何だ、早々の転入生いびりか？ お？ 俺様売られた喧嘩は拳で買うぞ？

「……」

「あー、んで、何の用よ。えーと、確かハゲと葵冬馬だったか？」

「ハゲてねえよ！」

「お、名前を憶えていただいてましたか。これはうれしいですね」

いいんだよ、たぶん将来ハゲるだろうから。は、まさかこいつら俺の小雪ちゃん狙いか!?

「小雪ちゃんは俺のだからな！」

「……ふえ」

「……あー、こいつ人の話聞かない人種だ。九鬼とかと一緒の類」

「ふふふ、確かに、私の強そうな方ですね」

とりあえず小雪ちゃんは俺の腕に抱いたまま、二人と向かい合う。細いなあ、ちゃんと飯食わないといかんぞー。むにむにしてやるが、お肌のケアもしてやらないとな。将来は俺のマシユマロ布団になってもらうからな。

俺は女というデザートを彩るパティシエなんだよ。

てか、されるがままでねー、分かってたけど。そんなうえでどこか怯えながらも心地よさを感じてやがるな。これは従順なマシユマロ布団の素養が高いですねえ。

「九鬼つて英雄のことか。みかどつちの息子かあ。どんなやつよ」

「あー、どんな奴つて言っても、王様？　つて感じのやつだぜ、織原」

「ふーん、あつそ。ほら、小雪ちゃん、マシユマロだよー」

「……あむ」

「人に聞いたってその反応!？」

うっせハゲ、お前と幼女の餌付け、優先度はどつちが高いかわかり切ってるだろうが。異能で作ったマシユマロを小雪ちゃんの口に放り込んであげる。正直この能力の詳細とか分らんがまあいい、その内進化しそうな気もするし。

うーぬ、ふけも結構あるな。後で温泉に連れてってやるべきか。そうしようパイタツチしよう。俺が隅々まで洗ってやらねば。

「まあいいや、そのうち会えるだろ」

小雪ちゃん放り出して会いに行くって程でもないしなー。うりうり、マシユマロもつと食べるかや？ おーおー、ほれ、たんとお食べ。その内俺のバナナもお食べ

「それにしても、修二君は変わった人ですね」

「あ？ そりや俺以上にプレミアムで半端なくイカした奴はいねえよ」

「アツハイ……なんつー転校生だ」

あー、学校面倒くせーなー。小雪ちゃんいなけりやボーコツてるのに。

「フハハハハッ！ 我、降臨である！」

あ、これみかどつちの息子だわ。一目見て分かった。頭のぼってんもだし、何よりテシオンがみかどつちに通じるものがある。濃ゆい一族だなー。

「テンションたけーな。お前さん」

「……うう……」

「フハハ、父上から話は聞いているぞ。ヒュームの弟子になった織原修二であろう？」

「あーうん、ヨロシク。とりあえず声のポリューム下げろ、小雪ちゃん怯えてらあ」

「む？ これはすまなかつたな。フハハハ！」

だから声でけーつての！ わざわざ休み時間になつてまで来て高笑いしたかったのかよ。

「これからは同じ学び舎で学ぶ友なのだ。それに、これからは九鬼の方に住むと聞いたぞ」

「あー、じいさんそんなこと言つてたな。寝ながら聞いてたが」

なんでもいきなり鍛えるとか言い出してよー、小雪ちゃんと一子ちゃんの二人で遊ばたいよー。

……それに、小雪ちゃんの方も早めにどうにかしておかねえとな。

「ほれ、次の授業はじまつぞ。教室もどれ教室」

「む、もうそんな時間か。また来るとしよう。また会おう修二！」

……え、また来んの？

「というわけで、放課後は小雪ちゃんを交えて遊ぶこととします。君たちは強制参加です」

「フハハハハ！ 今日のリトルリーグの練習も休みだからな、我も共に親交を深めてやろうー！」

「転校生と九鬼つて混ぜたら危険つて言葉が思い浮かぶんだが……若？」

学校も終わり放課後、俺は愉快的仲間たちを引き連れて遊びに行くことにした。というのも、どうやら小雪ちゃんはクラスでぼつちらしい。これは優しい俺様が友達を増やしてあげなくては。

「んで、小雪ちゃんはどんな遊びがいいよ」

「本当に、修二君は小雪さんにゾッコンですね」

「ゾッコンつて、言葉古くねえか？ まあいいや、ほら、今日の主演は小雪ちゃんだ」

「んー、鬼ごっこ……？」

ほう、この俺に鬼ごっこで挑むというか。そうかそうか、かつて鬼ごっこで俺が鬼に

なった瞬間全員が帰宅していったこの俺に。

だめだ、これ以上は鬱になる。泣きそう。

「よーし、それじゃあハゲが最初の鬼な。皆ハゲが数数えてる間に家かえつぞー」

「なんでだよ！ そんな悲しい遊びじゃなかっただろ！ 普通に鬼してやつから、さつさと逃げろって」

「俺はやられたことは根に持つんだよ。つたく、おーらいおーらい、範囲はこの公園の敷地内な」

全員が頷き、ハゲが数を数えだすとともに逃げ出す。俺も全力で地を駆けていく。子供の遊びにも全力で付き合っただけ俺マジ超ジエントルマン。

「うし、行くぞー！」

ハゲが声を上げる。その足が向かうのは、俺。ほう、この俺の健脚に挑むか。愚かよなあ、愚かすぎて手から納豆が出てくるわ。

「うわ、なんだこれ!？」

「ちくしょう俺の手もベトベトじゃねえか!」

まさかの俺失策。納豆を投げつけて天パハゲの顔をベトベトにしてやったが、俺の手もベトベトになってしまった。

「修二お前! 何投げつけやがった! 前が見えねえ! てか臭え!」

「ヴァカめ! 一流の狩人は狙う獲物を間違えぬものなのだ!」

手は納豆菌に侵されてしまったが、鬼の目は潰した。やはり鬼には豆だよな、うん。愚かな鬼が必死に顔を拭ってる隙に公園の端の茂みの潜り込む。コ●ンボディになつた今なら簡単に全身を隠せるぜ。

「ぬ、修二! 食べ物で粗末にするでない!」

「正論過ぎて言い返せねえけど、特に改心しないからこの話題は止めておこうぜ! 不毛だかな!」

「うえーい! こつちだよハゲ。くさーい!」

「ひでえ!? ぜえつてえ捕まえてやるからなー!」

結局天パハゲこと準は誰一人として捕まえられなかった。小雪ちゃんも準で遊ぶことを覚えたようでこれにはお兄さんもにっこり。

冬馬はずつと木の影で静かに隠れてた。準を見捨てるとは賢い奴だ。

俺の友達百人出来るかな小学校生活は小雪ちゃんというマシユマロ布団(将来)といじりがいのある奴らを見つけることが出来たので上々な出だしだろう。

あー、番長でも目指してみようかなー。割と好きなんだよねー、不良つて訳じゃないけどさー。俺は優等生だから悪いことに憧れちゃうのよねー。

その後小雪ちゃんを銭湯へ連れて行き【自主規制】【自主規制】。溢れるパトスを【自主規制】してやった。最後は小雪ちゃんも【自主規制】。

でもエクスカリバーが抜けない……死にたい……。

小学校生活二日目。

やっぱり前世ではできなかったことをしようと思ひ、番長を目指してみることにした。

番長を目指すということでもまずは配下を探すことにしてみた。そのためにまずはめぼしいやつから声をかけてみるのが定石だな。

「という訳で、どうよ、準、冬馬。一緒に天下を取ってみないか？」

「若、昨日からも思つてたが、こいつは頭がおかしいやつじゃないのか？ 割とうちの病院に来る必要があるような」

「準、うちは精神科はありますが、彼はもつと専門的な場所じゃないとダメでしょう」

おうおう、失礼なやつらだな。こちとら将来の番長様だぞ。お前たちは聖帝十字陵のための労働力にしてやろうかおい。

「ですが、そうですね。楽しそうなので、参謀でもしてみましようか」

「いいねえ。そういうノリがいいところは好きよ？ いいだろう、冬馬は参謀な。んで、

準はパシリ。ジャンプ買ってこいや」

「なにそれひどつ！ ていうか若もノリノリい!？」

うるさいやつだな、罰として頭剃るぞ。バリカンが昨日買ってきたんだぞ。

「小雪ちゃん、ほーら、マシユマローだよー」

「……ううー」

マシユマロ布団こと小雪ちゃんはなんかよそよそしい、昨日の性への目覚めが刺激的すぎたのだろうか。こつちをまともに見れてない。

顔を真っ赤にして俯きながらもマシユマロを受け取る小雪ちゃんには、今日も【自主規制】をしてあげようしよう。えっちなことは刷り込み、光源氏先生も言ってた。

ああそうだ、番長の話だ。この学校で今一番人気な奴って誰だべ。パワーバランス的にトツプの奴。

「あー、そりゃ百代さんだな。一つ上の四年生なんだけど、強すぎて誰も逆らえないんだって」

「ほーほー、強すぎてって、なんだ、ゴリラみたいなパワーでも持つてんのか？」
「ああ、六年生も怯えてるって話だ。何人も喧嘩して負かされてるらしい」

ほー、最近の小学生は物騒だな。これは俺がその暴力に染められた心を浄化してやらねばならんな。ガンジーは核を背負ってこつちと握手を求めてくるしな。うん、ほんと暴力と平和の尊さを教えられたわ。

「それじゃあ、そのゴリラさん呼び出して穩便にボコボコにするか」

「ゴリラってお前……」

「おやおや、流石に彼女と正面からぶつかるのはおススメできませんね。私に考えがあまりですよ」

お、さっそく参謀が進言してくれるようだ。これでアホなこと言ったら準の髪が犠牲になる。

「では、いかがする、参謀」

「そうですね。手紙を送ってはいかがでしょう、内容は私が考えます」

俺が思う偉そうなちよび髭をイメージしながら冬馬に尋ねると、意外や意外、手紙か。なるほど、果たし状か。悪くないな、呼び出したところを罫にハメて狩るのか。顔が良ければハメてもいいな、ハメを外すためにも美口リであることを願おう。

ただまあ、どうせゴリラみたいな女子だろう。小学生ながらに業を背負うとは哀れな子だ、優しくしてやろう。

「よかろう、委細お前に任せる」

「はい、お任せくださいませ」

「ああ……若が悪い道に進んでしまった……」

準、お前あとで丸刈りな。

「それで、お前が私を呼び出したのか？」

ゴリラと思つてた子が想像よりも可愛かつた。どうしよう、こちとらバトルと思つてカルピスの原液詰めた水風船持つてきたんだけど。

将来は美人になるだろうつり目気味の瞳、そこには強い意志が備わり俺を見つめている。鳥の濡れ羽というのか、艶やかな黒髪は明かりを反射して天使の輪を作る。

チャームポイントだろうか、前髪をクロスさせているのも俺的にはポイントが高い。ふつくらとした唇は瑞々しく、食べてしまいたくなってしまう。

「あーうん、まあ、用事があつてな」

「……そうか、お前、何年生だ？」

「昨日転入した三年生だよ。敬語は苦手なんで勘弁勘弁」

敬語なんてものは母親の腹の中に置いてきたからなー、取りに戻れないからどうしようもない。人間皆平等、いい言葉だけ。

「生意気な奴だなあ。それで、これに書いてあったことは本気か？」

ゴリラと違ってた美ロリ。百代だったか、確か、なら百代ちゃんだ。

手のひらで冬馬が用意した手紙をひらひらさせる。そういや内容は確認してないな、どうせゴリラと思ってたからてつきり果たし状と思ってたけどなー。

面白そうだ。乗るしかない、このビックウエーブに。

「ああ、そうだ。俺はいつだって本気だ、百代ちゃんよ」

「……………う、そうか……………そうかあ……………」

俺は少年番長になって伝説を建てると決めたんだった。思い付きでも俺がやると決めたからやるんだ。

戸惑ったように百代ちゃんは眉根を寄せる。見れば見るほど、将来はたわわに実った彼女の桃をしゃぶりたいと思う。そんなよこしまな考えが覚られたのか、百代ちゃんが顔を赤くする。可愛い、肌が白い分、朱色になるとすぐわかる。

「それじゃあ……私を倒してみろよ」

「やっぱり、そううまくはいかねえか」

「はっ、私は弱い奴には興味ないからな」

そういうと百代ちゃんは脚を開いて腰を落とす。

こりゃあ、なんか武術とかやつてるな？　どーりで番長張ってるわけだ。そこらのガキんちよじゃ相手にならなそうな風格、堂に入った構えをしてやがる

「しかたねえなあ、障害は多い方が燃えるってか？」

SもMも行けるハイブリッドだからな。百代ちゃんをチヨメチヨメしてしま——。

「はあっ!!」

え、ちよ、はや……。

気がつけば俺の身体がピンポンボールのように跳ねてた。人の身体ってこんなに弾力性あったんだー、子どもだからかなー。

ポンポンと何度か跳ねた後、地面とキスをする。海老ぞり状態になり、そのまま数メートル滑る。痛いでござるー。

「あ……やりす——」

「死ぬわ！ 普通ツ！」

何今の!? 不意打ちにしても何今の威力!? え? 百代ちゃんも爺と同じくジャンル違い?

バトル漫画だったのかな、番長とか目指した時点でバトル漫画だったのかな。俺ってばルート選択ミスったのかな。

「い、生きてるのか?」

「俺じゃなかったら死んでたな。子どもだったらふうーに死ぬる衝撃だった」

まじ、俺じゃなかったら死んでたわー。これはもう、百代ちゃんをムック（意味深）しないと気が済みませんわー。

「そうか！ それじゃあ次だ！」

百代ちゃんはとても嬉しそうに俺にツツコんでくる。ええ……なんか目が爛々として怖い、肉食獣みたい。

踏み込んだ地面が陥没してるんですが、百代ちゃんどれだけのパワーで踏み込んだし。もう、すぐそこまで来てるし。

「ヴァカめ！ 正面から突っ込んでくるとはな！」

俺は手に持ってた水風船を投げつけようとする！ さっきので弾けてた！ ふあつきん！ びちよびちよじゃねえか！

「川神流！ 無双正拳突き！」

「おふいふ！」

またしてもピンボールのように跳ねる。なんだこら、テニスしようぜ！ お前ボールな！ ってか。

「あーもう、カルピス塗れだ。まったく、しかも土とブレンドされてオシャンティーな格好になっちゃった」

「まだ立つのか!? 今のはかなり手応えがあっただんどぞ!」

うん、今のも普通の子だったら死んでたね。百代ちゃんナチュラルボーンの素質あるね。これは矯正をしないと人間社会で苦労するな。

俺? 俺は世界の中心だから。手遅れともいう。

「痛いけど我慢できないほどでもないな」

ただ痛いだけだと存外意識は飛ばないから我慢すればだいじょうぶい。爺の蹴りはあまり衝撃は痛くないけど意識を飛ばそうとするからなー。

「それじゃあ、次はお前から攻めて来い! さあ!」

「ええ……」

仁王立ちで両手を広げる百代ちゃん、いきなりSM立ち替わりプレイとか要求高すぎ

るよ。俺は今Mな気分だからなあ。

「殴る気分じゃないしなー、でも、どうやって百代ちゃんを倒すかなー」

「っ、馬鹿にしてるのか！」

「いやいや、なんていうか、殴る気になれんのよね。百代ちゃんは逆に殴りつけてきてもいいよ」

へいかみん！ さあ！ 俺と共に新しい扉を開けようじゃないか！ でもなあ、百代ちゃん多分潜在的にMっぽいのよなあ。

「……」

「ん？ どうしたべ、百代ちゃん。俺は全てを受け止めるぜ？」

流石に大は無理だけど……多分……。多分、無理だよね……。？ いや、頑張れば……。いややっぱ厳しい。

「……ば、馬鹿なのか！」

「よく言われるけど、人の言葉は気にしないことにしてるんだ」

キラッ、つと顔の前でピースでキメる。流星にまたがって大気圏突入とかしてみたいな、そのうちチャレンジしてみるか。

「……ぶ、分かった。分かったよ、私の負けだ」

なんかツボにはまったようだ。よく分らんが勝つたらしい。これで俺の無敗神話に新たな勝利が積み重なったな。

爺？ 負けは数えないでおきます、ゆえに無敗神話です。また、番長伝説の無敗神話とすればここからスタートなのでオーケーです。

「それじゃあ、今日から——」

「ああ、私はお前の彼女だ」

んー、やっぱり、なんか話が噛み合わないと思ってたら急にどうしたし。

「百代ちゃん、その手紙見せて」

「ん？ ダメだ。これは思い出として取っておくんだ」

冬馬めえ、ラブレターでも書きやがったなあ。

……だが、よくよく考えれば、将来性を考えると百代ちゃんを彼女としてキープしておくのはいいんじゃないか？ 百代ちゃんの桃をぶりつと剥けると思えば、逆に冬馬はいい仕事をしたのか？

「よし、後で冬馬にはご褒美をやるか。でもイラつと来たから準は丸刈りな」

「ん？ 丸刈り？」

「百代ちゃんは知らなくてもいいことだな。それじゃあ、デートにでも行くか？」

好感度稼ぎは重要だからな。時折準で誰か爆弾を抱えたりしないか確認することでしょう。伝説の木の下で告白すると永遠のカップルになれる場所とかねえかな。待ち伏せして告白失敗させて遊ぶのに。

その内百代ちゃんと小雪ちゃんまで黒白井とかしたいな。夢がわくわく広がリング。

「という訳で、今日から彼女の百代ちゃんです。皆、仲良くするんだぞ！」

「ふふふ、予想通りの結果になりましたね」

「ええ……」

「うー……」

冬馬には褒美としてアワビをあげよう、将来たくさん食べそうだからな、今のうちに勉強するがいい。準にはバリカン、不満そうな顔をしている小雪ちゃんにはマシユマロを手ずから食べさせてあげる。

「はむはむ……」

「修二、これがお前の友達か？」

「まーなー、バツテンこと英雄が玉遊びでないけど、まあいいじやろ」

「ほーん、ふーん」

俺がマシユマロを食べさせてあげてる小雪ちゃんを面白くなさそうに百代ちゃんが
見ている。警戒心バリバリな小雪ちゃんと自己中心的な百代ちゃん、相性はあまりよく
なさそうだ。

まったくもー、ここは俺が一肌脱いであげなきゃなー。そういや、剥き癖付けとか
ねえとな。

「ほれ、百代ちゃんも小雪ちゃんにマシユマロあげてみ」

小雪ちゃんはペット兼マシユマロ布団なのだ。百代ちゃんにも可愛がってもらおうこ
ととしよう。

「……あーん」

「……ハムツ……」

ぎこちないながらも餌やりをする百代ちゃん、まあ、その内3【ピー！】でもして仲

を取り持つか。まだ碌な性知識もないだろうし、今のうちに刷り込み刷り込み。

「なんだ……このバリカン……剃れっつてか……なあ、若」

「ふむ、このアワビ。ビラビラが広くて、色が黒くて……なぜか見ていると変な気持ちになりますね」

世は全てこともなしつてな。ひとまず、これでこの学校で俺で逆らえる奴が居ないっ
て感じだな。出てきてもプチつと蚊の如く潰してやろう。

「あーん……」

「はむ……」

黒いロリと白いロリ。二人はプリキュアかな？

……てか、何か知らないうちに俺の傷が治ってるな。さつき百代ちゃんにボールにさ
れて結構擦り傷とかあったのに。

「……んー……」

まあ、いつか。そんなことより小雪ちゃんと百代ちゃんの育成計画だ。あ、一子ちゃんも開発しないとな。

第4話

僕の毎日は、痛いことばっかりだった。

僕の家にはお父さんは居ない。お母さんは僕を嫌っている。学校でも皆に嫌われて
いる。

皆、僕を嫌な目で見つめてくる。

独りぼっち、誰も僕を好きになつてなんてくれない。ボクが、何か悪いことをしたの
？

なんで、ボクは皆と一緒に居ちゃいけないの？

お母さん、どうして僕を叩くの？

先生、どうして僕から目をそらすの？

なんで、なんで、なんで僕ばかり？

『あんたなんて生むんじゃなかった』『こっちに来るな！ 汚いんだよ！』『小雪ちゃん
は、ちょっと他の皆と遊ばないようにしましょう』

ああ……そっか……。僕は生きてちやいけないのか……

何でここに居るんだろう。分からないや

そう思った瞬間から、僕の世界から色が無くなった。

僕の髪とおんなじ真つ白と真つ黒だけの世界。皆が気味悪がる紅い目だけが、白と黒以外に残された色。

こんな目をしてるから。僕の見えた目が違うから。僕のお父さんが死んじやったから。ボクハ、ココニイナイハウガイインダ

そんなことをずっと思っていたある日。

「おっ？ アルビノか。綺麗な目をしてるな。お前、名前は？」

キレイ……？ 君は……？

「さつき先生に言われてイカシタ自己紹介してだろうが、織原修二だよ。あ、ここは質問に質問で返すんじゃない！　ってキレる場面だったか？」

よく分らないよ……僕は、小雪……。

「小雪か、いいじゃないの。真っ白の髪に似合ってたよ。うし、そんなやよろしくな小雪ちゃん」

僕の返事を聞かず、彼はその手で僕の手を握った。

その瞬間、僕の世界は色を取り戻した。

やはり、番長になったからには威厳とかそういう類のステータスも必要になるだろう。

今まで偉い人は自分の銅像とか、でっかい建築物とかで自分の権威を大胆に表現したらしい。

という訳で、俺は聖帝十字陵の建築に着手することにしたのだ。

「そのためには人手と金、あと場所が必要だな」

人手は親不孝通りでいくらでも調達できる。がきんちよどもをお菓子で釣り上げて働かせればいいし、足りなければ親不孝通りで不良どもを暴力と恐怖で従わせればいい。

場所に関しても目星はある。手がねえわけじゃない。

ただ、金は一朝一夕で手に入るものじゃねえ。遊ぶための小銭ならともかく、聖帝十字陵の資材とかの購入資金にはまとまった金が必要だ。

「どっかにでけえ金になる話はねえかねえ」

樂して稼ぎたい。不勞所得で生活したい。

所詮、番長になったところで資本主義からは逃げられないのか。どうしたもんか。

「しゅーっじっ！」

「おっと」

河川敷で一人どう金策しようかなーと思つてたら、背後から百代ちゃんが飛びついてきた。女子の割には高身長だが、百代ちゃんくらいならどうとでも受け止められる。

「修二ー！ ボクもー！」

「あ、流石に定員オーバー」

百代ちゃんに続いて小雪ちゃんまで背中に乗つかつてきた。流石に踏ん張りがきかず倒れ込む。河川敷の柔らかい草が受け止めてくれる。

「小雪！ 修二は私のだぞ！」

「ぶー！ ももちゃん一人占めしちゃだ！」

俺はおもちやか。まあいい、将来性的におもちやにしてやる分、それくらいは大目に見てやろう。

「んで、冬馬と準は？」

「置いてきた！ 冬馬ってば足が遅いんだもん」

ナチュラルルにおいてくる小雪ちゃんもDSの素質があるのかもしれない。

「それよか修二、今日はここで遊ぶのか？」

「いんや、今日は十字陵の建築予定地の下見のつもりだったんだよな」

「じゅうじりよー？」

百代ちゃんがひつついたままの体勢で寝転がる。小雪ちゃんも俺を間に挟んで川のように河川敷に横たわる。

「偉い人のお墓だが、お師さんみたいな、入れる人も居ねえしなあ。いつそのことでつかい建物なら何でもいいか？」

「秘密基地みたいなもんか？」

あー、シヨツカー基地みたいな秘密の実験施設とかも悪くないな。むしろ十字陵とかよりもそっちの方がいいかもしれん。誰の目にもつかんからえつちいことも悪いこともし放題だし。

「そりゃあ、いい！ うし、そんじゃ、秘密基地にすつか」

「ああー！」

「うんー！」

小雪ちゃん、ほんとよく笑うようになったなー。

「という訳で参謀、なんかいい場所とかなさそう？ 廃ビルとか、こう、どことなく退廃的で勝手に使つても誰も気にしなさそうな場所」

「そうですね……心当たりは幾らかありますね、修二君の参謀になるにあたり、色々調べてきたので」

「若が悪い道に進んで行つてしまつてる……俺はどうするべきなんだ……」

想像以上に参謀が有能だったでござる。

「冬馬、そういう情報つてどこから仕入れてくるんだ？」

「それはですね、百代さん。デキル男の秘密というものです」

口到人差し指を置いてウインクをする冬馬。中々に様になつてるな、俺ほどじゃないが、将来は冬馬もいい男になりそうだ。

「そんじゃ、場所は冬馬に任せるとして。設備とかも整えねえとな。木材とかあれば匠である俺が家具とか作ってやる」

「まじかよ!? そんなことできるのか!？」

うるさいぞ、小雪ちゃんに髪を全部持っていかれたハゲ。さつきから全自動太陽拳してて眩しいんだよ。

「うえーい！ 準ピカピカしてるー！」

「あんたが剃ったんでしょ!! あーもー！ 頭が涼しいんだよこのやろー！」

ここ数日髪が無くなったせいかな準が荒れてる。糖分が足りないんだろう、ほら、飴ちゃんあげるから元気お出し。

「ハツカ味じゃねえか!!」

うるせーな。俺が嫌いだから余ってんだよハツカ味。

「木材なら、家の裏の森から持ってこれるぞ」

「そういや、川神院の裏って森だったか。今度遊びに行こつと」

俺は大自然が好きだ。動物とかと戯れるのは心が癒される。

「そうか！ それじゃあそのまま家に遊びに来ないか？ 修二のこと、皆に紹介したいし」

「お、おう。今度な？」

百代ちゃんが言う皆って家族だよな。正直彼女って言ったけど、両親に挨拶とかできるといふ人間じゃないからな。

あれだ、娘がチャラチャラしてガム噛んだチャラ男を連れてくるようなもんだぞ。

「ボクも一緒に行く！ ももちゃんの家に行ってみたい」

「ああ！ 小雪もこい、何なら今から行くか？」

ん？ よくない話の流れな予感。

「モモさんの家って川神院だよなー、なんか少し気後れするっちゃするな」
「でも、中々ない機会かもしれないよ？ 川神院は高名な寺院ですが、友達の家として見るとまた別の面が見えて面白そうです」

準と冬馬も反対ではなさそう。うーん、どうしたもんかねえ。

「なあ、修二。一緒に来てくれないか？」

百代ちゃんが少しうるんだ瞳で求めるようにこつちを見てくる。
その瞳に逆らえる男は居ないと思うんだ。ちよつと卑怯だ。

「ほっほっほ、よく来たのお。百代が友達を連れてくるなんて初めてかもしれないからのお、ゆっくりしていつておくれ」

「あっはい」

百代ちゃんのお爺ちゃんって、護廷十三隊の総隊長だったんだ。初めて知ったわ。

「やっぱり、ひろいなー。モモちゃん家」

「そうだなー、やっぱり修行僧たちも住み込みで鍛錬してるからあっちの離れの方がその人たちの住んでる場所になるんだ」

「へー。あ！ 準がたくさん居るよ！」

「ハゲてるけど違いますっ!!」

「アハハハハハ！」

「ふふっ………すいません、準………少し面白かったので………ふふっ」

「若あ………」

やっぱり、武の総本山とか言うだけあって、それなりに腕の立ちそうなやつらが集まってんのな。あのジャージのジャッキーもどきとかは俺でも勝てるか危ういわ。

「君が織原修二君かの」

「……あつはい」

後ろに回り込まれたのに気配を全く感じなかったんですけどこの爺さん。

「百代から聞いたが、交際しておるといふのは本当かな？」

「まあ、そういうことになるかねえ。百代ちゃんもその気だし、俺も悪くはないとは思ってるし。ま、ガキの遊びの延長戦だが、悪いようにやしねえよ」

正直、誰それと付き合うとか。言葉でしかないと思うしねえ。大事なのは名より実だと思うのよね。

「ふうむ……」

爺さんは何かを考え込むように髭を撫でる。

「釈迦堂のようにも見えるが、随分と素直にも見えるのお。いや、野性的とでもいうのか、まるで獣に育てられたかのようなお」

「おい、何勝手に人を分析してやがる」

「おお、すまんすまん。百代の彼氏がどんな人となりか気になつての」

年季の入ったしわくちやの顔の癖に、いやに覇気がありやがる。なんだ、こんな爺さんどつかで会つたぞ。なんかキックで百人くらいなぎ倒しそうな髭爺だった気がする。金色の髭でビリビリ帯電しそうな爺さんでもあつたな。

「あの爺と同類かよお……」

「ふおつふおつふお、ヒュームから少し程度は聞いておつての。獯猛な小型犬とな」

「ぐああああ、あの爺めえ。どっか行つたと思つたらこれだ」

大魔王からは逃げられないってか？ ふあつく、ぜつてえ逃げ出してやる。

「俺はハンサムなドーベルマンなんだよ、そこらの柴犬と一緒にするんじゃないねえ」

「調子が出てきたようじゃのお。どうじゃ？ どうせならウチの門弟たちと組んでもし

ていかんか?」

「パスで、無駄な労力は払わない主義なの。それよか遊んでた方が楽しいしな」

小雪ちゃんたちは百代ちゃんたちの案内でお家探検に向かったようだ。俺を置いていくとか、扱いがひどくないか? それとも爺とのランデブーに気を遣ったってか? そんな気は遣ってほしくなかった。

「まあ、百代が騙されてるわけでもないようじゃしの。ひとまずは健全なお付き合いを頼んじゃよ」

「プラトニックなお付き合いよりもエスニックなお付き合いに定評があるんだがねえ。

まあ、まだ勃たねえから……うん」

「……………すまん」

「ええんや……」

爺さんが慰めるように背中をさすってくる。

触んなボケ。泣いてなんかないやい。

準が修行僧と間違えられて鍛錬に強制参加されたりしたが、百代ちゃん家訪問はおおむね大団円で終わった。

「モモちゃんの家、楽しかったなあ。それに武道つてかつこよかったし」

小雪ちゃんも小雪ちゃんでご満足なご様子。しゅびしゅびと足を繰り返したりして遊んでる。

「筋肉が……いつつ……明日は絶対筋肉痛だぞ……」

「家に帰ったら父さんたちに筋肉痛に効く薬をもらいましょうか」

「あー！ しゅーじー！」

五人で河川敷の近くを歩いていたら、帰り道だったのか、正面から一子ちゃんが走ってやってきた。

「おー、よー、一子ちゃん。帰りか？」

「うん、修二も？ そっちの人たちは友だち？」

「ああ。小雪ちゃんと冬馬とハゲだ」

俺だけハゲじゃねえか！ とかなんか煩いハゲは放っておく。

「初めまして、一子さん。葵冬馬と言います。よろしくお願いしますね」

「こ、小雪だよ……」

「ほーら！ わしやわしやしてやるぞ！」

「きゃー！」

俺は一子ちゃんを抱き上げ、犬をかわいがるように撫でまわす。一子ちゃんは悲鳴を上げるもまんざらでもないご様子。

「んー、どうせなら一子ちゃんの家のおばあちゃんに顔を出しに行くか」

「修二、家に来るの！ やった、おばあちゃんも喜ぶわ！」

「それじゃあ、今日のところはここで解散ですかね」

冬馬がそう言い、準を連れて家路へと向かう。

「小雪ちゃん、どうせなら一緒に来るかい？ 一子ちゃんもいいだろう？」

「私はいいけど……おばあちゃんが」

「あのばあちゃんなら喜ぶさね。せめて、喰いもん持ってくか。ほれ、行くぞ小雪ちゃん」

「え……あ……うん」

俺だけならともかく、小雪ちゃんも遊びに行くとなるとなあ。流石に手ぶらは俺の良心が痛む、特にあの善良を絵に描いたおばあちゃんだと。

「おやおや、修二君もすみにおけないねえ」

「ま、俺くらいの良い男なら自然と女が集まっちゃうのさね」

ほんと、あったかい場所だなと思う。一子ちゃんがあんだけ無邪気で無防備な女の子になったのも分かるってもんだ。

「小雪ちゃんだったかい？ 何にもないところだけど、ゆっくりして行ってね」
「……うん」

俺たち以外にはビビりまくりになる小雪ちゃんも、おばあちゃん相手なら大丈夫そうだな。

「んで、また勉強を見てほしいのか？ 一子ちゃんよ」

「うー、せっかく遊びに来たのに。お勉強〜?」

不満たらたと言った感じの一子ちゃん。一子ちゃん、覚えは悪い訳じゃないから、やる気出せばいいのにな。

ちなみに、小雪ちゃんは天才型だから、ろくに勉強しなくても授業聞くだけで問題はなさそう。まあ、今まではまともに授業も受けられなかったみたいだけど。

「保健体育の実習をしたいと思います」

「保健体育? 体育じゃないの?」

「小雪ちゃん、昨日の続きするよ。今度は一子ちゃんも一緒だ」

ぐへへへ、両手に花とはこのことよ。今日はどこまでしよかな。

善良なおばあちゃんの家でその孫を好き放題するなんて、背徳感がピンピンで昂つてくる。

女の子は甘いお菓子でした。

「なー、ばあちゃんさ。もう一人くらい、子ども見る余裕ってある?」
「そうねえ……ちよつと無理をすればいけないこともないけれど」

流石に無理か。うーん、あんまりこのおばあちゃんの優しさにつけ込むのは嫌だし、九鬼に借りというか、しこりを作るのも嫌だしなあ。

「修二君」

「おん？」

「好きなようにしんさい。それで困ったら、うちにおいで」

ほんと、おばあちゃんの目は、節穴だねえ……。

第5話

好きなようにしていいとおばあちゃんのお墨付きももらったので、そろそろ俺も全国を目指そうと思った。

その道先はどこまでも困難だろう。時には膝を屈さなければならぬときもあるだろう。

「だが、俺はこの相棒（リアカー）で峠を極める」

百代ちゃんの裏の森からいくらか木を拝借して、俺が手ずから完成させた一点物だ。通学通勤にはもちろん、格納された屋根を出せばあら不思議、スイートマイホームに変化するおちやめな匠の遊び心を感じさせる。

樹齢うん百年と百代ちゃんの爺が自慢していた大木は乗員に自然の温かみを感じさせ、あまりの出来にお爺さんは涙を流していた。

乗車席は前二つ、後ろ二つ。そして座席後部には収納スペースを備えており、このスペースにはなんと！ 冬にはこたつを設置することができるのだ。

だが、まだ匠の技は見せきっていない。このリアカーにはなんと――。

「てか、急に何でリアカー？」

「ヴァカめ！ これからの時代はエコ車の時代なんだよ！ つまりこのリアカーは時代の先駆けと知るのだ！」

たまたま日本に戻ってた帝つちがリアカーをさらに改良する俺の手元を物珍しそうにのぞき込んでくる。

「エコねえ……。そういや、車関係の企業がそんな話持つて来てやがったなあ」

まあ、俺からすりゃ昔の時勢だからな。本当のエコって物を大切に使い続けるスタイルだと思ってるしな。

「んで、リアカーはともかくとして、お前さん、最近どうよ」

「あー、そうだねえ。割かし楽しんでるよ。面白そうなやつらもそれなりに居るし」

「ヒュームも紋白に付けてきたからな。感謝しろよ？」

「マジか。だからあの髭爺さん居ないのか。最高かよ帝っち。愛してるわ」

廃品を回収して溶かして作った金具を金槌で打ち付ける。至高のリアカーを名乗るからには大陸を横断できるくらいじゃなくちやいかん。そのためには一切の手抜きは許されない、部品一つ間違えただけで、その歪みはこいつの寿命を10年縮める。

「すげえな。どこでこんなこと覚えてきたんだ？」

手作りのねじを弄びながら、帝っちは俺の横に腰を下ろす。

「大工仕事は怪我して大工できなくなったゲンさんつてのに習って、金物は小さな工場バイトして覚えたなあ。どっちもろくな結果にならなかったけど」

「へえー、俺には分からねえことだな」

ちなみにゲンさんとは酒を取り合って喧嘩別れ、バイト先は不況でブツ潰れた。仕方ないから下請け企業舐めた大手の会社を襲撃して金品かっぱらってやったが。

「まあ、大したことじゃねえよ。時間と気合があれば、誰だってできることだ。帝っちみたいな経営の方が俺には絶対できないからな」

なぜって、ギャンブル染みた運営で会社の金とかを勝手に使う未来しか見えないから。

「惜しいなあ。その気があればお前も俺程度のこととはできるだろうに」

「そっくりそのまま返すわ。ほれ、芋焼酎」

「お、サンキュー。最近仕事詰めで息抜きも出来なかったからなあ」

とんてんかんという音と杯を傾ける音。

「あ、そうだ。英雄が今度試合あるって言ってたんだが、俺の代わりに応援に行ってくれねえか？」

「あー？ 応援ってあれか？ 敵チームに盛大にブーイングしまくれればいいか？」

誰かを持ち上げるよりも罵声とつばを投げるタイプなんだよ。

「まあ、暇だったら小雪ちゃんたち連れて見に行くわ。野球は好きだしな」
「おう、頼むわ」

「俺は風になるうううううう!!!」

早朝、愛車兼新居が完成したので、俺は九鬼から逃げ出すことにしました。人力車は軽車両に分類されるみたいだから、車道じゃないと走れないらしい。まあ、普通車より俺の方が足速いかな、ほんとこの体のスペックにはビビる。

そんなことを考えてると、俺は今日学校だったことを思い出した。

「そういえば最近学校に行つてねえや」

リアカーを作ること熱中しすぎてたようだ。

「これ、学校に駐車していいかな。いいよね、学校関係者だし」

どうせなら用具の中に隠しとこ。森を隠すなら山火事を起こせつて言うしな。なんかやらかしてやればそっちに気が回るだろ。

愛車を他のリアカーがある場所に隠し、何食わぬ顔で教室へと入る。

「おはよう、諸君」

お化け見るような顔で見るんじゃねえよ、がきんちよども。

「おはようございます。修二君」

「おーつす、参謀。俺が居ない間変わりなかつたかね？」

「はい、特には。せいぜいが純の髪がまた小雪さんに刈り取られたくらいですかね」
「よしよし、小雪ちゃんも言いつけ通りにしてみたいだな」

「こういうのは時間を重ねて定着させるものだ。そのうち準の奴も剥げているということに慣れるだろう。」

「おお！ ようやく来たか！ 待っていたぞ修二！」

「このでかい声は英雄か。朝っぱらからうるせえんだよ、こちとらリアカー制作で完徹なんだよ」

「割と深夜テンションで学校に来ている感じではある。あー、眠い。リアカーに寝袋あるんだよなあ。」

「ぬ、それはいかんな修二。きちんと睡眠を取らねば、学業に精を出せんぞ」
「いーのいーの、学業は二の次だから」

正直二の次どころか地球圏から飛んでいつてるけどな。ぶつちやけ、授業なんて受け

なくても、勉強なんぞパラパラ教科書見てりやあできちまう。

「まあよい、それよりも修二、野球に興味はないか？　ちようど私の所属するリトルリーグチームで欠員が出てな」

「ほーふーん、助っ人つてこと？」

帝つちに応援行ってくれて言われたただだったが、俺も参戦するか？

「いいぜえ。相手チーム全員ケツバットで退場させればいいか？」

「フハハハハ！　面白いジョークを言うな！　だが、今回は正々堂々と試合に臨んでくれ！」

この体のスペックの時点で正々堂々じゃないと思うけど、弱い者いじめつて気持ちいいからシカタナイネ。

「そんじゃ、やってやるか。ポジションは4番でピッチャー？」

「9番でライトだ」

あれ？ もうちょい期待してもいいのよ？

かっとなすよ？ ボールも敵のメンタルも。

「しゅーじ！ 今日学校に来たんだ！」

「おー、小雪ちゃん。今日は気分が乗ったからな。それよか、秘密兵器が完成したから、放課後載せてやるよ」

「うん！」

小雪ちゃんも学校にやってきて、そろそろ朝礼の時間だ。

「それでは、我は自分のクラスに戻るとしよう！ それでは、助っ人任せたぞ！ 修二！」

英雄もテンション高く戻っていった。なんか忘れてるような気がするな。

「俺だよ！ お前小雪に髪剃るように命令してたな！」

あ、ごめん。太陽かと思った。

「おー、これが修二の秘密兵器か。これを作ってたから学校に来てなかったのか？」

百代ちゃんが我先にと愛車に乗り込む。あーあー、乱暴にせんといて。繊細な匠の技は丈夫だけど百代ちゃんパワーには耐えられるか分らんから。

「これは……本当に修二君が造ったのですか？」

「ああ、そうだべ」

冬馬が驚いた様子で聞いて送るので俺は鷹揚に頷いてやる。

「これでどこにでも行けるはずさね。その内海も渡れるようにするから」
「まじかよ……うわ、これすっげえ手触りいい……」

ハゲモリアカーの表面を撫でまわしている。お前の頭よりも手触りはいいぞ。

「修二……?」

「ん、なんだ。小雪ちゃん」

「……何でもない……」

「そうか」

そんじゃ、いっちょ皆で遠出でもしてみるかかな?

「ひゃっほおおおおおおおおお!!!」

速さを極めるんだ！ 誰よりも何よりも！ 速さを求めることこそ俺の生きる意味

!!

「おおおおお!! いいぞ修二!!」

「思った以上に振動もなく、快適な乗り心地ですね」

「こわっ!? 今なんかぶつかったよ!? なんでそんなに余裕なの若!？」

「うわあああいいい!! 風が気持ちいいいい!!」

後部座席からハゲの悲鳴やら、なんか銀髪の女を轢いたりした気もしたが、無事に俺たちは川神市を抜け――。

「どっだっだ」

「分かんねえで走ってたのかよ!」

えーと、標識を見れば、松笠? 知らねえ場所だな。

「ちようどそこに公園もあるし、一休みしようぜ。俺も久々に走ってちよいと疲れたしな」

異能で菓子、それもガツツリ系を引つ張り出す。乗り物酔いしなかったし、走って腹も減ったしな。

「松笠って……そんなところまで来たのかよ……」

「随分と遠くまで来ましたねえ……準、修二君に関してはあきらめが肝要ですよ」

準と冬馬が遠い目をしているが、俺と百代ちゃんは二人で小雪ちゃんの口の中にポイポイとマシユマロを放り込んでいく。

「んまー」

「よしよし、器用だなあ。修二ー、私は桃が食べたいぞー」

「あいよー、桃缶なー」

物理法則とかガン無視な異能だから、桃の缶詰だつて出せちゃう。聞かれたら手品とでも答えとこ。

「これなら、北陸とか関西にも進出できるな。目指せ全国制覇だ」

「それいいな！ 夏休みとかには武者修行に行こう！」

百代ちゃんのバトル漫画的願望は置いといて、夏休みかあ。そうねえ、軽井沢とか、リゾート地巡りもこのリアカーなら行けるだろう。流石俺の愛車。

んー、夏休みかあ。小雪ちゃん大丈夫かねえ、主に家庭環境。今度家庭訪問するか？

「ん？ どうしたの修二？ 僕の顔になんかついてる？」

ま、どうとでもできるか。世の中吹っ切れたもん勝ちだ。

「マシユマロの粉で真っ白だぜ、小雪ちゃん」

ほんと、可愛い子だぜ。

「ハイハイ、ピッチャービビってるー」

バットの先を大きく振る。そりやもう体全体で相手を小馬鹿にするように、ケツもフリフリして下手なメジャーリーガーの物まねをしてやる。

晴天の青空の元、英雄と同じリトルリーグのユニフォームを着こみ、バットで玉遊びをしている。どうせなら可愛いねーちゃんと玉遊びしたかったがなあ。

「ち、なめやがって……」

キャッチャー君の毒づく声が聞こえる。いやあ、人の嫌がることって気持ちいいなあ。

一死一塁、監督は好きに打ってこいと言われたので、どうせならピッチャーの股間を狙おうかとも思ったが、英雄に止められたので自重することにした。

ま、普通にホームランでいいよね。

「ふっ!!」

ピッチャーが大きく振りかぶって投げる。速球、小学生にしちや速い、これは打てる奴あんま居ないかなー。

「カッキーン」

「なっ……」

ふざけた姿勢から打ったが、飛んだなー。この前一子ちゃんたちと野球した時よりも打球の伸びがいいわ。速い球の方が伸びやすいんだっけ？ 野球はにわか知識だからなー。

「かつこいいいよー! 修二ー!」

応援席から小雪ちゃんが手を振ってくれる。隣には冬馬と準も居て軽く手を振ってる。

当たり前だろ？ 俺を誰だと思ってるやがるんだ。

手を振ってこたえてやる。そして、ホームベースを側転からのバク転三回転ひねりで踏んでやる。

ベンチに戻ったら英雄以外が変なものを見るような目で見てくる。そんなに見惚れるなよな。

「凄まじいな、流石はヒュームが弟子にして鍛えようとしただけのことはある」

「あのじいさんのことは置いといてくれや。今でも夢に髭を見るぜ」

「フハハハハハ！ ここまで盛大に援護されたのならば我も応えねばなるまいな!!」

お、おう。まあ、頑張れや。

「それにしても、英雄も英雄で、何で野球なんかしてんのかねえ……」

「そりゃ、逆にお前が何で女が好きかって聞かれたときに答えられるのか？」

「父上！」

あれ？ 帝っちじゃん。来てたの？

「ああ、無理に時間を空けた。お前も野球するって聞いてな。てつきり相手ピッチャーの股間に打球ぶつけるかと思つたが、さうでもなかったか」

「ひでえーなー、俺がそんな外道にみえるかあ？」

「ああ、ガキの顔とは思えねえな。英雄、今のところノーヒットノーランじゃねえか、やるねえ」

「はい！ このまま完全試合して見せましょう！」

普通の子どもみてえな顔しやがって、英雄。ま、フライ系なら外野どこでも拾ってやるかねえ。

「1番2番は凡退でチェンジつと、そんじや守備行つてくるわ。帝っち」

「父上、我も行って参ります」

「おう、頑張れよ」

もちろん、その後は完全試合達成だった。

俺は自分の守備位置から、キャッチャーフライを取りに行つて監督と英雄に怒られた。いいじゃん、アウトにしたんだし。

「修二、今日は礼を言う」

試合後の整地をしてたら、なんか英雄が神妙な顔で近寄ってきた。ホモか？ 流石に俺は女じゃないとアウトなんだが。

「おん？ 助っ人か？ そうだな、次からは時給10000円で頼むわ」
「父上にいいところを見せられた。試合に勝てたのはお前のお陰だ」

まあ、相手のピツチャーから俺以外点取れてなかったしなー。やっぱり股間にぶつけてリタイアさせるべきだったか？ キヤツチャーはチップからの股間誘導でリタイアさせたが。

「帝っちも忙しそうだからな。それに、俺のお陰っていうほどでもねえだろ」
「そうかもしれない……だが、我が貴様に感謝していることは伝えたかったのだ」
「あいあい、ありがたく受け取っておくよ。今度飯でも奢ってくれや」

恩とか借りとか、がんじがらめになりそうなのは嫌なんだよねえ。まあ、今度恩に着せてやろつと。

「英雄もたまには遊ぼうぜー、女遊びとか覚えさせて帝っちを困らせてやりたい」
「修二、父上のそれは洒落にならないから遠慮させてもらおう」

ああ、そーいや別腹の妹が居るんだったか。帝っち的には別腹で食べちゃったってか。

……流石に下品が過ぎか。口に出してないからセーフセーフ。

「今九鬼の名誉を限りなく貶す思念を感じたが、気のせいかな？」

英雄、お前も超人的直感持ちかなよ。血は争えねえなあ。

第6話

俺が番長だということをすっかり忘れていたので、番長らしいことの一環として高学年のがきんちよども、腕白坊やどもを簀巻きにして河川敷に吊るしたりした。俺は俺以外が弱い者いじめをするのは許せないが、俺が弱い者いじめをすることには寛容であった。

俺の傍若無人らしさがいい具合に他校どころか市外にまで広がって俺としては満足だった。ついでにと親不孝通りでチンピラに絡まれている三姉妹をナンパしたりしたのだが、そのチンピラも兄弟らしく流れで姉妹たちの家で御馳走になったりしてた。

あ、もちろん性的な意味でもご馳走になったよ？ 長女が中学生くらいだったから脱ロリと言えなくもない。いや、まだ周りロリ寄りだけでも。ガタイのいいチンピラ君は外に放っておいたけど。

ただ、その後これからはアイスの季節だなーと油断してたら、小雪ちゃんが足技を覚えたり、百代ちゃんが俺の浮気性にブチぎれてサンドバックにされたり、散々な目にあつた。

一番怖かったのは何故か目からハイライトが消えた小雪ちゃんだった。あの手に

持ってたライターと灯油はあかんで。俺が百代ちゃん以外の女の子とにやんにやんしようとするやん発動するモードだから、対策は簡単だったや。

一子ちゃんワンコ計画などが遠のいたぞちくしようめ。

それはそれとして、最近優しいおじさんからお金をもらったので、俺はそろそろ秘密基地計画を本腰入れようと思いついた。

まったくもー、裏帳簿なんて危ないもの、ちゃんと保管しとかないなんて不用心だなー。ま、結構あくどいこととして手に入れた金のようにだし、泣き寝入りするしかないでしよ。

「葵紋病院つてどつかで聞いたことあるやうな？ 気のせいかな」

最近冬馬が、父親の頭の毛が薄くなってきたと言ってたし、準の父親も最近じゃ過労気味らしい。

一体何があつたんだらうか、しんぱいだなー。

「それじゃア、今日は型の基本をやってみようカ」

「はーい」

最近小雪ちゃんが川神院で武術を習い始めた。俺としては小雪ちゃんに戦闘能力を持たせたくないのだが、主に俺の身の安全のために。

小雪ちゃんが百代ちゃんに頼み込みやがって、いつの間にか門下生の一人になってしまった。

「中々筋がいいじゃねえの、あの白いの。百代が連れてきただけはあるじゃねえか」

「釈迦堂さんじゃん。小雪ちゃんのハイスペックさを見誤ってたなあ。小雪ちゃん割と闇深いから、将来俺を蹴り殺しかねないのよねえ。一度メラメラと炙られたし」

「……………お前どうしたんだよ、ソレ」

いまだにブチ切れぶんぶん丸の百代ちゃんに、簀巻きサンドバックにされた後に川神院の門前に吊るされたんだよ。

「百代ちゃんが最近バイオレンスすぎてヤバイ」

「俺からすりゃあ、あんだだけポコポコにされてぴんぴんしてるお前も化け物だけどな」

手からビームとか出る人と同カテゴリにはしないほしい、せいぜい食べ物くらいしか出ないから。十分人じゃねえな。お菓子マンとか名乗って義賊よろしく空からお菓子でも降らしてやろうか。

「釈迦堂の旦那ー、助けてくださいよー」

「おめえ最近羽振り良いんだろ？　なんか奢れよ」

ごみかよこのおっさん。

「ちつ、勘のいいおっさんだな。梅屋でいい？」

「特盛りつゆだく、あと単品でとろろな」

やっぱごみだよこのおっさん。

結局釈迦堂のおっさんはおかわりをたらふくしてくれやがった。豚丼美味かったからいいけどさ。

楊枝で歯の間のカスを取り出しながら、帰ってきてもまだ続いていた小雪ちゃんの稽古を眺めていた。隣では釈迦堂さんがビールを呷っていた。

それ、俺が俺用に出してたもんだったはずだったんだがな。まあ、まだまだ出せるからいいけども。

「あ、そうだ。釈迦堂さんこの後暇？」

「あん？　暇っちゃ暇だが、どうしたんだ？」

「いやねー、夏休みに関西のあたりに行こうかと思ってんだが、おっさんなんかうまい飯屋とか知らないかなって思ってたな。どう？　酒くらいなら出すよ？」

「ほー、小学生のくせに関西旅行かよ。そうだなあ、あっちの方なら、幾らか店知ってるが、大半が居酒屋だぞ？」

「それそれ、どっちかってつとそっちの方が知りたいんだわ」

「店に入れねえんじやねえか……？」

そのあたりはね、その時にどうにかするわ。世の中金と暴力の強さは計り知れないか

らな。

「修二ー！ 稽古の相手をしてくれー！」

百代ちゃんが胴着を着てこつちに走ってきた。汗を綺麗な黒髪から垂らしながら、笑顔を浮かべながらこつちに美少女がやってくるのは絵面的に非常に保養になる。

でもな？ その手に纏ってる赤いオーラは何だい？ それで俺を殴り愛たいって？

「オー、バイオレンス」

「まあ、百代に目エ付けられたのが運の尽きだな。どうせ最後にはピンピンしてるんだからいいだろ？」

仕方ねえから寝技に持ち込むか。大人の寝技なら俺の方が経験値上だからまだまだ勝てるはずだ。アへ顔にしてやんよ、俺はアンパンマン顔になる可能性大だけど。

「一応爺の目もあるから、自重はしろよ？」

「ナチュラルに心を読むのは止めろって超人ども」

「ほらー！ー いーくーぞー！ー！」

ドナドナドーナーと百代ちゃんに首根っこを掴まれて引きずられていく。最近テンプレ化してきたな、これ。

百代ちゃんの闘い方はシンプル、倒される前に倒すっていう、多少の被弾を省みないスタイルだ。

稽古というか、ほとんど組手だが、その攻撃の破壊力は――

「せやあー！」

多分コンクリぐらいは軽く粉碎できるんじゃない？

「……百代ちゃん、これ稽古よね」

「ああ、そうだぞ？　楽しいだろ？」

楽しくねえよ、身体も心もいてえよ。

なんでこんなモンスターに育っちゃってんだよ。

百代ちゃんとの稽古が終わったところにはボロボロになってしまった。百代ちゃんも俺のHPバーが尽きないからって喜々としながら殴りかかってくるし。釈迦堂のおっさんを筆頭に大人たちは見ているだけだし。

その内大人組にはケツから気功砲をぶち込んでやる、百代ちゃんには、んほおつてさせてやる。

「修二、ボロボロだねー」

「おう、せやろ」

最近常時ボロボロがデフォになってしまってる気がする。まあ、それはいいんだが、

皆俺への畏怖や敬意を忘れてきているようだから一度きちんとしてやらないな。

「あ、そうだ。小雪ちゃん」

「んー？」

初めて会ったころと比べると小雪ちゃんはずいぶんと変わった。元気になったし、冬馬や準も居る。なにより、笑顔が増えた。やっぱり笑った表情はいい、まあ、泣いた顔も嫌いじゃないけど。

「家出しよっか」

「はい、こちら匠である私が親切な大人から頂戴したお宅を改造したものでございます」

裏帳簿おじさんがくれたのはおつきなマンションの一室だったからな、ここを俺の城とした。I L D Kに憧れていた俺は、搾り取れる分だけ搾り取らせてもらった。

まずはキツチン、外国の映画に出てくるようなでっかい冷蔵庫を兼ね備えたオール電化のだ。家賃や電気代も全部裏帳簿おじさんが払ってくれるらしい、やったね、優しい裏帳簿おじさん大好き。

「うわー！ 修二見てみて！ おつきいベッド！」

「せやろ」

将来、何人もの女と同時にプレイできるように、寝室のベッドは一番でかいサイズだ。むしろ部屋ごとベッドと言っても過言では無い。おかげでその部屋にベッド以外置けなくなったのは、ちよつとやりすぎたかと思っているが、ヤリ部屋なので別にいいか。

リビングには俺が手づから創り上げた家具が並んでいる。匠にかかれば、思いのままに創り上げられる。

「ここが私たちの秘密基地になるの？」

ふかふかベッドでぼんぼんと跳ねながら、小雪ちゃんが笑っている。

「そうだけど、ひとまずは小雪ちゃんと俺の家だよ。今日から、そうだなー、一週間ちょいってところか、ここで生活することになるな」

「え……え？」

小雪ちゃんは虐待を受けている。これは確定事項だ。小雪ちゃんマザーは、ちよいと手遅れ気味だった。

ああ、性的な意味でね？ もう少し若々しかったら性的な解決をしたよ？ 年齢は若いんだろうけど、過労とか心労とかで半分ゾンビみたいになってたし。

「まあ、小雪ちゃんのママンを爺さんどもに丸投げしてる間はここで一緒に過ごそうってことだ」

「……うん」

た。聡い子だ。俺のようなくそ雑魚ナメクジな脳みそとは違って、これだけで察してくれ

「小雪ちゃんはママンが好きかい？」

「うん……」

小雪ちゃんはベッドに顔をうずめ、隠す。

「ママとはお別れになるけど、そう事を運んだ俺が嫌いになるかい？」

「ううん……修二は……大好き」

「そりゃ結構」

「でも……ママは優しくかったんだ……僕……が……僕が……悪い子、だっただから」

「おい、小雪ちゃんや。一ついいことを教えてあげよう」

「……何……？」

あまり気が進まないが、約束は守るタイプだからな、俺。まあ、半分くらいの確率で

破るけど。

俺はベッドに登り、うずくまる小雪ちゃんの頭を撫でつける。その華奢な体を持ち上げ、その頭を胸に抱く。そして、その毒を小雪に飲ませる。

「小雪、愛してるわ」

できる限り想いを伝えられるように。届けと願った人が居たから。

「……僕も……僕もだよ……大好き……大好きだよ……」

まったく、女を泣かすのに。俺以外言葉を使ってやるのはこれつきりだぞ。

「ちわー、三河屋ですー」

猫も寝静まった深夜、俺は一つのぼろアパートへと宅配に来た。届けものは暴力だ、ぼっこぼこにして海に捨ててやんよ。

最近百代ちゃんの写真似してたら、出来るようになった波動拳をお見舞いしてやる。

俺がドアノブをぶち壊しながらお邪魔すれば、そこには腐臭を漂わせた死人のような女が居た。

「……誰よ……あんたは」

「あん？ んー……三十五点。もう少し健康と美容に気を使つてれば、人並みに気を配れば、貴女は人一倍美しいでしょう。次に応募される際にはその素材を生かしてください。審査員一同期待しております」

俺からすれば人と言うよりは汚物だしな、今のあんた。

「……いきなり何言ってるのよ……狂ってるの？」

「まあそうだな。間違っちゃねえわ。でも、あんたみたいな逃げよりはましだろ？」

そう、目の前の汚物は逃げるために狂った。現実には耐え切れなくて、戦うこともできずに、賢く退くこともできずに。

女は何かをその濁った眼を俺へと向けてくる。おおよそ、まとも生きてきた人間が見れば、おぞ気を感じるだろう。

「……何が分かるのよ……あんたに」

「何も知らねえよ。ただ、そうさな」

女が泣いていた。助けると言っていた。それに体が反応した。

ああ、今回は股間じゃねえ。俺の心臓が俺を動かした。珍しいんだぞ？　いつも下半身が第二の脳なのに。

「……そう……あの餓鬼……変なのを送り込んで」

「ま、そういうことだ。齒あ食いしばれや。汚物からオブリエに変えてやつからよ」

三河屋として宅配物は殺してでも届けてやんよ。

「……放つておいてよ……もう、嫌なのよ……痛いのは。もう、これ以上私を苦しめないでよ……」

「あつそ。知るかよ」

一発、その頬骨を折らない程度の威力で殴りつける。

娘と同じように細い身体が吹っ飛び、壁にぶつかる。やべ、寝てる子を起こしちゃまう。

「……」

「どうよ、殴られたのは久々か？ 目が覚めたかよ」

「ふざけんじや……ないわよ……。あんたに何が分かるのよ。苦しんで、つらくて、それでも娘のためって思ってたのよ？ でも、私の痛みを理解しないあの子の笑顔がイラつくのよ。誰のお陰で生きていられると思ってるのよ……誰のおかげで……！」

頬骨ぐらいは砕く力込めたと思ったんだがな、思ったより元気だな。

「……娘なのよ？ ……愛してるのよ？ ……誰よりも大切に想ってるのよ？ でも、もう……無理だわ。あの子の笑顔がチラつくだけで……あの子の顔を見るだけで……私は……」

「最初媚売るような笑顔だったしな。余計イラついたろ、あれ」

悪循環って怖いねえ。悪いことってのは、どこまで行きつくからな。

「……………そう……あんたみたいなのと一緒に居るなんて……あの子も災難ね……」
「まあ、否定はしねえよ。ただ、可愛がらせてもらうがね。肌がすすすべになっただぞ？
気がついてたろ」

「そう……。ねえ……あんたが、終わらせてくれるの？」

それが願望か。そりやそうだろうな。

誰にも助けてもらえず、世の中の悪意に晒され続け、それでも娘は守りたいと思いつけた。そのためだけに、生きていて、生きていた。

だが、歯車が狂えば、自分の背に居た娘を自分の悪意が傷つけていた。そこからは転落だ、まさしく転がり落ちて行くだけ。傷つけられ続け、傷つけ続け、狂い、汚物へと成り果てていた。

「ああ、終わってしまいたい。けど、最後に残った愛情が、終わらせてくれない。私が終わってしまえば、一人残された愛しい我が子。誰が一体その娘を守るといえるの？ つか」

立派な母親だこつて。気が狂って好きだぜ、そういうの。

「……」

「いいぜ、終わらせてやるよ。後は俺に任せな」

「……任せられると思えるの……？」

「安心しろつて。お前よりはヤワじゃねえから」

汚物は目を瞑り、鼻で笑う。それは俺に対してか、それとも自分自身に対してか。

そして、眼を開くと、そこには月明りに照らされた光の粒があった。最後、こびりつ

いて離れない想いが、最後の母親の口から洩れる。

「……小雪、愛してるわ」

気づくのがおせえよ、ヴァーカ。

第7話

小雪ちゃんの名字が榊原になる頃、学校は夏休みという期間へと突入した。暑い夏の日差しの中、地中から這い出てきた蟬たちが子孫を残さねえとつてミンミンと泣き散らしてやがる。

百代ちゃんは出稽古とかいうのでしばらく川神に居ねえし、冬馬や準のやつは学習塾、英雄はリトルリーグで皆々思い思いの夏休みを満喫してらしい。

小雪ちゃん新しい家族と旅行に行ってるし、俺は一人だけいつものメンツからハブられてしまっていた。実は嫌われているんじゃないかと、少しダウンナーになった。

そんな暗い気分の時は甘いものを喰おうと、九鬼の本部へと戻ってきていた。メイドさんのスカートの中を駆け抜けながら、食べるアイスは美味かった。

「あー、アイスうめえ」

九鬼が俺のために用意してくれた部屋は既に使用頻度が悲しいことになっていたが、たまにメイドさんにセクハラをしに帰ってきている。セクハラとタダ飯食える場所と

しか思っていないとかバレたら、あの殺人キック爺に殺されそうだな。

グーたちの極みを決め込んでいたら、部屋がノックされた。どうしよう、部屋中クシャクシャのテッシュだらけにして、メイドさんを困らせようか思ったが、何のおもてなしの準備もしてねえ。

「久しぶりだな。赤子、いや、お前は鬼子と呼ぼうか」
「チエンジで」

俺はそつとドアを閉じた。ドアごと蹴り飛ばされた。

「ぐええ!？」

「お前のことは聞いたぞ、随分と好き勝手していたようだな」

内臓とかシェイクしてくれるように、ねじりを加えてくれてやがったな。口から血が出るってことは、内臓を痛めつけられてる。

喉に溜まっている血を吐き出してやる。血が床を汚し、飛び跳ねた雫が足にかかる。生温かい感覚に、脳みそがゆるるような、頭に血が行くのを感じる。

「不意打ちとは随分、味な真似してくれるじゃねえか、爺。来ると思ってたぜえ」

「ふん、殺さないようにはしたが、やはりしぶといな。貴様が九鬼の名を騙り、小娘の親権を動かしたことは知っているぞ」

「あん？ 勝手に使われたから怒ってんのか？ 少しぐらい大目に見ろや、年長者だろうが」

俺は小雪ちゃんの親権を動かすために、九鬼と言うビツクネームを利用した。この爺からすれば、許せねえことだっただろう。

九鬼大好きっ子の爺ブチ切れ案件って分かってたのになー、すっかり忘れてた。こりや、洒落にならねえな。

「貴様は一度徹底的に痛めつけねば、九鬼と言う存在に対しての認識があらたにならんよ。だからな。こうして俺が足を運んだという訳だ」

「わざわざご苦労なこった、クソが。謝りはしねえぞ」

間違っていた。もつとうまくやる方法があつた。そう思うのは簡単だし、謝れば爺も

八割殺しくらいで勘弁してくれるだろう。

九鬼にしたって、俺が勝手に名前を騙ったり、役人を金や脅しで自分の都合のいいように動かした。

俺がしたのは他人の人生を自分の思うままに動かしたことだ。それが良い悪いは関係ない。ただただ、小雪ちゃんにしても、あの女にしても、榊原っていう赤の他人にしても、俺は自分のルールを勝手にぶち込んだ。

その手段として九鬼の名を騙り、爺の逆鱗に触れた。だから、なめた真似をした俺を爺が制裁しに来た。単純な話、それだけのことだ。

悪いことをしたら謝る。ガキでも知ってる当然のことだ。九鬼に謝る。それで丸く収まりはしないだろうが、少しばかりはそれが正しい行いなのだろう。

でもよお、それはちいとばかり虫がよくねえか？ もつとうまくやる方法があつただ？ 俺が間違つてただ？

「今更よお、んなこと言えるわけねえだろ？ そいつは真剣さが足りねえんじやねえか？ あの女にも、小雪ちゃんにも。なあ、爺よお？」

「ふん、吠えるな、鬼子。貴様がどう思つていようと、貴様は俺の超えてはならん線を超

えた。故に、ただ制裁するだけだ」

「ハッ、やれるもんならやってみろや。短い老い先、全部持って行ってやるよ」

恩を仇で返す。俺は今、最悪の道徳を体現しているのだから、爺も今までの蹴りが遊びだとしても言わんばかりの殺意を以て暴力を振るう。いいねえ、ヒリヒリとした死の感覚が心地好いわ。

柄にもねえことしたツケか？ いい事すればいい結果が伴うんじゃないのか？
ただまあ、五体満足で済めばいいがねえ。

気がついたら、全身が砕け散るんじゃないかって痛みに襲われていた。両手の感覚はなく、かろうじて、繋がっているくらいしか感じない。顔も陥没してるのか、右目の視界は黒く染まっており、左目の視界もかすれてやがる。

あんの爺、徹底的すぎんだろうが。ラブコメ路線目指しているのにこの様は何だったんだ。

それにしても、よく生きてるな、ほんとしぶといな、ゴキブリか？

あーあー、九鬼から追い出されたなあ。幸いと親切な裏帳簿おじさんからもらったマンションの一室があるから衣食住の住はなんとかなるが、他二つはどうすつかなあ。裏帳簿おじさんに弱みを見せるわけにはいかねえんだけどな。

「随分と派手にやられたじゃねえか」

「……あん？ 釈迦堂のおっさんか？」

加齢臭のする影が俺を見下ろしていた。正直、視覚は今当てにはならん。つたく、イケメン顔になってことしてくれやがる。

「驚いてたぜ。ヒュームのおっさんが本気で闘ってやがってるてな」

「あー、超人どもは気とか感じ取れるんだったな。そんなん考える暇もなかったわ」

「てか、何したんだ？ ヒュームのおっさんがここまでやるなんてよ」

「あー、うん、意固地になって我を通したらボコられたんだよ。」

「……お、おう。馬鹿なんだなお前……いや、知ってたが」

馬鹿だよ。うん、仕方ねえ。頭よくないから。

「ひとまず、川神院に持つてくぞ。このまま放置してたら死ぬからな」

「……え？ 槍でも降るの？」

「あー、足が滑ったー」

うぎやあああ!! てめえ！ 肉が削げた場所を踏むんじゃねえええ!!

のおおおおお!!!

「……カッ」

「あーあー、ガチでやべえ状態じゃねえかよ。ったく、梅屋一年分奢れよ？」

傷に塩どころか靴の裏の泥を塗りこまれて、俺の意識は再びブラックアウトしていった。

「お前、ほんとに化け物だな。なんで寝て起きたら骨がくつついてんの？」

「俺も本格的に分らなくなってきたから突っ込まないで置いてくれると嬉しい」

川神院は出稽古ということで人は少なかつた。幹部格は釈迦堂さんくらいしか残ってなかつた。まあ、逆に都合だったからいいが。

完全に粉々になつていた足の骨はまだ治つてなかつたが、ポキポキ折られていた右腕の骨とかはくつついていた。俺も、化け物に足を一步踏み入れているのだろうか。

釈迦堂のおっさんが言うには目に見えて傷が治つて行つて気持ち悪かつたらしい。

見てみたいような見たくないような奇妙な思いを抱くしかなかつた俺だが、手から出した日本酒を瓶で呷る。釈迦堂のおっさんは焼酎を飲んでる。
ちなみにまだ太陽さんは未だ俺たちの頭の上を歩いていた。

釈迦堂のおっさんに口止めとして酒を山ほど手から出して渡した後、俺はマンションへと戻った。足が粉々だから逆立ちで帰る羽目になったし、てか一日くらいゆっくり泊めてくれよ。多分明日には元気になってるから。

「よお、邪魔してるぜ」

「びびるわ」

四苦八苦しながら部屋に入ると、我が物顔でくつろいでるみかどつちが居た。しかも、俺が置いておいた菓子を喰っていた。

「てか、よくわかったな。つてことは、葵紋病院も抑えられるか」

「ああ、少しばかりこの街でやる事が出来たんだな。その内街の掃除をするつもりだったんだよ。まあ、遅いか早いかだけだったし、ついでに潰してきた」

「ヤのつく自営業の人とのつながりもあつたんだが、やつぱ九鬼パネエな」

ついでに潰すとか冬馬の親父さんたちも浮かばれねえな。ただ、補給路が絶たれちゃった。これはもう裏家業とかに身を染めないといけなくなるぞ。

「てか、思ったより元気だな。てつきり廃人にでもなるかと思つたんだが」

「なつてたわ。自分の身体リジエネかかってんじやねえかつてくらい、回復速いんだけど」

「なんだそりや、化け物かよ」

カラカラと笑うみかどつち。

「意外とみかどつちは普通なんだわな。てつきりおこなのかと思つてたわ」
「ハツハツハ！ そりやおめえ、あんだだけブチ切れたヒュームなんて久々に見て逆に冷静になつたわ。まあ、名前くらいなら幾らでも使えつて感じだわな」

懐の広さが爺と月とすつぽんだな。

「ただま、一言くらい言つておけよなつてくらいか？ 貸し一つだけ？」

「何でも言う事聞かせるつて！ 嫌らしいことでもするんでしょ！ エロ同人みたいに
！」

「ハツハツハ、キモツ」

「おう、俺も言つてて気持ち悪かつたわ」

みかどつちは少し考えるようにして、菓子を口の中に放り込む。

「まあ、その内クローンたちの世話でも任せようかねえ。お前からしたら腸煮えくりかえるようなことだろうけど、まあ、それが俺からの仕返しつてことで」

「あん？ クローンだ？ みかどっち何かやってんのか？」

「おう、武士道プランって言ってな。過去の偉人のクローンを育ててんだよ」

「へえ……」

確かに、正直好きな類の話じゃねえなあ。手前勝手に命をいじくりまわすって、舐めてんのか？ ってなるな。

「このタイミングじゃなけりやあ、俺もブちぎれてたなあ」

「だろ？ だから今言ったんだよ。少しはお前も殊勝になつてるだろうってな」

「……ぐぬぬぬ」

俺が自戒しているタイミングを見計らうとは、みかどっち、恐ろしい子……！

「ハッハッハ。ま、ヒュームも、もうこのことでうじうじ言わねえだろうし、俺としちゃあ最初からさほど気にしちやいねえから。よろしく頼んだぜ」

「……あいあい、偉人って誰なんだ？ 俺的には新選組とかが好きなんだけど」

あとは、奇兵隊とかが好きだな。まあそもそも幕末が好きだからなあ。あのくらいの混沌していた時勢の中で誰もが必死こいてたつてな。

まあ、クローンであつて本人じゃねえだろうから、あんま気にしないでおくか。

「時代がちげえなあ、源氏だよ源氏。源義経と弁慶、あと那須与一。あと一人いるが、こっちは秘密だ」

「偉人当てゲームつでもしろつてか？ 面白そうだな」

「お、そりゃあ面白そうだ。当てられたら金一封やるぜ？」

「逆に当てられなかったら、九鬼の従者にでもなつてやろうか？」

やっぱり、みかどつちとの軽いやりとりは小気味いい。波長が合うんだよねえ。

「んじやま、クローンたちに会わせるとしても中学生くらいからだな。流石に今会わせても悪影響しかなさそうだ」

「おう、せやな」

中学生か、どんなやつらなんだろ。クローンつてのは気に入らないが、偉人に会

うってのは割と面白そうだな。

「しゅ、修二!? 包帯ぐるぐるだよ!」

「おう、一子ちゃんか。骨はくつついたが、顔が凹んでてな。新しい顔ができるまで待っててくれや」

次の日には、足の骨も治ってた。自分の身体が怖い。

イケメン顔がアンパンマンどころかバイオハザードしてたから、ひとまず包帯で隠しておくことにした。ミイラ男かゾンビかどっちがいいかは首をひねるが、ひとまずミイ

ラの方がイケメンだからな。

「おいおい、大丈夫なのか？ 修二」

「おう、キャップ。大丈夫大丈夫、また皆で遊ぶなら何する？」

「野球は昨日したし、そうだなあ。岳人たちは何かいいアイデアあるか？」

キャップを除く男組は、ミイラから距離を取るようになっている。おう、ビビってんのか。うん、ビビるわな。

「鬼ごっこでもするか？ 俺が殺人鬼役で、お前たちが生存者役。発電機を五つ付けて、出口を開いて逃げればお前たちの勝ち、捕まって生贄にされたら俺の勝ち」

「ほー、面白そうだな。でも、発電機って、どうするんだ？」

「そうだな。代わりに謎々でも置いておくか」

さあて、全員生贄に捧げてやるよお！ あ、一子ちゃんはいえつちいことしようそうしよう。

第8話

爺にリンチされてから数日、へこんでいた顔面も元通りのイケメンフェイスに戻っていた。骨格から歪んでいたはずなのに、我がことながらエイリアンの細胞でも混ざっているんじゃないかと思ってしまった。

とりあえず、爺にリベンジするために九鬼に呐喊したが、返り討ちにあった。また顔がデコボコにされた。

「ということがあつてだな」

「お、おう……だからそんな包帯巻いてるのか。一瞬誰かと思つたぜ」

「フハハハハ！ ヒュームと派手にやってくれたようだな。本部の一部が崩壊したと聞いたぞ」

準や冬馬はしばらく塾もないとのことなので、お宅訪問ということで冬馬の家に遊びに来たのだ。なんだか冬馬の親父さんが、白目を剥いてたけどなんでだろうなー。

まあ、俺と英雄が来た時点で胃に穴が開いてもおかしくねえな。

いやごめんて、おまけみたいに潰されて。でも、足を洗えたから許してくれ。逆に九鬼のお陰で穩便に済んだんだからな。感謝しろ、もつと金搾り取るぞ。

「ねー、修二……それって、僕のせいなの？」

旅行から帰ってきた小雪ちゃんが包帯越しにデコボコになった俺の顔を触ってくる。ミイラモードのおかげで見た目には変態だが、触ればそこが人の頭の形としては変であるということが分かるだろう。

「あー？　小雪ちゃんよお、この傷は俺が選んだ結果の傷だぞ。だから、小雪ちゃんは気にしないでいいんだよ。こういう時はありがとうって、チューしてくれればいいんだよ」

「……うん」

「む、修二、どういうことだ？」

「痛い痛い痛い！　百代ちゃんの握力だと顔がデコボコで固定されちゃうー！」

小雪ちゃんを慰めながらチューをねだったら百代ちゃんに制裁された。頭の形が洋

梨みたいにされそうだった。

俺が悲鳴を上げると、なんとか百代ちゃんは解放してくれた。頭にはつきりと百代ちゃんの手形が付いていた。

「いいよ……修二、ありがとう」

百代ちゃんから解放された瞬間、目の前には小雪ちゃんの顔があつた。それとともに、唇に柔らかい感触がした。甘い香りがする、そして、それと同じだけ甘い味が接した唇から広がってくる。

久々だったせいか、俺も唇から伝わってくる人の体温に、血が全身へと巡る感覚を覚える。

その血流が下半身へと巡る。むずむずとした感覚、これは慣れ親しんだ覚えのあるものだった。

エクスカリバーがいま目覚める……！

「……な、ななな……」

「ん、これでよかったかな。修二」

「ああ、ありがとうな。美味しかったぜ」

百代ちゃんが壊れたテープレコーダーのように動いている。面白いように動いているが、あまりよろしくない雰囲気だ。主にトラウマ的に。

「修二！ 小雪！ なんでキスしたんだ！」

「う……モモちゃん……でも、したくなつたから……」
「がるるるる」

獣のように唸り声をあげる百代ちゃん。一歩扱いを間違えば、俺の頭どころか全身が面白オブジェに整形されてしまう。流石にこれ以上変な形にされたらアンパンマンみたいに顔を全部とつかえねえと元通りにならんレベルになっちまうかもしれねえ。

小雪ちゃんは怯えた小動物のようになってしまつてるし、冬馬と純もフリーズしている。まったく使えねー野郎どもばかりだぜ、小雪ちゃんは可愛いから許す。

「フハハハ、豪胆よな。修二も小雪も」

「そう言えるお前がうらやましいよ。つたく、くそ、せつかくエクスカリバーが抜けそう

だつてのに……」

久しぶりな相棒を小雪ちゃんたちに可愛がって欲しいが、まあひとまずはいいか。

「百代ちゃん百代ちゃん」

「なんだ修二、私は怒っ……ん！」

仕方ないので、百代ちゃんの口を、俺の口で塞ぐ。小雪ちゃんに不意打ちされて、俺も女の子ソムリエとして憤っているのだ。ならば見せつけならねばならない、俺がリードする側だと。

「んっ……はっ……あっ」

「んっ……じゅる……はあ」

溶けてしまえばかりに、百代ちゃんの口を食る。視界の端では小雪ちゃんが驚いたような表情をしているのが見えたし、その反対側では純や冬馬、さらには英雄までもが口を阿呆のように開いていた。

たつぷり一分、きっかり六十秒の間、ぷつくりと実った果実のような唇を味わせてもらった。俺の高ぶりが流れ込めと、お互いの気持ちを高ぶらせていく。もつと、もつと寄こせとばかりに吸い付き、舐める。

「(一)馳走様」

唇を離せば、端から銀の端が垂れる。小学生じゃ想像もできないだろうキスをしてやったせいとか、百代ちゃんの目は焦点が合っていない。コ●ンボデイになってから、俺が、俺の意思で初めてしたキスだ。ファーストキスと言っても過言では無いだろう。

小雪ちゃんにはファーストキス(笑)の称号をプレゼントしよう。

「おーい、百代ちゃん、大丈夫かい」

目の前でパタパタと手を振ってやるが、反応はない。不意打ちだったせいかトリップしてしまっていた。まあ、多分不意打ちじゃなくてもトリップしてたろうが。

正直言えば、すぐく股間に来る表情だ。もしこの場に冬馬たちが居なければ、すぐさまに押し倒していた。ロリだが、百代ちゃんの発育は非常によろしい。

俺の守備範囲はワールドクラスのゴールキーパーだから、もちろん小雪ちゃんも巻き込んで大暴れしていただろう。

「く、しかし流石に初っ端から見せつけプレイはレベル高い……」

「何訳の分らん事いつてんだよ！ こっちはいきなりトラウマもんだよこの馬鹿！」

準がツツコミのために復活してきた。お前も何気に順応能力高いよな。

「キスを実際に見たのは初めてですね。ドラマとかでは見たことがあったのですが、やはり生だところ、感じるものがあると言いますか」

冬馬も何故か顔を紅潮させて俺を見ていた。おいこら、こっち見んな。なんか尻がきゅつと寒気を感じるだろうが。

「む……むう……今のがでいーぶきすか……。中々に珍妙なものであったな」

あら、意外と初心なのね、英雄。ただ、なんかお前の恋のフラグをべきべきにへし折つ

てる気がするから、申し訳ない気もするんだよな。主に一子ちゃんあたり。まあ、どうでもいいか。

「修二……………今の……………なんだ……………？」

百代ちゃんがようやく再起動を果たす。

「大人のキスだよ。小雪ちゃんよりも先に、百代ちゃんにプレゼントだ」
「……………ああ」

上々な仕上がりがりだな。百代ちゃんは素材がいい分、俺も手のかけ甲斐があるってものだ。股間のエクスカリバーが真名解放しろってピンピンに主張して来てやがる。

「ただ、ミイラじゃなければ絵になってたんじゃねえか？」

「ああん？ そのこのハゲ、お前もミイラにしてやろうか？」

日も落ち、解散した後、俺は一人で考え事をしながら歩いていた。

小雪ちゃんと百代ちゃんの大人の階段を上げた後、なぜ今まで勃起しなかった癖に、今回は息子が臨戦態勢に入れるようになったのかを。

「なあんてかねえ。この体も不思議なことばっかだし」

俺がガキの頃の体なのは確かだ。このナイスガイすぎる顔面はそうそう存在しているはずはない、だが、俺がこの年齢だったころには勃起から射精まで、既に女体の神秘と競い合わせてたはずだ。

爺にボコられたからか？ ドMだったからか？ いや、S嬢ならともかく、加齢臭のきつい爺にボコられて興奮する趣味はねえ。

「よっつ」

垂直飛びでどっかの民家の屋根に飛び乗る。そのまま軽いジャンプで屋根から屋根へと跳んで行く。

身体能力もちよつと頭おかしいレベルだしな、まあ、ジエノサイド爺とか百代ちゃんとかも居るから、バトル漫画の世界みたいだし。

「……………ん？ 待てよ

」

バトル漫画の世界……………？ バトル漫画の世界の俺……………？

「もしかして、これって俺の身体だけど、俺の身体じゃなかったってオチか？」

俺の元々大人だった身体がコ●ン君的展開に遭遇したわけではなく、子どもだった俺の身体に俺が入り込んだってことか。そうなると年代的にずれがあっても、そこまで不思議じゃない。

「ようは馴染んでなかったって訳か？　うーむ、よく分からん」

まあ、真名解放はできるようになったし、歓楽街にある大人の風呂屋でレッツパーリーと行くか？

「いや待てよ、せっかくの童貞だ。風俗嬢とかじゃなくて、もっと面白い相手で卒業したいな」

人生に一度しかないのだ。どうせなら、捧げてもええんちゃう？　と股間の剣が反応する相手がいい、面白そう。

俺はいつだって面白おかしく生きていきたいのだ。

そうと決まれば、選別のお時間だ。

今冷静になって考えれば、小雪ちゃんと百代ちゃんはなあ。多分、今の俺のエクスカリバーでも、挿れたら裂ける。一子ちゃんも同様。行為中に血まみれとか萎えるから、もうちよい育つてからだな。

いや、ぶち込みたい欲求は勿論あるんだけどね？　ほら、俺って紳士だから。女の子

には優しいのがデフォだから。

「どっかに都合よくおねシヨタできそうな女居ねえかなあ」

あざといガキを演じて騙してみるのも楽しそうだな。うん、夢がワクワク広がっていく。

「つーわけで、今回は京都に行くぞ！ おめえら準備はいいか！」

「よくねえよ！ 昨日の今日でどうして京都なんだよ!？」

「俺が京美人に会いたくなつたからだよ」

とか言いながらちゃんと荷物用意してるじゃねえか、このむつつりハゲめ。実は楽しみなんだろう？

「京都かあ。確か、五重塔があるんだよね」

「五重塔は奈良やで、小雪ちゃんや」

「うえ？ そうだったんだ」

まあ、京都だけじゃなくてその辺りも回つてもよさそうだな。修学旅行生とかのホテルに転がり込んで食い散らかしたい。うーむ、時期的に微妙か？

「ま、とりあえず今回は子供だけじゃねえ。大人の引率者が居るんだぜ、特別ゲストだ」

大人の引率者つてのが、小雪ちゃんを連れまわす条件として榊原マミーに提示された条件だった。

仕方ないので、俺は頼りになる大人を探した、それはもう、子供たちの面倒を見るに相応しい、清廉潔白な大人の鏡を。

「よー、お前らが百代と修二の友達か。釈迦堂刑部だ、よろしく頼むぜえ」
「というわけで、特別ゲストの釈迦堂くんです、皆、仲良くするよーに」

ちなみに大吟醸五本で手を打ってくれました。いやー、話の分かる大人つていいわー。

「ま、口うるさくはしねえが、悪いことをしたらちーと厳しいしつけをするから、そこん
とこ注意しとけよー」

「……あの、修二さん？ この方絶対カタギじゃないですよ。ヤのつく自営業な方で
すよね」

「ヤクザより、どっちかつーとチンピラのおっさんじゃね？」

準も初対面だからってビビっちゃってまー情けないこと。冬馬は平常運転だぞ？

「ふふ、賑やかな旅行になりそうですね。僕は葵冬馬といいます、よろしく願いま
す、釈迦堂さん」

「準、そんなに怖がることないぞ。釈迦堂さんは川神院の師範代だからな」

「うえ、まじすか？ モモ先輩。あ、俺は井上準です。よろしくお願いします」
「釈迦堂先生、うえーい！」

小雪ちゃんも川神院に通ってるからか、釈迦堂さんと仲いいんよな。リングとかの気を使った技の適性はないらしいけどね、小雪ちゃん。まあ、それでも既にチンピラとかは蹴り殺せるんじゃないかって思う、この子、怖い。

「あ、ちなみに英雄は英雄でみかどつちに会いに行ってる関係で来れないらしいってよ」
あー、実に残念だ。仕方ないから京美人との熱い夜の記録でもお土産に持って帰ってやろうか。

エクスカリバーが抜けるようになったせいで、正直ムラムラすんねん。
発散したいってのがこの旅の七割がたの目的だったりする。

残り三割？ 旨い京料理と酒だよ。自分で手のひらから出したのより、やっぱ生で食う方が美味いんだよな。

女の子も、生が美味しいけど、ちゃんと避妊はしないといけない。

そのあたり俺は紳士なのだ。

「それじゃあ野郎ども！ 行くぞお！」

『おー！』

いやあ、楽しみだあねえ。京都。何故かはわからないけど、夫が株に手を出して借金をこさえて、それに愛想を尽かして別居中の人妻が居る様な気がするんだよねえ。

うん、悲しむ美女は放っておけないな！ 紳士として！

第9話

京都へ向かう新幹線の中、俺らはトランプで、釈迦堂のおっさんは雑誌を読んで時間を潰していた。俺か冬馬が一位、それ以外は大体同じ程度の勝率である。

百代ちゃんと小雪ちゃんはババ抜きやら大富豪では顔に出るから、二人がドベを争っている。

「おーい、てめえら、そろそろ到着だぞ。荷物片づけとけ」

「あいよ。ほれ、あーがり」

組み合わせになったカードを放り捨てる。トランプとか久々にやったが、サマの腕も鈍ったどころか身体能力が上がったためか精密動作性が上がったからなあ。ちとおっさん誘って、博打で荒稼ぎとかいいかもしれないな。

「ぬぬぬぬ」

「むむむむ」

百代ちゃんと小雪ちゃんがババを巡って睨めっこし、準と冬馬は散らかしたチリやら荷物やらを片付けてる。

「これだ!!」

「ああっ!?!」

百代ちゃんが小雪ちゃんの手札からカードを抜き、小雪ちゃんは絶望するような声を上げる。勝った百代ちゃんはいえーいと喜び、小雪ちゃんはぐぬぬともう一戦と言いつい出しような顔をしていた。

「はいはい、ほら着いたぞほら」

「はい、モモちゃん、夜にはリベンジするからね」

「ふはは、いくらでもかかってくるがいい」

「ちんたらしてるとめえら置いてくぞー」

雑誌をズボンのポケットに丸めて突っ込んだ釈迦堂さんに急かされ、俺らは予約して

たホテルへと向かう。釈迦堂のおっさんがチエツクインを済ませた頃には、既に日も沈みかけた頃、こつからは小学生を連れて歩くには時間が厳しいな。

「つーわけで、おじさんはちと居酒屋巡るから、お前らはホテルでゆつくりしてろよー」
「おうこら、俺も連れてけや」

そろそろきちんとした酒を飲みたいんだよ。手から出したのってなんか味気ないんだよ。

「いやいや、お前も俺らと同じ小学生だからな？ 居酒屋とか行けるわけないだろ」
「うるせー！ 俺は絶対に酒を京美人に酌してもらうんだよお！ そのままいろいろなところも尺してもらうんだよお！」

俺は肩を掴む準を振り払って逃げようとする。所詮準とは肉体のスペックが違うんだよお！

「意味分かんねえよ！ 小雪、モモ先輩！ 手貸して！」

「仕方ないにやあ。ほら、修二、今夜は遊び倒して寝かせないぞ！」
「くそう！ 馬力が違う！ 助けて冬馬！」

万力のような力で腕を捕まえる百代ちゃん。無理に逃げ出そうとすると、ミシミシと骨が軋む音がする。完全に技がキマツてやがる。無理に逃げ出そうとすれば、肩が外れちゃう。

冬馬に助けを求めるも、にこやかに笑ってるだけで役に立たない。そして、小雪ちゃんは百代ちゃんと一緒になって俺の足を掴んでいる。

てか、足を持ち上げないで！ 逆さにして運ばないでえ！

「そんじゃ、ホテルで大人しくしてろよー」

「覚えてやがれよおおお!!」

背中を向けて手を振る釈迦堂のおっさんに、俺は必ず復讐してやると心に決めたのだった。

「……………手ござらせよつて」

遊び倒して、移動の疲れもあつたからか、逸般人である百代ちゃんも寝静まつた深夜、俺は大いなる野望のために身を起こしていた。

周囲を見れば寝潰れたがきんちよども、釈迦堂のおっさんは別室だから分からんが、あのおっさんが深夜帯とか健全な時間で帰つてくるとは思えんな。

「よつと」

面々を起こさないようにホテルの部屋を出る。地図は頭にぶち込んだから、ぶらつきながらよさげな店を探して街をぶらつこうかねえ。

ホテルを出て、繁華街へと入りよさげな店を探す。蛍光色バリバリに聞かせて酔っぱらつたおっさんたちがうろついており、キャバ嬢と思われる女たちが行きかう。

ん、いい空気だ。生き返るう。

「ちよつと君、こんな時間に何してるの？」

「おん？」

そんな風に夜の街並みを楽しみながら、ワクワクしていたら、黒髪の美女が声をかけてきた。やはり俺ほどのハンサム顔なら女の方が放っておかないか。まったく、俺は罪な男だぜ。

「こんな時間にするなんて、決まってるじゃないか」

「少なくとも、君みたいな子どもがこんな時間にこの場所は似合わないと思うわよ。保護者の人は？」

「うーん、多分居酒屋はしごしてんじゃねえか？ それか風俗にでも行ってるじゃろ」
「……」

呆れたような顔をするがね、多分外れちゃないと思うぞ。釈迦堂のおっさんだし、川神院から離れたのをこれ幸いと酒と女に溺れると思うんだ。

「はあ……ちよつとお姉さんと一緒に来てもらってもいい？ 交番へ連れて行ってあげるから」

「何で悪いこともしてないのにおまわりに会わなきゃいけないんだ！」

俺は交番とおまわりとゲイが死ぬほど苦手なんだよ。

「こんな時間に子ども一人にしておけるわけないでしょ。つたく、何で家出たその日に、こんな面倒なことしてるのかしら、私」

頭をがしがしとかき乱し、京美人はため息をつく。なんかそっちはそっちで訳ありみたいだが、俺としては交番で保護で終了なんて、残念過ぎる京都一日目を迎えたくはない。

「俺は交番に入ったら全身の穴と言う穴から血を噴きだして死ぬ病なんだ。見逃してくれえ」

「だーめ、ほら、お姉さんとデートと思えば役得でしょ。……ほなら、うちと一緒に来てくれませんか？」

「わあい、デートに誘うとか姉さん情熱的い」

京美人から差し出された手を握る。きめ細やかとそれを保つための磨きを感じさせる綺麗な手に、俺はほいほいと握り返してしまふ。

百代ちゃんや小雪ちゃんと言った子どもとは違う、細くも嫺やかな、完成された大人の女の手だ。

「それじゃ、交番行くわよー」

「ハッ……!! 謀ったな!! この卑怯者が!」

ちくしよう! 美人に騙されちまった!

手を振り払おうとするが、想像以上に力強い。あれ? 俺の身体スペック的に、普通の成人女性程度の力なら簡単に逃げられるはずなのに。

えー、もしかして百代ちゃんとかと同じ逸般人枠え。この世界逸般人多すぎませんか
ねえ?

「離せえ! 死にたくなあい! 死にたくなあい!!」

「ちよ、暴れないで。こら、もう！」

ふわりとした感覚がした次の瞬間には、何か柔らかい物に包まれた感触がした。特に背中には二つ、マシユマロのようなものが存在している。

俺は確信する！ これはおっぱいであると！

「急に大人しくなったわね」

「んー、80点！ 80点をやろう！」

「結構高得点ね。まあ、綺麗に投げれたからね、合気道つて言うのよ？」

なるほど、合気道ねえ。気づいたら投げられてたからかなりの熟練者なんだろう。

まあ、そんなことよりおっぱいだわな。流石に大人の女だ。熟れている、そう、この柔らかさは若いだけの者にはない包容力だ。若い娘の芯のあるようなハリが強いおっぱいもいいが、俺はこの沈み込むような柔らかさも魅力的であると強く主張しよう。

手を入れれば、沈み込むのだろう。跳ね返すような弾力は弱いのかもしれないが、俺を持ち上げ押し付けられ、形をぐにゆりと変えているおっぱい。これはいいものだ。間

違いなく俺はそう断言できる。

顔を見上げれば、整った目鼻立ちが見えた。皺一つ見当たらず、悪戯好きな猫のような印象を覚えた。

「なあ、本当に交番に連れて行くのか？」

「ん？ そうだけど。というより、こんな時間に、ほんと無責任な保護者よね」

微かに自嘲するような笑みだった。

今気づいたが、微かに、それこそハイスペックボディである俺がようやく気付く程度の酒気が、その吐息に混じってるのに気づいた。

「なーんか、そつちもそつちで大変そうだねえ。どうだ？ 見逃してくれたんなら愚痴に付き合おうぞ？」

「子どもに愚痴るほど、落ちぶれちやいないわよ……」

ああ、分かった。この京美人は母親だ。気づくのが遅せえ。俺の『おにやのこセンサー』も対象年齢低めを相手しすぎて鈍っちゃったか？

んー、母親の女は、まずはその親と言う皮を剥いてやらねえとな。相手が母親であり、俺が子どもというハンデを背負っているが、構わねえ、その方が燃える。

「誰かに何か言うだけでもすつきりするんじゃないやねえか？ 例えば、もう二度と会うこともないような、小生意気なガキとかよ。旅行者だからな、旅の恥は掻き捨てっていうだろ？」

「私はここが地元なんだけど……ま、君が普通のこととは違うつてのは薄々感じてたし……ちよつとくらいなら、いいのかな？」

「ええんやでえ。そんなじゃ、どつか店に入ろうぜ」

「それはだーめ。こつちに公園があるから、そつちでね」

ちい、そう上手くは行かねえか。

抱きかかえられたまま、街灯がほとんど届かない公園へと連れ込まれた。やだ、この人誘つてるのかしら。ただ、ここで焦つて手を出すのは時期尚早だ。

「もー、何やつてるのかしら、私。こんな子供見つけて、こんなところに連れ込んで」

「ま、たまにはいいんじゃないやねえの？ そんな日もあるさね、と思えば大体世の中何とかな

るぞっ。」

「可愛くないなあ。うちの燕ちゃんと変わらないはずなのにませた子だこと」

子ども扱いするように、俺の頭をくしゃくしゃと乱す。

「ほんと、子どもには何の責任もないはずなのにね……」

「なんだ、旦那が株で失敗して、それに大激怒して家を出て、その後に残した子ども
のことを考えてるみたいな顔してるな」

たぶん、大体外れちゃいないだろ。俺の『おにやのこセンサー』には、男を見る目な
いって診断が出るし、この人。

つまり、ダメメンズ好き。それも特級が付くレベルの。

「……君、エスパ―？」

「ただのハンサムだよ」

「はあ……何か見透かされた感があるけど。大体そんな感じ……ほんと、久信君には呆
れたわ。株に手を出して、借金作って、その挙句に『大丈夫大丈夫、コツは掴んだから

今度やればうまく行くよ』よ？ 信じられる？」

「うわあお、思った以上にクツズい」

親近感が湧くな。勝つか負けるか、ひりつくようなスリルってのは麻薬じみた中毒性があるからな。しっかし、借金ねえ。

「んで、出てきたって訳か」

「そ、旦那の顔面に一発お見舞いしてからね。骨は折ってはいないと思うけど……」
「中々にアグレッシブだな。おおこわいこわい」

この美人、武闘家っぽいし、顔面変形してるんじゃないかねえの？ 旦那。

「旦那って、仕事何してんの？」

「技術屋。何でも、世界をあとと言わせるような物を作るって言ってただけどねえ」

懐かしむように、それでいて後悔するように顔を俺の後頭部にうずめる。

見ず知らずの子どもに弱みを見せるほどに、参ってるらしいな。まあ、俺からすれば、

親って皮をはがすのに都合いいんだがな。

「うし、そんじゃ飲むか」

「……はっ」

俺の異能で日本酒を創り出す。味はそこそこだが、酔うには十分だ。

物はあつても杯がねえな。てか、ビンとか袋は一緒に出来上がるのに、コップとかは作れないってどういう原理なんだ？

まあいつか、細かいことは。

「ちよ、どっから出したのよ。それ」

「なんかこういうのを作れるのが俺の能力でな。酒、つまみ、食べ物ならだいたいのものが出せる。原理は知らんけどな」

信じられないという顔をしている。まあ、メルヘンやファンタジーじゃないんだから、信じがたいのも分かるがな。俺も自分のことじゃなかったら信じられんだろうし。

「ほれ、つまみも酒もあるから。嫌なことってのは酒で流した方がいい時もあるんだべ」

酒瓶を俺の身体の前に回されている手に押し付ける。

この京美人は推せ推せに弱い。そう確信した俺は、ひたすらに押すことにした。いただきまーす。

Side：松永ミサゴ

朝目覚めた私が初めに感じたのは、下腹部にある異物感だった。半覚醒した目をこすりながら、私は自分が何一つ身に纏っていないことに気づく。

そして、それとともに自分がやらかしたことを思い出す。

「……やっちゃったなあ」

すぐ隣には子ども特有の高めの体温がある。そして、独特なおいが部屋の中にまだ充満していた。昨夜の狂騒とも思える情事を思い出し、朝を迎えて幾分か冷めた頭が回りだし、足元が崩れていくような感覚を覚える。

よろけながらも毛布を避け、バスローブを手部屋に備え付けのバスルームへと入る。そしてシャワーを浴びながら、指で自分の中にあつたものを掻き出す。

不思議と、嫌悪感はなかった、ただ、妊娠する可能性は限りなく低くしておきたかっただけだった。

「何やってんのよ……私……」

自分の不甲斐無さに泣きそうになる。あの少年がただの少年だとはもう思っていない。ただ、娘と同じくらいの子どもに甘え、傷心中の心をさらけ出して、酒の勢いと

はいえあまつさえ一夜を過ごした。

記憶の中にある私の顔は、女の顔をしていた。

「んー、俺としちゃあ、罵ってくれてもいいんだぜ？ 傷心中の心に付け込んで！ つて。再起不能になるまでポコられるのは流石に嫌だが」

「あ……」

シャワーの音で気づかなかったのか、それとも私自身の注意力がこの状況で散漫だったのか。いつの間にか少年は、私の後ろに居た。正面の鏡には、私の裸と、幼いながらも妖しい色気のようなものを漂わせる少年の裸が映っていた。

鏡の中の瞳が、私をみつめる。私の思いを見透かすように。私の心を見透かすように。

「ま、酒の勢いだった。傷心中だった。甘い囁きに惑わされた。あんたの言い訳はたくさんあるから気にするな」

「私は……」

彼の手が私を後ろから抱きしめる。身長が違うため手は私の下腹部で重なり、彼の鼻が髪をかき分けて背中へと触れる。そのまま、彼はすうーと、息を、わざと私に聞こえるように深く吸った。

嗅がれている。そう思ったが、昨夜の情景がフイードバックした私は、手を振り解けなかった。

なにより、彼の向こう側に、大人の男が見えた。絶世の美男子が、彼とダブるように姿を見せる。

「ただ、これだけは俺の言い分だ」

相手は子どものはずなのに。私には愛する人たちが居るといふのに。

どうしてこうも、彼の言葉は私の心に忍び込むのだろう。まるで蛇のように、隙間に入り込んできてしまう。

私はその蛇に、絡めとられてしまうような錯覚に陥ってしまった。

「愛したから、抱いた。そして、今も愛してるぜ」

私は、彼が子供のように無邪気に、極悪人のように邪悪に笑っていることを確信しながら、そつと下腹部へと手を重ねた。

仕方ない。だって、まだ、私の中にある酒気は抜けてなかった。そう頭の中で誰にともなく呟きながら。

第10話

「ごちそうさまでした。いやあ、非常に美味でしたなあ。京都に来た価値はこれだけでも十分すぎるほどだぜ。」

「ミサゴちゃんからすりやあ魔が差した、ですましたいんだろがねえ。俺からすりやあ、一夜で終わらせるつもりなんてない。俺あ、底意地が悪いからな。いい女は満足するまで食ってやりてえ。」

「修二、なんか機嫌いい?」

「おつ、分かるか? 小雪ちゃん、いやあ、久々にご馳走を食べれたからねえ」

「ミサゴちゃんと愉しんだ後、小雪ちゃんたちのホテルに戻ったころには既に朝日が顔を覗かせていた。倦怠感はあるが、むしろ心地よい。寝たいが、せつかくの京都だし、ちとばかり徹夜で無理してもいいだろ。」

「そのご馳走って、私のことかしら……」

ミサゴちゃんが大きいため息をつきながら、頭を抱える。小声でだが、一番近い俺の耳には届いてた。なんだ、自覚あるんじゃないやねえか。

「それよりも修二君、そちら女性は？ お知り合いでしょうか」

「ん？ ああ、昨日ナンパしてきた。今日は京都を案内してもらおうと思つてな」

いやあ、断り切れないミサゴちゃんもミサゴちゃんだねえ。結局ズルズル引きずられるように沼に落ちるタイプだよ、ミサゴちゃん。

「ナンパってお前な……いつの間に何やってんだよ」

準が呆れ、冬馬もいつもの笑みを浮かべていた。だが、一人だけその顔を赤く歪めていた。

うん、百代ちゃんは激おこぶんぶん丸になると思つてた。

「修二い！ この浮気者！」

「そげぶっー！」

百代ちゃんから拳が飛んでくる。レバーを抉る一撃で内臓をシェイクしてくれる。いい一撃だ……世界狙えるぜ……。

「……おち、落ち着くんだ。百代ちゃん、これはね……浮気と言うか、据えられてない膳も食べちゃう男の性というか……」

「言い訳無用だ。歯を食いしばれ、修二」

あ、あかん……、マジな目だ。百代ちゃんに断nice boat罪boatされてまう。

「んー……モモちゃん、どうしてそこまで怒ってるの？」

「……小雪……？」

心底分らないといった感じで、小雪ちゃんが首をかしげる。それに戸惑うように、百代ちゃんの拳からも力が抜けていく。

「だって、小雪、こいつは……私たちのことを好きとか言っておきながら、他の女にも同

じことを言うんだぞ」

前々から、百代ちゃんの中には燻っていたのだろう。冬馬の手紙という微妙なスタートだったとしても、そこから今までであったのは嘘幻ではなく、確かな現実だったのだろう。

その間に小雪ちゃんの中で育まれた感情は年相応に可愛らしい恋慕。だが、その相手が最悪過ぎたなあ。

平然と浮気(?)をし、最低で自分勝手な悪い男。自覚はあるが、改めて我が身を振り返るとほんと最悪だな。ついでに酒癖も博打癖も悪い。

「……………」

ミサゴちゃんは何も言わずに百代ちゃんを見ていた。俺の視線に気づいたのか、冷めた目を向ける。昨夜の出来事と言うフィルターを通さずに、俺と言う人間を図るようだった。

俺はその目に不敵に笑い返す。これが俺だ、好きなものを好きだけ、したいことはしたいだけ。

「でも、モモちゃん。修二はいつだってボクたちのことを考えてくれてるよ？」
「……」

百代ちゃんが小雪ちゃんに押し負けるように黙り込む。

「修二はいつも真剣だよ。馬鹿だし、ボクたち以外にもデレデレするけど」

馬鹿って、いやまあ、育ちがいいわけじゃないけどさ。もうちよつとオブラートに包んでくれよ、俺の心はこわれもの扱いなんだからさ。

「修二は真剣に生きてる。だから、ボクは好きだよ。修二がボク以外が好きでも。ボク
のことが好きな限り」

小雪ちゃん、随分と都合のいい女の子になってしまったなあ。将来悪い男に騙されるぞ、俺とか。

百代ちゃんは目を瞑る。怒りで赤く染まっていた顔が元の白い肌へと戻る。怒りのピークは七秒とかいう話を聞いたが、まさか小雪ちゃんが百代ちゃんを押しとどめるこ

とができるとはなあ。

「分かった。小雪の言うことも、私には分かる」

「ほっ」

俺だけじゃなく、準や冬馬も安堵の息を漏らす。そら、まだ子どもって言っても、既に百代ちゃんのパンチは人体破壊パンチになっちまってるからな。

「ただ、私のこのムシヤクシヤした気持ちも本物だから」

ん？ おや？ おやおや？ これは良くない流れ。

「修二を本気で殴る。改めて、歯を食いしばれ、修二」

「それには僕も同意——！ やつちやえモモちや——ん！」

ちよ、ま、死——。

「最近、顔面が崩壊しかしてない気がする」

百代ちゃんは一発殴ればある程度すつきりしたらしい。小雪ちゃんはゲラゲラ笑い、ミサゴちゃんはドン引きしていた。容赦なく顔面崩壊させた百代ちゃんにか、それを見て笑う小雪ちゃんにか……いや、どっちにもか。

顔面陥没が得意芸みたいになるのはほんとに御免である。

「あなたたちって、いつもこうなの？」

「あ、はい。だいたいこんなですね。修二が痛い目を見てつてのがいつもの収まりどころです」

「収まってねえよ、俺の顔を見ろよ。このハゲ」

ミサゴちゃんの案内で映画村までやってきた。長屋のような建物が立ち並ぶ中、百代ちゃんと小雪ちゃんは華やかな町娘のような着物に着替えてはしゃいでいた。

準は袈裟を羽織つて坊主に、冬馬も着物を着て商家の跡取りみたいになってやがる。

「修二も似合ってるよ？ 顔はへこんでるけど」

「ありがとうよ。小雪ちゃん。ただ、一言多いからね？ 既に顔も心もへこんでるからね？」

浅葱色の羽織りを羽織った俺はさぞイケメンなのだろうに。百代ちゃんの鉄拳制裁のせいで、ギャグマンガのように顔が内側にめり込んでしまつてやがる。

毎度おにやのご遊びするたびにこうされるのなら流石に自重するか……？

ぐぐぐぐぐつとめり込んだ顔に力を込める。PON！ という音とともに顔が元に戻る。

「ふい、鼻の高さ変わってない？ ハンサムそのまま大丈夫？」

「大丈夫だよー。いつも通りハンサムハンサム」

「ありがとよ、小雪ちゃん。うっし、お前ら、からくり忍者屋敷に乗り込むぞ」

からくり屋敷にお化け屋敷、遊び場には事欠かない。そんな俺たちを、ミサゴちゃん

が引率者らしく後ろから見守っている。

「はしやぎすぎぎてはぐれないようにしなさいよー」

ミサゴちゃんも引率に慣れたのか、大人の余裕を取り戻していた。うんうん、仕事ができる女をずぶずぶに陥れるのもいいが、こうして凜とした姿も中々そそるもんだわ。

「んじゃ、て

めえら、RTAするか」

お化け屋敷を指さし、俺は他の奴らに歯を見せて笑う。前世というか、前の身体の頃から色んな体を動かすことは好きだったんだ。サイヤ人のような体になった今なら、小さなからくり屋敷程度一分切れるかもしれん。

「修二、RTAって何だ？」

「おん？ タイムアタックのことだよ、要するにお化け屋敷を一番短い時間でゴールで切れば勝ちって話だ」

「なるほどな」

百代ちゃんは若干顔が青ざめてる。お化け嫌いだったっけ、この子。まあ、どうせこの当地お化け屋敷だし、大丈夫だろ。

俺はこの判断を、数分後には後悔することとなった。

「きゃああああああああ!!!」

「…………ケバ」

俺たちは二人一組でお化け屋敷を巡ることにした。一人で行って味気なくゴールす

るより、なんか二人の方がいいかなって思ったからと言う適当な理由からだった。

厳正なぐーぱーの結果、俺と百代ちゃん、冬馬と準、小雪ちゃんとミサゴちゃんという三組に分かれた。この時点で、俺は神の作為に気づくべきだった。なあにが、怖がつてそんな百代ちゃんを怖がらせてやろうだよ、タイムアタックしろよ。

「きゃああああああああ!! お化けえええ!!」

「……ゴボ」

既に、俺は虫の息である。何がやばいつて、百代ちゃんが悲鳴を上げるたびに首を絞められる力が増していくことだ。最初の頃はタップしてたが、百代ちゃんは気付いてくれなかった。

このままではほんとに死んでしまう。

「……………はあ……………はあ……………ゴールか?」

「……………」

ようやくゴールか。なんとか耐えたか……。

「おい、修二？」

「けほ……げぼ……百代ちゃん、お前ぜつてえ二度とお化け屋敷に入るなよ。少なくとも、俺以外とは行くなよ」

「そ、そうか……そう言われるのは少し照れるな」

そういうこつちやねえよ、勘違いっ娘め。まあいい、俺が二度と行かなければいいか。一位は冬馬、準ペアだった。小雪ちゃんはマイペースだからな、ミサゴちゃんも急かすタイプじゃねえだろうし。

ミサゴちゃんおススメの京料理屋で夜を済ませて、ホテルに帰ったら、なんか釈迦堂が掘ねてた。なんでも、放っておかれてたのが気に入らなかつたらしい。

他のがきんちよたちはいい時間だったからもう部屋に戻らせて、俺とおっさんでホテルのロビーでだらけていた。

「いや知らんべ。おっさんも自分で楽しんでたんじゃねえか、酒の匂いがするぜ？」

「ま、そうなんだけどな。俺ってば一応引率役だったじゃねえか。それを忘れるつてどうなんだ？」

「いや、それこそ居酒屋巡りしてた自業自得じゃねえか。まあ、忘れてたのは俺が代わりの引率役見つけたつてのもあるけどよ」

「ああ？ 代わりだあ」

怪訝そうな顔をするおっさんは、そこで俺たちの後ろで様子を窺ってたミサゴちゃんに気づく。

「さつきからそこそこの手練れがちらちらと様子窺つてると思ってたが、なんだ、手が早すぎねえか？ お前小三だろう？」

「悪いね、顔がいいもんで、可愛い子は勝手に寄ってくるんだよ」

「ちよつと、明らかにあなたが迫ってたじゃない。それに酔わせてホテルに連れ込んだ

でしょ」

「あれれえ〜？ おつかしいなあ〜」

おとぼけてみるが、ミサゴちゃんは唇をひくつかせてるし、おっさんはまあそうだろうなとか言わんばかりに缶ビールを開けていた。

「釈迦堂刑部だ。ガキどもが世話になったな、いや……まあ、それくらいじゃ済まねえくらい迷惑かけちゃったみてえだが」

「……そうね……でも、釈迦堂刑部って、川神院の？」

「おん？ ミサゴちゃん、おっさんのこと知ってるのか？」

川神院ってそういや有名な道場だったか。その師範代とかいう微妙なボジだと思ってたが、意外とすげーおっさんなのか？

「ああ、そうだぜ。ま、今回はガキのお守に来るだけだけだな」

「お守してない件について。酒飲んでるだけじゃねえか、おっさん」

「うっせえ、京料理も一緒に味わってるんだよ」

ナチュラルに気弾飛ばすなし。弾いた手が痛えだろうが。

「改めまして、自己紹介を。松永ミサゴと言います」

「おう、釈迦堂刑部だ。よろしくな」

「んで、このあとどうするー？ ミサゴちゃんなんかおススメのお店とか行く？」

夜は大人の時間だ。人は時間に合わせた立ち振る舞いをしなきゃいけないからなあ。子どもの時間は終わりだ。

「お、いいねえ。このチビでも入店拒否されねえ店って知らねえか？ 松永さんよ」

「知ってるわけないじゃない……。そういう裏のお店は探せばあるかもしれないけれど、少なくとも私は知らないわよ」

「かかか、残念だったな、修二。ま、俺も今日は少し胃を休めてやるか」

ちくせう。まあ、いいさ、飲む打つ買うの飲むがダメになったただけだ。打つは今はいいとしてえ。買うなら今すぐにでもできるなあ。

「と、いうわけで、俺とミサゴちゃんは部屋に戻るわ。釈迦堂のおっさんもたまには早寝しろよなあ」

「ちよ……何が、というわけなのよ」

「おう、やりすぎんなよお……つたく、やっぱぜつてえ見た目通りじゃねえだろ」

聞こえてんぞー。まあいいや、おっさんは放つておいて、ミサゴちゃんの方が優先に決まってる。

まだ何か言っているミサゴちゃんの腕を引つ張つて、ホテルの部屋へと向かう。あくまでミサゴちゃんなら振り払える力で引つ張ってる、それこそ、少し力を籠めればほどけてしまうだろう。

部屋までのエレベーターの中で、俺は今日はどんなことをしようかワクワクが止まらない。

「ミサゴちゃんよ。俺あ、逃げるのなら追わないが、立ち止まるのなら引きずり込むぜ？」

「……どうせ、一度やつちやったのなら、二度も変わらないわよ」

だから、とミサゴちゃんは顔を伏せた。

「彼のことを、忘れさせて……」

第11話

S i d e : ミサゴ

気怠さによく知らない充足感の中、私は目を覚ました。見慣れない部屋の風景に、嗅ぎ慣れない臭いに包まれ、私は自分の体に寄りそう別の体温を感じる。

ああ、またやってしまった。そう思うが、私自身驚くほどに胸につかえるものは無かった。

昨日と今日、それだけで私は目の前で眠る少年に絆されてしまっていた。私が尻軽なのか、それとも彼の手管が優れているのかは分からない。ただ、私の中で少しずつ、この少年が住む領域を広げつつあった。

起きているときは真正の悪餓鬼を思わせる笑みも、心地よさそうに私の胸の中で眠る表情は年相応に見えた。それを見れば、私は自身の娘とほぼ年の変わらない子どもと一線を越えたことを自覚させる。

昨日まではそのことにひたすらの後悔しかなかった。だが、彼はそれも見透かしていたし、罪悪感を煽るようにして興奮へのスパイスへと変えていた。

知らず知らずのうちに、私は彼の身体に手を回していた。それは昨夜の名残だったの

か、僅かに残った理性が爪を突き立てることだけは止めさせた。

「ほんと、何かあるか分からないわね」

むずがるように漏らされた息が、私の胸を撫でた。それとともに私の腰へと手が回され、求められるように抱き寄せられた。

ああ、ダメだ。これはダメ。

彼は麻薬のようだ。ふとそう思ったが、我ながら的を得ているだろう。するりと心に入り込み、少しずつ大きくなり、気づいたころには手遅れになってしまっている。

私は久信くんを愛していた。

初めはその必死さに微笑ましさを覚え、次第にその仕事をするときの真剣な横顔を好きになって、燕ちゃんが生まれた時には、ずっと三人で幸せについて信じてて。もしかしたら四人に、五人に増えるかもなんて思ったりしていた。

私は満たされていたのだ。

しかし、久信くんが株で大失敗して借金を作った。それだけで私は彼から離れてし

まった。

最初は怒りでどうにかなりそうだった。私と燕ちゃんが居るのにと、もつとちやんと考えてよと、家名に泥を塗ったのと、どうして一言も言ってくれなかったのと。

怒りながらも、まだ愛はあった。愛していると云えた。

「でもなあ……」

だめだ。やっぱり上書きされてしまう。目の前の小さな男に、今までの久信くんの住んでいた場所が奪われていつている。そして、それを受け入れてしまっている。

久信くんへの愛が、冷めていくのを感じていた。

まどろっこしい前置きを抜きにして結論だけ言うなら、ミサゴちゃんは離婚届けを旦那に突きつけることにしたらしい。俺はてつきり、そこまでせずに別居する程度だと

思ってたが、ミサゴちゃんは思ってた以上に思い切りがいらしい。

「私に気がかりだったのは燕ちゃんだけよ」

そう何でもない風に言ってたミサゴちゃんであった。強がってたのは見え見えだったけど。

まあ、俺からすりゃあ、ミサゴちゃんと憂いなくヤレるようになるのは大歓迎だ。ただ、人妻と言う背徳感が無くなったのは惜しいがな。

ミサゴちゃんは親権の関係でごちやごちやするから、落ち着いたら連絡すると、駅まで見送りに来てくれた時に言ってた。うーむ、借金こさえてひーこら言ってる男親に親権取れるのかねえ、そのあたりの事情は詳しく知らんからミサゴちゃんを信じる（ハート）としか言えないが。

そんな大収穫の京都旅行から帰ってきた俺だったが、当然の如く始まった二学期をサボっていた。

隠れ家もみかどつちに抑えられ、親不孝通りでの遊び相手も大抵虐めすぎて誰も遊んでくれなくなった俺は、河川敷沿いにあるポロ屋に身を寄せていた。

なんでも、親が蒸発しちまって子ども四人だけで身を寄せ合って生活している家庭ら

しい。ローンや借金がないのが救いか？ まあ、どん底なのに変わりはねえか、そのパピーマミーもまっとうな社会人じゃなかったみてえだし。

「しかし、ボロ屋だけで生き残れないのがこの日本社会なのよねえ」

「ボロ屋って、言ってくれるじゃねーか、修二」

「あーん？ ボロ屋はボロ屋じゃねえかよ、えーんじえーる」

「その名で私を呼ぶんじゃねえ！」

げしげしとチビツインテが寝そべって漫画を呼んでる俺を蹴ってくる。鬱陶しくなった俺はその足を掴んで、もう片方の足も掴んで、股を広げる。

「ちよ、おま！ 修二！ 何する気だ！ やめ！ 変態！」

「ああん？ 俺様が気持ちよくマンガ読んでんのを邪魔してくれやがった野郎を気持ちよくしてやるんだよ」

天使の股間に足の裏を当て、俺は笑顔を見せてやる。にっこりと、目の前の名前が天使の奴より天使のような笑顔だ。

「おま……まさか……!!」

「かかつ」

電気あんまって、元は拷問の一つだったんだってな。まあ、一応は手加減してやるよ。せいぜい情けなく喘げや。

「ぎゃあああああああ!!!」

かかかつ、悲鳴が心地いいなあ、オイ。

「もく、天ちゃんをいじめちゃだめだよ、しゅうくん」

「うええくん、たつねえ」

「てへへろ」

日が落ちた頃に帰ってきた、将来が期待できるボデイの辰子に天使をいじめすぎてたのを怒られてしまった。まあ、部屋をアンモニア臭くさせてしまったのは悪かったと思う。ただ、最後の辺りには扉開きかけてたからいいじゃねえか。あと十分もありやあ堕ちてたぞ。

「悪かったよ、今度お菓子買ってきてやるから許してヒヤシンス」

「ぐす……一番高いのな……」

「わーい、どんなのかな」

「はいはい、高いのな、ピザポ●トな、辰子にはおっぱいプリンな」

辰子や、たんと食べておつきくなるんだよお。天使は……まあ、生きる、そなたは美しいよ、うん。

てか、お菓子で機嫌が直る子どもは、ほんとに楽でいい子で楽だねえ。

俺はまだぐずってる天使の口にポツキーを数本突っ込み、板垣宅を出る。

ポ口屋の外には天使や辰子たちの姉である亜巳が居た。待ち合わせたとおりの時間

に來ているあたり、長子としてしつかりしないとでも思つてんのかねえ？

「おう、待たせたな」

「時間通りだから問題はないよ。それで、修二、約束のものはあるんだろうね？」

「ああ、そういやそうだったな。はいよ」

俺は懷に温めていた茶封筒を亜巳に渡す。

中に入っているのは皆大好き諭吉さんが数十人。俺と亜巳はちよつとした契約をしている。

「確認させてもらうよ」

「別に枚数ちよろまかすようなせけえことはしねえよ」

俺の言葉を見無視して亜巳は慣れない様子で札束を数える。そんなところを見ると、まだこいつも中学生とかやっているはずの年齢であると思ひ出す。

健気だねえ、がきんちよたちのために学校まで行かなくなつちまつて。こんなナイスガイに金策を頼むんだから。

まあ、多分天使も辰子もホモガキも、中学を卒業したら働き出したりローグライクな人生を送り始めたりするだろうな。それくらいにはこいつらは仲がいい。笑わせてくれるぜ、ほんと、家族仲良く思い合って皆纏めて貧困な人生だ。

「金は確認できたよ。家には自由に入り浸りな、ただ、あまり派手に暴れたりするんじゃないよ」

「あいあい、まあ、置いてあるおもち天使やらで遊んだりはするがな」

「まったく、あの子らも随分とあんたに懐いちまって」

打てば響くからなあ、天使。辰子はむしろ包み込まれて窒息しそうになるから手が出しにくい。ホモ？ 簀巻きにして捨ててあるよ、今も。

「んじゃ、俺は帰るわ。またな」

「……」

亜巳は何か言いそうな顔をしていたが、俺はそれに気づかない振りをして背中を向ける。

家族、ねえ……。この街にや小雪ちゃんといい、葵紋シリーズといい、あとついでに九鬼ーズといい、まともな家庭はすくねえのか？ おい。

S i d e : 亜巳

私は小さくなっていくその背中から目が離せなかった。

修二と私らは付き合いが長い訳でもない、特別深い訳でもない。天や辰、竜はどうかは知らないが、少なくとも私はあの奇妙な子どもを信じている訳じゃなかった。

親不孝通りに出没する小さな悪魔。そんな噂を聞いた私の目の前に修二が現れたのはそれはそれは衝撃的だった。

帰ってきた自宅にわがもの顔で居座りシャワーまで浴びてのんびりくつろいでいたのだから。

「……ふい」

その時のことを思い出して、私はくすりと笑いを零してしまふ。ただの不法侵入者かと思つたら、茫然としていた私に契約を持ち掛けてきたのだから驚きだ。

この家を自由に使う代わりに、お金を渡す。修二が提示してきたのは、金銭に困窮していた私にとつては渡りに船だった。

孤児院だとか、施設だとか、そういった所に行けば、私たちはどうなるか分からない。私は、私たち兄妹姉弟を離れ離れにさせるわけにはいかない。どうせまともな人生なんてもう送れないんだ、それなら、私は辰、天、竜と一緒に居る人生がいい。それで、少しでもあの子たちを幸せにしてやれれば、それでいい。

「……」

修二がうちに入り浸るようになり、天や辰も楽しそうだし、竜も修二のことを慕っていることは確かだ。うん……慕っている。ごめん、修二。

とにかく、我が家が明るさを取り戻したのは確かだ。

だからこそ、私は感じる。

「修二、あんたは……どうして、そんなに寂しそうなんだい」

顔には絶対に出さない、雰囲気にも絶対に出さない。いつも笑っている、いつも楽しんでる。

常に我が世の春、この世界は自分を中心に回って疑がっていない。修二はそんな奴だ。

短い付き合いだが、その破天荒っぷりは十分に思い知らされている。

でも、何故か、そう感じた。修二は乾いている。物足りない寂しさを常に味わっている。

おん？　なんか背筋というか首筋というか、その辺りがムズムズする。

「どうしたんだ？　修二、痒いのにそこをかけないような顔をして」
「すつげー的確な例えをありがとよ、おっさん。なんつーかな、誰かが俺のことえらい勘違いしさらしてくれやがってる気がするんだわ」

板垣家を出た後、俺は川神院の釈迦堂のおっさんのところに転がり込んでいた。おっ

さんは酒瓶さえ持つていけば快くあげてくれるから楽でいい。

「あく、なんか無性に歌を歌いたくなってきやがった」

「てめえ歌なんか歌えるのか？ わりがそんなガラには見えねえな」

「バンドのヘルプのバイトもしてたしな。まあ、メンバーの女子を食い散らかして長続きはしなかつたが」

「お前さんは、どこでも女を食いものにしてないと生きていけねえのか？」

ま、そうなんだろうねえ。女は駄菓子つて言う黄金の君ほどじゃねえが、俺にとつちやそういうのが必要なんだろうよ。

「少なくとも、セックス依存症じゃねえから大丈夫だろ。ただの女好きだよ。女好き」

「十分アウトだろうよ。ほれ、一本明けたから次出せ次」

「はいはい、明日も稽古なんだろ。飲みすぎんなよ。俺は俺の心が赴くままに生きてるだけだよ」

「心というか股間に素直に、だろうが」

ハハッ、なんも言い返せねえ。

かわいい子とにやんにやんしたい、綺麗な美人ともゆもにゆしたい。健全な男なら誰でもそうだろう？

人生楽しく生きたもん勝ち、人間としての節度を守ってりやいいんだよ。

「ま、人生往々にしてうまく行かないこともあるさね」

例えばミサゴちゃんの旦那のように株に失敗して嫁に愛想尽かされるとかな。てか、マジでナンデ株なんて始めたんだろ。俺も身を滅ぼすくらいのギャンブルとか数えるくらいしかしてねえんだが。

「ただまあ、百代のことは責任取れよ？ 破局がイコールで川神院全部が敵になるってことだからな」

「ん？ 悪いが、俺は一度も女と別れたことなんかねえぞ」
「ん？」

こんなになつちまつたから会いに行けないだけだが、俺は今も一人も忘れちゃいない。北欧出身だとか言つてた銀髪な女教師も、オカルト研究会とか言う謎の部の部長

も、ガールズバンドでボーカルをしていた赤いメッシュの子も、おめめがしいたけの中学生も、他にもたくさんいる子たちも。

俺は今も愛している。俺は今も想っている。相手が忘れようと、俺を捨てようと、憎もうと、殺そうとしても。

「俺は永遠に愛してるってな。それが俺なりの決まりだよ。愛は多くて浮気性だがな」「冗談か本気が分かりにきいこと言いやがるな。もし本気だしたらそうとうカッコついで狂ったこと言ってるやがるな」

「男なんてカッコつけてなんぼだるろお？ そう決めたんだよ、俺が真剣に生きるためにな。情が多くても、浮気者と罵られても、愛を貫くってな」

「ぶっ！ 愛を貫く……！ はら、いた……！」

笑ってんじゃねえぞ、濁酒飲まずぞ。自身でも恥ずかしいと思ってるんだからなあ！

こらあ！

やっぱ酒は碌なもんじゃねえな！ 旨いが！

第12話

そりやあまあさ、今は夏真つ盛りで、花火の季節じゃん？　でもさ、これは違うともんだよ。

確かに似たような物だけどさ、どっちも派手だし、おつきな音がするし。けどこっちはきたねえ花火にしかならねえんだよ、夜空を照らす華には成れねえんだよ。

というか、こんなときにこそ居るべき命はどこ言つてやがるんだよ！　ああ!?

みかどつちとドバイだと!?　ふざけんな！　あの髭全部もぎつてケツに全部植え付けてやるぞ！　……いや、ケツはきたねえから髭ごと頭燃やしてやる。お友達みたいなぴんぴかりんの頭にしてやる。

ああ！　くそが！　やつてやるよ馬鹿野郎が！　ぜつてえ黒幕には復讐してやるかな。

「見てろよ！　英雄！　これが俺の誕生日プレゼントだ!!　目に焼き付けろよ！」

「修二!?　お前何を！」

俺は全力で跳ぶ。ガラスの割れる音、英雄が息を飲む音、全てが鮮明に聞こえる。

脳内麻薬がドバドバ出ているのを感じる。世界がスローに、ふわりとした浮遊感すらも支配できるような万能感が俺を支配する。

「そらあああああ!!」

全力全開、右足を振り下ろす。すさまじい音と共に、宙に投げ出されたからだがか上へと浮き上がる。そのまま左、右と足を振り下ろす。空気を音を越えた速度で踏みしめることで、その反発により空を駆ける。

人類は空を飛べるのだと、身を以て証明してしまった。だが高さがまだ足りない、残り時間は十秒もない。

もつと、もつとだ。先のことなんて知ったことか、身を燃やせ。どうぞこの後爆散するんだ。派手に行こうぜ。

「たあああああああまあああああああやあああああああああ!!」

俺は夜空を照らす花火となった。

残暑も既に終わり、それどころか冬も春も過ぎ去っていつの間にか俺は小学四年生と
言う新たなステージに立っていた。俺は川神院に入り浸ったり、板垣家に入り浸った
り、小雪ちゃんたちと遊んだり、たまに一子ちゃんたちとも遊んだり、それなりに充実
した日々だった。

唯一問題になったのが、ミサゴちゃんのことだろう。といか、九鬼に就職してた。ビ
ビるわ、九鬼の収容所（俺はそう呼んでいる）に帰ったらメイド服でいやがるんだもの。

つい、

「無理しなくて……ええんやで、ミサゴちゃん」

と優しい声をかけて半殺しにされてしまった。いやね、綺麗だし似合ってるんだけど、あふれ出るコスプレ感についてた言葉は仕方ない。てか、九鬼が従者の服装をメイド服と執事服で統一してるのが悪い。以前帝つちにその理由を聞いたら、どつかの代の九鬼当主の趣味らしい。アホかな？

まあ、しつぽりと愉しませてもらっただけ。

九鬼の馬鹿さ加減と言えば、まだまだあるが、ひとまずは、俺の目の前に広がる光景だろう。

「たかが子どもの誕生日にこんだけ盛大なパーティーをするあたり、金のあるアホってすげーなーって思うわ」

俺は立ち並ぶ豪華な料理や、テレビで見たことある有名人や政治家が居るパーティー会場に居た。

本日、八月二日は英雄の誕生日だったらしく、数日前に俺に招待状が送られてきた。川神から離れて東京のどっか有名なホテルを一晚全部丸ごと貸切るとかどんだけだよ。せつかく冬馬達が誕生日ばーちーを考えてやってたのによお、俺の練習したヨガフレイムを見せてやろうと思つてたのによお。

「まあ、来れなかった冬馬たちにもお土産くらいは持つて行つてやるか」

俺は立ち並ぶ料理をタツパーに詰め込む、パーティーの参列者はそれに眉を顰めるが知るかアホ。こちとら大家族なんじゃぞ。

「修二！ お前も来てくれたか！」

「おん？ 英雄か、相変わらず眩しい格好してんな、今日は三割り増しつてか？」

いつも眩しい格好しているが、今日はいつもよりも眩しい恰好をしている英雄が俺の元へやってきた。立食パーティーでタツパー詰めしている子どもは目立つのか、ぽつかりと空洞のように人が避けていた。

おかげで好きな料理が取れるから別にいいんだが、少し悲しいぜ。

「誕生日おめでとうさん、つたく、こんな派手なパーティーがあるなら小雪ちゃんや冬馬達も誘ってやればよかったのによ」

「なに、あいつらにはこういった場はあまり好まないだろうと思ってな。後日、ひっそりとしたパーティーに招待するつもりだったのだ」

ほーん、意外と気が利くんだな。まあ、誘われなかったことがショックだったみたいだから、ちゃんとそのことを言えてれば満点だったけどな。

「それならいいが、てか、それなら俺は何で呼んだし」

「修二は父上が呼んでおけと言ったのだ。なんでも勘がそう冪いたらしい」
「……………」

虫の知らせだろうか、すさまじく嫌な予感が背筋をよぎったんだが。具体的には、このパーティー会場にいる全員が死ぬようなレベルの悪い予感。

「そーいや、そのみかどつちとかはどうしたんよ。爺さんがいねえのは気配で分かるが」

爺に虐められすぎたせいで、ナチュラルに気配とか読めるようにはなったのは、数少ない爺ズブートキャンプの良かった点だな。

「父上はドバイに出張だ。母上もそれについて行っている。ヒュームは護衛だな」
「さいですか、まあ、忙しそうだしな」

この様子だと、姉貴も居なさそうだな。揚羽ちゃんは一回声をかけたらそのままバトル漫画になったから、気を見て声をかける必要があるのは難点だ。武人然としてるけど、意外と乙女だから可愛いんだけどな。

「なんだ、寂しかったのか？ 英雄ちゃんよ」

「ふむ、正直言えばそうなのだろうな。父上や姉上に祝って欲しいとは思う」
「あら、案外素直なのな。てつきり、九鬼の者として寂しいなど言えないとか言うと思つてたのに」

少なくとも、初めにあったところに英雄ならそう言いそうなのに。

「ふっ、お前に取り繕ったところで意味もあるまい。ここに父上や姉上が居なくとも、後でお前たちも祝つてくれるのだろう?」

「ち、勤がよくなりやがって。生意気になったな」

「フハハハハ!! 勤がよくなったのなら少しは父上に近づけたのだろう!」

ちくしようめ、見透かすのは好きだが、見透かされるのは嫌いなんだよ。

まあいい、俺のヨガフレイムで英雄の金ぴかな服を炙って鬱憤を晴らしてやる。

「ん?」

英雄はあいさつ回りに忙しいとのこと、早々にどっかに行ってしまった。あいさつ回りに忙しい誕生日パーティーとかある意味あんのか？ まあ、上流階級には俺の知らないルールがあるんだろうさ、大変そうなおかつた。

そんな宴もたけなわなパーティーの中で、ふとなんか臭った。誰かが屁をこいたのかとも思ったが、どうにも違う。嗅ぎ慣れた訳じゃないが、知ってる臭い。

「火薬の香りがするって、おかしいよなあ？　おかしいよ」

臭いの元はガタイのいい男。その男を見た瞬間、俺はほいほいとこんなところに来たことを呪った。

おいおい、おいおいおいおい、ふざけんじゃねえぞ、ラブコメだつってんだろ。ジャンル違いが出しやばってんじゃねえぞ。

死の雰囲気と言ううべきか、なんかよく分からんが、確実にその男がただのぱーちーに呼ばれた客なんかじゃないのは分かる。そして、人をたくさんぶつ殺していることも。

「ああくそが、みかどつちめ、俺を呼んだのはこのためか。どうせなら爺を置いてけつてんだ」

この会場にも九鬼の従者は居るし、その他にもそこそできそうな雰囲気の奴らが護衛のように張ってた。しかし、目の前の男は少なくとも川神院のジャッキーチェンもどきくらいには強い。食らいつくことはできても殺されて終わりだろう。

九鬼がデカい分恨みつらみもたくさんあるだろうさ、そのあたりは察せられるが、ここまで門だとは思ってなかったぞ。

「はあ、やるしかねえか」

一回こっつきりくらいならバトル漫画展開もいいだろう。そもそも、バトル漫画嫌いじゃねえしな。

殺される前に殺す。少なくとも、生ぬるいやり方で渡り合える奴じゃねぜ。

「おい、ボーイ、度数の高い酒全部貰うぜ」

「あ、こら、君未成年だろ」

いいじゃねえか、どうせこつからはR18にしたいくらいの展開なんだからな。

「ああああああ!! 手が滑ったああああ!!」

世界有数の企業である九鬼財閥。その御曹司である九鬼英雄の誕生日会には、多様な業界から多くの人物が足を運ぶ。九鬼という巨大な企業と繋がりを持ちたい者、九鬼の次代を担う後継者の一人を見定めに来た者、純粹に呼ばれたからただ飯を喰らいに来た者。

当然、そのパーティーには万が一に備えての護衛が配備される。九鬼の従者部隊、政府公安、フリーランスの傭兵。この場に居る著名人たちを守るために、彼らは命を賭ける覚悟をして備えていた。それが任務であり、依頼であり、自らのすべきことであるからだ。

そんな彼らでも、それは唐突だった。

一人の少年が、突然ボーイの持っていたグラスを床にぶちまけたのだ。それも、コッ

プ一杯とかではない、まずはホテルのボーイがトレイに持っていたものをすべて、次は周りにあったボトルをカチ割りながら、パーティ会場を汚していく。

その少年は初めから周りに忌避の眼で見られていた。明らかに平凡な服装、まるで友だちの家にでも行くかのようないでたちであり、パーティが始まった後には料理をタッパーに積み始めるのだ。早々に九鬼英雄が声をかけていなければ、つまみ出されていただろう。

「いつけねえ、やっちゃまったなあ」

まさに悪辣と言う笑みを浮かべながら、修二はポケットに手を入れる。そんな少年へ、ホテルの従業員たちは顔を憤怒に歪めて近づく。普通の子どもなら、そのままつまみ出されておしまい。パーティを仕切り直すために、従業員たちは急いでカーペットを取り換えることとなるだろう。

「ああああ！　また手が滑ったあ！　邪魔すんじやねえ！」

しかし、修二は掴みかかってきたホテルの従業員を投げ飛ばした。そのままドアは壊れ、従業員の姿は部屋の外へと見えなくなる。

その光景にパーティ会場は静寂に包み込まれる。

「あーあ。くそが、こんなことのために用意してたんじゃねえんだぞ。ヨガフレイムしたかっただけなんだけどねえ」

あまりにも無造作に、あまりにも自然に、修二は手の中からそれを放り投げる。故に、それには誰も反応できなかつた。護衛として配備されていた従者たちも、依頼金目当てで紛れ込んだ護衛の傭兵も、このパーティ会場そのものを人質にしようとしていた暗殺者も。

撒き散らされたアルコールをたつぷりと吸ったカーペットにソレは放り投げられた。瞬間、部屋の中を熱が撫でる。パーティ会場が、突如として立ち上った炎で奥と手前に二分にされる。

少年が投げ落としたものがライターと気づけたのは、壁越えと呼ばれる実力者である暗殺者だけであつた。

「そんじゃま、次はお前じゃこらあー！」

そのまま、弾丸のように、修二は飛び出す。めがけるは一般人を装った殺人者であり、一瞬たりとも相手のペースを取らせるつもりは無かった。

「っ！」

突然子どもが奇行に走り、その動揺で僅かに、コンマ一秒以下だが反応が遅れてしまった。暗殺者は飛んできた修二に四撃、拳打を打ち込むが、会場の奥へと炎の向こう側へと連れていかれてしまう。

「いつてえなあ！ オイ！」

並みの武術家なら即死する拳撃に、悪態をつくだけで我慢した修二は、お返しとばかりに腹へと拳を振るう。

暗殺者は交差した腕で受け止め、子どもとは思えないその重さに眉をひそめる。その衝撃にカーペットを逆立てながら、後ろへと後退る。

「何者だ、貴様」

「答える必要も、聞く必要もねえなあ！　ぐらあー！」

まるでチンピラのように、修二は暗殺者を蹴りつける。それを突き出した拳で受け止め、暗殺者は素早く思考を切り替え、修二を殺すことにする。

ここに来てようやく、パーティー会場が動き出す。悲鳴に怒号が入り混じり、多くのものが会場の外へと逃げ出す。修司の突然の凶行に啞然としていた英雄も、真つ先に護衛たちによって連れ出された。

「やれやれ、計画が台無しだ。やってくれるな」

「そら残念だったな。俺はさいつこうな気分だよ！　余計な手間増やしてくれやがってよお!!」

暗殺者の姿がブレ、拳が、脚が、修二の体へと叩き込まれるが、修二はさほど堪えた様子もなく、反撃をする。男は打撃の効果が薄いと分かれば、その拳を開き、指先を伸ばす。より殺傷能力を高めるために、より人体を破壊するのに適した形に。

「シッ!!」

殺人者は岩石すら砕く威力を持つ貫手を、修二の喉へとめがけて打ち込む。流石に修二も身を振り、首をずらすことでそれを避ける。

効果ありと見た男は、続けて貫手を繰り出す。

その死に対して死中に活を求めるがごとく、修二は致死の一撃に晒されながらも隙を伺った。

「らあー」

何回か貫手が掠ったが、修二はギリギリで避け伸びきった腕を掴み、肘へと目掛けて膝を蹴り上げる。ボキリと確かな手応えとともに、暗殺者の腕はあるべき方向とは逆へと曲がる。

「ぬ……」

眉をわずかに顰めながら、殺人者は修二の鳩尾へと拳を叩き込む。修二は今までと同じように受け止め、そして吹き飛ばされる。

室内に並べられたテーブルを巻き込み、壁を半壊させながらも、修二は何事もなかったかのように立ち上がる。

「かーぺっ。腕を折ってやったつのに、元気な奴だな、おい」
「化け物が……どういいう理屈で平然としている」

暗殺者は修二の戦い方を観察していた。

決定的な致命傷となる一撃以外、全て攻撃を受けながら反撃をしてきているのだ。

手応えはある、しかし、ダメージが蓄積した様子は無かった。まるで、攻撃を与えたそばから回復でもしているかのような。

「そろそろ種もバレるだろうし、ケリをつけたいわな」

「そうだな。貴様を一撃で殺せば簡単に終わりそうだ」

相手が一撃必殺のみを避けるのならば、それを叩き込めば良い。それを為すための方法が武術なのだから。

暗殺者は腰を落とし、折れた腕を盾にするように構える。修二も、ここで初めて構え

を取る。

「ふっ！」

「らあ！」

暗殺者は全力の一撃を、必殺の意志を持って振るう。修司は元より防御などと言う殊勝なことは考えておらず、殺人者の攻撃をその上から蹂躪するつもりであった。

両者は同時に駆け、拳を振るう。ぶつかり合う拳は、拮抗し、周囲のものを吹き飛ばす。部屋に広がっていた炎すらも、拳同士の巻き起こした衝撃波で消え去ってしまった。

「……」

「……」

お互いに残心の構えのまま、一拍が経つ。

そして、崩れ落ちたのは暗殺者であった。拳は砕け、見るに堪えない有様となつてしまつていた。修二の拳も、同じような有様であつたが、しっかりと両足で立っていた。

「モモちゃんに無双正拳突きを習つといて良かったぜ。死ぬかと思ったわ」

あー終わり終わりと、修二は気絶した暗殺者の服をまさぐる。男の懐には、あからさまなスイッチのようなものがついた箱が入っていた。

「さて、とりあえずこれをどうにかするか……ん？」

修二は手に取ったそれに、残り時間のようなものが表示されているのに気づいた。そして、それが減っていることにも。

よくある時限爆弾のスイッチにしか見えないそれは、数秒修二がフリーズしてしまう間にもその数字を減らしていく。

しかも、男の体をまさぐれば、いかにも爆発しそうな包みが出てきやがった。

「おいおいおい、いつの間に押してくれやがってたんだ！」

残り時間は一分を切っていた。こうなればいつの間にスイッチを押したのだとか、こ

いつからした臭いはこれが正体かよとか、そんな疑問や感想はどこぞへと消し飛んでしまおう。

爆弾の規模や避難状況など分からない。実行犯である暗殺者は夢の中もしくは三途の川の向こう側。

少ない残り時間、目の前爆弾を処理する。

「あああああ！ どちくしよめ！ やるよ、やりやあいんだろ！」

絶対帝に一撃かます。そう心に決めた修二であった。

第13話

「うおおおおお！ 修二いいい！ お前つて奴は、お前つて奴はあああああ！」

目が覚めた俺が一番初めに見たのは、ギンギラギンギラくつそ眩しい上にむっさ暑苦しい泣き顔だった。

おいこら、喧しいんじや。こちとら体張った一発芸かまして無茶苦茶痛かったつてのによ。

「せめて、そこはよお。小雪ちゃんかモモちゃんだろうがよお」

せめて美少女か美女を連れてこいつてんだ。

何が悲しくてむさい男の泣き顔で目え覚さなくちやならねえんだ。この世界バグつてんのか？

「修二！ 目を覚めたのか！」

「おめえがギャンギャン喧しいからだよ。あーいって、爆発すんのは初めてだが、二度としねえからな」

ネタならともかく、リアルで汚ねえ花火だは割に合わねえ。

今何時だ？　ろくに首も回らねえから時計見えねえ。

「英雄、あれからどうなった？」

「お前が爆発した後か？　あの爆発で怪我をしたものはお前のおかげでゼロだ。ただホテルの損害や、揉み合いになって転んだ者は居たがな」

「重畳重畳。あのヒットマンはどうなった？　改めてお礼参りしてやろうと思ってるんだが」

せつかく旨いもんたらふく食って、ホテルの部屋を取ってるんだってナンパしようと思ってたのによお。全部台無しにしくさりやがって。

「ふむ……奴か……」

英雄の顔が言いにくそうに渋くなる。

「なんだ、自決でもしたか？ あのおっさん」

「……その通りだ。九鬼の部隊が捕獲しようとしたら、な。奥歯に毒を仕込んでいたよ
うだ」

「まじかよ。ガチ勢怖いな」

まあ、元々自爆用の爆弾持ってたしな、情報をゲロるくらいなら死ぬか。

「なあんか、マジでジャンル違う世界に来ちまったなあ」

「む？ どういう事だ、修二」

「何でもねえよ。てか、小雪ちゃん達には今回のことは黙っとけよ、流石に刺激が強すぎるわ」

R18を教え込む気は満々だが、後ろにGやらはつけちやならんからねえ。モモちゃんはどうなんだろ、川神院って絶対裏社会に知られてはいいそうな感じよね。

めんどくせえなあ、前の俺はバイトしてヒモして女の子と楽しむだけの優雅な生活

だったってのによ。

「しゃあねえな、そのうち何とかすつか。とりあえず英雄、俺の診断結果とかがつてある？
割と思ったより重傷っぽいんだけど」

「おお、そうだったな。あまりにも普通に話してたから忘れてたぞ」

「正直身体の節々がいてえし、右腕に至つちや感覚ねえんだよ」

「というか修二、右腕が吹き飛んだのだぞ」

は？ ま？

「いやいやいやいや、待て待て。確かに右腕の感覚無いけどさあ。そんな、隻腕になつて
るなんて……マジで無くなつてるんですけどおおおお!!」

お、俺の腕え!! 肘から先が無いんですけどお！

「俺のゴールデンフィンガーが無くなるとか世界の損失だぞ!! おい英雄! どうなつ
てやがる!? 俺の腕どこに行きやがった!」

「落ち着け！ 腕については医者からの言付けがあるのだ！」

「ああ!? どうせおてて無くて辛くても頑張れとかだろぅがよお!? そういうありふれすぎて、糞の掃溜に捨てられてるような台詞聞きたかねえんだよ！」

「そうではない！ 貴様の新しい腕が少しづつ生えてきているのだ！ まるでエイリアンみたいでキモツ、と言っていたのだ！」

「だあれがエイリアンじゃごらあ！ テメエの脳髓、プレデターよろしく飾ってやろうかああん!？」

あん？ てか、生えてきてるの？ マジで？

「……………俺って人間なのかな」

「正直エイリアンと言われても、我は納得してしまっぞ。それくらいにお前は酷い状態だったのだ」

英雄が言うには片腕は消し飛んで、右半身のほとんどは炭化、脳味噌もシェイカーでかき混ぜたような有様だったらしい。

どんな名医も匙を砲丸投げするくらいだったらしいが、病院に運ばれた頃には命に別

状がないレベルにまで自己再生してた上に、右腕の断面もうねうねしてたとのことだ。

「こわっ、きもっ」

「その場に居合わせたほとんどの医療関係者が、今のお前のような反応をしていたぞ」
「そりやあエイリアンを疑うわなあ、誰だつて疑う。俺も疑う」

まあ、超人ボデイとしか俺にも分からんしな。

「ところでよお、英雄、さっきから入り口に待機してるそいつ、誰だ？」
「むっ..」

俺が大声で叫んだ時に気づいたが、一人、扉の前でこちらを窺うように佇んでいる。
上手い具合に気配を隠してたが、俺のヒステリックボイスに反応してビビったな。

「何者だ！ 姿を現せい！」

英雄が喝と声を張り上げる。うるせーなあ、もちつと音量落とせや、こちとら怪我人

だぞ。

「申し訳ありません、立ち聞きするつもりはなかったのですが、お邪魔するわけにもいかず……」

扉を開けて姿を現したのは、若い女だ。ウエイトレスの服を着てるが、所々焦げてしまっている。

……ふむ、胸は並だが、そそる目をしておるな。

「80点！ いや、85点をやろう！」

「お、おう……あ、いや、はい、ありがとうございます？」

「んで、どこの誰よ。追加の刺客って訳じゃあるまいて」

もしそうだったら、鬼畜略奪ルートに入るが。尊厳という尊厳を俺のジョイスティックで蹂躪してやるぞい。

「ふむ、確か九鬼が護衛で雇った傭兵だったな。名前は……確か忍足あずみ」

「ほんほん、あずみちゃんねえ。どしたのよ、見ての通りあのバトルとかの苦情は受け付けられないんだけどさ」

包帯ぐるぐる巻きの、肘から先がない右腕をプラプラさせる。

あれかねえ、仕事のお株を奪った形だし、逆恨みかな。

「ち、ちげ……違います。礼を言いに来ました。織原修二、あなたのおかげで、私たちは来客たちを守れたんだ」

「おん、その一言のためだけに待機してたんか、律儀なやつちゃんあ」

「おお、そうであったか！ ならば入れ入れ！」

「は、はい」

英雄があずみちゃんを部屋に招き入れると、あずみちゃんは恐る恐ると言った感じが入ってきた。

「あ、そうだ、あずみちゃん、英雄はともかく、俺には敬語とかはいいからな。無理して感ばりばりあるし」

「……慣れないことするもんじゃねえな。ガキに気を遣われるなんて」

「かかか、猫被ってる女の子を愛でるのもいいが、やっぱ素直が一番だべ」

そうやって俺が笑うと、あずみちゃんは少し肩の力が抜ける。言っちゃ悪いが、あずみちゃんはアウトロー側の人間だろうし、かたっ苦しいのは苦手なんだろ。

「とりあえず、改めて礼を言わせてもらうよ。あんたがいて助かった」

「あいあいどうも、俺も自己防衛しなきゃならんかったしな。ま、それでこの様だから格好はつかねえが」

しばらくはミサゴちゃんに看病してもらおっかなあー。あんなところやこんなところまでお世話させるのも楽しみだ。

「そ、その傷のことなんだがよ」

「おん?」

「むっ」

あずみちゃんは言いにくそうに、まるで告白する中学生のように、もじもじしながら、

「あ、あたいに看病させてくれ！ あんたの右腕の代わりにならせてくれ！」

おんおん……あつ、ふーん。

こいつあ、鴨がネギ背負ってやって来たな。美味しくお食べと、天が囁いてやがる。

一週間が経ち、俺の右腕は、手首の手前あたりまで再生した。日に日に伸びる腕に、俺を含めた皆が気味悪がった。

小雪ちゃんたちには、一週間山籠りしていると英雄に説明させたから、しばらく姿を見ていない。

そんな、右腕が不自由な生活だったが、全然困る事はなかった。

「あずみちちゃん、あーんで食べさせてー」

「ああん!? それくらいテメエでしろよ! スプーンだから出来るだろうが!」

あずみちちゃんの右腕の代わりになる宣言から、俺は一晚であずみちちゃんを看病と称して食べとった。右腕は不自由でも、股間の腕は万全だったからね。

いやあ、やつぱりあずみちちゃん、俺に惚れてましたなあ。チヨロい、チヨロすぎるよあずみちちゃん。

にやんにやんしながら聞き出したが、パーティ会場で変な子供が居ると思ってたなら、身を挺して来客たちを庇った姿にときめいたらしい。

あつ、ふーん。となったが、それはそれ。チヨロインと呼ぶにふさわしいチヨロさだった、俺の目に狂いは無かった。

「チツ、しようがねえな。ほら、口開けろ」

あずみちちゃん、なんだかんだと言いながら甘やかしてくるからな!

「あーん。うまうま、病院食って味気ねえと思ってたが、意外といけるもんだなあ」
「そうかよ……つたく、甘えたがりかよ。ほら、次は何を食いてえ？」

甘やかすの好きな癖に！ ダメ男製造機の類でしょ！ あずみちゃん！

「あむあむ、ところであずみちゃん、九鬼に就職したってマジ？」

「ん？ ああ、元々傭兵してたのも金になるからだったからな。九鬼の従者部隊の方が給料良かったんだよ」

「ほーん、前の職場に知り合いとか居なかったの？」

「あー、まあ、世話になった人も居たけど、そこまですら無かったしな」

こ、こやつ、俺を追っかけて来やがってる。転職するって中々やりおる。

……まあ、ミサゴちゃんも離婚後追っかけて来たし、大概か。

「けふ、こっつそさん。そろそろ手首も再生するかな」

もう右腕には包帯を巻いていない。正直右腕以外は完治してるし、やりたかないが、戦闘もやろうと思えばできる。ほんと、したかねえが。

「ほんと、どういう身体してたら右腕が生えるんだよ。ありえねえだろ」
「びつくりだよねー」

とりあえず、右腕をサイコガンにする必要はなかったから良かった。あれはあれでカッコいいが、全身タイツで生活するのは流石にハードルが高すぎる。

「九鬼の従者部隊になるってことは、俺の腕が治っても俺の側に居るってことでいいのかな？ あずみちゃんよ」

「な！ それとこれとは別だぞ！ 単に九鬼の金払いがいいからだよ！」

まあまたあ、照れちゃってえ、このチヨロインめえ。

てか、この世界、チヨロイン多くね？ まあ、いいけどさ。

「俺、完全復活！」

汚ねえ花火事件から二週間、俺の右腕は元どおりに完治した。快気祝いにあずみちゃんにゴールデンフィンガーを喰らわしたから、性能実験も万全だ。

そんな俺は、久々に小雪ちゃんたちとのコミユを深めることにした。場所はいつもの河原、小雪ちゃんにモモちゃん、あとは冬馬と準に英雄というイツメンだ。

「んなわけで、てめえら残り少ねえ夏休み、遊び倒すぞ！」

「おー！」

あと一週間で切った夏休み、地元の夏祭りはもう全部終わっちゃったし、浜辺に海水

浴か？ 山登りでもいいな。

「うっし、山に登つぞ。確かモモチちゃんの家の裏、山つて言つてたよな」

「ああ、山を登るつて、何するんだ？」

「山菜狩りでもすつかねえ。夏の山には恵みが一杯だぜ」

タケノコとかいいねえ。炊き込みご飯にして、ほつくほくの炊き立てを山の木漏れ日の中でかつ喰らうとか。

フキの佃煮もいいなお。お、こうなりやもう、山行つて山菜パーティするしかねえな。

「修二、山菜つて、修二が料理するの？」

「おうさ、一時期イクメンを目指した時期があつたからな。こごみえても有名料理店でバイトしてたこともあるんだぜ」

「へえ、修二は料理もできるのですか。本当に多才ですね」

おうおう、冬馬や、もつと褒めるがいい。

「ふむ、修二よ。山狩りならば、九鬼が所有している山があるが、どうする?」
「あー、小雪ちゃんたちも居るし、そっちの方がいいかあ? だが、ぜってえ従者部隊とかが付いてくるんじゃないかねえの?」

邪魔くせレベルでまとわりついてくるんだよなあ、九鬼の従者部隊つて。忠誠心が高すぎるのなんの。

「そうだな、ミサゴとあずみを呼ぶとしよう。それならば修二も嫌ではあるまい」
「あー、まあ、そうだな。二人なら大丈夫だろ」

なーんか、女で囲っとけばいいみたいに思われるのもアレだなあ。いやまあ、俺への対処としちゃあ合ってるんだけどもよ。

「ま、いいや。んじゃ英雄、準備頼むわ」

「ああ! 任せてくれ」

英雄が道具やら何やらを、用意してくれるからいいとして。

「なあなあ修二」

モモちゃんがニコニコと俺の方へとやって来た。その後ろには小雪ちゃんも居る。

「あずみって誰だ」

「誰だー？」

だから、目からハイライト消すのやめーや。

第14話

山でバーベキューをしたら山火事になって大惨事になりかけたり、いつぞやの暗殺者のお代わりが今度は帝のところに襲撃に来たり、そんなこんながあつて、いつの間にか、俺は小学五年生へと進級していた。

ぶっちゃけ、小四だろうが、小五だろうが、俺からしたら大差ない。せいぜいAAカッブがAカッブになつたくらいだ。

ちなみに百ちゃんやCで小雪ちゃんはBだ。

最近の子はいいもんくつてやがんなあ。

今日も今日とて、ヒュームの爺は帝と一緒に海外に飛んでつてる。

そして、俺はその間の監督者として川神院に預けられていた。そろそろ独り立ちさせてもらつてもいいんじゃないっすかねえ。

まじ、俺の今の身体じゃ、保護者が必要なのはわかるけどよお……。

何が悲しゆうて、スパルタガチ勢の群れに放りこまれにやならんのだ。

まあ、釈迦堂のおっさんや鉄心の爺さんはそれぞれ酒やエロ本を与えてれば、それなりに便宜を図ってくれる。だあがしかし、あのジャツキーもどきは真面目に鍛錬しない

とネチネチうるさいし、それ以上にしつこいのが一人居てねえ。

「おーい、修二。試合しようぜ」

「なあ、百ちゃん。君は美少女なんだから、少し落ち着いたほうがいいじゃねえかねえ？
少なくとも、俺は試合よりもいちやいちやのほうが有意義だと思うんだよネえ？」

学校も休みだったし、川神院の割り当てられてた一室でゴロゴロしてたら、この欲求不満の塊が、四六時中バトル漫画の世界に俺をいざなつてやろうとしてくれやがる。

だーかーらー、俺はバトル漫画よりもラブコメのほうが好きなんだよ。

「爺に壁超え認定されたんだろー、いいだろー、遊んでくれよー」

「あーもー、疲れんだよ。百ちゃんははじめ、その壁超えとかいう奴らと殴り合うの」

チヨロい美少女がたくさん居るから、ラブコメの世界だと思つてたんだがなあ。それ以上に血の気の多い奴らが多い。

「爺の言う、基礎鍛錬とか退屈なんだよ。同じような型を何度もするって」

「まあ、百ちゃんも俺と一緒にで天才派だからなあ。気持ち分かるが、まだ体も出来上がってねえ、精神も未熟ってんじや、基礎鍛錬で土台固めろってこったな」

「修二はどうなんだよ。むしろ、おまえのほうが年は下だろ？」

「俺はハンサムだからいーの。そも、俺は武術家って訳じゃねえの。だから、無理に鍛錬する必要も、強くなる必要もねえのさ」

「ほんと、やる気ないのに、強いよな。修二」

ま、餓鬼の頃から、割かし何でもできたタイプだったからな。

「んじやま、百ちゃんは早くあの万年ジャージにところに戻りな。今頃お冠だろうさ」

百ちゃんのさらさらの髪を少し強めになでつけ、百ちゃんを残して部屋を出ていく。

不満げな百ちゃんが、恨めし気な目線を向けてきていたので、カカと笑い声を返しておいた。

ぶつちやけ、退屈なのは今だけだと思っぜ？ 百ちゃん。世界は、思ったよりも少しだけ広いんだから。

川神院を抜け出し、色んなところで時間を潰し、日も沈んでしまった。

なんか大和が高学年から助けてくれとか頼ってきたから、とりあえず、ヘタレな大和ともども拳でのしてきた。

まあ、大和たちを殴る必要はなかったが、まあ、ノリで。

それにしても、一子ちゃんは今大きくならねえなあ。他のみんなはスクスクだつてのに。

「そこんところどう思うよ。俺の目測じや辰子ちゃんはDに届いてそうなんだが」

「いきなり何言ってるのさ。うちに可愛い妹をそういう目で見るのは止めてくれないか

い？」

ああん？ あんな兵器ぶら下げて引つ付いてきやがるのがいけねえんだろぅがよ？
ぶつちやけ、ミサゴちゃんもあずみちゃんもどつちかつてつとスレンダー系のスタイルだから、ぽよんぽよんな甘いのが食いてえんだよ。

「もしそんなことしたら、あんたを竜の前に簀巻きにして放り出すよ」
「すいません、まじすいませんっした」

自分でもびつくりするくらい綺麗な土下座が出た。

時刻は夜、場所は親不孝通りということで、まるでカツアゲされてるような気分になつてくる。

人の目が付かない場所を指定したのはこちらだが、もつと洒落た場所でもよかつたのかもしれない。

「ほら、今月の分を寄こしな」

普通にカツアゲだったわ。つらたん。

「あいよ。ほれ、みんな大好き諭吉さんだ」

亜巳ちゃんへ分厚い封筒を差し出す。

金の重みをしっかりと感じるように、亜巳ちゃんは手で少し上下させた。

「いつもより多かないかい？ 特別何かあったわけじゃないだろ？」

「あ？ そろそろ亜巳ちゃんも進学だろ？ それに、ガキ4人ともなり入り用だろう

サ」

「そりゃあ、そうだけどさ……、約束と違うじゃないかい」

歯切れが悪そうに、封筒を仕舞うこともできず、亜巳ちゃんは眼を泳がせる。申し訳なさやらないやら、天秤にかけてるんだらうさ。

ククク、そろそろ攻め時かね。

「なら、亜巳ちゃんがその分を払ってくれりゃあいんじゃないかな？ ほら、俺が言っ

てるのがどういう意味か、亜巳ちゃんなら分かるダろ？」

「……やっぱりそういう話かい」

「なあに、何も無理にさせようつて訳じゃあねえよ。たあだ？ 辰子ちゃんたちに美味いもん食わせてやりテエよなあ？ ちつとぼつかしオジサンと楽しいことをすれば、それが叶うんだぜ？」

ちなみにほぼ毎日餌付けしてるおかげか、ほつぺにチューくらいは簡単にしてくれるようになった。エンジェルはまだにツンツンしてやがる、ゲームするとき張り付いてくるから素直になれてねえだけだな。

チヨツ口。

竜？ 最近は簀巻きにしても、腕力で破ってくるからコンクリ風呂に詰めてるよ。なんか日に日にムキムキになってねえか？ アイツ。

キツモ。

「……………はあ、分かったよ」

呆れたように、長いため息の後に亜巳ちゃんは了承をした。

ククク、亜巳ちゃんも発育はいいからな、今夜はしつぽりと楽しんでそうだ。

亜巳ちゃんは金の入った封筒をカバンにしまい、そして、代わりに

ゴリツゴリに硬そうな鞭を取り出した。

「ワアオ☆」

変な声出た。

そりゃあ、俺もそういうプレイをしたことあるし、そういうグッズにお世話になったこともある。

だが、亜巳ちゃんがいきなりそういうグッズを取り出すとは、夢にも思ってたなかった。

「この前、あんたがウチに置き忘れた雑誌にこういうのが載ってたさ。好きなのかなって思ってた買ってみたんだ。そしたら、思った以上に手に馴染むのさ」

亜巳ちゃんは鞭をしならせ、それと連動して空気の弾ける音がする。元々鋭く尖らせ

ていた瞳は、爬虫類じみた獲物を見る眼へと変わっていく。

少女から女どころか、色々飛び越えて女王様へとジョブチェンジしようとしてやがる。

「あー、その、亜巳さん？　じよ、冗談ですよ、ジョーダン。僕がそんなお金を盾に女の子に悪いことしようとする訳ないじゃないですか」

「いいのさ、修二。アタシはアンタのこと、好きだからね」

亜巳ちゃん、いや、亜巳さんが一歩、距離を詰めてくる。俺は得体の知れない怖気に、詰められたキャラと同じだけ足を引いた。

まだローティーンの小娘に、圧倒されたのだ。この俺が！

「……ああ、口に出しちまえば、スッキリするね。そうさ、アタシは好きなんだよ、アンタのことが。私らには、大切なものは家族しか居なかった。みんなと一緒に居ればそれでよかった。例え、それで貧乏だったとしても、人並みな幸せってのが難しくてもね」

そう語る亜巳ちゃんの顔はたしかに、アイツらの姉の顔だった。

「それなのにさ、アンタはズケズケと土足で割り込んで来て、私らを掬い上げちゃったんだよ。こんな紙切れだけじゃないよ？」

辰も、天も、竜も、みんなアンタのことを待つようになっちゃった。いつの間にか、家族同然になってたのさ」

「そりゃあ、辰子ちゃんも、まあ、エンジェルも可愛い娘だからな。粉かけるのは当たり前だわな」

「それでもいいさ。アタシはアンタが好きなこと、そんなことは関係ないんだからね」
「あ、あいにくと、俺彼女持ちなんだわ。だから、浮気なんて不義理はできねえんだわー、残念だわー、マジ残念だわー」

「修二、あんたも、馬鹿だねえ」

亜巳ちゃんの手の輪郭がブレる。握られていた鞭は音速を超え、俺の首をからみ取り、主のもとへと獲物を引き寄せる。

そのままの勢いで、亜巳ちゃんにキスされる。

鞭に首を絞められ、脳への酸素の供給が止められる。靄がかかった思考を、唇からの熱が情報として流れ込んでくる。

「逃がさないよ、修二」

「……上等だ、分かせてやんよ、小娘ちゃんが」

過程はちよいと思ってたのと違うが、予定通りってことでひとつ。

ぶつちやけ、一回戦、二回戦までは押され気味だった。覚醒した亜巳さんは強敵だったが、こつちはスタミナで勝負した。

あやうく、豚に落とされるところだった。あぶねーあぶねー。

「んー、んー?」

「どうかしたのですか?」 修二、しきりに周囲を見回して」

亜巳ちゃんが亜巳さんへと進化した翌週、俺は変な感覚に囚われていた。

「いやね、冬馬、俺ってばぶっちゃけ視線とか、殺気とかつてのにすげー敏感なのよ。そのシックスセンスが、見られてるはずなのに、見られてねえのよ」

見られているはずなのに、気配とか全く感じない。

まるで、研究者が実験動物を観察するような、そんな無機質な視線だ。

今現在居る学校の校舎だろうが、川神院の自室だろうが感じるが、そのくせ、山中とか親不孝通りで夜遊びしてる時には感じない。

「やつぱり、人間の枠組みからはみ出してるよなあ。お前」

「しゃあねえだろ、感じるもんは感じるんだからよ。ああもう! なんだこりやあ、気づくと気になる!」

一度気づいてしまうと、気になって仕方がなくなる。
ハゲが遠い目して、失礼なことを言ってくるが、制裁する気も起きない。

「うーん、僕はよく分かんないけど、なんとなーく稽古の時、こうしてきそうだな〜って感じるよ」とあるよ」

うんうん、小雪ちゃんも順調に人街への道を歩いて行ってるねえ。

百ちゃんが、足技だけなら互角とか言ってたし。百ちゃんと互角って、それ、意味わかってんの？

「ああもう、しゃあねえ、ちよつと派手なことしてみるか」

実際、心当たりというか、思いついてることはあつた。

盗聴器、隠しカメラ、その類だったら、俺の感じてる違和感の正体に説明はつく。

だが、見つけられなかった。俺の行動範囲、荷物、それらに付けられてないか調べたが、白、全く痕跡すら見つからなかった。

手作業やらで探すのに限界がある。

「お前ら、電子機器手元に持つてるか？」

「いや、まあ、俺も若も持つてるが……。何する気だ？」

「まあ、とりあえず、携帯とかは電源切っておけ」

気っていうのは便利だよな。川神流は気を純粋なエネルギーとして放出したり、ヒュームの爺さんは電撃として足に纏わせたりできる。

ぶつちやけ、何でもできる便利エネルギー的なものと思ってる。

手の中で、気を練る。百ちやんがビームとして、ヒュームの爺さんが電気として、表出させてるように、磁気として作り上げる。

そして、波として、周囲に送り出す。

小雪ちやんたちの間を駆け抜けていく。

……みつけ。

「やあつてくれるねえ。まったく、そりゃあ、気づかないわけだ」

俺は小雪ちゃんのバッグから、小さな機械を引つ張り出す。

表の世の中には出回ってなさそうな、少なくとも、普通の電化製品店では買えそうにないやつだ。

「さすがに俺も、自分以外に仕掛けられた盗聴器には気づかねえわ」

なにそれーと覗き込んでくる小雪ちゃんをよそに、盗聴器を手の中で握りつぶす。

冬馬と準は、何やら青い顔になってる。そりゃあ、小雪ちゃんのカバンの中から盗聴器が出てきたんだ、不気味だろうさ。

「カカカ、売られたケンカは、のし付けて返してやらなきやあねえ。なあ、準くんよお？」
「なんでそこ俺に同意求めたの!?! やめて! お前今めっちゃ怖い顔してるから! 何その犬歯! お前そんなのあった!?!」

川神じゃあ派手なことできないから、百ちゃんじゃないが、俺もストレス発散した

かったところだ。

いやまあ、爆破事件とか派手は派手だったけど、自分で花火上げたいんだよ。

どこのどいつか分かんが、ボッコボコにしてやんよ。

第15話

小雪ちゃんたちを置いていき、学校から抜け出した後、俺は人気のない場所へと向かった。

盗聴器を壊したせいで、恐らくこちらが気づいたことは勘づいてるだろう。

私有地につき立ち入り禁止という看板を踏み越え、山の中へと分け入っていく。隠す気がなくなった気配が、ピッタリと張り付いてくる。

「それでよお、お前さんはどこぞの誰なんだい？」

山を分け入って、緑に囲まれた中、俺は木々の向こう側へと声をかける。

「織原修二。やはり気づいたか」

轟音、それと地震のような振動。

それとともに、俺の目の前の森が消失し、小さな広場が作り出された。

自然を破壊しながら姿を現したのは、褐色肌に中華風の服を纏った美女。

その手には、身の丈と同じ大きさの棍棒。光を飲み込むような、真つ黒な鉄塊を軽々と片手で持つている。まるで草むしりでもするかのように、森に空白を作り出したソイツは、棍棒を肩に担ぎ、こちらを見据えてくる。

金色の虹彩は油断なく、こちらを冷静に見定めてくる。銀の髪が日の光を反射し、まるで光をまとつてるかのようにも見えた。

「気づいたのはさっきだがねえ。古めかしい格好しといて、やるこたあ軍隊じみてやがるからタチ悪いな」

「今はもう、機械の時代だからな。使い始めたのは最近だが、自分の実力に自信を持つ武闘家ほどこつちの方が役に立つ。正直、まだ気付かれるとは思っていなかった」

そう言いながら、美女はイヤホンを取り外し、投げ捨てる。

「それで、何で俺のことを監視してたのさ。清廉潔白に生きてきたし、人の恨みを買う覚

えはねえんだがな」

「依頼があつたのさ、織原修二、お前を殺すようにとな。心当たりはあるだろう？　九鬼に差し向けた暗殺者を何度も撃退したろう？」

あー、あの爆破事件以降何度か遭つたなあ。あのおっさん以外は一人ぐらいした骨のある奴は居なかつたが。

「逆恨み甚だしいな、オイ」

「ああ、私もそう思うが、よくある事だ。九鬼そのものへの暗殺なんてリスクいな依頼は引き受けないが、ただの子供がターゲットなら話は別だ」

なるほどねえ、こりゃ、本格的に相手潰した方がいいカア？

だがまあ、理解はできた。どこからの縁かも分かつたよ。

「だが——」

「それで、俺の首には幾らかけられてたんだ？」

「は……？」

「だから、やつこさんは俺の首にどれだけの金をかけて、お前さんらはどれだけの金で引き受けたんだ？」

「……………」

答えるか否か、美女は考え込む。

そして、

「……………5000万だ」

「あ……………？ ……ドルか？」

「円だ」

5000万？ 俺が？ この俺さまが？

へえ、そうかい。俺はお前らにとつちやあ、5000万の価値しかねえのか。なるほどなるほど。

この世界で唯一無二、天上天下唯我独尊な俺様が、ねえ。

「ぶっ殺してやるよ、舐め腐りやがって」

完全にキレちまったよ。屋上行こうや。

初動は俺からだった。

ぶっちゃけて言えば、頭に血が上ってた。

「……なんだ、この……押さえつけられるような、闘気は」
「ビビってんじゃねえ!! 殺しに来たんだろがよオ!」

地を駆ける、身体を低く、潜り込むように。

完全に反応が遅れている。タイミング完璧、威力も速さも充分。

俺の握りしめた拳は、心中へ目掛けて叩き込まれる筈だった。

女の左目が怪しく光る。

そして、咄嗟に持った棍棒を間に割り込ませる。

「小賢しいんだよ、んなもんで防げる訳あねえダロ！」

「ぐっあ」

棍棒諸共殴り飛ばす。踏ん張ったようで、足を地面にめり込ませながら、数メートルほど滑る。

やっぱ、なあんか変な絡繰持ってやがるか？

「待て……私はお前を……」

「待てねえなあ！ カハハッ！」

完全に俺はプツンしてた。

ラブコメしたいだけなのに、強引にバトル展開に持っていこうとする世界にも、こそこそ人の命を奪うのを他人にさせる愚図にも、小雪ちゃんに盗聴器仕掛けた目の前の女

にも。

「仕方あるまい。本気でやらねば、こちらがやられるか……」

美女は棍棒を振りかぶる、それは追撃をしようとした俺を脳天から砕く勢いだった。

俺は笑ってその一撃を頭で受け止める。

頭蓋に衝撃が走る、足が地面にめり込む、衝撃で地面が割れる。

「な………」

「だから、惚けてんじゃあねえ!!」

視界が赤く染まる、ダラリと垂れる熱さが心地よい。

ノーガードだからこそ、ノーラグでカウンターを出せる。

前蹴りで狙うは腹、武器は俺の頭にめり込んでるからガードできない。

「っう………」

「ガッ、クソがつ!」

モロに入れたつもりが、相手も合わせて蹴りを入れてきやがった。

ダメージはねえが、反動で逃げやがった。あつちもまともにダメージ入っちゃねえ。

あーくそ、あんな武器持ってパワータイプかと思つたらテクニクも充分すぎるわ。それに、何でか分からんが反応が良すぎる。まるで動き読まれてるみてえな反応しやがる。

「ふん！」

「無駄ア！」

今度は向こうから仕掛けてきた。音速を軽く超えてる棍棒に対して、拳を叩きつける。

鈍い音が鳴り、火花が散る。続けて乱撃、黒い暴力が暴れ回る。

それを正面から殴りつけ、押し返す。

カハハ！ 手エ痛えなあ！

一撃、大振りな横薙ぎが振られる。同じように弾き返し、それに反撃しようとするが、瞬間、棍棒が軌道を変え横つ面にぶち当たる。

首が捻り飛ぶレベルの衝撃が走り、きりもみ回転しながら俺の体は木に叩きつけられる。

まただ、完全に当たるタイミングだった筈なのにズラされた。

「もう、油断はしない！」

追撃は地面に落ちるよりも早かった。地面に打ち据えられ、二度、三度、滅多撃ちにされる。

血が飛び散り、黒い棍棒を赤に染める。骨が砕け、肉が破裂する。
反撃を許さんとばかりの破壊だが、

「カハツ、いいねえ。だあがあ？ 俺を壊すにはちと足りねえなあ」

振り下ろされた棍棒を掌で受け止める。引き戻そうとする力を、握力で止める。
何でも視えてるって訳じゃあ無さそうだな。

「化け物が……」

「ひっでえな……ボコボコにしといてその台詞かよ」

掌に力を込める。腕に血管が浮き出て、棍棒から僅かに砕ける音がする。

「握撃って知ってっか？」

「まさか……離せ！」

「砕けちやうんだなあ！ コレが！」

棍棒を握り砕く。焦って蹴りつけてきた足を空いてる手で掴み、引きずり倒す。

そのまま、マウントポジションを押しやる。拳を突きつけ、やつこさんの武器の残骸を投げ捨てる。

「それで、どうするよ。武器も無くなったし、チエックじゃねえか？」

「はあ……ただの鋼鉄じゃないのだが……降参だ、降参」

参ったと言わんばかりに、残された棍棒の取っ手を投げ捨て、両の手の平を頭の上上げる。

「うし、終わり！ あー、疲れた。てかいつてえー」

マウントポジションを外さないまま、大きくのけぞる。

「知ってはいたが、本当に信じられんような戦い方をする奴だ」

「そりやどーも、てか、どうするよ、こつから。俺を殺しに来た暗殺者を、野放しにしたくないんだけど」

「全く、話を聞いてくれ。私たちは確かにお前の排除の依頼を受けた、だが、お前を殺す気はないんだ」

「あ？」

既に俺の中のイライラは収まっており、どうしたもんかと尻に敷いた美女の処遇を考えていた。

美女を尻に敷いたまま、事情を改めて聞いてみる。

この美女、史文恭ちゃんだが、曹一族とか言う傭兵集団の師範代らしいんだが、ぶつちやけ、壁越え相手にできる人材が少なすぎて出張らざるを得なかつたらしい。

川神院と九鬼のお膝元だから、人員を引き連れる訳にもいかず、孤独にぼっち任務を受けたらしい。

三ヶ月ほど前に。

史文恭ちゃんはまず身辺調査を始めたらしい。壁越えターゲットは初めてらしく、慎重に慎重を期すために。気配を絶つての尾行や監視をしたが、気付かれそうになり中断、盗聴器や隠しカメラでの監視に切り替えた。

ここで史文恭ちゃん、俺の勘の良さを警戒して、俺本人ではなく、周囲の人物、小雪ちゃんや板垣家、川神院の修行僧たちにそれらを仕掛けた。

そんなこんなで監視する事ひと月程、史文恭ちゃんはあることに気づいたらしい。

「お前は、次期曹家の当主たる才を備えている。お前を監視して、私は確信した。中国へ来い、織原修二」

「急になんか馬鹿な展開になってやがる。もうお腹いっぱいなんだよ」

さらに話を聞けば、史文恭ちゃんたちにはライバル組織がいて、最近負け越し気味らしい。その上、当主が高齢で、実質的な運営を史文恭ちゃん始め、幹部連中で分担している現状らしい。

「興味ネエなあ。てかなんだ、傭兵稼業とか血生臭いのは基本パスなんだよ」
「貴様の戦い方こそ血生臭いだろうに……んんっ、まあいい、コレを見てみる」

史文恭ちゃんが何かを取り出したそうにするので、馬乗りから退いてやる。

取り出されたのは手帳サイズのアルバム、史文恭ちゃんは、それを俺に差し出す。

「あ？ ……んだこりゃあ、証明写真？ 随分と多いな」

「曹一族は、大半が女性の構成員だ。そして、そのアルバムはお前が、我らの頭領になれば、そこに載ってる構成員を好きに抱き、孕ませることができるぞ」

「ブツ——」

アルバムの中は、美少女、美女ばかりだ。

中華美女たちによる夢のハーレム。美少女満貫全席。

「く、ぐうぬぬぬ」

「凄い苦悩の仕方だな」

ここで史文恭ちゃんたちのリーダーになっても、俺なら何とかかなると思う。それな

りに上手く立ち回り、相手組織とかもぶっ潰して天下取れるだろうさ。
しかしまあ、個別ルート入る感じでエンディング入る。

「つーわけで、非常に、ひっじょーに惜しいが、断らせてもらおうよ」

ほんと、ほんつとうに惜しいがな。チクシヨウ……チクシヨウ……。

「血涙流すほどなら、受ければいいと思うが……」

「俺は自由でいたい。何も背負ってないから、どこまでもこの足で歩けるの。それに、俺は誰かを背負うほど力持ちじゃねえんだよ」

「そうか……」

史文恭ちゃんは、起きあがろうとするが、キツそうだ。

「最初の一撃と軽減したはずの蹴りだけでこのザマか……。やはり、貴様は化け物だよ」
「失敬な、意外と傷つくんだよ、化け物呼ばわりは。ぶっちゃけ、俺が一番そう思ってるし」

既に砕かれた骨は繋がりが、傷は塞がっている。半年以上前のかの爆発事件の時より治癒速度は速くなっている。

正直、さっきのめった打ちは砕かれた側から治る、そしてまた砕かれるの繰り返しだから、滅茶苦茶痛かった。

「ま、いつか。さてと」

掌に気を集中させ、史文恭ちゃんの腹部に当たる。緑色の発光を出すと、それは史文恭ちゃんの体へと染み込むように取り込まれていく。

自分の体を治す力が気だとするなら、こういう応用もできると思ったが、ほんと、何でもできるじゃねえか。

「それは……」

「文字通りの手当てだよ。自分が治せんだ、他人に応用できるかなってやってみたらできただけだよ」

「やってみたらできた……か」

史文恭ちゃんは身体を起こし、俺を見据える。

特徴的な金色の瞳は、何を考えてるのか分からない。

「修二と呼んでも？」

「好きな呼ばばいいさ、なんなら、ダーリンとかハンサムでもいいぜ？」

「そうだな、なら、ダーリンと呼ぶとしよう」

ジョークなのに……、真面目に返されると滑ったみてえで恥ずかしい。

「ダーリン、お前を曹一族に引き込むのはひとまず保留にする。だが、諦めるわけではない、いつかお前を当主と仰ぐ日を気長に待つとしよう」

「個人的な付き合いなら、史文恭ちゃんとかならバッチこいなんだがねえ」

「そうか、それはそれは」

史文恭ちゃんの目が妖しく光る。

俺の第六感が、狙われていると警鐘を鳴らした。

よくよく見なくても分かるほど、史文恭ちゃんはエキゾチックな美女だ。スタイルも

いいし、胸も豊かだ。胸が豊かだ!!

美女に迫られるのはいい、男としての肯定感が満たされる。

だが？ 俺も最近主導権を握られっぱなしの場面が、多い気もする。

「これ以上、主導権を握らせる展開は許されねえ。というわけで、ヒヤッハー!!」
「うわっ!」

史文恭ちゃんにルパンダイブをかまし、押し倒す。

さあさあ、ウブなネンネじゃあああるまいし、その甘体を味わわせてもらおうかあ!

「ま、待ってくれ……。わ、私はそこまでするつもりは。せいぜい、キスくらいで、そもそも初めてで」

「問答無用じゃあい!」

「ああもう! どこまでもふざけた奴! いいだろう、叩きのめしてやる!」

カハハ! やっぱりこういう方が俺の性に合うなあ!

第16話

史文恭の乱は、ひとまず彼女が帰国するという結果で落ち着いた。

俺の懸命な説得（卑猥）により、傭兵集団の当主に俺を据えることは諦めてくれたらしい。だが、最終的に、自分と俺の子を跡継ぎとして育てればいいと言うとんでもない結論を導き出し、なんか満足げな感じで帰っていった。

また会いに来ると言っていたし、完全に諦めた訳じゃないだろう。

「いくぞー！ 修二ー！」

「あいよ、来な、英雄」

今日も今日とて、川神は平和である。

英雄の自主練に付き合い、キャッチャー役をやってやる。

「かつとばせー！ キャップー！」

「おう！ 任せとけ！」

さらに、今回は風間ファミリーから翔一がバッターとして入っており、他の奴らは守備位置入ったり、観客として歓声を飛ばしたりしている。

俺はサインで、内角低めストレートを出す。英雄はそれに目だけで頷き、投球フォームに入る。

翔一もバットを握る手に力を込め、脇を締める。

「ふんッー」

英雄のストレートは既に130km/hを超えており、小学生のレベルを超えている。リトルの中では上級生を抑えて看板エースを張っており、地区大会とかは余裕で完全試合を成し遂げてしまう。

そんな英雄のストレートを、翔一は確かに反応してバットを振る。

「へえ」

当たりはしなかったが、球は視えてるようだ。俺は、ボールを英雄に返し、次に外角

のボール球を要求する。今度もストレート、どれくらい視えてるか、探りを入れる。

英雄が投げ、翔一はそれを見逃した。

「ボールだ。ワンボールワンストライクだな、翔一」

「へへっ、そうじゃねーかなーって思ったんだ」

思った以上に視えてるな。このままストレートを投げてたら、目が慣れていい感じに打たれそうだ。

俺は翔一にちよつと待つてろと声をかけ、英雄に近づいて耳打ちする。

「英雄、どうする？ 変化球主体ならそれでリードするが」

「フハハ！ ストレートのみで構わん！ 我の球が見える者との対戦も必要だ！ それに、ストレートだけでも打ち取れる」

「おっ、自信満々じゃねえか。なら、好きに投げるといいさね。どんな球でも取ってやるよ」

確かに、いい練習にはなるか。英雄のリトルは、英雄のレベルに届く相手が居ねえかな。

「悪いいな、お前が強いから作戦会議してたわ」

「全然構わねえぞ！ 次くらいなら、打てそうな気がするしな」

こつちも自信満々だねえ。英雄も翔一も、同年代で刺激し合ってるようだ。

英雄がワインドピッチポジションに入る。翔一もバットを短く持ち替え、速球に備える。

「しッー！」

「らッー！」

翔一は確かに英雄の球に反応していた。しかし、僅かにバットに当たっただけのボールは前には飛ばず、俺のグローブの中へと収まる。

「チップ、ツーストライクだ」

「だあ！ 惜しい！ 次だ次！ 今度こそ飛ばしてやる」

「カカカ、ま、頑張れや」

英雄は安心した様子も、焦った様子もない。ただ、静かに次の投球へと思考を巡らせる。

どのコースに、どのスピードで投げれば、翔一の虚を付けるか。速球縛りをしてるなら、そんな所か？ まあ、そんな風に考えてるなら、英雄、打たれちまうぞー。

「おら、次の球くるぞ。構えな、翔一」

「おう！ 来い！ 英雄」

翔一は先ほどよりさらに短くバットを持つ、英雄のストレートを確実に捉えるために。

「ふッー！」

英雄のストレートは先ほどよりも速くなっていた。140km/hは出ているのではなからうか。少なくとも、並の高校球児とかには打てないだろう。

「視えた！ 球の一球！」

カキン、と甲高い音が響く。白球は青空へと登り、驚愕の表情を浮かべる英雄の頭上を飛んでいく。

おー、中々飛ぶなー。

「オーライオーライー！ ウエーイ、獲ったー！」

だがしかし、打球の伸びは、センター辺りに待ってた小雪ちゃんのところで止まる。待ち構えていた小雪ちゃんは、危なげもなくグローブでボールを取る。

「センターフライ。惜しかったな、翔一」

「くっそー！ 負けた！」

「……」

翔一は悔しそうにし、英雄もまた苦々しそうな顔をしていた。

そんな英雄のいるピッチャーマウンドに近づき、俺はグローブを手から外す。

「んじゃま、英雄、なんで打たれたか分かるか？ 渾身のストレートだったろ？」

「……速さを重視しすぎて、球威が足りなかった。風間は既に球は見えていたが、その速さに反応するためにバットを短く持っていた。なら、重い球で球を飛ばさせなければよかつた」

「そうだな、ありやあもうちよいあたりどころが良ければホームランもありえてた。ま、そこまで気づいてんなら、もう大丈夫だろ」

「フハハハハハ！ 我もまだまだ精進が足りんということか！ いい勉強になった！」

翔一も英雄も、お互いリベンジを所望してるみたいだし、もう少しやらせて見るか。やだネエ、才能溢れる若者ばかりで。気づいたら、何処か遠くに飛んでつちまいそ
うだ。

こりや、俺もうかうかしてたら、置いてかれそうだなあ。

自然つてのはいい。空気は美味いし、くだらない俗世のしがらみなんか一切存在しな

い。

木々に囲まれた中、座禅スタイルで自身の中にある気という不思議エネルギーを操る。

清廉な気が満ちる山の中。大気と一体化するように、自分という存在を世界に溶け込ませる。自身の気と、自身の肉体の境界を無くし、それを垂れ流す。

認識できる世界が広がる。植物の持つ脈動、動物の声、虫のさざめき。全ての命が手に取る様に分かる。

広がれ、広がれ、この山を覆え。

「スゲエな、こりゃあ。どういふ神経してりゃあこんな芸当できるんだ？」

静謐な世界の水面に、波紋が響く。

「よお、釈迦堂のおっさん。人の特訓覗き見るとか趣味悪いぞ」

「酒集ろうとお前を探したら、百代が山に向かったって言ってたからな。そしたら、山を気で覆ってやがる」

「探したぞ、修二。うわ、なんか変なオーラ纏ってる」

「すげえだろ？ たぶん、触ったら弾き飛ばされるから、離れてろよ？ 百代ちゃん」

百代ちゃんも来てたんか。マジでハズイな、人に努力してるところ見られるとか、切腹もんだ。

二人と話しながらも、気のコントロールを止めない。山に流し込んだ気は、山が元来持つエネルギーと混ざり合い、莫大なエネルギーとなり俺の体へと帰ってくる。

それをさらに山へと流し込み、また山からエネルギーが返ってくる。以下エンドレス。

「おっさんのにこれどう思う？ 例えばドカンとかしたら」

「お前、川神を更地にする気か？ おめえ、その状態で暴走とかしたら確実に俺らは死ぬし、川神が世紀末みたいになっちまうぞ」

「だよねえ。そんじゃま、そろそろ放出すつか」

そろそろ俺の身体が、破裂するくらいの気が溜まったので、立ち上がり、手を空に翳す。

百代ちゃんと釈迦堂のおっさんは、思わず身構える。安心しろって、爆発落ちなんて

サイテー！ なことはしねえからよ。

「ひっさーっ!!」

「ぼっ、おま?」

ドカーン!! ってなあ!

side: 釈迦堂刑部

その日も、俺はいつもと同じようにクソつまらねー鍛錬をサボってた。そして、同じ

く基礎鍛錬から逃げ出した百代の組手に付き合い、師範代による指導という名目で、サボりを誤魔化そうとか思ってた。

しかしまあ、予想外の百代の進化とも言える成長速度に驚き、普通に鍛錬を積むより疲れちまった。

「つたく、修二も百代も、天才がそんなゴロゴロと転がってんじやねえよ」

「ぬわー！ 負けた！ 悔しー！」

流石に、まだまだ負けてやるわけにはいかない。だが、あと数年もすれば、百代は誰よりも強くなる、そんな予感を感じさせた。

百代はどちらかと言えば俺に近かった。同年代に相手になるレベルの敵はおらず、飢えて、渴いて、やがて闇へと堕ちていく。

その時を俺は見たかったし、その後の死合を心待ちにしていた。

「はずなんだがねえ……」

「釈迦堂さん！ もう一回だ！ 次は勝つ」

「やだよ、おめえの相手すんの疲れんだ。修二にでも相手してもらえ」

「……」

俺が百代の駄々を突き放してやると、百代はポカンとした顔をした。

「何だよ、そのアホ面は」

「いや、釈迦堂さん。修二と全く同じこと言ったから。私の相手を他の奴に押し付けようとするあたり、ドンピシヤだ」

「おんなじねえ……」

修二、奇妙どころか、奇怪な餓鬼だ。

少なくとも、中身がそのまんまの子どもじゃないのは確かだ。

「つか、その修二はどこにいんだよ。ルーの奴が、またサボリカーって、顔真っ赤にしてたぜ」

「なんか、山でオナニーしてくるとか言ってたぞ。見られたくないからついて来んなってさ」

オナニー、ねえ。流石に、そんなまの意味じゃあるめえ。

ちよつくら、様子を見に行ってみるか。サボるやつを探しに行つてたつてんなら、ルーや爺もうるさくいわねえだろう。

「んじゃ、俺は修二を探しに行くから、お前は大人しくルーのどこにもどつてろよ」
「ずるいー、ずるいぞー。私も連れてけー」

しょうがねえなあ、ルーと爺には黙つてんだぞ？

side:百代

修二が居るはずの山は、いつもと全然違った雰囲気満たされていた。

四方八方、あらゆる場所から修二の気を感じ取れる、それこそ、この山そのものが修二と言われても納得してしまいそうになるくらいには。

「まったく、何だつてこんなことになってやがる。こりゃあ、奥義の類とかってレベルじゃねえぞ」

「釈迦堂さん、この山、どうなってるんだ？」

「百代、変に気を乱すなよ。下手すりゃあ、変な反応起こしてドカンだ」

釈迦堂さん曰く、この山が本来持つ生命エネルギー、植物とか動物とかそういう小さな命が積み重なってできているソレと、修二の気が混じりあっているらしい。

それに指向性を持たせれば、修二が思うがままに周囲にビームみたいに振りまくこともできるうえ、私たち自身が持つ気を上から踏みつけるようにして押さえつけることも

できるらしい。

いわゆる、修二以外自由が許されない領域、この山はそんな状態らしい。

「下手に気を乱したら、地雷みたいに反応させてドカンなんて、あいつがいかにもやりそうなことだ」

確かに、この領域に対して、それならと、やろうとした相手を笑顔で踏みつけて高笑いするのが修二だ。

「すげえな、こりゃあ、どういう神経してりゃあこんな芸当できるんだ？」

釈迦堂さんに連れられて行った場所、気の中心部に修二は居た。

座禅を組み、静かに目を瞑るその姿は、人という枠組みから外れた何かを思わせた。

釈迦堂さんの声に、静かに目を開けた修二は、いつも通りの人を食ったような笑みを浮かべる。

「よお、釈迦堂のおっさん。人の特訓覗き見るとか趣味悪いぞ」

その声に、私は安堵した。

さきほどまで、どこか遠いところに居るように感じた修二が、きちんと目の前にいることが分かったから。

「酒集ろうとお前を探してたら、百代が山に向かったって言ってたからな。そしたら、山を気で覆ってやがる」

「探したぞ、修二。うわ、なんか変なオーラ纏ってる」

私もできる限りいつも通りの私で修二に声をかける。

「すげえだろ？ たぶん、触ったら弾き飛ばされるから、離れてろよ？ 百代ちゃん」

目に見える光が、修二の身体を包んでいる。

触つてみたいと思ったら、それを制するように修二が優しく言う。そして、いたずらを思いついた子供のようには、釈迦堂さんのほうへ顔を向ける。

「おっさんのこれどう思う？ 例えばドカンとかしたら」

「お前、川神を更地にする気か？ おめえ、その状態で暴走とかしたら確実に俺らは死ぬし、川神が世紀末みたいになっちまうぞ」

「だよねえ。そんじやま、そろそろ放出すつか」

修二が立ち上がり、手を空に掲げる。

ああ、私にはわかった。こんだけすごいエネルギーを、修二はきつと下らないことに使うのだろう。

釈迦堂さんは焦るが、私は落ち着いた気持ちで空を見上げる。

「ひっさーっ!!」

「ばっ、おま!?!」

修二の手から放たれた気は、空高くへと昇る。高く、?く昇っていき、空の彼方で弾ける。

それは億万の小さな光となって、川神市に降り注ぐ。まるで雨のように、それは降ってきた。

当然、爆発の真下にいた私たちのところにも、それは降ってくる。

小さな、白いマシユマロ。小雪の大好物で、いつも修二が与えてるやつだ。

「名付けて、マシユマロシャワー。どうだ？ カッコいいだろ？」

修二は降ってきたマシユマロを手に取り、口にする。

釈迦堂さんと私の呆けた顔を楽しむように、色んなところで騒ぎになってるだろうマシユマロの雨の結果を楽しみにするように、修二は笑う。

私もマシユマロをひとつ、口に放り込む。

甘くて優しい、修二の味がした。

第17話

空からマシユマロが降るといふ、謎現象はすごい話題となった。怪奇現象にしても、規模が規模だし、マシユマロという物的証拠が残されている。

九鬼のイベントだとか、川神院の修行の一環だとか、色んな憶測が飛び交っている。

「てか、あのマシユマロ事件、犯人はお前だろ」

「まあ、あんなことするのは、修二君くらいしか居ませんからねえ」

冬馬と準にはバレてたようだ。付き合い長いし、マシユマロって分かりやすかったか？ 小雪ちゃんは街を駆け回って集めまくってたみたいだし。

小雪ちゃんは今も、その際に集めたマシユマロを詰めたお菓子箱を抱えている。

「うま、うま、修二の味がするー！」

「こらー！ ユキ！ さつきから食べすぎです！ ほら、1日10個までって約束したでしょー！」

「あー！ 返せ、かーえーせーよー！」

小雪ちゃんは幸せそうにマシユマロもぐもぐしてる。ほんま、かわえーなー。そんな小雪ちゃんから、準がマシユマロを詰めたお菓子箱を取り上げる。

「修二君、少し相談があるのですか、よろしいですか？」

「あん？ 珍しいな、お前さんが俺に相談だなんて」

準と小雪ちゃんが戯れているのを見守りながら、冬馬がすすすつと距離を詰めてくる。

なんか最近、距離が近い気がするんだよな、こいつ。

まあ、最近はその女の子に声をかけられて、そのまま仲良くいい雰囲気になったりしてるから、大丈夫だろ。

「そんじゃま、修二お兄さんのお悩み相談のお時間だ。どんな内容なんだ？」

「ええ、大したことでは無いのですが、父の書齋から、非合法な方法で得たと思われる金銭についての帳簿が見つかりまして……」

あ、ヤバ、あのおっさんドジ踏みやがった。

「あー、うん、ダイジョーブダイジョーブ。多分もう悪いことシテナイヨ」

「そう、ですね。確かに、帳簿の年月日はだいぶ前で止まってましたし、もう悪事はしてないのでしょうが……」

あー、まあ、俺が強請ってたし、九鬼が介入して悪事なんて何もできなくなっちゃまったからな。

むしろ、俺が搾取の限りを尽くして、そのあとに九鬼にトドメを刺されて、最後に息子に悪事がバレるとかいうオーバーキルとか、可哀そーだなー。

「とりあえず、お前はどうか考えてるんだ？ いや、どっちかってえと、親父さんをどうするんだ？」

「正直、父がしていることは許されることじゃありません。それに、まさかと思つて調べれば、準の父も関わっているみたいですよ」

「アーウン、ソウダネー」

「準は、私に任せると言ってくれました。しかし……」

告発するか、それとも見逃すかって所か。

「父の罪を告発することは、こう言つてはなんです。簡単です。証拠は準の力を借りれば、すぐ押さえられると思います。」

ですが、その結果、私と準は犯罪者の息子、母さんたちも肩身が狭くなる」

まあ、少なくとも、葵紋病院の院長の息子、妻から、犯罪者の家族へと世間の見る目は変わるだろう。

「それに、修二君やユキ、英雄にも、迷惑をかけてしまうでしょう。こんな僕たちと仲良くしてたなんて、と」

なるほどねえ、冬馬らしいっちゃ、冬馬らしい悩み方やな。

「冬馬よお、お前さん、俺らがそんな風評とか世間体とか気にすると思うか？」

「ですが、世間の評価というのは、馬鹿には出来ません。あなたや英雄、百代さんは自分

で自分を守れるかもしれませんが、ユキは、そんなに強くありません」

確かに、小雪ちゃんは冬馬や準からすりやあ、まだまだ守らなきやいけない子なんだろうさねえ。

「おーい、小雪ちゃん！ 準で遊んでないで、こつち来てくれー！」

「ウエーイ？ 修二、なにになに？」

お菓子箱を取り返し、準の口の中にマシユマ口を詰めて窒息させてる小雪ちゃんを呼び寄せる。

俺に駆け寄り、撫でてと言わんばかりに突き出してくる頭を撫でてやる。

白くサラサラの髪を梳かしてやれば、気持ち良さそうに目を細める。

「小雪ちゃん、冬馬と準をいじめめる奴がいたらどうする？」

「えー？ うーん、こらしめるー？」

「それで、小雪ちゃんを逆にいじめようとして来たら？」

冬馬は心配性なんだよ、たまには、守るだけじゃなくて、守られてみる。

「やり返すよー、いじめはダメなんだからー」

「ユキ……ですが、それはあなたを周囲から孤立させてしまいます」

「大丈夫だよ、トーマ。僕にはもう、みんなが居るから」

小雪ちゃんが、冬馬の頭をよしよしと撫でる。

「修二も、モモちゃんも、英雄も、トーマの味方だよー」

「ユキ……」

「それに、そんなので離れていく奴らなんて最初っから期待できないのだー」

小雪ちゃん、随分と遅しくなって……お兄さんは感慨深いぜ。

「フフ、いつの間にか、ユキも強くなったのですね」

「そうだぞー、ルー師範代も褒めてくれるんだー」

「ま、お前が思うより、お前の周りの奴らは強いんだよ。あの風間ファミリーも、なんか言えば手エ借りれるだろ」

冬馬は笑みを浮かべ、吹っ切れたような目を俺に向ける。

「分かりました。私は、私のやりたいようにしようと思います」
「おうよ、ま、なんかフォローが必要だったら言えよ」

まあ、俺が何かしなくても大丈夫そうだなエエ。

葵紋病院の院長が替わり、俺はいい金蔓が居なくなり困っていた。
仕方ないので、お馬さんとお船で金を稼ぐことにしたが、ミサゴちゃんにバレてマジ
切れされた。

ミサゴちゃん、旦那との破局の原因が株とあって、ギャンブルじみたのにはすつこい過敏に反応する。

「次黙ってやったら、許さないから」

「ごめんて。でも、どうやって金稼ぐかなあ」

「お願いだから、借金までしてギャンブルとか止めてよ？」

喧嘩後のセックスは燃え上がるというが、確かにお互い不満をぶつけ合った後には、お互いがまた求め合う欲求も高まる。

ベッドの中のピロートークにしては、夢がないが、金策にこれから困るだろうから仕方ない。

ミサゴちゃんとは、たまにこうしてベッドを共にする。

ミサゴちゃんもいい大人だし、家庭ぶつ壊した責任取れとは言わないが、釣った魚には餌をやれと睦言を強請る。

その少女のようないじらしさがまた、可愛らしく感じる。

「それじゃあ、私はそろそろ仕事に行かなきゃいけないから、先に出てるわよ？」

「あいあい。そういや、ミサゴちゃん、娘さんは元気そうかい？」

ベッドから起き上がり、色気のある背中を見せつけながら下着を身につける。

その尻を撫でたい願望を我慢するのは、中々に至難の技だったが、俺の内なる野獣をやつとかつと抑えつける。

「元気よ。今も一日に一回は連絡を取ってるわ」

「そりや重畳。前会った時は、すごい剣呑な眼で見られたからねえ」

そりや、母親寝取って、家庭をもう取り返しのつかないような状態にした張本人だからな！

そのうち刺されそうな気がする。いや、マジで。

「そりや、あなたがふざけた調子で新しいパパだよ！ とか言うからよ。燕ちゃんも意固地になって、久信君のところに残っちゃったし」

「カカカ、まあ、その場のノリでやつちまったことは反省してるさ。燕ちゃんの攻略難度上がっちゃったしな」

「うちの娘を狙わないッ！」

「あいたつ」

ミサゴちゃんから遠当てが飛んできて、俺の頭を小突く。

「それじゃあ、またね。修二」

「あいよ、またね。ミサゴちゃん」

身だしなみを整えたミサゴちゃんが、部屋を後にする。

残されたのは大人の女の残り香と、鎖骨に一つ残されたキスの痕だけ。

俺は深く息を吐き、目を閉じる。先程の気味良いやり取りの余韻に浸りながら。

「ぼくらは、あるいていく」

夕暮れの川沿い、肩車をした小雪ちゃんが、楽しそうに歌っている。ぐわんぐわんと俺の首を揺らしながら、小雪ちゃんは綺麗な声を響かせる。

音程は外れてるし、抑揚も下手つぴだが、ほんとうに楽しそうに歌いやがる。

「みんなと、いっしょに、どこまでも」

何気に、久々かもしれない、小雪ちゃんと2人つきりなの。

いつの間にか、俺の周りも賑やかになっちまったなあ。割と最初っから騒がしかったけど。

「あめがふつても、ゆきがふつても、わらってられるさ」

将来、小雪ちゃんはどうなってるんだろうか。

こんなクズな俺に良いようにされると気づき、離れていつてしまうのだろうか。

百代ちゃんも、冬馬も、準も、英雄も、そのうち餓鬼のまんまじや居られない時が来るのだろうか。

「らららら、これからもう、きつとたのしいことがあるさ〜」

元から子どもじゃない俺は、置いてかれちまうだろうな。

「だから、あるいていこう、どこまでも〜」

小雪ちゃんは、最後にビブラートを効かせて、曲を締める。

肩車のまま、体を丸め込んで、俺の顔を覗き込む。

「ね！ どうだった！ 修二。僕の歌！」

「35点。小雪ちゃんよお、もつとテンポつてのがしつかりしてねえと、曲じゃなくてた

だの朗読だぜ？」

「……」

小雪ちゃんの顔がドアップで、前が見えねえじゃねえか。

「修二、泣いてるの？」

あん？

「何言ってるんだ？　小雪ちゃんや」

「修二、最近さ、僕気づいたんだ。修二のこと」

ええい、近すぎんぞ。その真っ赤なお目々しか見えねえ。

「おう、小雪ちゃんの癖に言うじゃあねえか。この織原修二、泣くのはガチャで爆死した時だけって決まってるんだぜ？」

「修二、ほんとはすごい寂しがり屋だよね」

「……寂しがり屋だあ？」

「うん。だから、修二は、僕たちを大切にしてくれるんだなーって」

ああ、そうだよ。大切だよ。

だから、止めろ。

「小雪ちゃんよお。俺がそんな、寂しい淋しい、一人にしないでって言うような奴に見えるのか？」

「んーん。だってー、修二、我慢しちゃうよね」

「……」

「壊れちゃうぞー、ずっとそんなのだと。ガシャーン！ って」

小雪ちゃん、止めてくれよ。頼むからよ。

「修二つてき、凄いいね。頭もいいし、運動もできる、顔だってカッコいい。だからきつと、ひとりぼっちなんだなーって」

……。

「修二は、ヒーローだから。でも、きっと、誰も修二のヒーローにはなれないから」

小雪ちゃんが、俺の肩の上から飛び跳ねる。白い髪をはためかせ、ウサギのように、俺の目の前へと向き直る。

よく分からなかったが、その声は優しかった。ぼやけて見えなかったが、その目は優しかった。

「僕が、修二のヒロインになってあげる。僕が、修二を一人ぼっちにしないであげるんだ」

ああ、くそ。

完敗だ。

恋愛という戦いで負け星が付いたのは、前世も含めて初めてだ。

こいつは俺の考えだが、恋愛というのは如何に相手が欲しいものを与えることができるかということだと思っている。

その理屈で言うなら、小雪はズドンと、一発で撃ち抜いてくれやがった。

ああそうさ！ 俺より低い奴らどもばっかりの世界！

完璧でハンサムな俺はずっと孤独を感じてたさ！ 誰も俺を満たせねえ訳だ！ 俺は俺で満たされてたから！

だが、ああ、くそ！ よく見破ってくれやがったなあ！ おい！

俺が一番欲しいもんをよお！

「ああ！ 悔しいなあ！」

こんな年端もいかない餓鬼に！

その感情の正体も知らなさそうな小娘に！

俺は負けた！ 惚れさせられた！！

この寂しさを埋めさせられた！

「よく分かったな、小雪ちゃん」

「へへー、分かるに決まってるじゃん。僕、修二のことずーっと見てたもん」

虎視眈々と狙われてたって訳だ。小雪ちゃんを舐めてた俺は、足元掬われたってことか。

カハハ、ここまで清々しい負けなら気持ちもいい。

「よし、小雪ちゃん。結婚しようぜ」

「ウエ!!？」

小雪の手を取り、俺は抱き寄せる。

ワルツを踊るように、小雪ちゃんを俺を軸にふわりと回転させ、腕の中に抱き込む。華奢な膝の裏と背中を持ち、走り出す。

行く先なんて考えてない、ただこの体の持つ熱が足を動かす。

「カハハ！ 二度と離れられると思うなよ！ 俺を負かしたんだ！ 責任は一生掛けて取ってもらうぞ！」

腕の中の小雪は、俺の首に手を回す。

「うん！ 修二、大好き！」

「俺もだよ、バカヤロウ！」

ああ、俺もまだまだ、若いなあ。

恋愛で、こんなに心が弾むなんてよ。

第18話

小雪に攻略され、何かが特別変わったという訳ではないが、何となく距離感が近くなったような気はした。

それを察してか知らずにか、百代ちゃんも引っ付いてくるようになった。

ああ、そのいじらしさが可愛らしい。

俺と小雪の間にあつて、自分と俺の間がないものが存在しているのを感じるのさう。知らず知らずのうちに、それを埋めようとしてるのさう。

愛いやつめ。そんな君が俺は好きだぜエ。

小雪のせいで、俺の相手に求めるハードルは下がった。

いや、どちらかと言えば、意外と人を信じられるようになったと言うか、こいつら、俺が思うより馬鹿なんだから、深く悩まなくていいって考えるようになった。

やつてくれるぜえ、小雪よお。俺をここまで腑抜けさせるたあよお。

そんなこんなでさらに時は消し飛ばされ、小学5年生となった。

リアカーで日本横断してたらなんか神速の女と5回ほど事故ったり、松笠の古狼とかいうおじさんの戦艦に穴開けて一週間ほど命をかけた追いかけっこしたりしてた。

てか、なんであの女行く先々でぶつかんの？ 呪われてんの？

百代ちゃんは最高学年となり、その発育具合はさらに磨きがかかっていた。

小雪もマシユマロの食べ過ぎのせいか、体もマシユマロみたいに柔らかく抱き心地の良いものとなっている。

我慢ができなくなってしまうような時がちよくちよく出てくるとか、最近の若い子はヤベーな。

そんな感じで、誰も彼も成長期に入った少年期の最後の夏

クソみたいな日差しがギラつき、何をしてもじんわりと汗が滲む。

いつもの河川敷、いつそのこと川に飛び込んで水浴びをしたい衝動に駆られながら、小雪と百代ちゃんの組手というには、ガチではなく、じゃれあいというには高レベルなやり取りを見守る。

百代ちゃんは戦闘スタイルが確立されたのか、ゴリツゴリのパワーファイターだ。多少のダメージは最近会得したらしい、瞬間回復とやらで治してしまう。

なんか、戦闘スタイル被ってる気はするが、百代ちゃんの方が小技の引き出しは多いし、川神波とか無双正拳突きとかの大技も持つてる。

あれ？ これ俺の上位互換？

対して、小雪はヒットアンドアウェイ、トリツキーな身のこなしが持ち味だ。型にハマらず、それでいて、その基盤は積み重ねられた鍛錬に裏付けされた技術で作られている。

小雪の戦い方で、特筆すべきは足の力だ。しなやかで、それでいて強靱な足の筋肉。そこから繰り出される一撃は、軽く出されたものでも人体を軽く粉碎してしまうものへと変貌していた。

「トオー！」

「ハハッ！ ほんと、器用に戦うな、ユキ！」

小雪が跳ね、蹴り、また跳ねる。

百代ちゃんは見切り、受け止め、気弾を飛ばす。

「ほんま、最近の女子は怖いわー」

この一年で百代ちゃんも小雪も、超人へとステップアップしてる。

その力が俺に振るわれないことを切に願う。

そんな見守る俺をよそに、ヒートアップしない程度で百代ちゃんと小雪は河川敷を少しずつ変形させていく。

「最近の修二君は、どこか清々しい顔をしてますね」

「おん？ どうしたよ、急に」

そんな折、笑みを浮かべた冬馬が、すすすつと近寄ってくる。

何故か尻のあたりがヒュンツて寒気を感じた。

「前の何処となく憂いが見え隠れしてた修二君も素敵でしたが、今の修二君もすつごく魅力的ですよ」

「ひえっ」

ねつとりとした声。

いつの間にかやら、冬馬はホモになっちまった。この眼はガチだ。

「じゅーん!! お前なんでこんなになるまで放つといておいたんだテメエ!」

「オメエのせいだろうが! 若が薔薇の道に進んじまったのは!」

「俺が好い男過ぎたつてかあ! ありがとヨオ! クソが!!」

とりあえず、冬馬とは距離を置こう。間に小雪か百代ちゃんを置くしかねえ。

「へるぷみー! 小雪ちゃん! 百代ちゃん!」

「こらー! トーマ、修二のお尻を狙うなー!」

「やつぱり、お前ホモだったのか。前々から怪しいとは思ってたが……」

君たち、助けを呼んだらきてくれるのはいいけど、頭上飛び越えて参上するのは止めない?
ナチュラルに、人の身長以上の高さに跳躍しないでくれ。

「おやおや、やつぱり修二君はガードがしっかりしてますね。あと、百代さん、私はホモじゃなくて、バイですよ」

どつちにしろじやい、俺のケツを狙うな。

「つたく、準！ お前がしつかり面倒見て、ケツでもなんでも差し出してろ！」

「ふぎけんな！ 俺が何で若に掘られなきやなんねえんだよ！」

うるせえ！ 俺は女の子しか受け付けねえんだよ！！

「つたく……あん？」

河原の土手の上、そこから誰かが俺たちを見ていた。薄汚れた服装に、顔を隠すように垂れ下がる前髪、そこから微かに覗く眼は不安そうに足元へと向けられる。

なあんか、会った頃の小雪を思い出すなあ。

準も視線に気づいたのか、土手へと顔を向ける。

「修二、あいつ知り合いか？」

「見たことねえ顔だなあ。うちの学校の奴じゃねえよな、多分」

ふむ、ふむふむふむ。なるほどなるほど。

「あれは逸材だな。将来はどエロいボンキュッボンな美少女になると見た」

「いや、なに言ってるのお前」

俺の美少女スカウターでは、現在の美少女力は10だが、将来的には美少女力114
514になると判定が出てる。

それなら、いまのうちに粉かけておいて損はない。弱みがあるならつけ込むのもいい
だろう。

「カツカツカツ、最近俺様の鬼畜っぷりが薄くなつてた気がするんだよ。そろそろここ
いらで、俺が女の子を侍らせて不敵な笑みを浮かべる、そんな超絶ハンサム霸王だつて
ことを分からせてやらなきやなあ」

「お、おう」

「ま、取り敢えずは餌を撒く。ああいうタイプは追えば逃げるタイプだからな」

俺は、懐からサッカーボールを取り出す。

「お、おい、どうやってそんなところにしまってたんだ？」

「気にすんな。うーし、それじゃあ、お前ら、このボールを使ってリフティングパスゲームすつぞ。許されるのはワンバンまでだ」

「いいよー、修二、ボールちよーだいー」

小雪ちゃんが、ボールを受け取り、器用に一人でリフティングを始める。足という部位を使うことに関して、百代ちゃん以上の技量を持つ小雪ちゃんにとって、リフティングなんぞ目を瞑ってても簡単だろう。

少しボールで遊んだ後、小雪ちゃんは高く蹴り上げる。

「次は準ー！」

「つと、オーライオーライ。高く飛ばしすぎだろ」

運動神経に優れた準も、危なげなくボールを受け止め、ボールを冬馬の方へ柔らかく飛ばす。

冬馬もワンバンさせ、安定したりフティングで、百代ちゃんへとボールをパスする。

「思いつきり行くか? 修二」

「いや、勘弁してクレメンス」

「ちえー」

百代ちゃんが軽く蹴り上げ、ボールが50メートルくらいの高さまで飛んでいく。

あのさあ? 何でボール破けてないのか不思議なくらいのパワーで、蹴り上げる必要無いじゃん?

高く蹴り上げた過ぎたせいか、ボールが風に煽られてあらぬ方向へと流れていく。

「あーあー、しょうがねえなあ。……おん?」

ボールが流れた先、遥か上空からの落下速度が加わったボールの行き先は、あの少女の真上であった。

あのボールに当たれば怪我は必至、下手すりゃあ骨折とかの大怪我に繋がりがねない。

「やばっ、直撃コースだ」

百代ちゃんも気づいたのか、焦ったように気を練る。気弾を飛ばして、ボールを弾き飛ばすつもりらしい。

だがしかあし！俺がこんな美味しい場面を逃すわきやあねえだろ！

「とっつー！」

気のパワーを全開だ！一瞬で気を全身に練り込み、地面を蹴る。そのまま、土手の上にいる少女の元へと、ひとつ飛びで駆け上がる

少女の眼前、俺が駆けつけた衝撃で、ふわりと風が舞い上がる。

「えっ？！」

浮き上がった前髪に隠れていた瞳は、驚きに見開かれていた。

藍色の綺麗な目に、俺はニヤツと笑う。お姫様抱っこで抱きかかえ、落ちてきたボールを土踏まずで受け止める。

「大丈夫か？ 嬢ちゃん」

少女の顔を覗き込み、ボールを見ずに小雪の方へと蹴り飛ばす。

小雪がウエイイと言いながら、オーバーヘッドシュートで準へと叩き込んだのを他所に、俺は少女を下ろしてやる。

「悪かったな、怪我はねえか？」

「あ、うん……」

「そりゃあ、重畳。お前さん、名前は？」

「み、京！ 椎名、京……」

椎名京、京ちゃんねえ。よしよし、掴みは上々。

やつぱ、なんか小雪に似てるなあ。うーん、家庭に難あり、それに学校でも友達居なさそうなの霧囲気。

本人の性格も、ハッキリ言っちゃえば根暗。不摂生のせいかな、体つきも細い。

こりゃあよお、女の子ソムリエとしてめっちゃ許せねえよなあ。

「京ちゃんな、良い名前じゃあねえか。よろしくな」

「あ、ありが……と」

んじやま、攻略開始だあねえ。

京ちゃんを遊びに誘ったら、キョドリながらも、嬉しそうに混ぜてくれた。準はまたかというような顔をしていたし、百代ちゃんも後でしばらく顔をしてた。

小雪と冬馬は、いつも通りのニコニコした様子だったが、小雪が一瞬だけ京ちゃんを見定めるような目をしていたが、どうやら問題なかったようで、今ではむしろ京ちゃんを構うようにはしゃいでいる。

「へえ、椎名さんは、やっぱり私たちとは別の学校だったのですか」
「う、うん。し、修二くんたちは、いつもここで遊んでるの？」

京ちゃん、運動神経は優れてる。それこそ、準よりも動体視力や体さばきは上だ。何か武道でも修めてるのかと思ったら、案の定、弓道をしているらしい。
そんな折、百代ちゃんが思い出したかのように、教えてくれた。

「確か、聞いたことがあるな。弓の椎名だったか、有名な武家だろ？」
「……………うん」

百代ちゃんが京ちゃんの家のことに触れると、京ちゃんの顔はあからさまに暗くなる。百代ちゃんも、触れちゃいけない話題だと察したのか、気まずそうに顔を逸らす。
「やっぱ、家庭のことは地雷っぽいなあ。やっぱりこの川神、ロクな大人が居ないのであ？」

「あー、まあ、家のことはいんじやあねえか？ 京ちゃんは京ちゃんなんだしよ」

古い家によくあるような厳格な家だとか、両親がとんでもない奴だとか、ぶつちやけ
どうでもいい。むしろ、良家の令嬢に悪いこと教えるとか、興奮しちまう。

昼は貞淑、夜は淫乱とか、何処ぞのAVみたいなシチュだが、男が好きなシチュだから
需要があるのだよ。

「修二、くん……」

俺がそんなことを考えてたら、京ちゃんがどこか熱っぽい表情を向けてくる。

ずっと欲しかったものを、あっさりともらえたかのような、そんな感じだ。

チョロっ。俺つてば、なんかクツソくだらないことを考えてただけだ。

「なあ修二、確か、さつき聞いた学校、風間たちの学校だったよな」

「あん？　そういやあ、そうだな」

京ちゃん、学校に友達が居ねえか、今度風間たちに聞いてみるか。

まあ、今はんなことあどうでもいいか。せつかく遊んでんだ、難しいことは後でいいんだよ。

そんなこんなで、日が暮れるまでいろんな遊びに熱中した。

三対三のバスケットボールをしたり、百代ちゃんと小雪がどちらが俺を空高く打ち上げられるかとか。ちなみに後者は百夜ちゃんの発案で、力一杯投げられて雲まで届くかと思つた。

マジでシバこうとされるよりはマジだが、小鳥ちゃんとこんにちはする羽目になるとはなあ。

「んじゃあ、そろそろお開きにすつか」

「……そう、だね」

日も沈み、カラスの鳴き声が夕暮れの河川敷に響く。

俺がそろそろ解散するかと声をかければ、京ちゃんは残念そうにする。俺たちは明日学校で会えるが、京ちゃんは別の学校だからな。

てか、そんなに家と学校が嫌かね。こりや、早めに風間に話聞きに行つた方がいいかもしれないね。

「なあに、また明日遊ぼうぜ、京ちゃん」

「…………え？」

俺は京ちゃんの頭を、くしゃくしゃと撫でてやる。その綺麗な藍色の目が、俺を見つめてくれる。

ようやく、真つ直ぐ俺を見てくれたか。

うっし、磨きのかかってない美貌の卵を、俺は大切に育ててやろう。

「んだよ、京ちゃんは可愛いんだから、笑ってくれよ。また明日って、笑顔で別れようや」

「…………うん！」

俺がそう言えば、京ちゃんはぎこちない笑顔を返してくれる。

うんうん、やっぱ、暗い顔より笑ってる方が、女の子はイイネえ。

第19話

京ちゃんと一緒に遊ぶようになり、そこそこの日数が経った。やつぱり、そもそも大人しい性格なのか、あまり声を上げてはしゃぐことは無かったが、楽しそうに笑うことは増えた。

そんなある日、風間たちの遊ぶ空き地へと俺は足を運んでいた。

「よお、今日もクソ暑い中、仲の良いこった」

「お、修二！ 久々じゃねえか！ なんだなんだ！ 今日遊びに来たのか？」

「修二ー！ 一緒に遊びましょ！」

翔一と一子ちゃんが、懐いた犬のように駆け寄って来る。

夏ということもあり、一子ちゃんは薄着な上に、動き回るのが好きな一子ちゃんの裾がめくり上がりチラチラと健康的なお腹が見え隠れする。

「ンー！ デイツモールト!!」

やはり、夏という開放的な季節はいい。女の子のガードも緩くなっているし、山海川とアバンチュールなイベントに事欠かない。

それに、一子ちゃんの懐きようは、昔飼っていた犬のジョージを思い出す。あいつも俺が呼べば直ぐに駆け寄ってきたもんだ。

「ゲツ、修二かよ」

「なんだあ？ もつと嬉しそうな顔しやがれや、世界一のハンサム様だぞ？」

そんな一子ちゃんに対して、岳人はまるで天敵でも見たかのような顔をしている。

最近色気づいたのか、女子にモテようと筋トレをしているようだが、俺のハンサム力に怯えてるようだ。

カハハ、俺に勝てるわきやあねえだろうがヨオ！

「フツ、貴様が来れば、特異点の乱れは最大限となる。そうか、時が来たのか……」
「相変わらず、いてエ奴だなあ。まあ、将来のために、記録は残しといてやるか」

優しい俺は、大和の奴の雄姿をビデオカメラに納めてやる。

「あー、悪いが、翔一、今日はオメエらと遊びに来た訳じゃあねえんだ」

「ん？　じゃあ、何しに来たんだ？」

「お前ら、椎名京って知ってるか？」

俺が京ちゃんの名前を出した瞬間、大和と岳人、卓也は顔をしかめる。

「うげ、おまえ、椎名とかと知り合いなのかよ」

「……なるほど、椎名か……」

あー、もうこいつらの反応でだいたい察した。

「確か、あのいつも一人で居る子だよ。その子がどうしたの？　修二」

「んにゃ、特になんもねえよ、一子ちゃん。おい、岳人、お前もしかして、京ちゃんのこといじめちゃあねえだろうな？」

「……な、そ、そんな訳ねえだろ！　椎名のことなんて、知らねえぞ！」

あーはい、黒。とりあえず、岳人の顔を殴り飛ばしとく。

女子にモテたいってのに、んなカッコ悪いことしてどーすんだよ、このダボがつ。

「つたく、まさかお前らが関わってるとはなあ。まあ、クラスメイトみたいだし？ 同調意識ってやつもあるんだろうさ？ おい、大和、おめえも岳人みてえになりてえか？」

ふつとばされた岳人が、ピクピクと痙攣して泡を吹いている。それを見た大和は顔を青くして首を横に振る。

俺は優しい笑顔を浮かべて、大和の肩に手を乗せる。

「それじゃ、詳しいこと教えてくれる？」

大和から詳しい話を聞いたら、発端は京ちゃんの母親にあるらしい。なんでも、他の

保護者と不倫してたとのことだ。それももうズブズブの関係だったらしい。

その話が学校内外ですぐさま広まり、淫売の娘というレッテルを京ちゃんは貼り付けられた。

子どもってのは単純なもので、何か責め立てれるモノがあればそれを突つかずにはいられないのだ。

ましてや、今回は大人たちが汚らわしいやら、尻軽とやら悪評を声を大にして話を広げてやがる。子どもからすりゃあ、意味がわからなくても、虐める理由にはなるだろうさ。

さてさて、そんなこんなで、京ちゃんは、椎名菌やら、淫売の娘やら、色々言われているらしい。無視して、孤立させ、じつくりと捌るようなそんなイジメ方らしい。

「なるほどねえ」

ぶつちやけ、京ちゃんの母親より俺の方が尻軽だからなあ。浮気、不倫は、実際にミサゴちゃんまでヤツちまつてるし。

ミサゴちゃんだけじゃなく、あずみちゃんや亜巳ちゃんに史文恭ちゃん、ついこの前も、神速の女とまた事故って、そのまま交通事故ツクスしたしなあ。

帝の奴も、浮気相手孕ませて大変なことになっちまってたみたいだし、ロクな奴がいねえな？ 川神には。

「おい大和！ そんなことになってるなんて、俺知らなかつたぞー！」

「キャップやワン子は知らなくて良いことだったんだ。下手に俺たちが首を出して、皆に飛び火させる訳にはいかない」

「大和……」

翔一はいい子だねえ。今にも何かしでかしそうだ。イジメに対して、義憤を燃やせるって奴は少なくないかもしれんが、そのために動けるのは本当に少ない。

大和の言うことも、賢い立ち回りの一つだ。触らない、見て見ぬ振りをしてれば、対岸の火事で済むからな。

「まあ、だいたいは把握できたわ。ありがとな、大和」

「待て、修二。貴様、椎名京をどうするつもりだ」

「何だよ、大和。俺がお前らの学校に殴り込みに行くとも思ったのか？」

「お前と言う特異点の行動は予測できない。ならば、お前がファミリーに害を為さない

ように、俺は釘を刺さなければならぬ」

ほお、生意気にもこの俺様の行動に口を挟むつもりか。

まあ、別にこいつらをどうこうする訳じゃねえ。

てか、殴り込みねえ。それもそれで、いいんだが、ぶつちやけ、他校で起こってるいじめの解決とか、面倒くさい、ダルい、女の子とイチャイチャしてたい。

「俺はもつとスマートなやり方でやるってんだ。と言うわけで、翔一、お前ら風間ファミリーに俺からミツシヨンをくれてやるよ」

「修二、急に何だ？ 椎名を助けるのか？」

助ける助けないとか、んな上から目線で俺はヤラねえよ。やりたいからヤル、気に入らないからぶん殴る。そんなぐらいでいい、そんなぐらいがちょうど良い。

「二週間、いや、二週間だな。二週間で、学校のイジメを解決しろ。お前ら皆んなでやりや、それくらいできるだろ」

「おい、修二！ 何で、俺らがお前の命令でそんなことしなきゃいけないんだ！」

いつの間にか復活した岳人が、俺に突っかかってくる。手が出てない辺り、俺に敵わないことを理解してるのだろう。

まあ、お前らはポコポコにされても誰かの言いなりになるタイプじゃ無い。その辺りは、俺もきちんと評価してるぜ？

「只とは言わねえよ。ホレ」

俺は岳人に、異能で作ったピ〇ポテトを投げ渡す。風間や大和にも、菓子を出して、投げ渡す。

一子ちゃんには、裸のマシユマロを投げてやる。一子ちゃんは綺麗なジャンプを披露し、そのままマシユマロを口に入れてうまうまと顔を緩めている。

カワイイ！

「二年分だ、一年分のお前らの菓子を出してやるよ。好きなやつを好きなだけな」

ゲンナマは流石に小学生にはねえ？ その辺り、俺もまだまだ良い子ちゃんだろ？

「オツケー！ 修二、お前からのミツシヨン、たしかに風間ファミリーが解決してやるぜ！」

翔一が、カッコよく指を突き出しながら、俺へと宣言する。他のメンツも、やれやれと言った顔をしたり、しようがねえなあという顔だったりだが、号令一つでこいつらの意思が固まった。

やるネエ、俺ほどじゃあねえが、中々のハンサムっぷりじゃねえか。こりや、一週間でも十分だったか？

「キャップが言うなら、僕も手伝うよ」

今まで喋ってなかったせいで、影が薄かった奴がようやくやく会話に入ってきた。

「あん、お前居たの？ モロチ○くん」

「師岡！ 師岡だよ！ そんな下ネタなあだ名じゃないよ！」

「あー、はいはい、分かったよ。パ○モロくん」

「だから、師岡だって！」

うるせーな、どっちでも大差ねえだろ。

京ちゃんの学校のことは、取り敢えず風間ファミリーに任せるとして、俺は俺でやるうと思うことがあった。

そのため、愛車であるリアカーに腰掛けながら、いつもの河川敷の土手で京ちゃんを待っていた。

「ハアハア、修二……待った？」

「いんにゃ、全然待ってねえぜ、京ちゃん」

ランドセルを背負ったまま、息を上げている京ちゃんが。学校終わった後と言つてたが、走ってきたのだろう。

俺に早く会いたい、そんな気持ちが見える京ちゃんの態度がいじらしく、愛おしく感じる。

「さてさて、京ちゃん、今日俺は京ちゃんをどこに連れて行くと思う？」

「え……？」

俺は京ちゃんの手を引き、リアカーへと乗せる。京ちゃんのキョトンとした顔が、やけに心地よく感じる。俺はリアカーを曳き、大地を力いっぱい蹴り出す。

超人的な力で走り出したマシンは、殺人的な加速度を出し、街を駆ける。

「風を切り！ 地を踏みしめ！ どこまでも行こうじゃあねえかあ！」

「修二！ どうしてこんなことを!?!」

京ちゃんは必死に、リアカーの取っ手にしがみついている。強すぎる風に目を瞑り、風に掻き消されないように慣れない大声を上げる。

俺はそれを横目に高笑う。

「いいか！ 京ちゃん！ くつそくだらねえ事ばつかだつたらな、こうやつて全部放り投げちまつてもいいんだぜ！」

家庭？ 学校？ いじめ？ んなこたあどうでもいい。んなもんは、鼻をかんで丸めたティッシュよりも価値がねえ。

この目の前の可愛い少女を、そんなクソくだらないしがらみが縛っちまつてるのなら、それを解放してやるのは俺の様なハンサムの使用人だ。

だから、俺が手を引いて連れ去つてやろう。とつておきの策を教えてやろう。

「逃げげるんだよおおお！ スモークーいいいい！」

カハハ、二週間ありやあ、日本横断くらいできるだろ。北から南、美味しいもの食つて、温泉入つて、いい旅になるぜエ？

な？ しがらみなんてくだらないだろ？

楽しく生きようぜエ、京ちゃんよお。

京ちゃんとの二週間に渡る旅行は、日本を飛び出すこととなった。日本海を渡り、シ
ルクロードを駆け抜け、ヨーロッパを横断し、アメリカを制圧前進し、太平洋を駆けた。
そして――

気づいたら、一ヶ月経っちゃってた。

「いやあー、国内で収まるつもりが、世界旅行になっちゃったよ」

「いや、おかしいだろそれ！ 急に姿消したと思ったら、なんで地球横断してんの!？」

久々に帰ってきた川神の地だが、流星に一ヶ月も顔を合わせてなかったら準のツッコ

ミも新鮮味を取り戻す。

俺の隠れ家兼ヤリ部屋マンションに、いつものメンバーが久々に集まった。久々なのは俺と京ちゃんだけか？ まあ、いいか。

ちなみに、小雪と百代ちゃんからの折檻は既に済まされた後である。

「んだよ、きちんと書き置き残してたろ？」

『旅に出ます。探さないでください』ってメモ書きだけな！ ったく、俺や若はともかく、ユキとモモ先輩がどんだけ心配したと思ってるやがる」

しゃーないだろ、女口説き落としてる所だつてのに、他の女に安否連絡とかしてられるか。

その小雪とモモちゃんは、京ちゃんを交えてテレビゲームをしている。

それ、俺がやろうと楽しみにしてた新作ソフトなんだけどなあ……。

「んで、風間たちはどんな様子だったのよ。まあ、時間はたっぷりあったんだし、余裕じゃろ」

「ええ、彼らは上手くやってくれましたよ。お陰でイジメは無くなり、学校はひとまず

平和になったと言えるでしょう」

冬馬は、俺が部屋に用意してたワイングラスで葡萄ジュースを飲んでいる。こいつもこいつで、子どもらしくねえなあ。

「そりゃあ重畳。まあ、誰がどうこうしたとかはいいや、面倒臭いし」

「それで、修二君の方はどうだったんですか？ 京さん、随分と吹っ切れた様ですが」

「まあな、もう京ちゃんも大丈夫だろ。イジメも、親も。それよりも、楽しいことがあるって知れたからな」

俺は欠伸しながら、肌が黒く焼けた京ちゃんを眺める。

佇まいは前と変わらない。だが、前にはなかった芯みたいなのが生まれている。オドオドと人の顔を伺う様な怯えは無くなった。

無くなったんだがなあ……。

「修二、何話してるの？」

京ちゃんが、俺の背後からしなだれかかってくる。甘い声を耳元で囁き、熱の籠った吐息が耳をくすぐる。

「ん、くすぐった。何でもねえよ。ただ、京ちゃんも強くなったなあ」と

「そう、修二が私の話をしてくれてたんだ。両想いだね。結婚して？」

背中から俺の胸元に回されていた手が怪しい動きをする。

コラ！ さりげに乳首を弾くんじゃありません！

感じちやうでしようが！

「まったく、おませさんが」

「あつ」

京ちゃんの拘束を外し、京ちゃんにデコピンをする。

ペッティングまではしてやるが、本番は身体が出来てからじゃあねえとな。せめて高校に入ってからだわな。

「修二の愛が痛い……でも、痛いのも気持ちいい……」

「無敵か、こやつ」

京ちゃんは確かに強くなった。イジメも家庭の問題も、自分で跳ね除けられるだけの芯を手に入れたと思う。

だが、俺はとんでもないラブモンスターを目覚めさせてしまったのかもしれない。それくらい京ちゃんは、俺へと好意を向けてくれる。

んー、重い愛も心地よい。悪くない、キャラが立つてるヨオ、京ちゃん。

「相変わらず、おモチになられるこつて」

「カハハ、悪いこと教えただけだよ。ちなみに準、モチるのは俺がハンサムだからだ」

「そう、修二には悪いこと教えられちゃったの。恥ずかしくて人には言えないようなことをね、ぼ」

頬に手を当て、顔を赤らめる京ちゃん。

京ちゃんを侍らすのは気持ちいいが、ちよつとルート選択ミスると監禁ルート行きそ
うで怖いのかなあ。

まあ、そんな時はそんな時か。

「背中から刺されんなよ、修二」

「カハハ、安心しろよ準。俺がんなへマするかよ」

ピコーン！

あれ？　もしかして今、フラグ立った？

第20話

「シュージ！ シュージ！ 死なないでくれ！」

可愛らしい子が俺に、必死にしがみついている。

綺麗な空の様な蒼い瞳に、いっぱい涙を浮かべて。陽の光で輝く金色の髪を、濡れるのも構わずに振りかぶり。

そんな必死な金切り声に、沈みかけていた俺の意識が引き戻される。

「……ぎゃー、ぎゃー……うる、せえぞ」

「シュージ……？ シュージ！」

何とか、声を絞り出す。息苦しいし、口から今にも吐き出してしまいそうな血の味が気持ち悪い。

てか、あーあー、お嬢様がこんなに血で汚れちゃって。早く洗わねえと、色が落ちねえぞ。お父様とやらに買ってもらったお気に入りワンピースなんだろう？

ただまあ、綺麗な柔肌に傷一つねえようでよかった。お前のような子に、傷痕は似合わないわねえからネエ。

「がんばれ、あと少しで救急車が来る！ だから……だから！」

祈るような彼女の声に、俺は手を伸ばすことで応える。

口を開けるのも億劫だ。どうやら、今回は本当にヤバい状態らしい。

彼女は伸ばされた手を掴み、自分の頬へと当てる。血の手形が、彼女の頬を汚してしまふ。それでも彼女は、自らへと手を当て続ける。

離れないで、行かないで、そんな感情が触れ合った部分から伝わってくる。

「つたく、なんてかお、してやがる……」

随分とまあ速攻でデレおって、可愛いやつめ。チヨロインは嫌いじゃあねえぞ？

……ああくそ、また意識が飛んでいきそうだ。血を流し過ぎた。

やろお、人の体穴だらけにしてくれやがって。これで死んでなかったら、ぜってえ復讐してやる。

「なあ、クリスマス……」

一瞬だけ、小雪や百代ちゃん、冬馬や準、ミサゴちゃんやあずみちゃん、風間ファミリーの奴らやら、いろんな奴らの顔が過ぎる。

クソ、柄にもねえこと思い出しちまった。

「カハハ、なあ……キスして、くれよ」

恥ずかしかったから、最後の最後まで俺らしくいてやろう。

「シュージ、ダメだ、ダメだダメだ。目を閉じるな！ キスなら後でいくらでもしてやるから！」

マジで？ 何でもするって？

ああ、でも……、眠いんだよ。いったん、寝かせてくれや……。

悪いな、クリス。

「来たぜ！ ドイツ！ 待ってたか！ ドイツの美女たちよ！ 俺が来たぜ！」

京ちゃんが俺たちの輪の中に加わってから、俺の周りはさらに賑やかになった。
風間ファミリーとの交流も増え、何時ぞやだったか、竜舌蘭の花を一緒に守ったこと
もあった。あの台風の中呼び出された時は、肝が冷えた。

百代ちゃんや俺はともかく、あの貧弱ボーイどもはマジで死にかねない状況だった。そんなこんなで俺たちは小学校も最終学年になり、百代ちゃんは中学一年生。聞いた話じゃあ、既に学校の不良どもを従えて、女の子を侍らせて優雅な学校生活を送っているらしい。

あれ？　なんか俺に似てきてね？

まあ、各々平凡で愉快的日々を過ごしているが、ちーとばかり、スパイスが足りないかと常々思っていた。

「んじゃ、修二、俺はここで別れるが、あんまりハメ外しすぎるなよ？」

「わーってるってよお、帝。ただ、こちとらお前さんのもめごとにつき合ったんだ、少しは見逃せよ？」

異国の空港で、大量のボディガードに囲まれながらの密談は理由もなくワクワクする。

どこか漠然とした退屈を感じてる時、帝から護衛の誘いがあり、外国へと向かう機会があった。その依頼料に目がくらんでホイホイと付いてきてしまったが、一国の軍隊と喧嘩しかけるといいう大惨事になりかけた。

まあ！ 権益独り占めしようとする帝と俺が悪かったんだけどね！

その後、帝の金でドイツ観光をさせてくれるとのことだったので、俺は喜んで遊ぶ金をせしめてこの空港に至る。

「んじゃ、また一週間後な。置いてくくなよ？」

「そんなときや、人を置いておく。てか、お前時間も忘れて腰振りすぎるなよ？」

じゃかあしい！ きつとこれから出会う異国美女が俺を離してくれんのじゃい！
俺は、帝たちから足早に離れ、綺麗な街並みへと思いを馳せる。

うーん、カハハ、どんな美女に出会えるかねえ。

「迷ったわ。ここどこだよ」

流石に土地勘も、風土も違う異国の街を気ままに練り歩きすぎた。太陽も頭のとつぺんにあるせいで、方角すらわからなくなってしまった。

でかい城があるから、なんとなくそれを目印にすりやあいいんだが。

「てか、なあんか、街が騒がしいなあ。やたら人が走り回ってやがるし」

美しい河と石造りの建築物に包まれた風光明媚な都市だが、それをぶち壊すかのよう
に走り回つてゐるやつらが多い、なんだ？ 祭りつて雰囲気でもねえな。テロか？

ああ？ せつかく人が気分よくドイツの女をナンパしようつて時によお。

「あーあー、どつかで飯食つて日当たりのいいところで昼寝でもすつかねえ」

俺ほどいい男なら、餌をまく様に振舞つているだけで女の側から寄つてくるだろう。

そんなことを町の大通りを歩きながら考えていたら、目の前に黄金が飛び出してき
た。

「うわっ!？」

「のわっ!？ つと、あぶねっ」

それが少女の綺麗な金髪だと気づけたのは、これまた綺麗な碧眼と至近距離で見つめ
合うことになったからだ。

咄嗟に受け止めて、足を踏ん張らせる。

「おいおい、大丈夫か？」

「あ、え、あ、す、すまない……」

俺が手を離すと、その少女の全体像が見えるようになる。

一目で高級と分かるワンピース、手入れの行き届いたお髪に、玉のような白い肌品のある佇まいに、生まれながらに授かった美しさ。

明らかに上流階級のお嬢様な少女が、これまた優雅に頭を下げる。

「別に構いやしねえよ、俺もぼーっとしちまってたしな」

「いや、道走って、飛び出したのは私だ。すまなかった」

凜とした物言いは、俺の頭の中に姫騎士という三文字が思い浮かばせた。

くっコ口とかめっっちゃ似合いそうだな、この子。

「まあ、素直に受け取っとくよ。見たとこ、急いでたみたいだが、良かったのか？」

「そうだった！」

そう言うなり、彼女は俺の体の影に隠れて周囲を見回す。

「あつ」

そして何かを見つけたのか、声を上げた後にさらに俺の体の影へと身を隠す。

俺が彼女の視線の先へと目を向けたら、屈強な男たちがこれまた周囲を見回しながら街を歩いていて。明らかに堅気な雰囲気じゃ無いし、そこはかとなく血の気配を感じさせた。

「もしかしてお前さん、あいつらから逃げてるのか?」

「ああ。もし捕まったら、ひどいことをされるんだ」

ふーん、酷いことネエ。おしりペンペンとかかな?

まあ、あの男たちはギャングやマファイアとか、そう言うアウトローな感じはしない。どちらかと言えば、軍人やら警官とか、そういう護る側の人種だろう。

「そんじゃあ、逃げるの手伝ってやろうか?」

「え？」

さしづめ、逃げ出したお嬢様とその護衛つてところか？ 何で逃げ出したかは分からないが、こんな面白そうなイベント、見逃す訳にやあいかねえよなあ。

「困ってんだろ？ なら、助けてやるよ」

「そんな、知らない人に着いて行くなつて、お父様が……」

困ったように戸惑う彼女の手を取り、物陰へと身を潜める。

そして、さつきまで俺たちが居た場所を先程の男たちが走り抜けていく。

それを見送った後、腕の中の彼女へと顔を向ける。

「織原修二だ。これで、知らない奴じゃ無いだろ？」

「クリス……クリステイアーネ・フリードリヒ……だ」

おつけおつけ、クリスちゃんな。いい名前じゃないか、ますますくつころして欲しくなつたぞ。

んじやま、軍か警察か、分かりやしないが、追いかけること行こうかねえ。

俺とクリスちゃんの逃亡劇は、このドイツ、リユーベック全域に及んだ。俺が黒服たちを避け、クリスちゃんの手を引いて隠れ潜んで歩いていく。

最近、川神院や九鬼から姿を消すために隠形の術をあずみちゃんから教えてもらった。要は視点の誘導と気配の薄弱化らしいが、あずみちゃんに見せてもらったらできるようになった。

「そういや、クリスちゃんは目的地とかあるのか？」

「う……そ、そうだな。えーと、実はだな……」

「おん？」

「私、家出を、してきたのだ」

気不味そうに、クリスちゃんは俯き気味に告白する。

そして、それからつらつらとクリスちゃんは、事情を話してくれる。

何でも、発端は父親が過保護すぎることにらしく、周りも父親の部下だからか、自分に優しくしてくれるが、それも度が過ぎてるとのことだ。

「自分は、優しくされるのは分かっているが、甘やかされたい訳では無いのだ……」

欲しいものは何でも買ってくれるし、軍人である父親の部下は優しく、まるでお姫様のように扱ってくれるそうだ。

今までは気にもならなかったが、最近になって、それを鬱陶しく感じるようになったらしい。

そのまま溜まり溜まった不満が爆発、家出という結果に繋がったらしい。

「なるほどねえ。やっぱ良いところのお嬢さんだったか」

「すまない。私は、シュージを騙して、お父様の部下たちから逃げ延びたのだ」

ほんと、蝶よ花よと愛されて育ってきたのだろう。清廉潔白で、真っ直ぐない子ちゃんじゃあねえか。

プチ反抗期が来たくらい、むしろ真つ当な育ち方してやがると思うがねえ？

「別に構いやしねえよ。俺は俺がしたかったから、に手を貸しただけだ」

「したかったから……？」

「ああ、クリスちゃんもそうしたかったから、家出したんだろ？」

ああしたい、こうしたい、そう感じたままに行動するのは大切なことだ。

だから、クリスちゃんは、したいようにするといい。その結果大人に迷惑をかけたなら、後でごめんなさいすりあいいい。

俺？ んなへまはしねえよ。

「さてさて、んじや、クリスちゃん。せつかくの家出だ。普段は行けねえような場所に行こうや」

クリスちゃんとの家出デートは、それなりに楽しんでいただけたとは思う。
アイスを食べ歩きしながら、

「んんん？ テメエは一体何のようだ？」

俺がクリスちゃんを背中にやり、暗がりへと目を向ける。いつ何が飛んできてもいいように身構える。

突如、暗がりから針が飛ばされてくる。それを一本も逃すことなく掴み取る。

「先端に毒か。随分とまあ、粋なことをするネエ？」

「……………」

暗闇から現れたのは、のつぺりとした東洋人の男だ。目には闇しか存在せず、その服装も闇に溶け込むように黒で統一されている。

表情から感情は読み取れない、殺意も悪意もなく、ただ空虚で静かな目だけが俺たちを見据える。

「こちとらデート中なんだわ。悪いがお引き取り……っ！」

男が取り出したのは鎖鎌。素早く手首の回転だけで振り回し、風切り音を鳴らす。音速を超えて回された鎖鎌は目の錯覚で円盤のように見え、今にも勢いよく俺たちへと襲い掛かろうとしている。

男の手首がブレる。思考するより速く、一呼吸の間もなく俺はクリスを引き倒した。

「きゃっ！」

なるお、今のは俺じゃなくてクリスを狙ってやがった！

「クリス！ ぜってえに顔出すなよ！」

俺は再び振われ、弧を描く鎖鎌を足で弾く。そして、石畳を蹴り碎き、飛び散った破

片を襲撃者へと投げつける。

「……………」

襲撃者は弾かれた鎖鎌を素早く手元に戻し、飛んできた破片を再び鎖鎌を回転させることで全て打ち弾く。

「つたく、まあたマスタークラスかよ。なんだってこう、俺の行く先々にはこんな展開ばっかなんだよ」

そんなに超人が居ていいわけねえだろうがよお！

俺は踏み砕いた石畳の亀裂に手をかけ、一気に掘り起こす。

地面を地層ごと掘り起こしてしまえと、力いっぱい、通路一面の地面を畳返しの要領で掘り返し、投げつける。

「オラア！ 観光名所破壊アタックじゃボケえ！」

襲撃者からすれば、壁が突然目の前に現れたかのようにも見えるだろう。
「……………」

しかし、銀線が一筋走り、即席の畳返しは切り捨てられる。

襲撃者は鎖鎌を捨て、その手には曲刀を携えていた。

そのまま、俺たち、正確にはクリスに追撃を仕掛けようとした時だった。

「……………」

「あん？ んだこの音」

何か機械の駆動音が、空から聞こえて来る。それは段々と近づいてくるかのようにだった。
た。

俺と襲撃者は、揃って空へと意識を向ける。

空から、鉄人兵団が降ってきた。

俺が砕いた街並みをさらに砕いて現れたのは、鉄の巨人だった。

蒸気を吐き出し、巨大な鉄球のついた棍棒を携えている。俺たちと襲撃者の間に立った鉄人は、顔だけをこちらに向ける。

「ご無事でしたか！ クリスお嬢様！」

「テルさん！」

クリスが嬉しそうに声を上げる。そこに、さらに声が重ねられる。

「俺も居るよー、お嬢様。そら、マキビシの術、合わせて金縛りの術！」

音もなく俺の側に降り立ったのは、軍服の麗人。プラチナブランドの髪をたなびかせ、指で印を結ぶとともに襲撃者の足元には棘が撒かれ、周囲にはピアノ線のようなものが張り巡らされる。

「リザさん！」

「まったく、家出するにしても、タイミング悪すぎだよ、クリスお嬢様」

「中将を狙うテロリストが潜伏したという情報があり、猟犬部隊総出でクリスお嬢様を探したのです」

クリスちゃんは、見知った顔が現れたことで、僅かに緊張が緩んだらしい。糸の結界に囲まれた襲撃者は、観察するように俺たちを見つめているだけだ。

俺はいつでも動けるように、気を張っておく。

「それで？　クリスお嬢様、そつちの日本人の子どもは誰だい？　見たところテロリストって感じじゃないけど」

「ああ、彼は——」

クリス、そして、鉄人とリザさんとやらの意識が一瞬だけ、ほんの僅かな間だけ襲撃者から緩められた。

その隙を、マスタークラスが見逃す訳がなかった。

「え……？」

一呼吸の間も無く、糸の結界は切り裂かれ、鉄人はすり抜けられたことにすら気づかずに、襲撃者は俺たちの目の前へと迫っていた。

「ちいっ！」

唯一反応できたのは俺だけであり、そのままクリスを殺さんと、振われた凶刃を、膝と肘で挟み留める。

「らあー！」

そのままへし折ってやるが、今度は毒が塗られていたのか。壊死したかのように、肌

の表面が崩れてしまう。

やっぱあるよなあ、してるよなあ。そういうことしそうだもんなあ！

「油断してんじゃあ、ねえぞ！　ゴラア!!」

激痛が走るのを我慢して、のつぺら面をそのまま殴りつける。そのまま吹き飛び、レングの壁をぶち壊しながら、家の中へと吹っ飛んでいく。

「今すぐここから、クリス連れて逃げろや！　邪魔なんだよー!」

砂煙の中から、またしても煌めきが瞬く。それはクリス、そして、近くにいたりザを狙っていたものだ。

「つそがあー!」

クリスだけならまだしも、もう一人分となると手が足りない。

仕方なく、俺の身体自身を使って庇う。

右肩に一本、右腕に二本、合計三本の毒針が突き刺さる。
即効性の毒なのか、酩酊感が襲う。

「……………」

顔の骨を砕かれながらも、顔色一つ変えずに襲撃者は現れる。その手には、小刀のよ
うな暗器が、見るからにヤバそうな液体を滴らせながら握られていた。

「ああ、くそ、頑張れよなあ、俺」

心臓が激しく動悸する。熱を持った身体を、今すぐにも引き裂いて冷ましてやりた
い。

「そこまでだ！　くらえ！　激震!!」

鉄人がその棍棒を振り、襲撃者に攻めかかる。動きは遅いが、その破壊力はかなりの
ものだろう。

だが、その遅さは目の前の襲撃者には致命的だった。襲撃者が小刀を滑らすように振るえば、その棍棒はまるでバターののように切り裂かれる。

返す刀で、そのまま鉄人の首へと刃を滑らせようとする。

「ボケが！ 逃げろって言っただろうがよお！」

俺は2人の間に入り、鉄人に刃が届く前に襲撃者の手を蹴り上げる。蹴り上げた勢いのまま身体を回転させ、鉄人をクリスたちの方へ投げ飛ばす。

「テル！」

「……ぐつ、大丈夫だ、リザ……だが、マズイぞ」

これでひとまず、あいつらと目の前ののっぺらとの距離は取れた。

だがなあ、代償がデカすぎた……。

右半身の感覚が無くなってきた上に、目が霞む。

「おいおい、わりいな。それじゃあ、もう手首は使いもんになんねえか？」

だが、やつこさんの手首もへし折ってやった。イーブンには程遠いが、まあ、敵が無傷よりはマシだマシ。

「クリス！ そのボケ連れてさつさとどっか行きやがれ！ お前がいるとまともに戦えねえんだよ！」

「え……」

執拗にクリスを狙うこいつをここで逃すわけにはいかない。クリスを庇いながら戦うのも限界がある。

俺は丹田から息を大きく吐き出し、呼吸を整える。

気を体内の活性化にフルで回し、毒の中和に専念させる。

さて、気合い入れるか。売られた喧嘩は百倍で買ってやらなきやなあ!!

side : リザ・ブリンカー

「リザ、私たちの任務はお嬢様の保護だ。ここは撤退するぞ」

目の前の同僚が言い出したことが、俺は一瞬信じられ無かった。

「なに、言ってるんだ！ テル、あんな子どもに、アレの相手をさせるつもりなのか!」

今も、目の前では超人たちの攻防が繰り広げられている。黒装束の男が暗器を振るい、それを避けながらも拳撃を繰り出す少年。

毒に侵されているのだろう、血を吐き散らしながらも戦う少年は、常に私たちを庇うように立ち回っている。

「私には分かった……アレはもう、私たちの手に負える敵ではない……。あの時、彼が間に入らなければ、私は死んでいた」

切り裂かれた武器の片割れを俺に見せながら、テルは肩を震わせる。それは死に直面したからの震えか、それとも軍人でありながらも何もできずに子どもに庇われた情けなさからか。

「ここに居れば、足を引つ張るだけ、つてことかい？」

「そういうことだ。私たちでは歯が立たない……隊長でも何合渡り合えるか……」

ああ、分かってたさ！

俺たちじゃ、相手にもならないことは！

あの子どもが、俺とクリスお嬢様を庇ったことくらい！

「でも、だからって……」

「でもじゃない、リザ、我々は軍人だ。最も優先されるべき事項は任務の遂行だ」

テルは諭すように俺の肩を掴み、そのまま引つ張るようにその場を離れようとする。

肩越しに見えたのは、いまだ戦う少年の背中。しかし、その背中に先ほどまでの苛烈

さは感じられず、動きも緩慢に見えた。

それでも、俺たちはその場を離れなくてはならなかった。

俺たちは、軍人であるのだから。

血を出しすぎた。頭がクラクラするし、今もまだ激痛が走ってる。
だがまあ、クリスちゃんたちがここを離れてくれてよかった。

「……………」

襲撃者は、俺と戦う手を止めて距離を取る。毒に冒された獲物がなぜ死んでいないのか、それを疑問に思っているのだろうか。

無表情すぎて、気味が悪い。

「つふうー、ようやく、毒も抜けて来てくれたか……」

気の出力をそちらに傾けてたお陰か、何とか毒の中和が間に合って来たらしい。

ほんと、何でもありだな、俺の身体。

ただまあ、目の前の根暗陰キヤ野郎をボコすには都合がいいから、よしとしよう。

「……………時間だ」

「あ?」

ようやく喋ったかと思えば、そいつは懐から手榴弾のようなものを取り出し、ピンを抜く。

咄嗟に、俺は顔を手で庇いながら、突貫する。それとともに閃光と爆音が周囲に広がる。

勘で拳を振り抜く。手応えあり、肋骨を砕くのを感じる。

しかし、光が晴れた時、襲撃者は気配を消し、姿を晦ます。

「くっそが！ やろお、クリスを追いやがったな!？」

俺は咆哮を上げながら、地を駆ける。

舐めてくれやがって、ぜってえ許さねえ！

俺が追いついた時には、既に手遅れだった。

血に濡れたリザとやらと、腹が凹まされ、沈黙した鉄人形。

「くそが……」

二人の容体を確かめれば、リザは毒に冒されていたが、鉄人形の方は中で気絶してただけで、大きな外傷は無かった。

「起きろ！ おい起きろってんだよ！」

リザをいつぞやの史文恭ちゃんと同じように治療しながら、鉄人形から引つ張り出した女の肩を揺らす。

「……っ、あ、あなたは……クリスお嬢様は!？」

「落ち着けや。暴れんなよ？ こっちも今繊細な作業してんだ」

気で人を回復させるといふのはその実、凄まじく神経を使う。自身の気を他人の気と同化させ、その気を治癒という出力で操作しなければならぬのだから。

いつもならともかく、俺自身も毒でまだ意識がふらついているのだ。

「落ち着いて、聞かれたことだけに答えろや？ 時間が惜しいんだからよ」

「え、あ、ええ……」

「お前らを追って来たのは、さっき俺が戦ってたのつぺり顔でいいか？」

テルとやらは頷く。

「よしよいい子だぜ？ テルちゃん。次に、奴の痕跡は何かあるか？ 血でも何でもいい、すぐに追跡しなきゃならんのだ」

一刻も早く、クリスの元へ向かわなければならぬ。

マジでくっころとか、洒落にならん展開になったらマジイ。

「やつの痕跡？」

「ああ、相当深傷を合わせたはずだからな、すぐにそう遠くにはいけねえはずだ。奴の匂いがある奴なら何でもいい、それで追う」

鼻の良さには自信はあるが、猟犬の真似事とかできるかわからん。ただ、嗅覚に気を全振りしてでも追いつかなきゃならん。

「それなら……ここにがあるよ」

そう言ったのは、俺の手の中で眠っていたリザだった。手に握っていたのは、奴が着ていた装束の一部。

「おい、無理すんなや。まだ毒は抜けきってねえんだぞ」

「……それは、お前もだろ？ 早く、お嬢様を……」

リザは装束を無理やり押し付け、治療してた俺の手を離させる。

「クリスお嬢様を、頼む……」

リザはそれだけ言つて、また意識を失つた。

「カハ、いい女じゃあねえか……」

最後に気を流し込み、自然治癒力を底上げして、俺は装束に鼻を近づける。

染み付いた血の匂い、それは奴が積み上げて来た死の匂い。何年経とうが、絶対に落ちることのない死臭は、意識すれば同じ臭いがそこまで遠くない位置にあることを感じさせる。

「くつせえなあ、プンプン臭うぜえ？」

みいつけた。しっかりとファブリー○かけてねえから、こんなにすぐ見つけれらるんだよなあ。

「なあ、テルちゃんよお。悪かったな、俺があいつを仕留められてりやあ、すぐ終わったのによ」

ほんと、ロクな目に合わねえなあ。普通に観光ぐらいさせろってんだ。

「んじゃ、行ってくるから、コイツは頼んだぞ！」

まあ、ぐちぐち言ってもしやあねえ。

んじやま、囚われのお姫様を、助けに行きますか！

side：クリステイアーネ・フリードリヒ

今この時ほど、私は自分の行いを後悔したことはなかった。

誰も寄り付かない廃工場、黒装束の男に連れられた私は、そこで知らない男と引き合わされた。

眼鏡をかけた、線の細い男だ。

「初めまして、クリステイアーネ・フリードリヒ。ご機嫌はいかがかな？」

気味の悪い笑みを浮かべながら語りかけて来た男に、私は顔を背けることで応える。

「おやおや、嫌われたものですね。こんなに無愛想な娘さんなら、フランク中将閣下もたいそうご苦労なされていることでしょう」

「お父様……？」

男の口から出てきたお父様の名前に、私はつい反応をしてしまった。そうすると男は嬉しそうに、口を歪めながら私に語りかける。

「そう！ お父様！ 君のお父様が全て悪いのです！ 彼が私の組織を潰さなければ！ 彼が私の身柄を逃さなければ！ こんなことにはならなかったのです！」

男のそばには、あの黒装束が佇んでいる。

「彼が私の恨みを買わなければ、あなたはこんな目には合わなかったのですよ？ まったく、最低な父親だとは思いませんか？ ねえ！ クリステイアーネ嬢！」

男の目は、復讐に暗く濁っていた。

たしかに、お父様がその職務で恨みを買うことはあるだろう。

だが、決してそれは正しいものではない。

「違う！ お父様は人のため、国のために働いている！ 私はそんなお父様を誇りに思うし、お前みたいな悪党の逆恨み、どうとも思わない！」

お父様は私の誇りだ。マルさんも、獵犬部隊のみんなも、ドイツ軍の誰もが、私の自慢の家族だ。

私たちは正しいことの白の中に居て、こいつは黒の中に居る。それだけは、まだ世間知らずなお子さまの自分でも、はつきりと分かった！

「気に入らない、気に入らないですね。なにも汚いことなんて知らないような顔をして、そんな綺麗事を……」

男が拳銃を取り出し、私に向ける。

「人質として扱いただけなら、足の二、二本、動かなくても問題ないでしょう？」

恐怖はなかった。ただ、何故かシュージの顔が思い浮かんだ。

男がトリガーに指をかける。

私は、彼を信じた。

間一髪だった。

俺が投げたレンガは、変態の手を完膚なきまでに破壊し、その手の内にあつた拳銃を弾き飛ばした。

「手、手があー！ 僕の手があー!?!」

「待たせたな、お姫様」

俺に気づいた襲撃者あらため、黒装束が短刀を持って俺へと駆けてくる。

心臓への一突き、神速の速さで繰り出されたそれを、俺は横から手首を掴み取ることで止める。

「もうテメエの出番は終わりだよ、三下あ！」

その手を離さずに、ヘッドバッドを喰らわす。そのまま二度、三度と顔面を殴りつけ、最後に渾身の一撃で殴り飛ばす。

死んでなきやラッキー、死んでりや超ラッキーってぐらい、ボコボコにしてやり、少しばかり気持ちが晴れる。

「あいにくよお、プツツンしてんだよ、俺は今ヨォー！」

殴り飛ばした相手を、さらに踏みつけ、完全に再起不能へと追いやる。

マスタークラスのやつは、死体蹴りするくらいしとかなないと起き上がってくるからタチ悪い。

「ふう………こんなもんか」

未だ痛い痛いとうるさい奴を放っておき、クリスの拘束を外してやる。

「怪我はなかったか？」

「シュージ！」

クリスは自由な身になるなり、俺の胸へと飛び込んでくる。

そのうち、ゾロゾロと軍隊の皆様方が来るはずだ。そうすりゃあ、一件落着つてどこか。

ふう、今回はマジでしんどかった。毒とか耐性がついてねえんだよ、普通。

あーくそ、緊張の糸が緩んだら身体に力が……。

「あー、クリス……悪いが、そろそろ、俺倒れるぞ」

俺の身体が流石に限界を迎え、そろそろ意識を飛ばそうとしていた時――

銃のコツキングの音が聞こえた。

俺は咄嗟にクリスを抱き抱える。刹那、銃声と衝撃。

一発や二発ではなく、フルオート銃弾が俺たちへと浴びせかけられる。

「くそがあ！ 死ね、死ね、死ねえええ!!」

背中越しに、男の金切り声が聞こえる。

狙いはノーコン、しかし、動かない的を撃つのは難易度が低過ぎた。

「シュージ！ シュージ！」

腕の中のクリスが叫ぶ。俺は歯を食いしばり、暴れもがくクリスを押さえ込む。

長いようで短かった銃声が止む、カチリと撃鉄が鳴る。

俺は腕に撃ち込まれた弾丸を、指で捻り出す。

「とつととくたばれや、クソ野郎が」

砕けた手でリロードをしようと手間取っている男に、弾丸を親指で弾き飛ばしてお返ししてやる。

銃で撃ち出されるのと同じ速度で、弾丸は男の右目へと撃ち込まれる。

……くそ、脳天撃ち抜くつもりが……外しちゃった、か。

「威力も……足りやしなあ……」

だが、見るからに貧弱な男が意識を失うには充分だったのか。そのまま仰向けに倒れる。

それを見届けてから、俺も膝を突き、倒れ込む。

クリスが俺へと縋りつくのを見ながら、俺はようやくやく片付いたと、息を吐いた。

side : ジークルーン・コールシユライバー

テルちゃんたちから連絡を受けた私たちが、その廃工場に訪れた時には全てが終わった後だった。

「シユージ、シユージ……」

同じ年くらいの少年に縋りつき、名前を呼びながら泣き続けるクリスお嬢様。再起不能という言葉が相応しい二人の男性。

そして、文字通り、血溜まりに沈んでいる男の子。

「お嬢様！」

隊長がクリスお嬢様を素早く確保する。少年の状態に眉を顰めたのは一瞬だけ、すぐさまお嬢様を抱えて私たちのところに合流する。

「ダメだ、マルさん！ シユージが、私のせいで、シユージを、シユージを助けてくれ

……

「申し訳ありません、お嬢様。ご容赦を」

隊長がお嬢様の首元へ手刀をし、意識を落とす。

「フイーネ、状況報告を」

「……分かりました。元麻薬組織の幹部、ローウエン・シユライバー。ローウエンの雇った暗殺者、絶影。両名を意識不明の状態で確保」

フイーネ副隊長が冷静な声で状況を読み上げる。

そして、そこで一呼吸区切りを置く。

「そして、民間人、おそらく日本人の旅行者一名の死亡」

「……」

副隊長の報告を聞き、隊長は表情を固くする。他の隊員たちも、一様に表情を沈める。特に、コジちゃんは泣いてしまっている。私も、今にも泣き出しそうになっている。

「……分かりました。コジマとフィーネは、戦闘部隊を連れローウエンと絶影を拘束、連行しなさい。ジークルーン、あなたは残りの隊員と現場の処理をしなさい」

隊長は表面上はハキハキと命令をする。しかし、内心で最も無念なのは、隊長だろう。

「私はお嬢様を中将閣下の元へお連れします。では、総員行動開始！」

「了解！」
Jawohl

隊長が立ち去り、コジちゃんとフィーネ副隊長も居なくなった後、私は真つ先に少年の元へと駆け寄った。

「ごめんね……助けてあげられなくて……本当に、ごめんね……」

よく見れば、その酷い状態が私にはよく分かる。

毒によつて壊死した部位に、呼吸器系も壊されてる。そのうえで、体に何発も撃ち込まれた弾丸。

「ひびこ……ひびこよ……いんなの」

こんな小さな体で、お嬢様を護りながら戦ったのだ。傷跡から、彼の優しさを感じてしまい、私は涙を堪えきれなかった。

「ジークルーン、あまり感情移入しすぎるなよ。死体に手当てをしても……」

後ろから同僚が声をかけてくれる。気づけば、私は医療道具を手に彼の手当てをしていたようだ。

それでも、私は彼の身体から手を離せなかった。一つ一つ、丁寧に弾丸を抜き取り、包帯で止血する。

だって、私の感覚が、こうすれば彼が助かると教えてくれるのだ。

「え……う？」

私は思考が停止した。しかし、その手は止まらない。今の彼に最適な処置を、手際良く施していく。

そんな私を見かねたのか、同僚が私の肩を掴もうとする。

「おい、ジークルーン！ いい加減に——」

「触らないでっ!!」

自分でも、信じられない大声が出た。

「生きてる……。まだ、生きてる！」

フィーネ副隊長の眼鏡型デバイスでも読み取れない微弱すぎる脈拍、呼吸は止まっているし、心臓も止まりかけてる。

でも、生きてる。まだ死んでいない。

「死なせない……。絶対に、助けてあげるから……」

後ろが何か騒がしくなったが、私の意識は彼にだけ向けられていた。

この小さな英雄を、死の淵から救い出すために。

第21話

ドイツ、リューベックにあるフリードリヒ邸。

それは邸宅という枠組みではなく、豪奢でありながらも気品と歴史を感じさせる、かつて地方貴族であったフリードリヒ家の城でもあった。

そんなフリードリヒ邸の来賓室では、ビジネススーツを着崩した男と、軍服を整然と着込んだ初老の男が対面していた。

「それで、フランク中將閣下さんよ、俺がここに来た理由、アンタならもう分かってるだろう？」

差し出されていた紅茶を豪快に呷り、ビジネススーツの男、九鬼帝は正面に座る男を見据える。

世界有数どころか、現在は世界のトップを走り始めた九鬼財閥。その総帥に睨まれてなお、ドイツ軍中將は細波一つの動揺もなく答える。

「もちろんだとも。彼の、織原修二の容態は既に回復へと向かっている。ドイツの医学薬学は世界一を誇るからな」

「そうかい、それは何よりだが、何でまた、普通の病院じゃなく、あんたの居城であるここにアイツを捕まえてんだ？ 別に、あいつはただの旅行者だろ？」

九鬼帝がフリードリヒ邸を訪れた理由は、友人である織原修二が意識不明の重病という報告を受けたからだ。

一時は生死の境を彷徨い、ドイツのある邸宅に保護されているとのことだったが、まさかドイツ軍中將の元に居るとは帝も思っても無かった。

「彼は娘の命の恩人だ。私のできる限りの、最高の環境で治療を行うのが当然だとは思うがね」

「なるほどな。まあ、馬鹿正直に言う訳はねえ、か」

帝は紅茶をカップに戻し、一つため息を吐く。

そこで、気まずそうにお互いの従者が顔を見合わせる。それは人を従える立場であり、それに相応しい圧力を自然と携える者同士が牽制しあっているからだ。

「腹の探り合いも面倒だな。……あんただから単刀直入に聞くが、中将閣下はアイツをどうするつもりなんだい？」

「……」

帝の切り出しに、フランクは考え込むように目を閉じる。

「今回、我がリューベックに潜伏したテロリストは、マスタークラスの手練れを雇っていた。それも、絶影と呼ばれる暗殺者を」

暗殺者、絶影。その名は帝も聞いたことがあった。壁越えの中でも実力派、それも暗器や毒の使い手であり、並の武闘家どころかマスタークラスの者すらその悪辣さで殺してしまう。

フランクは席を立ち、帝に背を向けながら窓際に立つ。そのまま眼下に広がる訓練風景を見ながら、語り続ける。

「私の新設した猟犬部隊は、ドイツ各地から集めた精鋭揃いだ。士官学校から引き抜い

たエリートたちに、一芸に秀でた者を身分経歴問わずにスカウトしてきた。危険な任務もこなせるだろう」

「次の言葉を当ててやろうか？」

帝が紅茶のお代わりを啜りながら、悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「実践経験が足りない。そうだろう？」

「……その通りだ。まだ部隊として日が浅く、隊長や副隊長、一部の士官を除けば、新兵も多い。全体としての練度もまだ発展途上だ。マスタークラスの敵と戦うにはまだ、荷が重かった」

フランクは帝へと振り返り、鋭い猛禽類のような目を向ける。

「そのために、彼が必要なのだよ。猟犬部隊が、真にドイツの、世界の平和に貢献できる精兵になるために」

「そこが分からねえんだよ。純粹に修二の戦闘力をつてんなら、やめた方がいいぞ？
アイツは、誰かの元で飼い慣らされるようなタマじゃあねえからな」

「分かつてはいるさ。彼はまるで、叙事詩に語られる英雄のようだ」

フランクは修二の話を聞いた時、クリスが無事だったことに死ぬほど安堵するとともに、その少年に心からの敬意を抱いたのだ。

毒に侵され、銃に撃たれ、心臓の鼓動が止まりそうになりながらも、クリスを守り抜き、敵を討ち果たしたのだから。まさしく、英雄、現代に生きるサムライである。

「彼が猟犬部隊と触れ合うことは、彼女たちにとって大きなプラスとなるだろう。私は別に、彼に猟犬部隊に加入してもらおうという訳ではないのだ」

「なるほどねえ……。考えることは一緒ってか……」

英雄たちのクローンを用いた武士道プラン。それは、優秀な英雄クローンたちを競争の中に混ぜることで、その組織での競争意識を活性化させるという計画。

「実際、何名かの隊員は先日の事件以降、大きく成長した。それは軍人としても、戦士としてもだ」

リザ・プリンカーは、怪我一つ残つてなかつた身体を、訓練でひたすらに虐め抜くようになった。彼女は自身の適性を活かし、ニンジャリスペクトの技にさらに磨きをかけ始めた。諜報として、斥候として、なにより戦場における遊撃手としての能力を高めようとしていた。

テルマ・ミユラーは、部隊に課された基礎鍛錬が終わつた後、深夜遅くまで機械駆動のプログラミングに打ち込むようになり、精錬技術にも手を出し始めた。彼女自身は、自身の身体能力の限界を見極めていた。そのために、自身が強くならないなら、強い機体に乗ればいい。より速く、より強く、より強靱に。もう二度と、守られるのではなく、護れるように。

ジークルーン・コールシユライバーは、先日的事件以降、ある能力に目覚めた。それは、彼女が元々持つていた、「どこをどうすれば治りがよくなるか」感覚でわかる能力から蕾が花開くように成長したものだ。

織原修二が使う気を用いた治療、彼女はそれを使えるようになった。彼女が持つ外科技術と気を用いた治療は瀕死の重傷も、ものの数時間で治してしまうまでになった。

彼女の持つ気の総量が少ないから乱用はできないが、その異能は猟犬部隊でも頭ひとつ抜け出す価値を持つようになった。

「ほんの僅かな時間に、彼に影響された彼女たちは大きな飛躍を遂げようとしている。そのあり様で他者に影響を与える。これを英雄と言わずして、何と云うのかね」

フランクは再び帝に背を向け、今度は慈しむように。視線を優しいものへと変える。

「私の娘、クリスも、彼に庇われるだけだったことが辛かったようですね。今までもしていたフェンシングに加え、軍隊式の訓練へ参加を希望するようになってしまった」

それを聞いた時、フランクは当然却下した。しかし、クリスは冷静に、自分の立場、その危険性と自身に必要とされる能力の足りなさを自らの父へと説いた。

親のエゴという、道理に外れた理論では覚醒したクリスを曲げられなかった。そして、渋々、本当に渋々ながら、フランクはクリスの訓練を許可したのだ。

「うちの長女はつえーし、次女には最強の護衛を付けたからなあ。そのあたりは心配したことねえわ」

「なるほどな。だが、親として娘の心配をするのは当然のことだが、娘の意思を尊重することも、必要なことなのだ、あの時のクリスの顔を見て思ったよ」

フランク自身、娘のこととなると視野狭窄になることは自覚していた。それでも構わないと、開き直つてもいた。

しかし、その結果として娘は反発し、テロリストに付けて入る隙を与えてしまった。

「二年、いや、半年だけでいいのだ。彼を借り受けたい、帝殿」

「…半年、ねえ……」

帝は半年という期間、修二を川神から離すメリットとデメリットを頭の中だけで計算する。

川神における武士道プランの根回しは、織原修二のせいで遅々として進んでいないと、序列2番の老女は嘆いていた。不審な出来事があれば、何故か現場に織原修二が姿を見せるのだ。

その織原修二が長期間、川神を離れるなら武士道プラン、そしてその裏に隠れた計画にも都合がいい。

「いいんじゃないの？ 別に、俺はアイツの保護者つて訳じゃあねえしな」

「良かった。これで、後は彼の意思次第か」

帝がここまでに来る途中で見かけた猟犬部隊の隊員たち。女性だけの部隊であり美人揃い、しかも一部の者は織原修二の好みにもろドンピシャだろう。

「半年で帰ってくつか……？ 流石に永住とかにはならんだろうが……」

帝は女軍人ハーレムを築き、美女たちを侍らす修二の姿を幻視した。やけに似合うドイツ軍の軍服を身に纏い、魔王のような笑みを携えて戦場を蹂躪する姿もセットで。

「それでは、彼に会っていくかね？ 帝殿、まだ身体を動かすのには不自由しているが、意識は先日戻ったところだ」

「あー、そうだな。一応、面だけでも見ておくか……」

フランクは頷き、控えていた部下へと目配せをする。

赤髪に眼帯をした彼女は、帝たちの前に立つと、気をつけの姿勢を取る。

「彼女は獵犬部隊の隊長、マルギツテ少尉だ。彼の元へは、彼女に案内をさせよう。申し訳ないが、私は先日の件で仕事が溜まってしまつてね。失礼させていただくよ」

「マルギツテ・エーベルバッハです。以後、この屋敷の案内を担当させていただきます」
「おう、知つてると思うが、九鬼帝だ。よろしくな」

「では、後は任せる。マルギツテ」

「ハッ！」

マルギツテの敬礼を見送り、フランクが退室する。来賓室には、帝とその執事、そしてマルギツテだけが残された。

「では、ご案内します。着いてきてください」

長い廊下を、三人は会話なく歩いていく。

程なくして、一つの客室の前でマルギツテは足を止める。

「ここです」

「随分といい部屋を宛てがつてんだな。おーい！ 修二、元気してつか？」

帝はノックもなしに、部屋へと入る。

そこでは――

「ジークちゃん、次は俺、君が食べたいよう」

「はいはい、修二くんは、ホント甘えん坊さんだね。はい、ぎゅー」

「ひゃっほーい！」

バブバブと言わんばかりの、まるで赤子のように長身の女軍人に甘える間抜け野郎が居たのだった。

今回ばかりは流石に死んだと思ったが、どうやらしぶとく生きていたらしい。なんか、クリスちゃんに言つてたような記憶もあるが、死にかけてたせいでいまいち覚えてない。

身体が本調子になるまで、このフリードリヒ邸で面倒を見てもらっているが、これがまた居心地いいのなんの。

ひたすらに甘やかしてくれるジークちゃん。これがもうたまらない、バブみを感じる。ここまで俺をオギヤらせるとは、只者ではない。

姉御肌で、面倒を見てくれるリザちゃん。カラツとした態度と、ウブな反応をする二

律背反のギャップが可愛い。

ちよっとツンツンしながらも、時折デレてくるテルマちゃん。ぶっちゃけて言えば、俺が好きなのが伝わってくるからもうツンデレ検定百点満点。

なんだ？ ドイツは俺の故郷だったのか？

「……ふう、それで、迎えにきてくれたのか？ 帝っちよ」

「それで誤魔化せると思ってるのか？ さっきのお前ヤバかったぞ？」

ジークちゃんとバブバブしてたら、無粋にも帝のやつがノックもなしに入ってきた。がった。

ちなみに、ジークちゃんはマルギツテちゃんに連れて行かれた。首根つこを持たれてズルズルと連れて行かれた彼女は、今ごろお説教を受けているだろう。

「いいんだよ。俺は森羅万象あらゆるプレイができたから」

「そうかい。まあ、元気そうで何よりだ。死にかけてたって聞いたぜ？」

「あー、それぞれ、マジで今回は死ぬかと思った。鉛玉何発身体に入ってたと思う？」

「9発だぜ？ 19発」

「それはもう死んどけよ」

死んでないんだから仕方ねえ。

まあ、とりあえず、帝が来たってことは、そろそろ日本に帰るってことか？ まだ自力では立ち上がれねえんだけどなあ。

「とりあえず、帝が来たってことは、そろそろ俺も日本に帰るのか？」

「いんや、修二、お前しばらくドイツに残れ」

おん？ どうしてまた、俺としちやあ、猟犬部隊の面々とイチャイチャしたいから都合は悪くないが。

あーでも、百代ちゃんたちがどうすつかなあ。そんなに長くなけりやあ、大丈夫か？

「大体、何でまたドイツに残るって話になったんだ？」

「それがよ、フランク中將がお前のことをいたく気に入ったみてえでな。まあ、なんだ、タダ飯食って、美女に面倒みてもらえるんだから、いいんじゃないか？」

「まあ、うーん、それは魅力的なんだが……」

フランクさん、困い込む気か？ いやでも、この前会った時にはそんな素振り見せなかつたしなあ。

まあ、考えても仕方ねえか。なる様になれだ。

「んじゃ、話は決まりだな。半年間、しっかり猟犬たちと仲良くしろよ」

「は？ 半年？」

流石に長くね？ 百代ちゃんたち、ブチ切れるぞ？

「たまに帰ってくる様にすりゃあ、大丈夫だろ。飛行機代とかも面倒見てくれるんじゃねえか？ あの中将閣下の様子じゃ」

んー、週一で帰るとか要求すれば、期間も短くしたりするか？

まあ、とりあえずは

「ジークちゃんやリザちゃん辺りは、一発ヤレそうだしな、カハハ」

「お前ほんと、懲りねえのな」

「しゃあない、男の子だからね。」

第22話

帝が俺の顔を見に来てからさらに二週間、旨い飯を食って、いい女を抱いてれば、傷はすっかりと言つていいほどに癒えていた。

俺が世話になってるフランク氏に会つたのは、そんなある程度動き回れるようになった頃であつた。

「はじめましてだね、織原修二くん。まずは、娘を助けてくれ、ありがとうと言わせてくれ」

第一印象は声が渋い。

品位とその人物が積み重ねてきた人生を感じさせる、そんな落ち着いた大人の声だつた。

「あーいや、体勝手に動いただけだから……そんなに畏まらないでくだ……さい」

俺はつつい、小惑星を地球に落としかねないような雰囲気に敬語を使ってしまう。なんだろう、俺、こういうまっとうな大人って苦手なんだよな。岡本のばあちゃんとか、その代表格だ。

「それでもだ。君は娘たちの恩人なのだから……改めて、礼を言わせてくれ」

深々と頭を下げるフランク氏に、俺は気恥ずかしく頭をかく。

「……分かりやした。その礼は受け取っておきます。まあ、傷の手当てや、色々世話になってますから、それでチャラってことで」

「そうか。なら君がドイツにいる間の面倒は、私が見させてもらおう」

嬉しそうに、フランク氏は椅子に腰を下ろす。背後に控えさせていた部下を退室させると、改めて俺へと向き直る。

「さて、今日私が君のもとに来たのは、君に礼を言うほかに、君に頼みたいことがあったからだ」

「へえ……俺みたいなのチンピラに、頼みたいことすか？」

正直さっぱり分からん。

確かに俺は、フランク氏の娘であるクリスちゃんを助けたが、言つてしまえばそれだけだ。

今日の前にいるこの男が求めるものを、俺が持っているとは思えん。

「ふふ、チンピラか。私からすれば、君は傾奇者というべき無頼なのだがね。まるで、歴史上の前田慶次のような、破天荒っぷりだ」

ニヒルな笑みを浮かべ、フランク氏はどうやら俺を買いかぶっているらしい。

「ジークルーン・コールシユライバー、リザ・ブリンカー、テルマ・ミューラー」

「ぶツ……」

そして、そんなフランク氏から三人の名前が出てきたとき、俺はむせかけた。

「今名前を挙げたのは、現在君が肉体関係を結んだ三名の隊員たちだ」

なんでバレたし。

人目をつかないように気を付けていたし、彼女たちにも秘密にするように伝えていた。

ぶつちやけ三人とも男性経験の無さからチヨロすぎとか思ってたけど、なんかマズったか？

「君たちは隠そうとしていたようだが、テルマがね、深夜君の部屋の前でうろついているという報告を受けてね。少し念入りに調べてみたら、三人の名前が出てきたという訳だ。英雄色を好むとは言うが、まさか、一ヶ月も経たずには信じられなかったよ」

テルマちゃんエ……、キミ、チヨロすぎるから心配だったけど、やつぱり我慢できなかったかあ。男相手の初恋に、舞い上がりすぎたか？

これは不味いか？ 流石に、部下を食い散らかしたとか普通に考えてブチ切れ案件なのでは？

しかし、フランク氏の表情に怒りはなく、ただただ静かな願いだけが感じられた。

「お互いが同意であった以上、私からとやかく言うつもりはないが。お願いだから、彼女たちを悲しませるようなことはしないでくれないか？」

あくまで真摯にお願いするようなフランク氏に、俺はどうすつかなと頬をかく。

「察してるかもしれないですけど、俺はまともな奴じゃないです。悪いこともしますし、女好きのクズ野郎です」

「……」

彼は、彼女たちの上司であるが、それ以上の父性とも言える情を彼女たちに抱いてるのだろう。怒るでもなく、嫌悪するでもなく、ただ託すようにたのむ。

そこまで、俺を高く買ってくれているなら、俺も筋を通すべきだろう。

「でも、抱いた女に責任取れねえほどの小さい男じゃねえつもりで、今まで生きてきました」

「なるほど……やはり、君はサムライなのだな」

フランク氏は何か思うところがあるのか、瞳を閉じて小さく息を長く吐いた。
いや、急に侍とかどないしたんよ。俺の実家ただの庶民だったぞ。もう何処にあるかも知らないけど。

「私にとつて、彼女たちのことは大切な部下なのだ。それだけは忘れないでくれ」
「……あいよ」

やっぱ、まともな大人というか、親つてのは苦手だわ。

「行くぞー！ とおおりやー！」

小柄な少女、コジマ・ロルバツハが真っ直ぐに突っ込んでくる。その勢いそのまま握りしめた拳を、俺になんの躊躇いもなく振るってくる。

手のひらで掴むように受け止めるが、踏みしめた足が地面を捲り上げながら滑る。

「捕まえたぞー」

コジマちゃんは自分の拳を掴んだ腕を、さらにもう片方の腕で掴まえる。

万力のような力で掴まれた腕が軋みをあげ、俺はわずかに顔を顰める。

「動きを止めた！ 畳みかけろ！」

好機を逃さず、赤髪の猟犬、マルギツテ・エーベルバツハが駆けてくる。その後ろには鉄の巨人と複数の猟犬部隊の隊員たちが続く。囲みを作る様に素早く部隊を展開させる手腕は、マルギツテちゃんの指揮能力の高さを感じさせる。

「甘いね、甘い甘い！」

「わ、わわっ！」

俺は腕を掴んだコジマちゃんを、強引に持ち上げる。そのまま、突っ込んでくる一団めがけて、放り投げる。

さて、どう対処する？ マルギツテちゃんよ。

「リザー！」

「あいよー！」

一団の中から、リザちゃんが飛び出し、コジマちゃんを受け止める。そのままくるりと回転することで勢いを殺すとともに、再び俺の方へと飛ばしてきた。

マジか、投げ返してきやがった。

「コジマミサイルー！」

投げられながら体勢を整えたコジマちゃんは、鋭い蹴りを放ってくる。俺が投げた勢

いに加えて、遠心力も一緒になれば、その破壊力は侮れない。

俺はそれを見切り、体を半歩ずらして躲す。コジマちゃんは、そのミサイルのまま、後ろへと飛んでいってしまう。

「外れたー！」

「だが、こちら側まで対処できるか？」

コジマミサイルを無理に避けたせいで、体勢が崩れたところにマルギツテちゃんたちが襲いかかってくる。トンファアの猛攻に、各隊員の援護も加われば、良い一撃をもらいかねない。

振り下ろされたトンファアを、ショルダーブロックで受け止める。続いて発砲された銃弾を、トンファアで吹き飛ばされるようにして後ろに飛ぶことで回避する。

「おー、こっちに来たぞー！」

「げっ、マジか」

飛んだ先には、待ち構えていたコジマちゃんが拳を構えていたのが見えた。俺は空中

で身を捻り、拳を握り込む。

「コジマメガトンパンチ!!」

「英語じゃねえか!?!」

ドイツ人なのに英語かぶれな必殺技に気が抜けながらも、俺はそれなりに全力で殴りつける。拳と拳がカチ合ったとは思えない、大型車両同士の事故のような重低音が響き渡る。

コジマちゃんは踏ん張りが効かなかったのか、気の抜ける声を上げながら吹っ飛ぶ。それに息つく間もなく、飛んでくるダガーを振り返らずに指先で掴み取る。そのまま飛んできた方向へと投げ返すが、硬い金属に弾かれる音がする。

「テル! 援護するから、突っ込め!」

「承知! この鉄壁、容易く砕けると思うなよ!」

へえ、今度はリザちゃんとテルマちゃんのコンビか。いいねえ、相手を休ませることなく、数の利を活かして波状攻撃。マルギツテちゃんは、コジマちゃんを連れて下り、体

力を回復させる。

猟犬部隊、中々どうして、軍として、群として格上との戦い方を研究してるみたいじゃねえか。

「^{Zerquetschen}
粉 砕 !!」

鉄の拳兵が棍棒を大きく振りかぶり、躊躇うことなく破壊を執行する。俺は、それを真正面から受け止める。地面に大きく足がめり込む。そのまま棍棒を引き寄せ、引きずり倒そうと試みる。

「そうはさせせん！ 憤怒！」^{Zorn}

次の瞬間、鋼鉄の鎧から高温の水蒸気が噴き出す。一瞬にして、肌が爛れるほどの熱量が、俺を襲う。

慌ててテルマちゃんと距離を取るが、腕が痛々しく火傷していた。痛みを我慢し、笑みを浮かべる。

「……っ、やるねえ」

気での回復はせず、ただただ俺を油断なく見つめるテルマちゃんを称える。

「私も忘れてもらっちゃ困るよ!」

テルマちゃんの背後から、声が聞こえるとともに、再びダガーが複数飛んでくる。速度は上々、数も精度も悪くない。だが、俺に対しては、緩い。

「無駄無駄無駄無駄無駄あ!」

「ダガーを百年以上生きた吸血鬼の気分で弾き飛ばしていく。んん、テンション上がってきたなあ。」

「ダガーを二十本ほどだろうか。弾き飛ばした後に、リザちゃんは俺の前に姿を出す。テルマちゃんはその後ろに下がる。」

「なあ、修二。今から私はこのダガーをどうすると思う?」

「俺に投擲物は効かないってのは分かっただろうし、突貫して、その腰元の煙幕で攪乱、テルマちゃんと一緒に乱戦に持ち込むって感じか？」

「ふふ、そうか。まだ気付かないか。修二、お前の足元をよく見てみな。既に状況は出来上がってるだぜ？」

待て……乱戦に持ち込むにしても何故、明らかに前衛のテルマちゃんが下がった？

何故、俺の周りにはダガーが散乱しているだけじゃなく、俺を囲むように突き刺さっている？

何故、俺の足元から、微かに火薬の匂いがする？

「答えは簡単。リア充爆発しなっ!!」

リザちゃんはダガーを手元で振り下ろす。それに連動し、俺の足元に刺さっていたダガーの柄が抜ける。

恐らくはダガーの形をした手榴弾。がむしやらに投擲したと見せかけて、その実俺の逃げ場を塞ぐ。爆発の結界を作っていたのだ。

「ぬおおおおお！」

今度は波紋使いな吸血鬼な気分で、爆発に巻き込まれる。一つ一つの威力は低くとも、まとめて食らえばひとたまりもない。

「……やったか？」

リザちゃんのそんな声が爆炎越しに聞こえる。

「そいつはフラグだなあ。リザちゃんよお」

俺が声を出した瞬間、爆炎を切り裂くように黒い一閃が走る。それを腕でガードすれば、至近距離まで詰めてきたマルギツテちゃんがトンファーを振るってきたのだと分かった。

「下がりなさい、リザ！ テルマ！ コジマ！ 援護しなさい！」

「了^{Jawoh!}解!!」

そこからは、獵犬部隊の前衛三トップの猛攻が始まった。

攻めに秀でたコジマちゃんを主体に、マルギツテちゃんが要所所で俺の隙を突くようにトンファーをねじ込んでくるし、反撃しようにもテルマちゃんが攻撃を出し切る前に潰しにかかる。

うーむ、これは中々に厄介な上に、

「おっとー！」

遙か後方、針の穴を通すかのような狙撃が飛んでくる。チラリと目を向ければ、腹這いになったスナイパーと、側に観測手として指揮を取っているフィーネちゃん。

それに、いつの間にか、リザちゃんが加わり影から攻撃が、ついに俺の身体に傷をつける。

うーむ、連携されるとこうも厄介とはな。流石に特殊部隊ってだけはあるな。

ぶつちやけて言えば、俺はこの獵犬部隊の面子と戦っても十割負けないだろう。これはマルギツテちゃんたちが弱いとか、策が足りないとか、そういう訳ではない。

シンプルに、獵犬部隊にはマスタークラスを相手取るには火力が足りないのだ。

そりゃあ、コジマちゃんのパワーはワンチャン作れるかもしれないが、それだけしか
矛がない相手など、壁越え連中にとつては脅威ではない。

壁越えは壁越えにしか倒せない。

いつだったか、ヒュームの爺が言つてたのを思い出す。

「とおりやあー!」

コジマちゃんが焦りからか攻めつ気を出し、揃えていた足並みから、一人だけ前に出
てきてしまう。それを援護しようとマルギツテちゃんたちも、前のめりになる。

俺はコジマちゃんを捕まえ、俺は悪戯好きな笑みを浮かべる。

「コジマちゃん、アウトー!」

「おわ、おわわわ!?!」

我慢できない子のコジマちゃんは、戦線を崩壊させかねない行動の報いとして、後ろ
に控えているフィーネちゃんの方へと放り投げる。

だいぶ強い力で投げたので、受け止めようと構えたフィーネちゃんも交通事故にでも

あつたかのような衝撃で吹き飛んでしまう。

これでまず二人。

マルギツテちゃんとりザちゃんはコジマちゃんが掴まれた時点で、冷静に引き下がったが、テルマちゃんはその巨体のせい引き下がるのが遅れてしまった。

「川神流！ 電気鼠!!」

ビツビツカチユウ

ちなみに、川神流にこんなふざけた技名の技はない。

テルマちゃんの甲冑の隙間に腕を突っ込み、電撃に変換した気を放出する。いくつかの回路がショートする音が聞こえ、鉄の巨体が膝をつく。

「ちよつと!? どんな電圧流したのよ!」

中からテルマちゃんの抗議にも近いが聞こえるが、無視する。

これで三人、あと残った主力はマルギツテちゃんとりザちゃんかな？

「リザ！ 援護は任せます。正面は私が立つ!」

「分かった! 直ぐにやられんなよ!」

二人が息を合わせて向かってくる。

さながら、魔王に立ち向かう勇者のような勇ましさだ。

あれ？ 俺主人公だよな？ なんでこんなボスマーブしてんの？

「は〜い、みんな、お疲れ様〜」

ジークちゃんたち医療班が、訓練を終えた隊員たちに手当てを施していく。重傷者は

居ないが、誰もからも切り傷、擦り傷、打撲などの怪我を携えている。

「修二くんも、お疲れ様。めっちゃカッコよかったよ〜」

「何を当たり前なことをおっしゃる、ジークちゃんや」

一通り隊員たちの治療を終えたジークちゃんが、少し離れた場所でビールを呷っていた俺のところに戻ってくる。

ふいー、やっぱ昼間っから飲む酒は最高だぜエ。

「隊員たちの目の前で、見せつけるようにビールを飲むのはやめなさい。織原修二」

「いいじゃねえか。こちらら強い猟犬たち相手取って大立ち回りしてんだぜ？ これくらい、多めに見てくれよ」

「あ、隊長！ もう、大丈夫なんですか？」

頬にガーゼを当て、腕に包帯を巻いた上半身タンクトップ姿のマルギツテちゃんが険しい顔をして近づいてきた。その腕には包帯が巻かれており、他の隊員と比べても傷が多いのが分かった。

うーん、エロい。ナチュラルボンドスケベなお犬様だな。

「ええ、ジークもご苦労様です。治療が済んだのなら、他の隊員とともに休んでてもいいのですよ?」

「まだ、修二くんの治療が残ってますので。ほら、修二くん、脱ぎ脱ぎしましょうね」

ジークちゃんが興奮したように、俺の服を脱がそうとする。手がなんかワキワキしてるし、本当に治療目的かは怪しい。俺の火傷とか、既に治りかけてるし。

ちよつと興奮気味なジークちゃんは、近くに怖い怖い隊長さんが居ることを忘れちゃいけないだろうか。

「ごほん!」修二、後でテルマが鎧の修理を手伝えと言っていました。何でも、回路どころか配線まで焼け焦げてしまっているとのことですよ」

マルギツテちゃんが、大きく咳払いをする。

あー、割とノリで使った技だったから、加減が分からなかったからなあ。

しゃあない、猟犬部隊でテルマちゃんの機械趣味に、追いつける奴おらんしの。

「あと、ジーク。他の者の目がある場所で、そういう事は控えなさい。噂になってます。あまり度が過ぎる場合は、制裁と心得なさい」

「うー、ごめんなさい」

しょんぼりとするジークちゃん、可愛い。

「さて、修二。今回の演習、あなたからの感想を聞きましょう」

マルギツテちゃんは俺の対面に座り、俺が飲んでいたビールを奪い取り、一口で飲み干す。

おいおい、いい飲みっぷりだねえ。

「……このビールは美味しいですね。つ、それより、貴方から見て、今回の演習はどうでしたか？」

「んー、まあ、大分強くなったと思うぜ？ 壁越え相手に、持久戦持ち込めるくらいには。

それこそ、普通の軍隊とか傭兵相手なら鎧袖一触だろうさ」

「みんな、めっちゃ強くなったよね」

そう強くなった。俺がこの一ヶ月の間してきたことと言えば、おせつせと獵犬部隊との演習、あとはクリスちゃんとの勉強の面倒を見たりだ。

ぶつちやけ、俺がマルギツテちゃんたちに教えられることなど、正直あまりないのだ。せいぜいがこうやってマスタークラスの仮想敵として、演習に付き合うくらいだ。

「まあ、強いて言うなら、火力が無いところじゃないかネエ。壁越えに連携で粘れるなら、今度はワンチャンを作るための必殺技が欲しいところだ」

「なるほど。たしかに、コジマの攻撃以外、貴方はそれほど警戒してませんでしたね」
「そこまで分かってくれば、上々だろ」

「つまり、コジちゃんの攻撃を当てれるようにするか、コジちゃん並みの攻撃力を他に用意すればいいんだよね？」

ま、そう言うこつた。それが一番大変なんだろうけどな。

何か考えているのか、マルギツテちゃんは難しい顔で腕を組む。はち切れんばかりの胸が、腕の中で窮屈そうに歪んでいるのについつい目がいつてしまう。

「んじや、俺はクリスちゃんど約束の時間だから、そろそろ行くわ」
「…………ええ、分かりました」

「修二く、大和丸が見たいく」
「おうおう、宿題終わったらな。ったく、ハマるとは思ってたが、中毒になる程だとはなあ」

クリスちゃんの成績は、ぶつちやけ微妙だった。なので、俺が頭の出来も顔と一緒に

素晴らしいと知ったフランクさんから、そっちの面倒も任されたのだ。

「なあ、修二、日本にはやつぱり、修二みたいなやつが多いのか？」

「正気か？ 俺みたいな奴らばかりな国とか、三日で滅ぶぞ？」

「あ、いや、そういう意味じゃなくて、修二みたいなサムライの魂を持つ者が多いのか、って意味だ」

サムライ、ねえ？ 川神には武家は多いが、サムライとかより、ぶっちゃけ変態と犯罪者の方が多様な気がする。

「んな大層なやつは、居ねえよ。お前さんたち親子がサムライなんて言う、大和丸みたいな奴はよ」

「……そうなのか。でも！ 私にとって修二は尊敬すべきサムライだ！」

「サムライ、ねえ」

日本勘違い親子どもめ、まったくもって節穴としか言いようがない。

「ほら！ 終わったぞ！ 大和丸、大和丸」

「あいあい、採点してやつから。それまで待つとけ、お嬢様」

クリスちゃんの終わらせたノートに俺は赤ペン先生を走らせる。きちんとワンツーマンで教えてやれば、地頭はいいからだいぶ勉強も身につける。実際、俺が作ってやった日本語のテストとか、大分いい点数だったしなあ。

興味のある分野は、のめり込んでる分覚えもいいのだろう。

「修二、どうだった？」

「花丸だよ。褒美だ、くのくの」

「わわ……」

俺はクリスちゃんの頭を、金の髪を梳くように撫でてやる。クリスちゃんは顔を赤くして、大人しく俯く。

暫く撫でてやれば、クリスちゃんは茹で蛸のようになりながら、俺の服の裾を掴む。

「ん……」

言葉少なに、俺をテレビの見えるベッドに座らせ、自身もその隣に腰を下ろす。触れ合った膝同士から、相手の体温が伝わってくる。

クリスちゃんの高い体温が、その小さな体に持つ熱と感情を教えてくれる。

画面の中の大和丸夢日記を見ながら、俺はそろそろ一度帰らねえと思っていた。百代ちゃんとか、そろそろ限界になりそうだと、送られた手紙から分かっていた。

俺たちは、それぞれ一緒に画面を見ながらも、内容は全く頭に入ってこなかった。

「……クリスちゃん」

大和丸が終わった後、俺はクリスちゃんの肩をを掴む。

「しゅ、修二……っ？」

クリスちゃんが見つめ合う。雰囲気酔ったような潤んだ碧眼に、俺が映る。クリスちゃんの中にあるそれを認めた俺は、ニイツと意地の悪い笑み浮かべる。

それに気づかず、クリスちゃんは瞳を閉じて瞼を震えさせる。

「日本に行くか、クリスちゃん」

「へ……？」

「二度日本に顔出しに戻ろうと思うんだが、クリスちゃんも一緒にどうかなってな。興味あつたろ？ 日本」

クリスちゃんは肩透かしを喰らったかのような呆けた顔をしたが、すぐに慌てるように顔を赤くしてアタフタする。

「あ、ああ！ そう言うことだな！ うん！ いいんじゃないか！」

「んじや、フランクさんに話をしなきゃな」

誤魔化すように捲し立てるクリスちゃんに、俺はその頬にそつとキスを落とすとしてやる。

悪戯が成功したかのような笑みを浮かべ体を離し、クリスちゃんの唇に人差し指を当てる。

「ちなみに、今のは秘密な？」

あの人にバレたら、マジでドイツ軍相手にするハメになっちゃうからな。

第23話

趣あるリユーベックの街を、俺はホットドッグ片手に練り歩く。肉厚のソーセージの割れる食感を楽しみながら、大きく口を開けてかぶりつく。

二口、三口でホットドッグを平らげ、包み紙で軽く口を拭う。そのまま丸め、道に設置されたゴミ箱に投げ入れる。

「どーすつかなー」

俺がリユーベックで食べ歩きしながら思案に耽っているのは、誰を日本に連れていくかだった。

クリパパこと、フランクさんの説得はクリスの上目遣いでワンパンだったし、俺の飛行機代とかも全額負担してくれるとのことだ。やっぱ持つべきものは金持ちのパパだな。

しかしここで、フランクさんは逆に俺たちだけではなく、猟犬部隊の誰かを連れていくことを条件に出してきた。

いやまあ、ガキ二人で海外旅行とか普通はあり得ねえから当然なんだけども。

「順当に考えりやあ、リザちゃんが無難なんだよねえ」

テルマちゃんはまだ男嫌いが激しいから、旅行とかに連れ出すならもうちよい矯正し
てからだし、フィーネちゃんは仕事忙しそうで邪魔するのも気が引ける。

やっぱまだまだ猫犬部隊は新設された部隊だし、フィーネちゃんも副隊長としてやる
べきことが山積みだろうさ。

ジークちゃんとコジマちゃんは、シンプルにお守りが増えるから今回はパス。だる
い、面倒い、仕事しろ。

となると、消去法でリザちゃんになるよなあ。少しの間現場離れても何とかなつて、
引率もできる。リザちゃん本人も日本に、というか忍者に興味がある。

「うっし、そんじゃ、リザちゃんに声かけてみるか」

手の中で先程のホットドッグを、異能で作り出しながら、俺は旅のプランを考える。
温泉旅館だな！ 浴衣着たりザちゃんと卓球してポロリさせよう！ クリスとこっ

そり混浴して性の目覚めを促してやろう！

楽しくなってきたネエ。

「なぜ、そこでリザなのですか。織原修二」

「……いつの間にそこおったん？ マルギツテちゃん」

俺がホットドッグを取りこぼしそうになるのを何とか堪えて後ろを振り向けば、いつもの軍服に身を包んだマルギツテちゃんが居た。

いや、マジでビビった。考え事してるとは言え、こんだけ近づかれて気づかなかつたのはこの体になってから初めてかもしれない。

「あなたが先程、ホットドッグの屋台で値切り倒して店主を半泣きさせたあたりからです。ああ言うことは辞めなさいとは言いませんが、程度を考えるべきです」

「あのハゲが俺を、にわか観光客だと舐めてぼったくろうとすんのが悪いんだよ。ま、味は悪くなかったがな。マルギツテちゃんも食う？」

もう一回、ホットドッグを手のひらから作り出しながら、マルギツテちゃんに差し出

す。

「食うかい？ 出来立てほやほやだぜ」

「いただきましよう。しかし、何度見ても不可解な能力ですね、その食物を作り出す力は」

「んー、まあ、そうだなア。どういう原理か俺自身もわかってないし、ぶっちゃけて言えば、科学的原理をこの能力に求めるのはナンセンスな気がすんぜ？」

「ふむ……そうですか」

いつぞやの中国からのヒットマンこと史文恭ちゃん曰く、異能のカテゴライズで、その中には他人に精神を憑依させたりとかつてのもあるらしいから、そんなのと比べれば可愛いもんじやろ。食べ物しか出せないし。

「ま、こういういった能力を解明しようとするのが科学者なんだろうが、マルギツテちゃんは別にそういう訳じゃねえだろ」

「ええ、まあ、ただ不可思議だと思っるのは致し方ないと理解しなさい。それだけ端から見ればその力は異質なのです」

「あいあい」

まあ、質量保存の法則とか言い出したら、それこそキリがねえしな。

「それはそうと、織原修二。クリスお嬢様を連れて日本に行くそうですね。中將から聞きましたよ」

「ん、あー、そうだな。その話をするつてことは、もしかしてマルギツテちゃんが一緒についてくんのか？」

「ええ。中將から直々に、クリスお嬢様の日本での護衛と身の回りのお世話を仰せつけられました」

「なるほどなあ。親馬鹿のフランクさんらしいが、猟犬部隊は大丈夫なんかねえ」

「問題ありません。一週間ほどだけなら、先に仕事を済ませておけば何とかかなります」
「まあ、それならそれでいいけどよ。無理はすんなよ」

俺の心配に対して、マルギツテちゃんはいつもと変わらず凛とご立派な胸を張って答える。

「心配されるほどではありません」

いやはや、ほんと、カッコいい女やねえ。

「おお！　これが日本の景色か！　修二！」

テンション爆上がりのお嬢様が、車窓から見える景色に歓声を上げる。隣に座る俺の肩を、ぐわんぐわんと揺らしてくる。

あーあー、はしゃいじゃってもー。

「こちら、お嬢様。はしたないですよ」

案の定、はしやぎ過ぎたクリスちゃん、マルギツテちゃんに嗜められる。

フランクさんに日本への一時帰国と、クリスの観光を提案したところ、快く旅費を出してくれるとのことだった。

ただ、態々マルギツテちゃんの任務を全部キャンセルさせ、お目付役兼護衛として付けさせるのはどうかと思う。いやまあ、引率は居た方がいいのは確かなんだけども。

「修二、川神ってどんな所なんだ？」

「変態と脳筋が住まう町」

「ごほん。お嬢様、川神は日本の中でも有数の武術の名門、川神院に、世界有数の財閥、九鬼財閥の極東本部があります。それらの他にも、商業施設もありますし、歴史ある武家の本家も多い、賑やかな都市ですよ」

「おおー！ マルさん物知りだな！」

「恐縮です、お嬢様」

俺の適当な説明に、マルギツテちゃんがきちんとした補足をつける。それにクリス

ちゃんが感心し、マルギツテちゃんはご満悦のご様子だった。

こやつ、さては川神のこと勉強してやがったな？ 実は結構楽しみにしてんのか？

この数か月で分かったことなのだが、マルギツテちゃんはすごく面倒見がいい。そりゃあ、軍人だから厳しいは厳しいが、クリスちゃんの相手でも分かるように、相手によつてはどちやくそこに甘やかす。

俺の生活習慣がだらしないからと、最近朝起こしてくれたり、一緒にランニングに連れて行こうとしたりする。なんだ、何処かかでフラグ立ててたか？

「修二も、適当なことを言わないように、お嬢様は純粹なのですから」

「あいあい、さーせんっした」

純粹培養しすぎなのも問題だとは思うがねえ。少しは社会の汚れを見せてやらなきゃ。

俺が一番汚い？ あとで屋上な。

「まあ、退屈はしねえだろうさ。クリスちゃんなら、仲見世通りだけでも一日中遊べるだろ」

「そうか、楽しみだなー！」

無邪気に川神を楽しみにするクリスちゃんに、俺は苦笑し、マルギツテちゃんは嬉しそうに見守っていた。

「修二ー!!」

駅に着いた途端、赤いお目の兎が俺の顔面にへばりついたてきた。柔らかいお腹が顔に押しつけられ、成長している胸が頭の上のつけられる。前後ろ逆さまの肩車状態になり、足が首をめっちゃ強い力で締め付けてくる。

「おーい、小雪、俺様に会えて嬉しいのは分かるが、前が見えねえ」
「えへへ、よつと、これでいーい？」

器用に頭の上で宙返りすると、小雪はきちんとした肩車の形に座り直す。

俺の頭の上からどけて言いたいんだがねえ。まあ、寂しい思いさせた分、許してやるか。

「おーい、ユキ、あんまりはしやぎすぎんなよ。ここ駅だし、他の人に迷惑かけちまうぞ」
「ちえー。はーい！」

「お久しぶりですね、修二君。また背が伸びましたか？」

準と冬馬もゾロゾロと合流してくる。小雪は準に言われ、軽やかに俺の肩から降りる。

「まあな、いいもん食って、寝てりやあな。あれ、百代ちゃんと京ちゃんは？」

「モモ先輩は川神院の修行って言ってたぜ。あと、椎名は……」

「修二、おかえりなさい」

背後からぬうつと、京ちゃんが顔を出す。そのまま京ちゃんは頬と頬を擦り合わせるようにして、背後から抱きついてくる。ちゆつと唇を軽く首筋に当ててくるあたり、やっぱりこの娘のエロさは同年代のそれでは無くなっている。

「お、おう、ただいま。元気そうで何よりだぜ」

「うん、ずっと健気に待ってました。なぜなら修二の正妻ですから」

京ちゃんは最近、百代ちゃんや小雪に対抗してなのか、自己主張をさらに強めて、攻勢にでてきている。俺がアイドル並みにプロデュースしたおかげで、今や立派な美少女になってきているし、ドキマギさせられることも多くなっていた。

「修二、彼らが前に言っていた友達か？」

「ん？ ああ、そうだぜ。おら、てめーら、このちみつこいのがクリスちゃんで、こつちのがマルギツテちゃんだ」

クリスちゃんたちを小雪ちゃんたちに紹介したところで、俺たちの川神観光が始まっ

た。

クリスちゃんははしやぎにはしやぎ、仲見世通りを回った時なんぞ迷子になりかけるという事件までおこりかけたが、おおむねうまくいっただろう。

「うまい！ うまい！」

クリスちゃんは葛餅が気に入ったのか、既に三杯もお代わりをしている。

「なるほど。日本の甘味はあまり食べたことはありませんが、確かにこれは世界中から評価されるのも納得です」

マルギツテちゃんもすっかりお代わりしてるしな。案外甘いもの好きなん？

「それで修二、クリスとはどうやって仲良くなったの？」

「ん、あー、そのあたりは口止めされててな。ま、いつものごたごたと思つてりやあい
「よ」

マジで俺、何でこんなにポンポンとマスタークラスと出会ってんだ？

世界でも指折りなんじゃねえの？ そんなエンカウントするもんじゃねえだろ。乱数バグってんのか？

「ふーん、そっか」

葛餅を頬張りながら、小雪ちゃんは意味深な視線をクリスちゃんへと向ける。

「あむ？ どうした？ 小雪」

「べっつにー！ ほっぺに粉が付いてるよ。ほら！」

「おお、ありがとう！」

ちと不安なところもあるが、大丈夫そうか。京ちゃんは吹っ切ってるようで、ニヤニヤとしながら俺を見てきている。

「どうしたのよ、京ちゃん」

「うーん、修二に言うのはフェアじゃないと思うんだけど、ぶつちやけ修二も気づいてる

よね。クリスマスのこと」

京ちゃんがススツと俺を近づき、耳打ちをしてくる。

んーまあ、そりやあなあ。可愛い女の子だし、そうなるようには仕向けたからな。ハ
ンサムな俺は、全く罪づくりに男だぜ。

「私は修二らしくていいと思うよ。修二は一人の女の子には縛れないしね」

ふっと、甘い声を吐息と共に吹きかけられ、背筋にぞわりといいしれぬ快感が走る。

「でも、私たちも考えてるんだよ。修二が自由を愛してるように、修二が好きで、恋して、
愛してるって。見てもらいたい、大切にしてもらいたい。それだけは忘れないでね？」

そのまま耳を甘噛みし、濡れそぼった舌を耳へと這わせる。

「ステイ、ステイだ。京ちゃん、それ以上は収まりがつかなくなっちゃう」

「……私としては、それでもいいんだけど……でも、とりあえずは修二を味わえたから満

足しとくね？」

京ちゃんは顔を離し、見せつけるように舌で唇を艶かしく舐める。

小学生の手管じやねえよ。誰だこんなエロティックモンスター生み出したの。

俺だよバカ！

「こほん！ 修二、そろそろ約束の時間です。仲睦まじいのはよろしいですが、お嬢様の前であると言うことを忘れないでください」

「悪いいなあ、マルギツテちゃん。流石の俺も、京ちゃんがここまでのもんだとは思ってなかつたんや」

時計を見れば、おやつ時間を少し過ぎた頃。

今回のクリスちゃんの観光地案内の締めくくりとして、川神院を案内する予定だった。エロ爺さんやエセジャッキー、どう見ても反社会的な世界の住民と、どうしようもない上層部だが、川神院は世界でも有名な道場だ。

ハゲどもが声を張り上げながらガチムチしてる光景しかないが、クリスちゃんとマルギツテちゃんは何故か興味があるらしい。

まあいいんだけどね。

そんなこんなで川神院にたどりつき、他のメンツが爺さんの案内で応接間に案内された後、俺は一人の猛獣に捕まっていた。

「修二ー、手合わせしてくれよー」

「久々に顔合わせたつてのに、百代ちゃんそれは無いんじゃないかなあ」

当然の如く百代ちゃんに絡まれていた。鍛錬の途中だったのか、道着姿で微かに汗ばんだ身体を惜しげもなく押しつけてのしかかってくる。

中学生となり、発育も倍プッシュで成長した百代ちゃんの身体は未成熟さはあるが、十分に女の身体であり、そこから伝わる柔らかさはホントもうご馳走様としか言いようがない。

「だってお前が帰ってきたと思つたら、一時帰国つてただけだし。おまけに女連れつて、こんな可愛い彼女ほつぽつて何してるんだよー！ かーまーえー！ かーまーえーよー！」

実はと言うほどでも無いが、百代ちゃんや京ちゃんよりも甘えたがりだ。いつもは年上だからと余裕ぶつてるが、実は一番精神年齢が低い、ちなみに一番高いのは冬馬と準だ。

「あーあー、分かつた分かつた。ちよつとただけだぞ、俺もクリスちゃんの案内やらで疲れたんだし」

「うっし！ 言質は取つたからな！ 逃げるなよ！」

爺ー！ と声を張り上げながら百代ちゃんはどこぞへと走っていく。

それに手を振りながら、俺は百代ちゃんの姿が見えなくなるといい笑顔を浮かべる。

「さあて、抜け出すとしますかね」

「では、東、川神百代」

「押忍!!」

「西、織原修二」

「……あー、うす」

目の前にはやる気満々な百代ちゃん。その立ち上る気が熱気を持ち、陽炎が生まれている。凄まじいまでの闘気が俺にたたきつけられる。俺は顔を引きつらせながら、なんとか名乗りに返事を返す。

「やる気ないのお。もうちつと気合入れられんのか?」

「だってよお。逃げ出そうとした瞬間、空から隕石降らすとか容赦なくね?」

気を薄弱化させて逃げ出そうとした瞬間、目の前の爺さんは惜しみなく奥義を使って

俺を捕まえに来た。やってやろうかとも思ったが、それこそ百代ちゃんも嬉々として飛び込んできてスマブ〇が始まっちゃう。

「お主がドイツにいる間、モモは随分とフラストレーションを溜めておつてのお。ほれ、彼氏なんだから彼女の欲求不満には付き合わんか」

「実の孫娘のことなのに欲求不満とか言つてやんなよ。あー、わーつたよ。たまには真面目に組み合うよ」

「よし、久々に本気でやれそうだ！ 爺！ 合図を早くしろ！」

百代ちゃん、嬉しそうやネエ。

まあ、たまには俺様が最強だつてことを、教え込みにやならねえか。

「それでは、両者……始めエエイツ！」

side：マルギツテ・エーベルバツハ

その闘いは、私が知っているものではなかった。

格闘技、軍隊格闘術、トンファーを始めとした複数の武器術。私が修めている武術はこの程度で、日本の諺、武芸百沓とは自惚れても言えないが、それでもこれだけは言えた。

目の前の闘争、これは人の闘いでは無い。

「川神流 致死蚩！」

「散弾ではなあ！」

無数の気弾が修二に襲いかかる。その密度は銃火器であるマシンガンの比ではなく、修二の目の前の空間そのものを埋め尽くすようにして放たれた。

それに対して、修二が行ったのは氣を乗せた怒号。音という波に乗せられた氣は迫り

来る気弾の悉くを粉碎していく。

川神百代、織原修二。二人は人間では無いのでは。そんな風に私の理性は感じてしまった。

「川神流 無双正拳突き！」

ただの正拳突き、しかし、その内包された破壊力は計り知れず。ただの基礎を極め、奥義へと昇華させ、相手を必殺する技へと。そこに積み重ねられた歴史と研鑽、武術とは斯くあれかし。

「……」

その一撃必殺の技を、修二も技を以って返す。そこにあるのは先ほど感じたものとは真逆の天賦の才。

突き出された拳を優しく包み込み、そつと虚空へと走らせる。それとともに包み込んだ手は蛇の牙と変わり、捕らえた獲物を離さずに川神百代の身体を投げ飛ばす。

「ほお……合気か。やるのお」

武神が隣で感心する。

合気、日本固有の相手の力を利用した武術。欧州には存在しない、理外の技。

「本当に末恐ろしいとは思わんかの？ マルギツテ嬢。あれで、まだ齡十を僅かに超えただけなんじゃよ」

「……確かに。それは……そうでしょう」

背中から地面に叩きつけられた川神百代は、自身の拳の力をそのまま受けたかのように息を吐きだす。しかし、次の瞬間には掴まれた腕を掴み返す。

「川神流 雪達磨」

「そいつあ、効かねえんだなあ？ 百代ちゃんよお」

川神百代の腕が冷気を放つ。外気功による自然現象の再現、あんな技を喰らえば、凍傷は避けられないだろう。

対して、修二も外気功を炎へと変える。両者の拮抗は一瞬、効果なしと判断した川神百代は寝そべった姿勢のまま引きずり倒そうと修二の腕を引き寄せる。

「それは悪手じゃよ、モモ」

「なぜ？ 相手にマウントを取られるよりは、同じグラウンドで戦うのは悪い選択肢では無いのでは？」

「確かに、それも間違いでは無い」

ほれ、と鉄心殿が目線をやれば、勝負の様相は一瞬で変わってしまった。

川神百代は間接を完璧に極められ、修二の手が卑猥に彼女の身体を弄っていた。

「修二は自身でも一番寝技が得意と言っておるからのお。というか、普通祖父の目の前で孫娘にあんなことする？」

「……」

修二の寝技の技量に感心すべきか、それともその技量の根源が邪な欲求から生まれたものであることを嘆くべきか。私と鉄心氏の心は一致した。

「くそつ、ひわつ!? くら、しゅーじ! だ、あつ……!」

「カハハ、ここか、ここがええのんかあ? 全く立派に育ちやがつてヨオ!」

「だあああ! 人間爆弾!」

次の瞬間、川神百代の体が爆発した。

「……はあ、はあ……」

「……自爆技かよ」

爆風が晴れば、傷だらけの修二と同じく傷だらけの川神百代。

しかし、両者の傷はみるみるうちに塞がっていく。修二の体質は知っていたが、川神百代のはいったい如何なる技によるものか。

「さて、遊びはこの辺りでいいだろ。そろそろマジで付き合うぜ」

「……ああ、そろそろ私もウォームアップが済んだところだ」

無傷に戻った二人がお互いに駆け出す。

織原修二は愉しむように、川神百代は幸せそうに。

そこにはたった二人の世界しかなかった。

それを見た時、何故かズキリと痛みが走った。

その痛みを自覚すれば、あとは早かった。

修二が他の者と戯れるのを咎めるのも、今回の旅で中将に無理な自薦したことも、時折その姿を探してしまうのも。

始まりは何だったのか。

意外と気が利くことに気づいた時からか、その快活な笑みにつられて笑顔が出た時からか、小気味良いやりとりが日常に組み込まれたからか。

お嬢様も彼が好きなのだろう。その素直な好意は誰の目にもわかる。周囲の女の子たちも、誰もが彼を見ている。そこに私のいる場所は……。

試合は激しさを増す。

私の胸の痛みも。

「そこまで！ ……流石にこれ以上は、修繕費が馬鹿にならんわい」

爺さんの合図に気張ってた身体の力を抜き、大きな息を吐く。

百代ちゃんも相当に疲労したようで、ゴロンと武闘場に寝っ転がる。

「疲れたにやーん。修二ー、抱っこ」

「俺も疲れてんだけどネエ。それも百代ちゃんに付き合ったせいで」

仕方ないので、伸ばされた両手を掴み上げ、背中におんぶする。

「そこはお姫様抱つことか、気を利かせてもいいんじゃないか？」

「疲れてんの。それに、こっちの方が尻とおっぱいが当たって俺が幸せ」

「うわ、ナチュラルにセクハラを。まあ、いつか。うりうり」

セクハラと言いながらも、百代ちゃんは俺の背中との接地面を広げる。

しかしまあ、全力でやったんだが、勝ち切れなかったゾ。ぶっちゃけ、武術という分野だけ見れば百代ちゃん、俺よか天才なんやなあ……。

「イチヤつくんなら、さっさとどっか言つて欲しいんじゃないかのお……」

「爺！ 修二との甘いシーンを邪魔するなよなー！」

爺さんが胡乱な目が出ていけと言うので、仕方なく百代ちゃんを背負ったまま舞台から降りる。

「修二……お前、こんなに強かったんだな」

舞台から降りた俺に駆け寄ってきたのは、クリスちゃんだった。そのすぐ後ろには何

か考えているマルギツテちゃんがいる。

「お、修二がドイツで知り合ったクリスか……ふむふむ、可愛い子だな。なあ？ 修二」
「そつと首に回す腕に力込めるのやめて下さい死んでしまいます」

「ふん、女好きめ。私は川神百代だ、モモ先輩でいいぞ。私もクリスって呼ぶから」
「こーら、ちゃっかかりマウント取りに行こうとしないの。」

「悪いな、クリスちゃん。百代ちゃんは一つ上だから、偉ぶりたい年頃なんだ」
「いいや、構わない。あれだけの武威を誇るのだ。私はモモ先輩を尊敬するぞ！」
「おお！ 修二！ クリスはいい奴だな！ 私を尊敬するって言ってくれたぞ！」

クリスちゃんは純粹すぎて心配だが、百代ちゃんはアホにチョロくて心配だよ……。
てか、マルギツテちゃん、だいぶ難しい顔してるな。

うーむ、こりや、俺が下手に触れない方が良さそうだなあ。

side : クリステイアーネ・フリードリヒ

夜、私とマルさんはお父様が用意してくれたホテルで、今日のことを話していた。同じベッドに入り、部屋の明かりを消して話し込む。

昔はよくこうして夜更かしして、お父様に怒られた。

「今日はすごく楽しかったな、マルさん！」

日本に来てよかった！ 私は心の底からそう思った。修二が育ったこの地は、気持ちがいい。修二のように、侍の魂を受け継ぐ者たちが数多くいる。冬馬や準もいい奴だし、小雪や京も私とマルさんのことを快く受け入れてくれた。

「そうですね、お嬢様。世界は広いと、改めて感じました」

しかし、どうしてかマルさんは元気が無さそうだ。

修二がモモ先輩と試合をしてから、どこか心あらずといった感じに。

「修二のこと、何かあったのか？ マルさん」

修二がドイツに来て、色々と教えてもらった。勉強や人との付き合い方、それは世間知らずの私にとって、世界を広げてくれることに等しかった。

人の気持ちを慮る。今、マルさんは何か悩んでる。修二が教えてくれたから、分かった。

「なにもありませんよ、お嬢様。ただ、修二が思った以上に強かったので、驚いたのです」
「確かに凄かったなあ。モモ先輩もだが、どうやったらあんな強くなれるんだろうなあ」

私の今してるフェンシングで勝てるのだろうか。うーん、難しそうだ。マルさんたちの訓練に混ぜてもらって格闘技も習ってるけど、勝てるビジョンが浮かばない。

「悔しいな、マルさん」

「え……………」

でも、マルさんとなら何とかなるかもしれない。獵犬部隊のみんなとなら、もしかしたら勝てるんじゃないだろうか。

「ドイツに戻ったらもつと頑張らないとな。本当は一騎討ちで勝ちたいけど、あれは難しそうだ」

「……………お嬢様」

なんとなく、マルさんが何を思ったのか分かった。

そっか、マルさんも、修二が好きなんだな。

「大丈夫だ、マルさん。私たちなら追いつける。だから、一緒に頑張ろう」

「……………ありがとうございます」

私を抱きしめるマルさんと、そのままそつと眠りについた。

第24話

燦々と照りつける太陽！ 弾ける水飛沫！ 輝くほどに白い女体！

細波の寄せる水辺では、楽し気な笑い声が聞こえてくる。日本人とは体の作りからして違う肢体を、軍隊という過酷な職場で磨き上げた女子たちが、今だけは職務をその軍服とともに脱ぎ捨ててはしゃいでいる。

俺はパラソルの下でビーチチェアに座り、そんな美女博覧会と言つて差し支えない絶景をトロピカルジュース片手に眺めていた。

「これが至高の贅沢か。ついに俺も行きつくところに来ちまったようだな」
「一体何を言っているのですか……」

俺とフランクさんの半年の契約期間、その最終日が今日であった。思えばあつという間だったような気もするが、猟犬部隊の面々を始め、出会いの密度は中々に濃かった。

そんなドイツとのお別れの日、フランクさんは猟犬部隊の慰安も兼ねてこのビーチを用意してくれた。ちなみに、フランクさんが職権濫用の極みを使い、訓練の名目で貸し

切っている。

ちなみに、クリスちゃんとフランクさんも一緒に来ており、猟犬部隊と一緒に遊ぶクリスちゃんを、フランクさんはストーカーよろしくカメラでひたすら激写しておられる。

信じられるか？　これがドイツ軍のトップの一角なんだぜ？

「いんやあ、マルギツテちゃんみたいな可愛い子に酌してもらいながら、きやつきやつとはしゃぐ美女たちを眺める。これほどの贅沢があるかね？　いやあるまい」

「本当に、最後まであなたはふざけた事ばかりを言うのですね」

「そうかい？　割と贅沢ではあると思うがねえ。さて、俺らもそろそろ一緒に遊んでみようか」

なにやら部隊の面々が、ビーチバレーの用意をしているようだ。流石特殊部隊、遊びだとしても、瞬時にコートが設営されていく。

どこからかトーナメント表まで作られており、二人一組のチームでの参加らしい。

「修二くん、たいちよー、皆めっちゃ待ってますよー」

ジークちゃんが手を振ってるので、俺はマルギツテちゃんを伴って集まりの中に合流する。

「おつ、マルと修二も来たか。んじゃ、二人で飛び入り参加だな」

リザちゃんは既に他の隊員と組んでるらしく、トーナメント表に名前が書きこまれていた。

「おつ、いいのか？ マルギツテちゃんと俺が組んだら、優勝待たなしだぜ？」

「言うじゃねえか。確かに戦闘ならきついだろうが、スポーツなら何とでもなるんだぜ。なつ、ノエル」

「もつちろーん。隊長と修二くんも、油断してたら足元掬っちゃいますからね」

「待ちなさい。私はまだ出るとは」

「いーからいーから、今日はオフなんだから、マルもたまには遊びに付き合えよ」

マルギツテちゃんはまだ何か言いたげだったが、リザちゃんが有無を言わずに参加

させる。

ほむ、なんか引つかかるもんがないわけでもないが、まあいっか。

「それじゃあ、修二君たちも参加だねー。ちなみに、私は審判だから。びしばし厳しく判定していくよー」

ジークちゃんがご立派な胸を張る。トーナメント表を見れば、リザちゃんはじめ、コジマちゃんにテルマちゃん、クリスちゃんまで出場してやがる。

まあ、俺がやるんだ、サクツと優勝してやろうかねえ。てか、優勝賞品って何が設定されてんの？

「ちなみに、優勝者にはフランク中將がお持ちの秘蔵のワインと人気店のソーセイジ&ザワークラウトのセットです」

「へえ。フランクさんの酒の趣味は確かだからな。リザちゃんたちには悪いが、マジでやらせてもらうか」

「ふっふっふ、修二、悪いが優勝は私とコジーが頂くぞ」

「クリスと私のコンビなら、隊長と修二のコンビも怖くないぞ！ 首を洗って待ってる

「いいぞー！」

ほー、純粋な身体能力ならコジマちゃんもクリスちゃんも高水準だからな。こりゃあ、リザちゃん含めて一筋縄ではいかねえなあ。だからこそ、やり甲斐があるつてもんだ。

「はあ、全く仕方のない者たちですね。良かったのですか？ 修二」

「マルギツテちゃんの方こそ良かったのかい？ あんまこういう催しが好きなイメージは無かったんだが」

「そういう訳ではありません。私だってスポーツは好きです。観るのも、自分でするのも」

「へえ、そりやいいこと聞いた。今度サッカーでも見に行くかい？」

半年間ずっと一緒に居たが、案外まだまだ知らないことがあるもんだ。惜しむらくは、サッカーを見に行く機会はまただいぶ先のことになっちまうことだろうか。

「また冗談を……。ただ、期待しないで待ってますよ」

「おいフィーネ、これでよかつたんだよな」

「ええ。男女が一緒にスポーツをすることで、仲を深めるのは恋愛において定石です。この後はピンチを演出させましょう。試合では頼みますよ、リザ」

「はいはい、俺もたまにはマルたちとガチでやり合いたいしな。ったく、ほんと世話のかかる隊長さんだぜ」

「仕方ないかと。マルギツテも初めての感情を持って余っていたのでしよう。端から見てもどかしさを感じたのは否定しませんが」

「隊長もめつちや可愛かったよね。日本から帰ってきた辺りだったっけ。何かと修二くんを追いかけ始めたの」

「全く、隊長もさつさと素直になればいいのに。しょうがないから、私たちが一肌脱いで

あげるのだ」

「はあ、何で私までこんなの手伝いを……でもまあ、隊長のためだもの、仕方ないわね」
「では、各員、手筈通りに頼んだぞ。マルさんの恋の成就のため、みんなの力を貸してくれ」

「おぉー！」

トーナメント表第一試合の相手は、クリスちゃんとコジマちゃんのコンビであった。

「第一回戦から、優勝候補同士のぶつかり合いのようですね」

「みたいだねー、どんな試合になるのかなあ」

「実況は私、フランクと、フィーネくんの解説で務めさせてもらう」

ジークちゃんたち運営側が、興味深げに試合の準備をする中、俺は肩を回し身体をほぐす。隣を見れば、マルギツテちゃんも同じように軽いストレッチをしていた。

豊満な肢体に水着が食い込み、凄まじいドスケベボディを見せつけてくる。

「修二、お嬢様が相手とはいえ、手を抜きません。それこそお嬢様を侮辱することです、ですが、絶対に怪我をさせないように気をつけなさい。……どうしたのですか？ 前屈みになって」

「何でもないべ……ま、わあつてるよ。やるからには全力でだ」

気合は十分、試合とはいえ舐めてかかれるような相手では無い。体の内で気进行操作し、ヤル気を見せたジュニアを押しさえ込み背筋を伸ばす。

気の操作の応用を果たし無くくならない使い方をしてるが、房中術にも応用できそうじゃね？ これ。

「よし、行くぞコジロー、二人に勝つぞ！」

「よし来た！ どんと行くぞー！」

ロリロリコンビもやる気満々のようだ。未成熟な健康美も、それはそれでそそのめるものがある。

それでこそ、俺たちの相手に相応しい。

「修二、何やら二人を見る目が怪しいような気がするのですが」

「気のせいです。それはきつと気のせいです。ほら、試合始まるから、前見て前見て。ジークちゃん！ 試合始めよー！」

「はーい！ それじゃあ、四人とも準備はいいかなー！」

勘のいいマルギツテちゃんが、胡乱気な視線を向けてくるので、試合開始を急かす。ジークちゃんが俺たち全員を確認した後、が笛を啜える。

「それじゃあ、はじめー！」

「行くぞ！ 騎士サーブ！」

初手はクリスちゃんのサーブからだった。頭上に放り投げたボールを、綺麗なフォームで打ち出す。

「クリスー!! 頑張れー！ 頑張る君が何よりも輝いてるぞー！」

なんか中将閣下殿がご乱心のようだが、大丈夫か？

しかし、恵まれた身体能力から放たれたサーブは、正確に俺たちのコート端に滑り込もうとしてくる。

「修二ー！」

「あいよー！」

俺は素早くボールの着地点に走り込み、レシーブする。衝撃を手首で受け止め、マルギツテちゃんの位置へと再び打ち上げる。

「マルギツテちゃん！」

「任せなさい！」

マルギツテちゃんが自身の元へと来たボールを、優しくトスする。それはレシーブした直後にネット際へと走り込み、跳ねた俺の目の前へとちようど落ちてくる。

「そらっ！」

ボールが壊れない程度力で放つスパイクは、クリスちゃんたち側のコート端にめり込む。

ジークちゃんが笛を鳴らし、俺たちの点数ボードを捲る。

「まずは一点。ナイストス、マルギツテちゃん」

「修二こそ、綺麗なレシーブとスパイクでした」

自コートポジションへと戻ると、マルギツテちゃんが手を上げてきたので軽く手を合わせる。

さあて、そんじやま、この調子で試合を進めていこうか。

試合は進み、なんとかマツチポイントまで漕ぎ着けた。しかし、コジマちゃん達も連携とパワーを生かして、油断できない点差まで追い上げてきてる。

「コジマスパイクー！」

「くっー！」

コジマちゃんの桁外れな臂力から繰り出されるスパイクを、マルギツテちゃんが何とか受け止める。しかし、そのボールはコートから外れていき、アウトになりそうになる。

「任せな、マルギツテちゃんー！」

俺は素早く走り込み、スライディングで飛び込んでボールを拾い上げる。

「良くやりました、修二！」

マルギツテちゃんが浮かび上がったボールを、相手のコートへと打ち込む。しかしそこにはクリスちゃんが待ち受けており、そのままトスを上げる。

「コジー！」

「ほい来た！ 任せろ！」

コジマちゃんが再びスパイクを決めるべく、ネット際に走る。それを見た俺たちもまた、ネット際に走り込む。

アイコンタクトすらいらず、俺たちはお互いに並んで飛び上がる。

「なに!? コジー、まずい！」

「コジマススパイク！」

再びコジマちゃんが打ち出した凄まじい威力のスパイクを、二人がかりでなんとかブロックする。

そのまま相手コートへと、ボールを落とす。

「ゲームセット！ 勝者は修二、隊長ペアー！」

ジークちゃんが笛を吹き、試合終了を告げる。

「くう、ごめんクリス」

「いや、コジロー、相手が上手かったんだ。落ち込むことはない」

いやはや、だいぶヒヤツとする場面が多かったぜ。クリスちゃんもだいぶ勝負巧者になつてたし、コジマちゃんは爆発力が油断できなかつた。

間違ひなく強敵だった。相方がマルギツテちゃんだったから、勝てたと言っても過言じゃない。

「流石でした、お嬢様。お嬢様たちが勝つても、なんらおかしく無い試合でした」

「ありがとう、マルさん。マルさんたち、凄いコンビネーションだったぞ」

「そ、そうですか……？ あ、ありがとうございます」

クリスちゃんに褒められて、戸惑いながらも照れるマルギツテちゃん。

その成熟した身体と内面のギャップ、やはりマルギツテちゃんのヒロイン力はハンパねえなあ。

「はい、それじゃあ、次の試合に移るよー!」

そして、ジークちゃんの進行によって、トーナメントが進められていく。

ちなみに、テルマちゃんは初戦で敗退してた。

「ちよつと、もう少し見せ場あつてもいいでしょ!?!」

「はいはい、それじゃあ、次が決勝戦だよー。二組とも、準備はいいかな?」

決勝戦は当然のように、リザちゃんとアンナちゃんペアが勝ち上がってきた。器用万

能なりザちゃんど、素早い身のこなしのノエルちゃんペアはテルマちゃんをフルボッコにしていた。

いやまあ、テルマちゃんの運動神経がそこまでって言うのもあるんだけどな。

「それじゃあ、マル、修二、悪いけど最初っから全力で行かせてもらおうよ」

「おうおう、リザちゃん。そりゃあ、こっちのセリフだぜ」

「ええ、あなたたちは強敵ですが、私たちには及ばないと知りなさい」

「隊長も修二くんも、やる気満々だねえ」

お互いの戦意も満ち満ちてる。

これは、楽しい試合になりそうだ。

「それじゃあ、試合、開始ー！」

試合はリザちゃん、ノエルちゃんペアのペースで進められた。

「影分身の術！」

「ずっけえ!？」

コート全域に、リザちゃんの分身がカバーに入る。シンプル単純に数の暴力で攻めてきたうえに、ノエルちゃんはいやらしくも的確なサポートをして点数を積み重ねていく。

多種多様なゲルマン忍法を駆使するリザちゃんをどうにかしないと、マジで負けちゃうぞ。

でもまじでずっけえな、ゲルマン忍法。リザちゃんにネオドイツのファイターのこど、話すんじゃ無かったぜ。

「ちくしょう、このままだとジリ貧で負けちゃうな。俺がリザちゃんたちが受け止めら

れないようにスパイクすると、ボールが壊れちまうしよ」

「ジーク！ タイムです！ ……修二、私に考えがあります」

「おん？」

俺がどうすつかないとサーブ前にボールを弄んでたら、マルギツテちゃんタイムを取って近づいてきた。

その顔は苦境に立たされながらも、活路を見出さんだする強い意志を宿していた。まるで戦場で指揮を取るかのように、俺に作戦を耳打ちしてくる。

「リザのあの技は気をかなり使用します。それも、分身たちが激しい運動をすればするほどに、その消耗は激しくなります」

「へえ、流石にローコストな技じゃあねえか。そこで作戦は？」

「攻めて攻めて攻め続けます。私が前にでますので、あなたは私のフォローに回ってください」

なるほどねえ。悪くないんじゃないか？ 下手に奇策をぶつつけ本番でするより、分かりますし確実だ。

何より、マルギツテちゃんらしくていいねえ。

「分かった。後ろは全部任せな、本気で全部の玉を拾ってやるよ。ノートスでスパイク叩き込めるように上げてやるよ」

「ふふ、頼もしいですね。それでは、任せましたよ!」

マルギツテちゃんが、コート際を陣取る。

俺はサーブを高く打ち上げ、分身たちを少しでも動かす。

「ノエル! 打ち込みな!」

「任せて!」

分身がレシーブとトスをし、ノエルちゃんが打ち込む。

俺は身体能力を上げ、ボールをマルギツテちゃんの元へと上げる。

「はあああ!!」

渾身のスパイク、マルギツテちゃんが全力で打ち出したボールを、リザちゃんの分身が何とか滑り込んで拾う。

「H a s e n」

マルギツテちゃんが再び、全力で打ち込む。今度は予想していたのか、分身はボールの落下地点に待ち構えていたが、ボールの威力に顔をしかめる。

俺はマルギツテちゃんを信じて、もう一度ボールを拾い上げる。

「J a g g d !!」

もう一度打ち込む。今度もノエルちゃんがボールを拾う、明らかに分身たちをフォローする立ち回り。

「なら、それごと叩き潰すまで！」

もう一度、もう一度、マルギツテちゃんは何度も全力でスパイクを打つ。

マルギツテちゃんの息が上がり、身体から汗が流れ出ている。

ほぼ守りの一手を引き受けた負担はマルギツテちゃんよりも大きいはずだが、そこはマスタークラス、まだまだやれそうだ。

「まだやれそうか？ マルギツテちゃん」

「はあ、はあ……当然、です」

そろそろマルギツテちゃんも限界か……。流石にダウンすれば、試合は負けだなあ。

「もう少しです。あと少しで、リザの体力も切れるはずですよ」

「分かった。信じるぜ、マルギツテ」

「……………」

マルギツテちゃんが、呆けたように目を丸くする。

「わかりました。……ありがとう、修二」

さあて、そろそろクライマックスだ。
気張れよ、マルギツテちゃん。

「はあああああ！」

それから何度目かのスパイクの時、リザちゃんの分身が吹き飛ばされるようにかき消される。

それは、とうとうリザちゃんの気によって作られた分身が維持できなくなったということだった。

「くっそ、悪いノエル！ スタミナ切れだ！」

「まさか、こんな力技で破ってくるなんて……」

そこからの試合は一方的だった。

スタミナの切れたりザちゃんをフォローしようとするノエルちゃんだが、数の有利と
言う圧倒的なアドバンテージを失ったのは大きかった。

マルギツテちゃんも疲労はあつたが、ラストスパートと言わんばかりに攻め立てる。

「マルギツテちゃん！ 最後、任せませー！」

「任せなさいー！」

俺が上げたボールを、マルギツテちゃんが最後の力を振り絞って打ち込む。それにリ
ザちゃんが滑り込むも、一步届かずにボールは相手のコートへと落ちていった。

「試合終了ー！ 優勝は、修二くん、隊長ペアー!!」

ジークちゃんの試合終了の合図が響く。マルギツテちゃんは力が抜けるように、崩れ
落ちそうになるところを支えてやる。

「おっと、お疲れさん、マルギツテちゃん」

「……修二」

「マルギツテちゃん、俺たちの勝ちだ。マルギツテちゃんのおかげでな」

「いいえ……あなたのお陰でもありますよ、修二。お疲れ様です」

穏やかな笑みを俺へと向けるマルギツテちゃんは、初めて会ったような、そんな錯覚を覚えるほど、魅力的だった。

夕日が水平線の向こう側へと沈み込んでいく。

夜までの僅かな夕焼けの時間を、俺はマルギツテちゃんと一緒に過ごす。

それも、疲れ切り、満足に動けないマルギツテちゃんを腕の中に抱きかかえていた。

「まったく、リザたちにも困ったものです。初めから、こうするつもりだったのでしょう」

口を尖らせるマルギツテちゃんだが、不思議とその声に棘はなく、むしろ少し嬉しうだった。

後片付けを全部引き受け、俺にマルギツテちゃんの面倒を見るとこの場所に追いやって面々の顔を思い出す。

「まあ、リザちゃんたちも単純に楽しんでたところもあるだろうさ」
「そうですね。本当にリザ手強かったです」

空白の時間、お互いがお互いに何も言わない時間が生まれる。
それでも、不思議と心地が良かった。

「好きです、あなたのことが。織原修二」

遠く、沈んでいく夕日を見ながら、そうマルギツテちゃんが囁く。

俺は答えず、ただその夕焼けより赤い髪を撫でる。

「あなたと生涯を共にしたい。そう願うのです。でも、あなたは私のそばだけに留まってはくれない」

「……そうだな。そして、マルギツテちゃんも、ドイツからは離れられない」

そう、俺とマルギツテちゃんの場所は遠い。

俺は束縛を嫌い、マルギツテちゃんは、このドイツから離れられない。それは軍人であるが故の必然であり、マルギツテちゃんがマルギツテちゃんである以上避けられない現実だ。

「それでもいいのです。それでも、私は……」

マルギツテの瞳が切なく潤む。そこには、ドイツの神童やら、古の城砦などと呼ばれる猟犬は居らず、ただの一人の乙女がいた。

本当、なんでこの世界は愛が重いのか、チョロいのか分からない子がこんなに多いんだ。

「だから、せめて今だけは、こうして抱きしめてください。今だけは、私があなただの心の中心にいることを許してください」

「それぐらい、いくらでもしてやるよ。これからも、いつでも好きな時にな」

マルギツテちゃん一人だけに向き合えない俺は、腕の中のマルギツテちゃんをそっと抱きしめるのだった。

既に日は沈み、暗闇を波の音だけが彩る。

そんな世界で、たった二人だけの時間を、願ったのだった。

中学生編

第25話

中学生に上がるまでの間に、色々なことがあった。それはもう、それだけで長編を何部か書けてしまうくらいには事件に巻き込まれた。

史文恭ちゃんの誘いに乗って、いつものメンバーで中国に行けばマフィアの抗争に何か俺だけ巻き込まれた。何でか手を組んだ敵対組織同士のマフィアから山中へと逃げ込んだら、少女に絡んでたロリコン虎と一夜のランデブー。そしたらお代わりだと言わんばかりに、追っ手に傭兵が増える始末。

なんでや、むしろ俺人助けしたんやけど。

超絶不幸ガールと一緒に歩いてたら、隕石が地球に落ちてきてそれを何とかぶっ壊したのはよかつたが、またしても死にかけて上に、頭の中身までぶっ飛んで行つた。なぜか知らんが、その後久遠寺とかいう超どでかい家で記憶喪失な品行方正シヨタ執事として働いてたり、記憶が戻つた瞬間次女のロリニートが発狂したり色々あった。まあ、ようやく好みに合つた専属執事ができたと思つたら、記憶取り戻した瞬間悪辣非道なヤツになつたらしやあないわな。

あとは……ああ、岡本の婆ちゃんやんが死んじまつて、一子ちゃんやんが川神院に引き取られたな。

月が天に輝く、涼しい夜。

まん丸の自己主張の激しいそいつは、星々の慎ましやかな燦めきなんぞ知るかと言わんばかりに夜闇を照らす。

しかし、そのおかげで、明かりをつけずとも縁側に腰掛けた俺は、しっかりとした手つきで月見酒を味わえた。

盆に盛られた団子は山ほど作ったはずだったが、育ち盛りのワンコに大半を喰われ、

残りも後少しとなっていた。まったく、遠慮なく貪りやがって、食ってすぐ寝たら太るぞ。

「いい月だ。あんなだけでかけりやあ、手を伸ばせば取っちゃまえそうだな」

「そうだねえ。ほんと、綺麗なお月さんだこと……」

しわがれた老婆の声はか細く、俺の言葉に応えてくれた。

「……」

俺は静かに酒を飲み、団子を口に放り込む。わざと、くちやくちやと音を立てて、ゴクリと飲み込む。

「二子のことなら、川神の爺さんに頼んである。ああ見えて、意外と金は持った爺さんだからな。飢えることも、寒さに震えることもあるめえて」

「……そうかいそうかい。ほんと、修二くんは気が利く男の子だねえ」

「当たり前だろう？ 俺は世界一のハンサムだぞ」

静かな夜に、俺が下品に酒と団子を食らう音だけが響く。

「私は……あの子でただ、自分の寂しさを埋めたかったただだったんだよ。家族に先立たれ、一人でいることに耐えられなかったのさ……」

俺はその告白に応えず、ただ同じように咀嚼音を返す。

「そんな私が、今度はあの子を一人にしちゃうところだった。ほんとに、ありがとうねえ……。修二くんが居れば、あの子は、きつとこれからも幸せだろうねえ」

「まあ、生憎と俺は金と女にがめつくてな。いい女は捕まえて放さないのさ。なにより、アンタは最後の最後に託せたからな」

「ふふ……修二くんとは、六十年くらい早く会いたかったねえ」

「そうか？ 残念だったな、俺は六十年前のアンタじゃなくて、今のアンタに会えて良かったよ」

酒を杯に注ぎ直す。それを月に翳すように、掲げてあげる。

「今日はほんとうに、月が綺麗だ」

小さな湖面に揺れる月。それは形を変え、揺ら揺らと今にもかき消えそうになる。

「……ごめんなさいねえ。もう、お月様も、見えやしないよ」

「そうか。……明日の月は、欠けちまうみてえだな」

ことりと、肩に軽いものが寄りかかる。軽い軽いその月を、倒れてしまわないように、手を振るう。

俺は湖面の月を空へと帰したのだった。

中学進学までカウントダウンが始まった今日この頃、最近は何代ちゃんが新しい妹の一子ちゃんを可愛がるあまり、俺が少し蔑ろにされ軽い寝取られ気分を味わっていた。

一子ちゃん繋がりでも風間ファミリーの面々との交流も増えてきて、大和坊はようやく暗黒時代を卒業したが、数々の歴史はしっかりと保存してある。

そんな折、珍しく日本に一週間ぐらい滞在してる帝からの呼び出しを受けた。いつもならブツチして、屁でも返すんだが、借りを返せと強制的に呼び出された。

「んで、何の用よ。借りを返すのは構わんが、つまんなかったら殴るかな」

「おお怖い怖い。ま、取り敢えずはこれを読んでみて見ろよ」

帝がポイっと、何かの資料を投げ渡す。俺は欠伸をしながら、それを流し読むが、次第に眉根に皺が寄っていく。

クローン。

遺伝子という人間そのものを形成する情報を操作することにより、同じ遺伝子を持つ人間を造り出す技術。命を自由に造り出すという禁忌だとか、現代倫理に則つての善悪だとか、そういう小難しいことはぶつちやけどうでもいい。それを論ずるのはどつかの偉ぶつた学者さんたちに任せとけばいい。

その資料には、そんな空想科学の産物について書かれていた。

「随分とまあ、大仰な存在を生み出したなあ。ええおい」

俺は不機嫌も隠さずに、渡されたそれを乱暴に投げ捨てる。その中には、四人の人物の情報が顔写真とともに記されている。身長、体重、特技や趣味、果ては日常生活の様子まで、個人情報これで何かと書かれている。

プライバシーって何かな？ って尋ねたくなるほどの情報だが、なぜかスリーサイズについては書いてなかった。

それが一番大切なところだろうがよおお！

「どうよ、うちの従者の中で一番頭のいい奴が考えた、武士道プランは」

「何年か前の貸しがなけりやあ、今すぐにもお前を殴ってるよ。クソツタレめが」

対面で偉そうに足を組んでいる帝が、俺の反応を楽しむように笑う。クソほど腹立つ。

武士道プラン。

過去の偉人のクローンを蘇らせ、それと今の若者と切磋琢磨させることによって、両者の成長を促す。九鬼が人材育成の新施策として、クローンたちが成長し、高校生として社会に適応できるまで待つてから公表する予定らしい。

「過去の偉人、源義経、武蔵坊弁慶、那須与一。んで、秘密の秘密の葉桜清楚つか。この計画の主導者は義経好きだったのかネエ。まあ、んなことよりも、エゴイスト地味な思想がこのプランからは滲み出てるがな」

「くっはっはっは。そう言うか。マーブルが聞いたら、悪態つきそうだな」

「人材不足でしょうがないから、過去の偉人蘇らせて競わせようとか、普通思いつかねえ

よ。勝手に若者に絶望したロートルが、老いさらばえて頭アツパラパーになったか？」

この計画の根底から滲み出ているのは、現代社会への諦観だ。こいつは今生きてる若者に、期待なんかしちやいない。先細っていく未来でも見たのか？ 悪りいが、テメエの感じた絶望なんか世の中の大半の人が感じてねえよ。

「ま、今を精一杯生きてんだ、俺たちはよ。だが、頭のいいやつは未来を見過ぎて、足元見えてねえ。んな前見すぎても、転んじまうつてのによ」

帝が酒を呷り、コップを空にする。

「そいつには同感だ。ぶっちゃけ、武士道プランってこんだけの計画じゃねえだろ。正直、ここまでの手段をすんのに、目的がシヨボすぎる」

ここまでネジの外れた奴が、切磋琢磨？ 笑わせてくれるぜ、気に入らない若者皆殺しくらいはしでかしそうだ。流石に過激過ぎるかねえ？

「勘がよすぎるのも、考えもんだな。まあ、その辺りは俺からはノーコメントで。取り敢えずは修二、お前に義経たちの面倒を見て欲しいんだわ」

「読めねえなあ。大事な大事なクローンに、なんだって俺を引き合わせるんだ？」

絶対悪影響だぜ？ しかも与一以外美少女だから、アタックかけていくぞ？ 絶対。

なんなら性教育とかしかできねえよ？

「あー、お前って、ぶっちゃけて言えば、世代の代表格なんだよ。川神百代始め、揚羽や英雄、葵冬馬あたりも将来有望だ。まあ、お前の周りには粒揃いの奴らばかりだ」

初耳だわ。まあ、俺ほどハンサムなら同年代で隣に並べるやつなんて、いるわけもねえか。

「俺だって、マープルのやってることに思う所が無い訳じゃねえんだ。ただ、あいつらの想いを受け止めんのも、頭の役目だからな」

大変だねえ。組織のトップってのは、やっぱ地位や名誉なんて碌なもんじゃねえな。

「んで、俺への貸しを使つてつて訳か」

「おう、マーブルに若者舐めんなって殴りつけてやれよ。まあ、それはともかくとして、俺としちゃあ、義経たちには幸せになつてもらいたいんだ。俺たちの都合で生んじまつた癖にだが」

そうかい。今すぐその老害駆逐した方が早え気もするが。まあ、いいや。

「わあつたよ。こいつら自体は面白そうな奴だし、からかつてやるぐらいはしてやんよ。ぶつちやけ、可愛い娘には目がねえの、俺」

偉人のクローンと大車輪プレイとか、ワクワクしない？ 俺はするわ。

まあ、そう言う意味じゃあ、プレイの幅が広がっていいかもしれない、武士道プラン。

「くはは、知つてたわ。いつか刺されるぜ？」

「……百代ちゃんからのガチのジャレつきの方が、刺されるより辛くね？」

「ごめんて」

ツマミを手から創造し、二人分適当にばら撒く。

「で、本音は？」

「え？ お前が混ぜた方が端から見て面白そうだから」

「ファック!! だと思つたぜ！」

だつて帝オメエ、俺と思考回路似てるもんなあ!?

「あー、それでは諸君、今日から君たちと同じ学び舎で寝食を共にすることとなる、織原修二です。よろしくお願ひします」

ただっ広い教室には机が五つ、うちの四つは埋まっております、興味深げな視線が八つの瞳から飛んできている。

「織原修二君だな！ 義経は源義経だ、よろしく頼む！」

ふむ、75点。最終的にはそんなに大きくなならないが、健康美はそれはそれで大きさに劣らない魅力となる。そのままの君で健やかに育ってください。

「主が挨拶したなら、私らししないとね。武蔵坊弁慶、弁慶でいいよ」

なっ!? 91点だと!? 俺と同年代で、いや、これは大ききだけで無い、彼女自体が醸し出す気怠げな雰囲気退廃的で男の欲求を刺激してやがる！ なんてポテンシャルの持ち主だ！

「私は葉桜清楚。よろしくね、織原くん」

……ん？ バグったか？ 俺のおにやのコスカウターが二重で表示されてやがる。

85点と56点？ふむ、評価はつと。

えー、表は清楚な雰囲気を出しながらも、夜は淫猥な娼婦の如く淫れる。ギャップに男は弱いので、是非俺を萌えさせてください。

……おん？ まだ反応しやがる。えーなになに、我が強く、性への刺激に弱いあなたは、普段は下に置く男に、夜は教え込まれると言う強みを持っています。そのギャップはあなたが霸王でありながらも、一人の少女だからできる唯一無二のものです。その強みを活かしましょう。先生期待してます。

なんだこれ、こんなこと初めてだぞ。全く違うおにやのこスカウターの結果が出るのか。

「ふつ、このタイミングで転入生とはな。俺たちと同じ運命の子と言うわけか。せいぜい、束の間の幸せを大事にすることだな。那須与一だ、俺にはあまり近づくなよ」

厨二病、プライスレス。

まあ、清楚ちゃんのことにはある可能性があるか？ まあ、後で少し調べてみるか。

「あー、堅苦しいのは苦手だから、下の名前で呼んでもいいか？」

「義経は構わないぞ！　むしろそっちの方が親しみやすく好きだ！」

あらやだこの子、とても良い子だわ。

「んじや、義経ちゃんだな。俺も修二で良いぜ。これからよろしくな」

「うん！　よろしく、修二！」

差し出した手を無邪気に握り、満面の笑みを浮かべる義経ちゃん。

「私も別に、弁慶で良いよ。何なら、与一みたいに姉御とかでも可」

「んじや、弁慶ちゃんと与一な」

「あ、姉御をちゃん付け。……なんて度胸のある奴だ」

与一がそんな驚いた反応すれば、いつの間にか弁慶ちゃんにアームロックを決められている。

「与一い、それはどういう意味だい？　私がちゃん付けされちゃあ可笑しいのかな？」

「いだいだいだ！ ギブ！ 姉御、ギブ！ ギブ！」

あー、なんか骨が軋む音してるけど、どんな握力してんだ？

「こら、弁慶！ 与一も、せつかく修二が来た日に、喧嘩しちや駄目だぞ！」

「はい。主に言われちゃ、しょうがない。反省するだぞ、与一」

与一はまだ頭で頭を抱えている。ドンマイ。

「あはは、賑やかでごめんね。うるさいかも知れないけど、皆仲良しなんだよ」

「俺も賑やかなのは嫌いじゃあねえから、大丈夫だぜ。っと、悪いネエ。敬語は苦手で。構わないか？」

「うん、大丈夫。修二君の喋り方は、ぶつきらぼうだけど優しさを感じるから」
「トングスな、清楚ちゃん」

さあて、どうこいつらの鼻っ面、へし折ってやろうかねえ。

ぶつちやけ、クローンって俺嫌いなんだわ。

第26話

煌めく白刃が空を走り、世界が斬られたの如く静止する。鏢が鯉口と打ち合った音が鳴り、世界が再び動き出す。

義経の目の前に置かれた巻藁が、綺麗な切断面を見せながら崩れ落ちる。

「ヒューッ」

生まれながらにして、最高のスペックが約束されていやがる。

そんな義経の一太刀を見て、俺は口笛を吹く。それとともに、どうすつかなと頭をポリポリと掻く。

「修二君！ 修二君！ どうだった！」

「すげえなあ。純正な剣士と立ち会ったことはねえが、義経ちゃんが随分な使い手だったのは分かった」

自己紹介を兼ねた特技披露、義経の演武という見世物は、俺に英雄のクローンという現実を見せつけるには十分だった。この前までランドセル背負ってるはずの年齢だったのに、一端の武芸者という風格を出してやがる。

「さて、それじゃあ次は私、つて言いたいんだけど、正直特に何もないんだよねー。だからパス」

お茶らけた様子で弁慶は、手をひらひらと振る。

「弁慶、せっかく修二君にいいところを見せれるチャンスなんだぞ、いいのかわ？」
「うーん、主がそう言うなら、ちよつとだけ」

そういうと、弁慶は義経が真つ二つに斬った巻藁でお手玉をしだす。はるか頭上、十メートルくらいの高さまで放り投げながらも、握力と腕力だけで軽々と扱って見せた。パワータイプかよ、重ねたトランプとか振じりとれねえかな。まだ、やるかいとか、そんなこと言ってみてほしい。

「んじゃ、俺もそろそろ見せてもらうだけじゃなくて、見せてやるか」

俺は手のひらを握りしめ、開く。その手には最中がいくつか握られている。

「ほーら、義経ちゃんにプレゼントだ」

「おお！ すごいな、いったいどつから出したんだ？ 修二君」

「弁慶ちゃんなんかリクエストあるかい？ だいたいのもんは出せるぜ？」

端から見ればただの手品だが、実際は種も仕掛けもない超能力だ。

「んー、そんじゃ、ビーフジャーキーで」

「お茶の子さいさいってな。ほれ、コンビニのあるやつだが、たまにはいいだろ？」

「……ありえねえ。なんだ、俺が見逃したってのか」

「ふーん、与一が見逃すって、なかなかやるねえ」

与一には駄菓子詰め合わせを、清楚ちゃんには中華まんを。

「実はこれは手品じゃなくて、超能力なんだよナア。食べ物を手から出せる程度の能力かってか」

「マジかよ、マジもんの超能力……?」

「んまあ、中国の専門家たちが言うには、異能ってカテゴリーらしいからな」

厨二病の与一くんはガチの超能力にビビってしまっただようだが、まあ、でも微妙ぞ。この能力、どうせならもつとチートっぽい能力がよかったわ。どうせなら異世界転生テンプレセットとか欲しかったわ。

「ま、ぶっちゃけしよほいがな。宴会芸にしちやあ、微妙だし」

「そんなことないぞ、修二君！ とつても素敵な力だと、義経は思う」

「つまみには困らなさそうだし、私としちやあ羨ましいけどね」

つまみつて……弁慶ちゃんアンタねえ。

義経ちゃんたちには、おおむね好印象のようだ。与一はなんか、衝撃を受けてしまつてるようだが、駄菓子じゃ気に入らなかつたか？ もー、贅沢な子だね。しょうがない、今日だけ記念でハーゲンダッツをあげよう。

「でも、なんで私には中華まんなんだろう」

「え、故郷にちなんだがいいかなって」

「え？」

「え？」

清楚ちゃんの反応を見て、俺はインコのように同じ声を返してしまう。

「そういや、秘密にしてたんだっけか。」

「まあ、別にいつか。どうせなら、そのうちぶちまけても良いんじゃない？」

「あー、とりあえず、この後どっか飯食いに行くか？　せつかくだしパーチーしようぜ、

パーチー」

「スルー!?　無理だよ!?　ちよつとあんまりにもあんまりな暴露じゃない!？」

清楚ちゃんが慌てた様子で俺に詰め寄ってくる。柑橘を思わせる良い匂いが、ふわりと舞う黒髪とともに振りまかれる。

「いやー、これはしまったしまった。つい口が滑っちゃったなー。大人たちが大事に大

事に隠してきたもん、チラ見せさせつちやっとなー。

「え、もしかして、修二君、私が誰のクローンか知ってるの?」

「あー、まあ、知りたきや教えてもいいけど……その、もうちよつと、好感度稼いでからじゃないと……」

でも、ただ教えてやるのもそれはそれで芸がない。どうせなら楽しめそうな方にやろう。清楚ちゃんには悪いが、もう少し頑張ってもらおう。

「なにその与一君がしてるゲームみたいなシステム!?」

「ちよ!?! 何故知ってる!?!」

与一くんも中々に思春期をしているようで結構結構。まあ、とりあえず、釣り針垂らすのはこれでいいだろ。俺はいつだって、超絶美少女という大きな魚を釣り上げるフィッシュャーなのだ。

「んじゃ、清楚ちゃん。教えてほしかったら、デートとか恋愛イベント重ねて、俺の好感

度を上げるんだな。攻略方法とかは与一くんにアドヴァイスしてもらおうといい」

「ほんと!? 約束! 約束だからね。絶対教えてくれるんだよね! 与一君ちよつとこつちきて!」

「ちよ、力つよつ、グエツ——」

「お、おう……俺様嘘つかナイ、ハンサム嘘つかないヨ」

お、思った以上に食いつきやがった。なんだこの暴れ、俺、釣りはじつくりと楽しむ派なんだが。

まあ、それだけ自分のルーツが気になるんだろうねえ。物静かな文学少女だったのに、根はしつかりとした我の強さがあるじゃあねえか。

「修二君が来て、一気に賑やかになったな。義経たちは、修二君を歓迎するぞ」

「ま、俺は最高峰のエンターティナーだからな。賑やかはお手のものよ」

その後は義経ちゃんたちは島内の小さな喫茶店で、ささやかな俺の歓迎会を開いてくれた。隣の席には清楚ちゃんが陣取り、趣味とか特技とかを質問攻めしてきた。

葉桜清楚という人物は、穏やかで読書好きな文学少女。帝から渡された資料にも同様のことが書いてあつたし、実際彼女は本を読むのが好きなのだろう。名は体を表すというばかりの、物静かな文学少女かとも思ったが、随分と普通の等身大の女の子だった。

しかしまあ、清楚ちゃんも自分のこと争い事や暴力とは程遠い場所にいると考え、自分は文化人のクローンと想っていた。そんなところに、ぼんやりと、しかし心の奥底にこびりついた自身の正体への疑念を、ちよこつと俺は刺激してやった。

そんな初顔合わせの翌日から、清楚ちゃんは俺を籠絡しようと必死にアプローチをかけてきている。アドバイザー与一君は何を言ったのか、手作りのお菓子を作ってきたり、デートに誘ってきたりと、健気に俺の好感度を稼いでる。

でも実際、顔を赤らめながら男をお茶に誘う彼女の様子はそれだけで値千金の価値があるだろう。

「お前は一体、何考えてんだよ、織原修二」

「んー？ 別に、ただ面白そうだから、ちよつとからかっただけだぜ」

正直、会って始めてわかることもあるもんだ。英雄のクローンだのなんなの言っても、まあまあ九鬼もまともな情操教育してるみたいでなによりだ。

「まあ、安心しろよ、与一。清楚ちゃんの正体について知ってるのは本当だよ、教えるつもりもあるのもな」

「なら良いけどよ……」

学校が休みの日、俺は与一を連れ出して堤防で釣り糸を垂らしていた。

青空の元、心地よい春風を感じながら、のんびりと釣りをする。最近どころか、川神に迷い込んでから随分とこんな穏やかな時間を過ごすのが久しぶりだ。

まじでなんでこんなイベントが目白押しだったんだ？

「まあとりあえず、与一よ。お前って、義経達にムラムラしねえの？ 毎日一緒に居るんだろ？」

「ブツ!!? おま、何言ってるんだよ!」

「いや、だって、お前弁慶ちゃんとは言わずもなだが、義経ちゃんや清楚ちゃんも超可愛

いじゃん、セツ●スしたいって思わねえの？」

「思うか馬鹿！ 生まれた時から一緒なんだぞ。義経は俺たちの主だし、姉御はゴリラだから恋愛対象外。葉桜先輩もそんな対象に見れねえよ」

お前ホモなん？ という言葉が思い浮かんだが、なんか口に出したらガチっぽくなりそうなのでやめておく。とりあえず、後でゴリラのことは弁慶ちゃんにチクツておくか。

「つまんねーなー、そんなもんか」

「突然ぶつ飛んだ話しといて、その言いざまかよ。というか、一つ聞きたかったんだが」
俺はリールを巻き取り、一度針を引き上げる。餌を食い逃げされており、いそいそとミミズを針へと付けなおす。

「んー、なんだ？」

「お前は一体何者だ？ 少なくとも、只者じゃあねえだろ」

いつの間にか、与一の手には釣り竿ではなく、弓が持つているらしく、ギリギリと弦の鳴る音が肩越しに聞こえる。与一の身体に流れる気が膨れ上がり、波が引く様に絞られた矢へと集められる。

義経ちゃんやんの演武や弁慶ちゃんのお手玉見たときも思ったが、やつぱスペックたけえなあ。

「織原修二、怪しすぎるんだよ。普通の学生と積極的に交流するためって話だが、今までそんな話が出たことは無かったし、学校も違うし人数も少ないが、同年代はこの島にいない訳じゃない」

まあ、ぶつちやけ帝の急なねじ込みだから、仕方ねえわな。でも俺そんな怪しいか？
お、魚がかかった。

「与一よお、俺が何者かそんなに重要か？ 九鬼の手の者、外部からのスパイ、傭兵、殺し屋。有り得そうなものから、ぶつ飛んだの、いろんな可能性があるな」

「何が言いたい。俺の矢はもう、いつでも撃てるんだぜ」

「ようは、俺がどこのどいつかってことより、何をしに来たのかの方が重要だろってこと

だよ」

「じゃあ、お前の目的は何なんだよ」

目的かあ、そうさねえ。

「義経ちゃんたちとセツ●スしてえなあ」

偽らざる本音であった。

「アホかお前!? ここに来てそんな俗な回答するか普通!? てかお前そんなこと考えてたのか!」

「いやだつてヨオ、可愛い子が居たらセツ●スしたい。これつて、原始の欲求じゃん? 大事なことだと思うのよ、俺は。ほら、種の繁栄つて全人類の責務じゃん?」

「原始過ぎてもはや原始人なんだよ! 現代人じゃないなら石器時代に帰ってもらえねえかな!」

「まあ、冗談は置いて。まあ、帝と俺は仲良くてな、友達少ないお前らと友だちになつてくれて頼まれたんだわ」

目的の九割は性欲由来だがな。

「会ってみれば、思った以上に面白そうな奴らだったからな。もっと面白くしてやろうって考えてる訳だ」

「……」

「なあ、与一よ。お前たちクローンは何のために作られたと思う？」

源義経、武蔵坊弁慶、那須与一。そして、西楚の霸王。

目的を持って、マープルとかいう婆さんの作った命。作られた命は生まれた命と違い、何かを求められるものだ。

「九鬼は、偉人のクローンであるお前たちを求めるだろう。お前たちの名前の前には、必ず偉人のクローンって言葉を付けてな。俺はそいつが気に入らねえんだよ」

「なるほどな……お前が馬鹿だつてことは分かった」

「そうか？ まあ、とりあえず、クローンだ何だとチャホヤされてる、これからされるお前らの鼻っ面をぶん殴りに来たんだよ」

与一は大きいため息をつき、弓を下ろす。弓矢をそばに置き、釣り竿を再び手に取る。余計なことを言いすぎたな。柄じゃなく説教くさくなつていけねえいけねえ。

「世界一のハンサムな俺からすりゃあ、お前が誰のクローンだろうが、どんだけ偉人とおんなじだろうが、どーでも良いんだよ。義経ちゃん、義経ちゃん、弁慶ちゃんは弁慶ちゃん、お前はただの与一。んで、清楚ちゃんは項羽つてだけだ」

「そうか……アンタからすれば、俺はただの中学生……か」

「ああ、思春期真っ盛り、悩みもする、はしやぎもするし、グレたりもする、ただの那須与一だよ」

「……ありがとよ、兄貴」

与一はまた釣り糸を垂らし始める。

兄貴か、そう呼ばれるのも、悪かねえな。

「ん？　ちよつと待て、ことうう？　え？　……え!？」

おっと、また口が滑っちゃったようだ。

side：那須与一

自分は何故産まれたのか。

小さい頃は気にもならなかったその事について、少しずつ考えるようになった。平安時代の英雄、那須与一のクローンである俺は、一体何のために生み出されたのか。

マーブルや九鬼の人間に聞けば、過去の偉人と今の若者を交流させることで、お互いに切磋琢磨させるためだと言われた。

九鬼は大企業だ。望めば大体のものは与えられるし、偉人のクローンとして全員優れた能力を持っている。

主人は単純とも言えるが、素直に自分の境遇を恵まれていると受け入れ、その恩に報

いるために日々を邁進する。姉御もそれに従い、日々を過ごしている。

俺も素直に、その後ろをついていければ、どんなによかっただろうか。俺はそこまで、良い子になれなかった。

俺は那須与一じゃなくて、那須与一のクローンだった。周囲がそう求めてたから、そうならざるを得なかった。

「与一君。男の子って、やっぱり肉じゃがが好きなのかな。カレーとどっちが好きかな？」

葉桜清楚先輩。俺たちと同じクローンでありながら、その正体を秘密にされている、俺たちの家族。

兄貴からその正体を暴露され、正直に言えば顔を合わせずらい。彼女が昔から自身の正体を気にかけていることを、知ってる身からすれば。

「あー、兄貴ならどっちも好きだと思いますよ。てか、好き嫌いとかなさそうですし。いっそ、両方とも作ったら良いかもしれないですね」

「そっか。たしかに修二くん、いつもたくさん食べてるもんね。ありがとう、与一君」

手を振って台所へと向かう葉桜先輩に、俺は少し冷や汗をかく。もし兄貴が言った正体だとしたら、兄貴はそのうち殺されるのでは無いだろうか。

……何だか、あの人殺しても死ななそうだな。

「まあ、何とかなるだろ。兄貴なら」

俺は俺だ。ただの那須与一だ。そう思っただけでも、気が楽になる。明日が楽しみだ、兄貴がまた馬鹿やってくれる気がするから。

第27話

清楚ちゃんはその本質はともかくとして、読書が好きだ。九鬼から25歳に誰のクローンかを教えられるとのことだが、それまでに知識と教養を身につけると言われているらしい。

まあ、歴史上の項羽が持つ暴君としての気質を、少しでも抑え込むためだろうとは、予想はつく。

とりあえずは、そういう始まりだったが清楚ちゃん自身は本を読むことが好きになった。それこそ、部屋の本棚が義経ちゃんや弁慶ちゃん達より2倍くらいの面積を占めるくらいには蒐集してるし、九鬼に頼んで新刊とか色々仕入れているらしい。

「それでね、修二君、この作者さんって、現役の大学生らしくて、でも、文章の構成とか語彙の使い方とかが、ああ、ずっとこの人は物語を書くことに触れてきたんだらうなつてくらい多様でね」

清楚ちゃんは楽しそうに、俺にお勧めの作者だと、何度か耳にしたことのある名前と

代表作を教えてくれる。九鬼がクローンたちのために作った学校、そこに併設された図書館には、一般的な蔵書が保管されている。たつた四人のために、随分と贅沢な施設だが、それだけ九鬼がこいつらに金をかけているとも言える。

そんな小さな図書館で、俺はその主である清楚ちやんと二人つきりで読書会をしていた。

「ほんと、本を読むのが好きなんだな。清楚ちやんは」

「うん、本を読んでる時つて、その世界の中に入り込んで、主人公になれたみたいに見える。あ、もちろん、空想つて分かつてるよ？ それでも、彼らみたいに自分らしく居れたらつて」

「自分らしく、か。やつぱ、気になるか？ 自分が何者か」

「そりゃあ、気になるよ。自分がだれか分かつてないのに、将来をなんて考えられないよ。特に私たちはクローンなんだから、たつた一つの自分のルーツを秘密にされちゃ、不安で不安でしょうがないよ」

今は昔ほど癩癩を起してまで知りたがつたりはしないけどね、そう気恥ずかし気に言う。

「ねえ……修二君はさ、私の正体を知ってるんだよね」

「そうだな」

「修二君が仲良くなったら教えてくれるって言ったけど、そろそろいいんじゃない?」

「んー、好感度は溜まってきたけど。今度はイベント起こさないとなあ」

「イベントって、ほんと修二君ってそういうの好きだよな」

男の子はだいたいがギャルゲー好きなんだよ。たまに現実に帰ってこれないやつもいるが。

「今度は自分で考えてみるといいさ。俺がどういうやつかはこの一か月で分かっただろ?」

「あはは……そうだね。すごい意地悪で、すごい俺様キャラで、まるで暴君みたいな男の子。顔立ちはおかしいのに、その不敵な笑い方で台無しにしてる。下品なこともうし、大雑把だし、子供っぽいし」

あるれえ? 清楚ちゃんの口から出てくんの、悪口ともいえる言葉ばかりなんだけど

?

フラグ管理ミスったか？ いやいや、意外と

「あれ？ ハンサムとかつて言葉を期待してたんだけど、ダメ出ししかされてくない？ もしかして清楚ちゃん俺のこと嫌い？」

「ふふふ、そんなことないよ。でも、ちゃんと見てるんだよ、修二君のこと」

清楚ちゃんの顔を見れば、いたずら染みた笑みを浮かべている。俺は本を閉じ、天を仰ぐ。

してやられた、俺を攻略しようと、清楚ちゃん自身も恋愛スキルを少しずつ始めたいやがる。もともと、恋愛小説も読んでたみたいだし、地頭もよさげだからなあ。

「一本取れたかな？ ふふふ、いつも修二君余裕そうだから、からかいたくなっちゃった」

「ちくしよー！ ばかやろー！ お前んちでカレー作って数日はカレー臭漂わせてやんならなあー！」

俺は本をしまい、図書室から走り出す。

s i d e : 葉桜清楚

図書室から彼が出て行ったのを見送ってから、私もそつと席を立つ。そのままぐるつと机を回り込み、彼の座っていた席をそつと、指先で撫でる。ありえないはずなのに、まだ彼のぬくもりがわずかにそこに残っているように思えた。

「君が来た時から、よく見てるんだよ。修二君は、分かっているのかな？」

突然現れた破天荒な少年。クローンの私たちにとって、初めてのことばかりだった。遊ぶことも、勉強することも、本を読むことも、なぜか初めてのよう感じた。それは

きつと、彼が有りのままの私たちをみてくれていたからだろう。ただの義経を、ただの弁慶を、ただの与一を、ただの葉桜清楚を。彼は私たちに何も求めてこない、ただ、自由を自身の有様で見せてくれた。

あの気難しい与一君も、今じゃすっかりお兄ちゃん呼びして懐いている。

「そう、すごい優しくて、すごい気配り上手な、いつも私たちのことを考えてくれてる男の子。見ると安心するような笑顔で、そして……そして……」

自身の胸に手を充てる。とくりとくりと、いつもより僅かに早い鼓動に、苦しさを感ずる。

きつと、この胸の中の感情に名前を付けるなら、それはきつと、とても素敵な名前なのだろう。

「修二君……」

名前を呼ぶだけで、幸せな気持ちになれる。本の中でしか知らなかったこと、本の中では決して知れなかったこと。

ああ、私は、あなたに恋をした。

きっと彼は走り続けるのだろう。生きるということに、誰よりも真剣な彼だからこそ。私たちのところに来たのだ。

そのことが少し寂しくて、でもだからこそ、その姿に憧れと恋を抱いた。

「ほんと、ずるいよね」

そう呟いた時、私の中で誰かが囁く。

ならば、自分のものにしてしまえばいい。俺たちにはその力がある。

「……………え？」

呆けた声を上げてしまう。そんな私に構わず、声は続ける。

迷うことはないだろ？ 欲しいものは手に入れる。俺ならそれができる。

それは私の声だった。でも、知らない私。

「あなたは……誰？」

俺はお前だ。ずっとお前の中に居た。ずっと、閉じ込められたここから、外を見ていたんだ。最近では退屈しなかったぞ。

「……なん……で、あなたは……出てきたの？」

お前の心が俺を求めたからだ。あいつを手に入れたという願いを叶えるために、俺の力を欲したからだ。

頬が吊り上がり、笑みが私の意に反して浮かび上がる。窓に映ったその顔は、見たことのないような、凶暴な、笑顔だった。まるで、霸王のように、彼のように、不敵な声で声は続ける。

俺もお前と同じだ、清楚。あいつが欲しい。あいつを俺のものにしたい、これが恋か。ふはっ、心地よいな。

「……違う……私は、そんな……」

違わないさ。俺はお前だ。好きになる男も、考えてることも、求めるものも、全部一緒だ。

心が揺れる。彼女の言葉を、不思議と信じられた。

ふと、視線が彼の読んでいた本へと映る。中国の古代史、一人の霸王についての本だった。

「――項羽」

さあ、手に入れよう。俺たちの恋を。なあ、葉桜清楚。

「力 山を抜き 氣 世を蓋う」

詩が聞こえた。

それは、一人の霸王の末期の祈り。

「時 利あらずして 驩 逝かず」

それはすべてから見放されてしまった、暴君の末路。

「驩 逝かざるを 奈何せん」

もはや、救いはなく、終わりを待つだけのその男は。

「虞や虞や 若を奈何せん」

それでも最期は、愛する者を想った。そんな恋の唄。

s i d e : 三人称

その時、世界が揺れた。大気が震え、その逆る気が世界を蓋う。

日本の、ドイツの、アメリカの、世界中の実力者が霸王の、絶対的強者の目覚めに気づいた。

「おいおい、ネタ晴らしする前に目が覚めちまったのか」

カレーの具材がめいっばいに入ったビニール袋を抱えた少年が、困ったように笑う。次の瞬間には、ビニール袋だけが残され、少年の姿が掻き消える。

「寝起きにカレーはねえか？ ええおい」

少年は風を切り、軽やかに島内を駆け抜ける。その楽し気な闘気は世界を包む気で、綺羅星の如くその存在を、俺はここに居ると告げる。

やがてたどり着いたのは、クローンたちのために作られた学校のグラウンド、そこで恋焦がれるように、霸王は待っていた。

「修二いいいい!!」

まさに暴風、荒れ狂う気の圧力が彼女を中心として巻き起こる。今確かに、世界の中心はこの小さな島国の、小島であった。

夜の帳が訪れる直前、夕暮れが世界を紅く染め上げる。そんな夕暮れと同じ目で、彼女は修二を見つめる。

「えーと、なんかイメチェンした？ 清楚ちゃん」

「んはっ！ 遅かったな、修二」

まるでデートの待ち合わせに来たかのように、彼らは言葉を交わす。

「えーとあー、どっちの名前で呼べばいい？ てか、そんなふうになるんだ」
「今の俺は項羽だ。清楚なら今もここにいるから心配する必要は無いぞ」

胸を指で叩き、項羽は笑う。

「そんなことよりもだ、修二、聞けい！」

高らかに、そうあるのが世界の摂理であるかのように。

「我が伴侶となれ！　そして世界を共に統べるのだ！」

覇王の宣告に、少年は鼻をほじりながら答える。何の気負いもなく、世界の王だろうと、その態度を貫かんとばかりに。

「え、やだよ。世界征服とか、面倒くさい」

世界が壊れたかのように、悲鳴を上げた。

何ともまあ、項羽ちゃんがこんな壊れ性能のスペックとはなあ。

「修二いいいいいい!!」

暴風を纏った拳が突き出され、まともに受け止めた腕が砕けそうになる。気を回復に回してなければ、瞬時に押し殺されそうになる暴力を全力で受け流す。

「何だよ！ 随分と熱烈じゃねえか！」

「黙れ！ 霸王たる俺を振り、あまつさえ面倒くさいだど!? その無礼、万死に値する

！」

一撃一撃が重すぎる。骨が軋み、筋肉がちぎれ、血肉が弾け飛びそうになる。

「んはっ！」

「オラア！」

拳同士がカチ合い、衝撃で地面が砕ける。飛び散る石片が、ゆっくりと飛び散るのを錯覚する。

その表情から見えるのは凄まじいまでの赫怒と僅かな悲嘆。

項羽ちゃんは腕を引き、体を捻ると共に後ろ回し蹴りを繰り出してくる。それを避け、綺麗な脚を脇に挟み込む。

「こんな世界、征服してどうすんだよ！　あと！　伴侶に関しては俺でよければだよ！　早とちりすんなすつとこどっかい！」

「ツア!?!」

ジャイアントスイングよろしく、振り回して校舎へと叩きつける。コンクリートが砕け散り、粉塵が舞う。

「やったな、清楚！　だが、俺の願いにも応えてもらうぞ！　修二！」

粉塵を吹き飛ばし、ロケットのように項羽ちゃんが飛び出てくる。その勢いのまま振られた拳が、俺の顔を殴りつけ、今度は校門へと俺が叩きつけられる。

「夫婦初の共同作業が世界征服とか、どこの魔王だつてんだよ!？」

「俺は霸王なんだぞ。生まれながらの王である故に、人の上に立たねばならぬ」
「……………ふうー、なるほどねえ」

何となく見えたわ、クソが。やっぱ、武士道プランはただの偉人と交流パーティーをするだけじゃねえなあ。

項羽ちゃんを王、義経ちゃん達を将、そう思えば、何となくしつかり来始める。やるお、若者との交流とか言っておきながら、やることは国取りか？

「それが本当にやりたいことなら、いいけどよ……そりやまた気が遠くなる夢だわな」
「んはっ、だからこそやり甲斐があるのだ」

その夢は遺伝子が持った本能か。それ程までに、項羽という霸王の素質は大きいものか。まあ、その辺りはどっちでもいい。どうでもいい。

ただ、彼女のその純真さを、婆の小汚い夢のために浪費させるわけには、いかねえなあ。

「項羽ちゃん、悪りい、その夢ぶっ壊すわ」

「なに……？」

「世界征服とか、今時小学生の夢でも書かれてねえよ」

校門から飛び出し、飛び蹴りを項羽ちゃんにぶちかます。体をくの字に折り曲げながら、地面に跡をつけて後退する。

「俺を、霸王を、馬鹿にするなあ!!」

「ぐ、おお！」

しかしそのまま足を掴まれ、地面に叩きつけられる。そして、そのままマウントポジションを取られる。

「俺は清楚と違う！ 霸王なんだ！ 項羽なんだ！」

全力の拳が振られる。地面が陥没し、蜘蛛の巣状にひび割れる。拳が赤く染まり、血の滴が空に飛ぶ。

「霸王じゃない項羽なんぞに、意味はなからう！ 王であることにこそ、俺の存在意義がある！」

振るわれた拳を掴み、引き寄せると共に頭突きをかます。怯んだ隙に、マウントを取り返す。そのまま項羽ちゃんの顔を覗き込む。

「項羽ちゃんよ！ お前、清楚ちゃんの中で何見てやがった！ 王？ 世界征服？ んなこと俺は知ったことねえんだよ！」

「……でも、俺は……項羽で、霸王で……」

「お前はうん千年前から蘇った項羽か？ それとも、俺が知ってる項羽ちゃんか？ 答えろや、ええ？ おい！」

霸王であることが項羽ちゃんのアイデンティティなんだろうが、それがある限り、マーブルとやらの思惑から抜け出せない。なら、ぶつ壊すしかあるめえ。

「……う、うう、世界征服……」

いや、マジで世界征服好きなんか。マーブルうんぬんは以外関係なかったりするの？

「安心しろよ。世界征服とかしなくても、その心が王足らんとすれば、王であるんだよ」
「……」

項羽ちゃんの雰囲気が和らいでいく。いや、まるつきりガラリと変わる。
穏やかな笑みを浮かべて、彼女は申し訳なきそうにする。

「……ごめんね。あの子が迷惑かけちゃって」

「清楚ちゃんか。項羽ちゃんは？」

「ちよつと、ね。拗ねて寝ちゃった。せつかく目覚めたからって張り切ってたのに」

ちと、悪いことしちまつたな。

「でも、届いたと思うよ。修二君の言葉、項羽にも」

「……そうか。何か、余計なお世話だった気がしちまうな」

「ううん、嬉しかったよ。私と項羽、どつちのことも考えてくれてるのがわかったから」

清楚ちゃんが俺の手を取る。そのまま、自身の頬へと当てる。火照った頬は、ほんのりと温かい。

「マーブルの考えていることや、項羽の世界征服とか、そういう難しいことはひとまず忘れてください」

清楚ちゃんは、傾国の笑みを浮かべる。

ああ、たしかに、こっただけ美しければ、世界なんて軽く取れそうだ。

「好きです。付き合ってください」

「……項羽のと答えはおんなじだよ。俺でよければ、喜んで」

俺が微笑むと、清楚ちゃんは笑いながら涙を流す。清楚ちゃんの上からどき、手を取って起こしてやる。

「あ、ただ俺、他にも彼女居るんだけど」

「は？」

清楚ちゃんの目が紅く明滅する。気が膨れ上がり、拳を振りかぶる。

俺はその日、天高く吹っ飛んだ。

第28話

「ごめんね！ 修二君！」

俺がお空の星になりかけた後、落ち着いたのか。清楚ちゃんは平謝りをしていた。いやまあ、俺が悪いんだけどね。こうなることは分かってたし。

「ふん、清楚、謝る必要などあるまい。それより！ 霸王たる俺を差し置き、彼女がいるだろ!？」

「いやまあ、百代ちゃんだろ、小雪だろ……えーと」

「しかも複数か！ 巫山戯るのも大概にせよ！」

そんなこと言っただって、しょうがないじゃないか！

「まあ、そんな俺だぜ？ 今ならまだ引き返せるぞ」

「ううん、私たちは引かないよ。ようやく分かったんだもん。前に進んで、掴んじやうよ。だって私霸王だもん……ああ、霸王に撤退の二文字は無い。お前を俺のものにする

ことから、世界の征服を始めるとしよう」

くはは、そりゃあ、世界征服よりも大変だぞ？

俺が笑いながら、清楚ちゃんの肩を借りて歩を進めると、校門のあたりに人影が見えた。

「やれやれ、随分と好き勝手やってくれたねえ」

黒幕は遅れて登場するとは言うが、ようやくお出ましたな。

幅広の帽子に、夜会ドレスと喪服を掛け合わせたような小洒落た格好をした婆が待ち構えていた。

「……マープル」

清楚ちゃんがその名を呼ぶ。

「テメエが噂に聞くマープルか。よろしくな、織原修二だ」

俺がフレンドリーに手を差し出すが、婆は無視して扇で口元を隠す。

「よろしくするつもりはないが、九鬼家従者部隊序列二位のマーブル、アンタが引つ掻き回してくれた武士道プランの提唱者だよ」

そのしわがれた声と刻まれた皺は、目の前の老婆が積み重ねた歴史の重さを思わせる。

星の図書館とか、世界の歴史を全部暗記してるとか大層なこと言われてるらしいが、俺に言わせりゃあ歴史の勉強しすぎて懐古主義こじらせた婆だ。

「清楚。悪いけど、項羽にはまだしばらく眠っていてもらおうよ。まだアンタが目覚めるには、ちと早過ぎるんだよ」

だから、そんなことふざけた言えるんだろうな。

しかし、そんなことを言う婆に、清楚ちゃんは凜とした顔で言葉を返す。

「マーブル、ごめんなさい。項羽はもう、マーブルの都合で動かないよ」

「はあ、そりやそうだね。言ってみただけだよ。仕方ないね。ひとまずは、様子見させてもらおうよ」

おん？ 意外と物分かりがいいな。無理やりにも項羽ちゃんを眠らすくらいしてくるかと思つたが。

「だが、織原ボーイ、アンタはやり過ぎた。いくら帝様がねじ込んだからつて、ここまで派手にやられちゃあ、私も黙つてられないよ」

やり過ぎただあ？ 寝ぼけてる子に、一緒に遊ぼうぜつて声かけただけじゃねえか。てめえらがこいつらに何一つ上げなかつたもんだから、それを見せてやつただけだろうがよ。

「はつ、何だ、思い通りにいかなくて怒つちまつたか？ これだから、年取つて考えが凝り固まつた奴はいけねえや」

「ふん、何も全部予定通りに進むと思つちやいないが、アンタは少しばかり予測がつかな

「さ過ぎるからね」

俺の行動を予測するなら、俺と骨の髄まで向き合わなきゃなんねえんだよ。心でぶつかつてこねえ奴に、俺の心が分かってたまるか。

「だから俺をどうにか排除しようってか。随分と大盤振る舞いじゃあねえか」

なあ？ 爺。

俺がそう声をかければ、校門の影から金色の鬨志を纏ったヒュームの爺が姿を現す。

「ふん、俺としては、武士道プラン自体はどうでもいいのだがな。この計画に手を貸すように約束をしておいてな、それを潰させる訳にはいかんのだよ」

「久しぶりだなあ、爺。ポックリ逝っちゃったのかと思ってたぜ」

帝と一緒に、ドイツで遊んだ時以来か？ ええおい、もうボケちゃったか？

「ふん、相変わらずふてぶてしい小僧だ。初めて会った時から気に入らんかったのだ」

「そうかい！ 俺は案外嫌いじゃなかったぜえ！」

遠慮なく殴りかけられるからナア！！

「ジエノサイドチエーンソー！」

爺の必殺技。最強にして絶対の一撃が俺に迫る。

回避、不可能。防御、不可能。躲せぬほどに鋭く、防御など意味をなさない。いなそうとしたところで、今の俺では、その威力を殺しきれずに致命的なダメージを食らっちゃう。

だが、俺は嗤う。ずっと考えてた、必殺の一撃をどう凌ぐか。

「くは、くははは。反応装甲って、知ってる？」

爺の脚が俺の身体に直撃した瞬間、爆発が起こる。血が飛び散り、爆風と爆炎がお互いの身体を包み込む。

俺は肩口から血を噴き出させながら、ぼろ布になった服を破り捨てる。まるで動画を

逆再生させるかのように、新しい皮膚が傷を覆う。

爺の足から、吹き出した血が地面に垂れる。

「なるほど、考えたな。馬鹿げた方法だが、お前なら理に適っている」

「だろ？　ちなみに、川神流の人間爆弾が元ネタな」

ちなみに百代ちゃんを使うときは皮膚の上から外に爆発させるらしい。でもあの爺のキック、雷撃帯びてるから、触った時点でアウトなんだよな。仕方ねえから、触れた皮膚ごと吹き飛ばすしかなかった。

「だが、一流に二度同じ技が通じるものか！　ジエノサイドピアシクル!!」

「そりゃあ、こっちの台詞だボケエ！　ジエノサイドジエノサイド、更年期障害でイライラしてんのか老いぼれがア！」

爺が選んだのは、横なぎではなく、足刀による刺突。腹を狙った一撃、しかし、その動きは今までのものよりも読みやすい。上下左右どこから来るか分からない範囲攻撃よりも、一点で攻められた方が攻撃範囲が狭く避けやすい。

それでも避けきれず、わき腹を大きくえぐられながら、俺は気を練る。それは俺が鉄心の爺さんに教えてもらったとおきの切り札。

「顕現の参！ 毘沙門天!!」

「何ッ!?!」

突如として俺の背後に現れた神仏、その足が爺を踏みつぶさんと振り下ろされる。

確かな手ごたえ、だが、浅せえ!!

咄嗟に腕でガードした爺に、俺はさらに気を練りだし、追撃を加える。

「かーらーのー! 顕現の七・神須佐能袁命 八岐斬り!!」

仏と並んで現れたのは武神。その手には巨大な剣を持ち、神速の一撃が一瞬にして八つ放たれる。嵐を起こす神に相応しい、暴風雨のごとき剣戟。

しかし、爺は全てを受けながら、膝をつくこともなく、その拳を振るう。

「舐めるなあ！ 猿真似で俺を圧せると思ったか!」

「ぐっ、らぁー！」

鼻っ面を殴られ、俺は仰け反るも拳を振るう。しかし、それは空を切り、爺は仕切り直しと言わんばかりに距離を取る。

「……鉄心の技を使ったのは驚いたが、気の練りが足りんな」

「強がんなよ。ちよつと痛かったんだろ？」

反応装甲で執事服は破けてるが小さな火傷と裂傷程度、今の奥義ラツシユも、戦闘不能には程遠い程度にしかダメージが入ってないだろう。やっぱり、付け焼き刃じゃ、鉄心の爺さんほどの威力はねえか。

爺が手のひらに気をエネルギーとして集める。少しの溜めのあと、それは濁流のごとく俺の目の前にあふれ出す。

「エネルギーウェイブ！」

「ッ、川神流 星砕きい！」

俺の口角が上がる。爺も楽し気に笑っている。

「無駄あ！」

「オラア！」

お互いの拳がお互いの顔面を吹き飛ばし、俺は校舎へと、爺は校門へと叩きつけられる。

「ぺっ、やるなあ！ 爺！」

「……ふん、やはり気に食わん」

口の中に溜まった血を吐き出し、俺は口を真っ赤に染めながら叫ぶ。

ああ、楽しい。生きてる実感を感じる。

爺との戦いは予想外だが、こんなことなら少しは婆にも感謝してやる。

「まだまだいけるぜえ！ メルツエエエル!!」

俺は拳を握り、爺へと向かって走り出した。

side : 葉桜清楚

おい、清楚。修二は負けるぞ。

「項羽？」

あの馬鹿。ヒュームに食らいつく為に、ペースを考えずに大技を出し過ぎだ。あいつの気が膨大なものだとしても、ヒュームより早くバテる。

私の中の項羽が、目の前で繰り広げられる戦いから、修二君の負けを分析する。

修二君の傷は最初、全て再生するように治っていた。しかし、今では小さな傷は放置

されているのか、少しずつ傷が増えてきている。

修二君の方もヒュームさんに攻撃を当てているが、有効打はヒュームさんの方が多い。殴って殴られて、吹き飛んで吹き飛ばされて、それでも二人は笑いながら立ち上がってまたお互いを殴り合う。

自然と、私の足が二人の元へと一歩踏み出した。それを、マープルが咎めた。

「悪いが清楚、いや、項羽かい？ アンタは見てな。つたく、ホントに未恐ろしい餓鬼だよ。アンタより、あいつの方が霸王みたいじゃないかい」

おい、俺より霸王らしいとはどういうことだ。

心の中で項羽がマープルの言葉に否を唱えるのを聞きながら、それでも私は無視してマープルに問う。

「……ねえ、マープル」

「なんだい？ 清楚」

「私たちつてさ、英雄のクローンなんだよね。私は項羽で、義経ちゃんたちも、昔に凄い活躍をした英雄たちで」

今まで、義経ちゃんたちと一緒に、英雄である誇り、英雄である責務、英雄である自負、英雄である未来、そんなものを背負っていたのだろう。

この身体を構成する遺伝子が、血に刻まれた記憶が、そんな鎖を作っていたのだろう。義経は義経らしく、弁慶は弁慶らしく、与一は与一らしく、項羽は項羽らしく。

「でも、英雄ってその遺伝子じゃなくて、その生き様が作るものなんだよ」

.....

「……」

「そう、英雄とは未来を指す言葉ではないのだ。そして、過去を具体化する言葉でもない。今を生きる、自分の信念を貫き通す者を指す言葉なのだ。」

「前だけ向いて、背中だけしか見せてくれない。でも輝いてて、手を伸ばして、それでも届かない。だから憧れる、惹かれる」

「我こそは、我こそはと先駆ける者。何者でもない彼が、その姿を見せてくれたのなら、英雄のクローンなんていう大層なものを持つてる私が負けちゃあ、名前負けも甚だしい。」

「だから、項羽、行こう。あそこに。霸王が傍観者じゃ恰好つかないでしょ？」

「しょうがあるまい。お前ひとりでは、奴の相手は骨が折れそうだからな。何より、お前は俺で俺はお前だ。」

「清楚、まさかアンタ、あの男に本気で惚れたつてのかい？」

「マーブルが呆れたように問う。それに私たちは声を高らかに答える。彼と同じように、自分の心を貫き通そう。」

「うん、ああ。私は、俺は、あの人の、あいつの」

「ようやく英雄というぼんやりとしか見えていなかったものに、手が届いた気がした。」

「隣に立つ!!」

ガス欠に近い。傷を治す気が足りない上に、攻撃も千日手となり始めた。この爺、攻め一辺倒かと思えば、存外に防御の方も硬え。

攻めるに難く、守るに足らず。有効な攻撃は奥義しかなかったから、連発すれば、流石にフルコースで顕現を使つたのはやり過ぎだったか。

「どうやら、決着が近いな。随分と器用に闘うが、経験が足りんな。未来のお前と戦いたかつたぞ、出来上がつても無いその子どもの身体であるのが口惜しいほどに」

「はっ、テメエの老いぼれて羨びた股間に比べりゃあ、ピチピチで羨ましいだろ？」

軽口をたたきながら、少しでも呼吸を整え、気を全身に巡らせる。臓腑を活性化させ、残り少ない切り札を頭の中で数える。

顕現は覚えた分は品切れ、なにより消費が激しい。自爆特攻は回復しきれないからトドメ以外には使えねえ。

「トドメだ。今の貴様では防ぎきれまい」

爺が振りかぶる。それは今まで何度も振るわれた、爺が積み重ねた武の歴史の集大成。

「ジエノサイドチェンソー!!」

「っー!」

反応装甲を使おうと、気を狙われた場所に纏わせるが、爺がそれすら叩き潰すつもりで、脚に気を纏わせてるのが分かった。

まじい!? これは防げねえ!

「拔山蓋世ツ!!」

その瞬間、爺が吹き飛んだ。

それを成したのは、横合いから飛び込んできた、虹彩を赤く染めた項羽ちゃんであった。

拳を振り抜いた姿勢から、俺の前に仁王立ちで立つ。

「……項羽ちゃん？」

俺は呆けたように、その名前を呼んだ。

そんな俺に、項羽ちゃんが喝を飛ばす。その声は、霸王らしく威厳に満ち、そして清
楚ちゃんの優しさがあった。

「負けるな修二！ 私の好きになった男の子なら、勝つて！」

「……」

その声を聴いたとき、心の底から何か力が湧いてくる。

体はボロボロで、気はすつからかんに近い。廃車寸前な有様の癖に、胸の真ん中にあるエンジンだけは、早く走らせると喧しく喚いている。

「……なるほどな。そうだな、勝たなくっちゃなあ」

惚れた女にかっこ悪いとこ、見せらんねえよなあ。

惚れられた女にいいとこ、見せてえよなあ。

「悪いな爺、サシの鬨いだと思ってたが、これも俺のハンサムさが粗相しちまったって
（こ）とで」

視線を上げれば、爺は変わらぬ姿で立っていた。

「ふん、構わん。一人も二人も、誤差程度だ」

よく言うぜ、慢心じゃねえってのが、腹立つところだ。

「行くぜエ！ 清楚ちゃん、項羽ちゃん！」

「うん！」「ああ！」

俺は彼女たちと手を重ねる。繋がった手から、荒々しい気とそれを導く柔らかな気が流れ込んでくる。

爺も拳を振りかぶり、その気が収束される。

「霸王咆哮拳！」

「俺の前で霸王を名乗るとはな！ 修二！」

「おう！ ありったけだ、もってけ！ 川神流！ 星殺しいい！」

爺から放たれた桜色の気と、俺たちから放たれた極彩色の気がぶつかる。

「はあああああ!!」

「オオオオオオ!!」

やがて光は臨界点を迎えるように、爆発を引き起こす。夜を迎えたはずだつてのに、まるで昼間のように明るくなる。清楚ちゃんが優しく微笑み、項羽ちゃんが不敵にほほ笑む。

それに俺は、砕けた歯を見せて笑い返してやった。

光が収まった夜空の元、立っていたのは俺と、そして清楚ちゃんたちだけだった。遠くには、ヒュームの爺が仰向けに倒れているのが見える。

「……ガス欠だ。もう何も出やしねえ」

「お疲れ様、修二君」

倒れそうになる俺を、清楚ちゃんが支えてくれる。

「あー、疲れた。ほんとチート過ぎんだろ、爺。主人公補正だけじゃ勝てねえとか信じらんねえ」

「ふふ、だったら、愛の力って奴かな？」

「かもな。てけ、こそばゆいな、おい」

あー、意識ブラックアウトしそう。身体も動かねー。動かないから清楚ちゃんのお胸に寄りかかるのも仕方ないよねー。

そんな風に気を抜きそうになった俺の目の前で、倒れていた爺がこともなげに立ち上がる。

「くだらん餓鬼の戯言だ。ふざけるのも大概にしろ」

「……おいおい、マジかよ」

「嘘……2人がかりでの全力だったのに」

爺が一步、俺たちに近づいてくる。

清楚ちゃんが、俺を庇うように胸の中に抱き込む。

「そこまでだぜ、ヒューム」

しかし、爺はその聞き慣れた声に足を止める。

「帝様……」

「子ども相手にムキになりすぎだぜ。もう勝負はついただろ。それ以上はしつこい爺つて言われてもしょうがねえぞ?」

いつの間にか、マープルの隣には帝が立っており、その後ろには侍るように従者部隊が並んでいた。

「帝様、なぜこちらへ来られたのですか？」

「そりやおめえ、面白そうなパーティーがあるつてんで急いで飛んできたんだよ」

あーくそ、身体が動けばあの軽口殴りつけてやんのによ。何だよパーチーつて、俺がボコられんのがそんなに面白えか？ ええおい。

ん？ でも俺も爺がボコボコにされてたら指差して笑うな。

「ヒューム、あんた上手く誤魔化してこっちに來たんじゃなかったのかい？」
「……」

マープルが爺を咎めるように目を細めるも、爺は何も言わずに服についた砂を払い落としている。

「はっはっはっ！ 変なところもなけりやあ、アリバイも完璧だったぜ？ ただ、俺の勘の方が一枚上手だったって訳だ」

いやだから、マジでそのチート能力どうにかしろよ。全部勘の一言で片付けるのお前の悪い癖だかな。

「やれやれ、ほんとうに大したお方です」

マープルも帝のクソゲーっぷりには、肩をすくめるしか無いらしい。そりやまあ、色々計画立てても、全部勘とか言うので看破されたりするからな。

俺絶対帝とカードゲームとかしねえもん、あいつリアルでデステイニードローとかしてくんだもん。

「お前らの負けだよ。ヒューム、マープル」

「……是非ありません」

「……」

帝の宣言に、ヒュームは潔く頭を下げ、マープルは不満げに顔を逸らす。

「んじや、でしゃばった審判役はここらでお暇するとすつか。おいヒューム、行くぞ」
「はっ」

「マープル、尻拭いは自分でしろよー」

帝はそう言うと、手をヒラヒラと振りながら爺を連れてどこかへと姿を消した。いやまじ、なんなんアイツ？ 好き勝手言つてそのまま帰つて行つただけど？ 残されたのは、俺と清楚ちゃんたち、そしてマープルの婆さんだけだった。

……いや、どう收拾つげんだ、これ。

第29話

「さて、全部、台無しになっちゃったね」

崩壊してまるで世紀末のような有様になった学校を見下ろしながら、マープルの婆はさして残念そうでもなくそう告げる。

「清楚、そして項羽、全部教えてやるよ。武士道プランの本当の計画を」

「んだよ、追い詰められた殺人犯の告白なら、岬って相場が決まってんだろ。蹴り落としやるから、そつち行こうぜ？」

「お黙り、織原ボーイ。大事なところなんだよ」

へいへい。なんかしみつたれた話でもしそうだから、空気軽くしようつてのによ。まあ？ 今更しおらしくなくても、隙がありやあケツ蹴り上げてやるがな。

「清楚、私があんたらを作ったのは、いつも言ってた若者たちと競い合わせるためなんか

「じゃあないんだよ。あんたたちの生まれた意味は、もつと大局的なものだ」
「……………私たちの、生まれた意味……………」

ある意味で、清楚ちゃんたちの真のルーツ。作られた命である彼女たちの持つ、至上命題とも言える武士道プランの本当の目的。

「それは、あんたたちが世界をより良く統べる者となること。より良い世界へと導く指導者となるためだよ」

それはとても独善的で、自己中心的な理想。世界の未来に、若者に期待を抱かなかつた天才が老いてたどり着いた狂気。

ほんと、ふざけてやがるぜ。骨董品のような婆が余計なお世話だったんだ。

目の前の清楚ちゃんたちを、この時代に生きている者たちを、全てを馬鹿にするような計画。クローンがどうか、そう言う次元じゃなく世界への宣戦布告にも等しい愚行。

「だから、アンタは王として。義経たちは将として。そういう理由でアンタらは選ばれ

て、生み出されたんだよ」

「だから、私は項羽だったの？」

「そうだね。このダメになつていく世界を引つ張つていくには、霸王という気質が必要だった。あんたには、世界を引つ張つていくだけの力があるんだよ」

「そっか、何となく、マーブルが考えてることが分かった気がしました」

自身の生み出された真の理由を知つても、清楚ちゃんは微笑んだ。

「でも、ごめんなさい。私たちは、そのために生きることではできません」

きつと、清楚ちゃんが言う私たちには、項羽ちゃんだけじゃなく、義経ちゃんたちも含んでるのだろう。

「私たちの人生は、英雄としてじゃなくて、ただの清楚と項羽として生きます。あなたが望む英雄として、定められた道を進むことはできません」

それは当たり前のこと。ただの己として生きていくということ。

「……やれやれ、花が芽吹くみたいに、一気にでかくなっちゃまって。やっぱり、英雄だね、アンタは。何だか、独り立ちする子どもを見送る親の気分だよ」

「親としては不合格も甚だしいがな。てか、どうすんのよ。リアル世界征服考えてたん
だろ?」

マーブルは困ったように、だが、嬉しくもあるような、そんな顔をしていた。その顔を見て、俺も少しはこの婆さんが血の通った人間であるのだと思った。

清楚ちゃんを、義経ちゃんたちを大事なクローンとしてだけじゃなくて、少なくとも親代わり程度のこととしてはやってたんだろ?」

「中止だよ中止。アンタみたいなのがいる限り、世界相手取っても、勝てないってのが分かったからね。ほんと、ふざけた餓鬼だよ。全部台無しにしてくれて」

「くはは、安心しろよ。俺の気に入らねえことしてたら、またカチコミに来てやるからよ?」

もし俺が居なかったとしても、世界を取るなんて無理だったろうな。目の前の婆に

は、世界を相手取れる知識も知恵もあつたし、財力や武力も用意できたんだろう。

しかし、圧倒的に人望が足りない。その思想が人を心酔させれるものではない。そうであるなら、やがてその勢いは失速する。人間、何かをするには理由が必要な面倒くさい生き方がデフォだからな。

この婆さんに喧嘩を売る機会が次あるかは分からんが、まあそんな時はそんな時はだ。

「武士道プランは表向き計画通り、若者との競争による相乗効果を目的とした平和な企画に終わるだろうよ。満足かい？ 織原ボーイ」

「んー、婆が拗ねても可愛かねえが、いいんじやねえの？」

好きにすりゃあいいいんじやねえの？ 俺も気に入らねえからって、好きにしたらだけだし。

ま、取り返しのつかないところに行き着く前で良かったんじやねえの？ 清楚ちゃんたち巻き込んで婆さん爆散するとか洒落にもなりやしねえ。

俺は婆さんから目を離し、空を見上げる。あーあー、もうこんな時間だよ。楽しみにしてたドラマ見逃しちゃったじやねえかクソツタレめ。

「あー、流石に疲れたわ。カレー作る元気もありやしねえ」

「ふふふ、それはまた今度にね。よいしょっと」

清楚ちゃんが掛け声を一つ、俺の体が浮き上がる。

俺の身体は清楚ちゃんの腕の中に納まっており、いわゆるお姫様だっこの形で運ばれていた。

清楚ちゃんのやわっこい体を堪能できるのは最高だが、ちよつとばかり格好がつかない。まあ、抵抗する力すらも今はないのだが。

「あー、清楚ちゃんって、前から思ってたけど、意外と押せ押せだよね？」

「だって、霸王だもの」

さいですか。

あー、ただ、人に運ばれてる時の揺れって、眠りに誘う心地よさがあるよなあ。

清楚ちゃんなら、フィジカル的にも落としたりもしないだろ……。

「……」

「おやすみなさい、私たちの英雄^{ヒーロー}」

目を閉じた俺の頬に、二度、熱が触れた感触があつた。

「おい、兄貴。この前、何があつたんだよ」

爺と婆の襲撃という最低のイベントから、早いもので一週間も経っていた。そこで俺はまた、いつぞやの堤防で釣り糸を垂らしていた。

あの時、与一たちのところには九鬼の従者部隊が来て、避難というか、現場に向かわないようにつけられてたらしい。

ちなみに、今現在遠くの方では義経ちゃんと弁慶ちゃんが同じように釣りに興じている。その後ろでは、パラソルの下で清楚ちゃんが、ニコニコと俺たちを見守っていた。

「あん？ 別に大したことはねえよ。清楚ちゃんが覚醒したり、ヒュームの爺が襲ってきたり、それを清楚ちゃんとの合体技で倒したりした程度だよ」

「いや、マジで何があっただよ」

いや、俺からしてもなんでもなったのか分かんねえよ。爺とやり合うのもっと先だと思ってたんだよ、具体的に言うなら高校生辺りで。

ぶつちやけ言えば、まだ体の出来上がりが不十分なんだよなあ。小学生のころと比べりゃ、そりゃあ身体も出来上がって来てるが、それでも大人の身体とは言い難い。

百代ちゃんも俺も、体が出来上がっていくと一緒に気の総量も馬鹿みてえに増えてき

てるしなあ。てか、百代ちゃんが暴れたとき俺か鉄心の爺さんしか宥められんの、下手しなくても爆弾じゃね？

「とりあえず、あの日から兄貴と葉桜先輩の距離感っていうか、葉桜先輩側からの距離の詰め方が露骨なんだよ」

「まあ、あの子は一人で二人分のパッションを持つてるからなあ」

真逆のようで似ている二人を同時に相手せにやららんから、意外と体力つかうんだよな。まあ、それも可愛いところだと思えば、全然気にならんがの。

たぶんだけど、清楚ちゃんと項羽ちゃんなら百代ちゃんとかのレベルまでパワーアップするんだろうなあ。ほんと、俺はラブコメしたいんだけど、バトル漫画の住民になつた覚えはないんだけど？

「兄貴よ、あんた、そろそろここから出ていくつもりなんだろう？」

「んー？ まあ、そうだなあ。そろそろこの辺りで釣れる大物は釣り終えたし。場所を変えるか」

与一は今日はボウズらしく、バケツの中には一匹も魚が入っていない。俺はそこそこに釣果があるが、なんか小魚ばかりだ。ていうか、向こうではしゃいでる女子たち、たらい持ってね？ え？ もしかしてアレに魚入れてんの？ どんだけ釣ってんの？

かー、全部あつちに持ってかれてんのか。女好きの魚ばっかかよ。

まあ、義経ちゃんや弁慶ちゃんは、また今度の機会だな。特上の餌を用意して一本釣りしてやんよ。

とりあえず、今はやりたいこと一通りやり終えたしな。

「もう少しくらい、この島に居てもいいんじゃないか？ 葉桜先輩も、俺たちも兄貴と一緒に居るのが楽しいんだ」

おいおい、そんなしけた面してんなよ。俺は男になつかれても蹴り飛ばすだけなんだが、まあ、今回は勘弁してやるか。

それにしても、随分と短期間で好感度が上がったもんだ。それだけ思春期だったんだろ
うな。

「……そうさなあ。あの婆がお前たちがこの島から出すのがいつ頃かは知らんが、少な

くとも中学生の間じゃねえだろうな」

だが、もう二度と会えないわけじゃない。意外と近いもんだぜ？ 川神とこの小笠原。

「さて、と」

俺は釣り糸を巻き取り、適当にその辺に置く。どこまでも広がる青い空と、綺麗な空気が輝く水面、いい場所だ。この島は優しい場所だった。

楽しい一夏だったろ？ また遊ぼうや。

「何年後になるか分からねえが、また会おうぜ、兄弟。^{ブラザー}清楚ちゃん達にはよろしく言っ
いてくれ」

俺は釣り竿と、少しの魚が入っただけのバケツを残して、その島から姿を消した。

「とまあ、そんな感じでなんとかなつたぜ。おら、酒寄こせ」

「そうかい。まあ、やるじゃねえか。ヒュームに助つ人つきとは言え勝ちを拾うとはよ。おら、つまみ寄こせ」

九鬼極東本部ビルの最上階、社長室と銘打った帝の私室。

俺がつまみを帝に放り投げ、帝は酒瓶を俺に放つてくる。俺は酒瓶のままラツパ飲みし、帝はビーフジャーキーを歯で噛みちぎる。

「くつそつらかつたんやが、まじで。てか、帝っちはヒュームの爺が出張ること知ってた

んだろ？」

ぶつちやけ、どうせ全部最初つからある程度どうなるか予想ついてたんだろう。俺が清楚ちやんたちを焚きつけることも、あの婆がそれを排除するために動き出すことも。

「ん？ まあな、俺が動けばマープルも対抗して動くだろ」

「フアック。やっぱ一発殴らせろ」

こつちもそのことについても承知だが、そうぬけぬけと言われるとめつちや腹立つ。俺が拳を握るのに対しても、帝は飄々と笑いながら今度はチーカマを頼張る。

「だが、相変わらず手の早いこつて、葉桜清楚を落としたんだろ？」

「あん？ なんだよ、藪から棒に。人の色恋に興味津々ってキヤラでもないだろうに」

てか、まだ手は出してねえよ。まあ、将来また会ったときに美味しくいただくこうとは思ってるが。

「英雄のクローンすら躊躇いなく口説き落とす、ただけ女好きなんだよって思ってたな」
「男の子はいつの時代でも女に弱いんだよ。帝だって、不倫経験者だろ?」

「げほっげほっ、お前ぼっ、お前、マジその話題やめろや」

俺が帝の下事情について突っ込むと、珍しく取り乱したように噎せてこちらに胡乱な目を向けてくる。

俺はこれ幸いにと、帝のやらかしについてそれはもう自分でもいい笑顔だろうなって思う顔でからかってやる。

「けっひゃっひゃっ、避妊し損ねた帝くんよお。嫁さんにバレたときの気分はどうでしたかあ?」

「うっぜえ! おい誰かこの下種を殴ってくんねえかなあ!? てかてめえの方が浮気しまくりにじゃねえか! 知ってんだからな、ウチのメイドにも手え出そうとしてるって!

てか、松永とか忍足には既に手エ出してんだろが!」

「ばっつきやろー! 最近入った中華風の美女とか金髪ロツクなアメリカン美女とか、あんな上玉居たら声かけねえ訳にはいかねえだろうが! それに、ミサゴちゃんとあずみちゃんはメイドになる前から手を出してるのでセーフです!」

最近、九鬼に若手が増えてきてるが、どいつもこいつも粒ぞろいで、流石天下の九鬼つてところか。美男美女揃い、適当に声をかけても外れがないってやべーな、なんか最近 は危険人物扱いで俺の情報が回ってるみたいだけど。

「てか、お前んのとこ、見た目も審査基準に入れてんのか？」

「そんなことはねえが、まあ、有能かどうかが一番だよ。てか、その辺の人事は人事部に一任してるよ」

人事部の職員は面食いなのだろうか。うむ、俺の目の保養のためにも、ぜひともそのままの審査基準で居てほしいものだ。

「ぶはあ、あー、何の話をしてたっけか。ああ、そうそう。ひとまず貸し借りゼロだな。いや、むしろおれの方が貸してんじゃね？ 労力的に」

「がめつい奴だぜ。ノーだノー。お前だつて好き勝手してるんだから、これ以上はいいだろ？ 衣食住提供してる俺にもつと感謝しやがれ」

「ちっ、まあいいや。とりあえず、清楚ちゃんたちはいつごろ公表する予定なんだ？」

流石に通らねえか。まあ、ごねるようなもんでもねえし、別にいつか。

とりあえず、武士道プランの公表時期は知っておかねえとな。その時期に俺が居なかつたら、つまんねえし。

「なんだ、気になんのか？ 一応は下の奴らが高校二年生になったらつー予定だな。大人と子供の間、そこで若者たちと交流させるんだとよ」

「ま、いいんじゃないの？ その頃には清楚ちゃんたちも熟れてるだろ。ちよーどいい食べ頃にな」

あの清楚な女の子と、気高い霸王様がどうなってるか。今からでも楽しみでしょうがない。

「お前ほんとそればつかだな」

「いいだろ？ いい男には、いい女が必要なんだ」

そう、極上の男である俺には、極上の女が似合うのだ。

「いい男ねえ。悪いが、鏡がねえから今は見えねえや」

「かはは、ボコすぞ」

俺と帝は、そんな調子で酔いつぶれるまで、酒を飲み、騒ぎ、部屋を散らかしまわした。

翌朝、クラウディオの爺さんにめっちゃ説教食らった。二日酔いの頭を、正論で殴らんでくれ……。

二度と酒は飲まねえぞ、くそ。